

館山市東田遺跡

—国道410号（北条）埋蔵文化財調査報告書2—

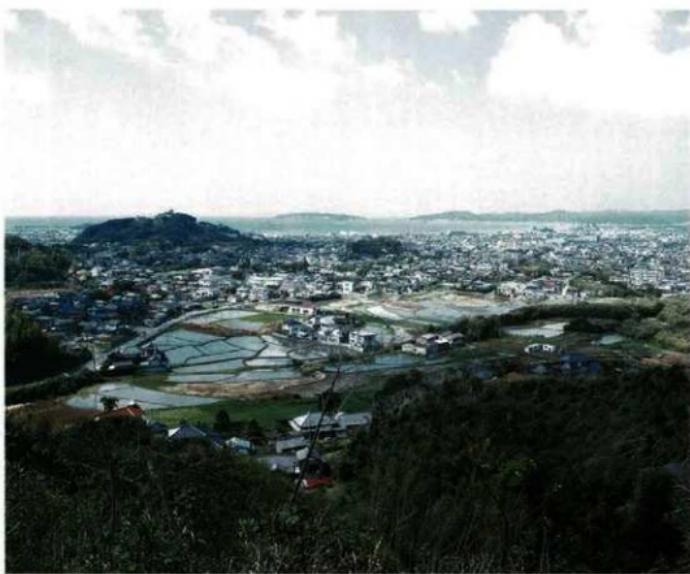
平成18年3月

千葉県県土整備部
財団法人 千葉県教育振興財団

たて やま ひがし だ
館 山 市 東 田 遺 跡

— 国道410号（北条）埋蔵文化財調査報告書 2 —

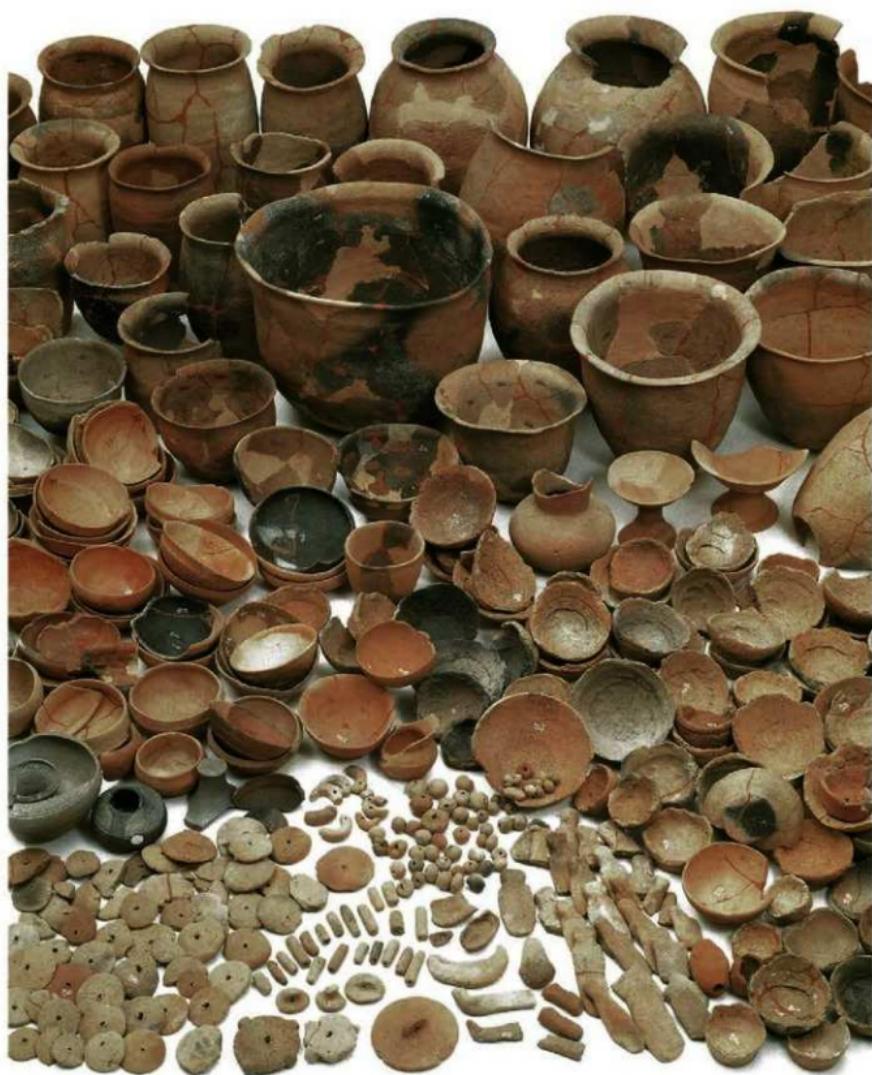




東田遺跡遠景（南から）



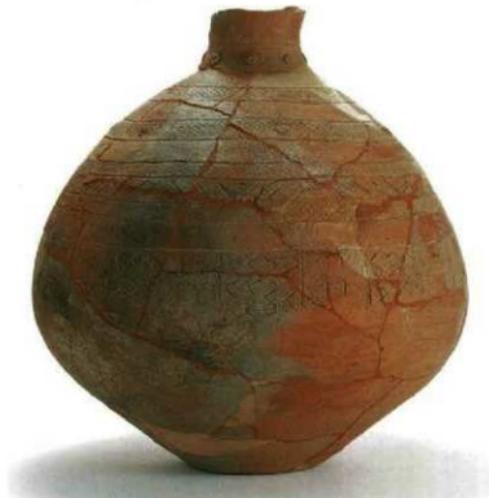
BSB-2・3（北から）



BSD-2 出土遺物



BSD-2 出土土製品



BSD-1 出土土器



K4-24 グリッド出土金具

序 文

財団法人千葉県教育振興財團（財団法人千葉県文化財センターから平成17年9月1日付で名称変更）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財團調査報告第551集として、千葉県県土整備部の国道410号（北条）建設事業に伴って実施した館山市東川遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、古墳時代～奈良・平安時代の大型掘立柱建物跡や多量の祭祀遺物を伴う溝状遺構が発見されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また地域の歴史解明の資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を始めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成18年3月

財団法人 千葉県教育振興財團
理事長 佐藤健太郎

凡　例

- 1 本書は、千葉県県土整備部による国道410号（北条）建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書は下記の遺跡を収録したものである。

東田遺跡 千葉県館山市上真倉字東田706ほか（遺跡コード 205-003）
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県県土整備部の委託を受け、財団法人千葉県文化財センター（平成17年9月1日付で財団法人千葉県教育振興財団と名称変更）が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者、実施期間は本文中に記載した。
- 5 本書の執筆・編集は、研究員 高梨友子が担当した。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、千葉県県土整備部安房地域整備センター、館山市教育委員会、県立安房博物館、大谷弘幸氏、神野信氏、笠生衛氏、白井久美子氏、杉江敬氏、相山林繼氏、竹内順一氏、田中裕氏（五十音順）の御指導・御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。

第1図 国土地理院発行 1/50,000地形図「那古」(N I - 54 - 26 - 2)
国土地理院発行 1/50,000地形図「館山」(N I - 54 - 26 - 3)

第2図 館山市役所発行 1/2,500都市計画図No26 (C5-0063-0065)
館山市役所発行 1/2,500都市計画図No27 (C5-0063-0065)
- 8 周辺地形航空写真（図版1）は、京葉測量株式会社による昭和42年撮影のものを使用した。
- 9 本書で使用した図面の方位はすべて座標北である。測量値については日本測地系を使用した。
- 10 遺構名について原則的に発掘調査時の名称の先頭に調査区名をつけて呼称することとしたが、整理段階で統合または欠番にしたものがある。新旧遺構名の対応関係は第1表のとおりである。なお、遺物への注記は全て旧遺構名で行っている。
- 11 遺物実測図断面の黒塗りは須恵器または灰釉陶器を表し、●は繊維混入を表す。
- 12 木製品実測図の断面に表現した年輪は、木取りを模式的に表現したもので、実際の年輪を表したものではない。
- 13 挿図に使用したスクリーントーン及び記号の用例は、特に指示のない限り以下の通りである。

● 土器



焼土

▲ 石器・石製品



赤彩

○ 土製品類



黒色処理

◎ 木製品

★ 金属製品

本文目次

第1章　はじめに	1
第1節　調査に至る経緯	1
第2節　遺跡の位置と周辺の環境	1
第3節　調査の方法と経過	4
第4節　基本層序	8
第2章　A区	13
第1節　概要	13
第2節　弥生時代以前の遺構と遺物	13
1 方形周溝墓	13
2 遺構外出土遺物	13
第3節　古墳時代の遺構と遺物	18
1 壁穴住居跡	18
2 溝状遺構	20
3 A区遺物包含層とピット群	23
4 遺構外出土遺物	25
第4節　中世以降の遺構と遺物	28
1 溝状遺構	28
2 遺構外出土遺物	29
第3章　B区	30
第1節　概要	30
第2節　弥生時代の遺構と遺物	30
1 溝状遺構	30
2 土坑	36
3 遺構外出土遺物	41
第3節　古墳時代～奈良・平安時代の遺構と遺物	49
1 壁穴住居跡	49
2 摶立柱建物跡	56
3 溝状遺構	65
4 土坑	105
5 遺構外出土遺物	107
第4節　中世以降の遺物	109

第4章 C区	110
第1節 概要	110
第2節 弥生時代以前の遺構と遺物	110
1 穴住居跡	110
2 溝状遺構	110
3 遺構外出土遺物	118
第3節 古墳時代の遺構と遺物	119
1 穴住居跡	119
2 溝状遺構	127
第4節 中世以降	133
1 溝状遺構	133
2 上坑	133
3 遺構外出土遺物	135
第5章 D区	136
第1節 出土遺物	136
第6章 まとめ	137
第1節 繩文時代～弥生時代	137
第2節 古墳時代～奈良・平安時代	137
1 BSD-2について	138
2 大型掘立柱建物跡について	142
3 変遷	143
報告書抄録	卷末

挿図目次

第 1 図 遺跡の位置と周辺の道路 (1: 50,000) ……2	第 33 図 B 区遺構外出土弥生時代以前の遺物 (1)
第 2 図 調査区と周辺地形 (1: 5,000)542
第 3 図 遺跡全測図6	第 34 図 B 区遺構外出土弥生時代以前の遺物 (2)
第 4 図 基本層序943
第 5 図 A 区遺構配置図14	第 35 図 B 区遺構外出土弥生時代以前の遺物 (3)
第 6 図 ASD - 31544
第 7 図 ASD - 3 出土遺物16	第 36 図 B 区遺構外出土弥生時代以前の遺物 (4)
第 8 図 A 区遺構外出土 弥生時代以前の遺物1745
第 9 図 ASII - 1 と出土遺物19	第 37 図 B 区遺構外出土弥生時代以前の遺物 (5)
第 10 図 ASH - 1A と出土遺物1946
第 11 図 ASH - 2 と出土遺物20	第 38 図 B 区遺構外出土弥生時代以前の遺物 (6)
第 12 図 ASD - 5・62147
第 13 図 ASD - 5・6 土層断面図22	第 39 図 B 区遺構外出土弥生時代以前の遺物 (7)
第 14 図 ASD - 5 出土遺物2248
第 15 図 ASD - 6 出土遺物22	第 40 図 B 区遺構外出土弥生時代以前の遺物 (8)
第 16 図 A 区遺物包含層とピット群2449
第 17 図 A IX 遺物包含層土層断面図25	第 41 図 BSI - 250
第 18 図 A 区遺物包含層とピット群出土遺物 (1)26	第 42 図 BSI - 2 カマド50
.....27	第 43 図 BSI - 2 出土遺物51
第 19 図 A 区遺物包含層とピット群出土遺物 (2)27	第 44 図 BSI - 3 と出土遺物53
.....28	第 45 国 BSI - 854
第 20 国 A IX 遺構外出土 古墳時代の遺物27	第 46 国 BSI - 8 カマド54
第 21 国 ASD - 4 出土遺物28	第 47 国 BSI - 8 出土遺物55
第 22 国 A 区遺構外出土 中世以降の遺物29	第 48 国 BSI - 9 と出土遺物56
第 23 国 B 区遺構配置図31	第 49 国 BSB - 157
第 24 国 BSD - 1・332	第 50 国 BSB - 1 出土遺物58
第 25 国 BSD - 1 出土遺物 (1)33	第 51 国 BSB - 2 と出土遺物60
第 26 国 BSD - 1 出土遺物 (2)34	第 52 国 BSB - 362
第 27 国 BSD - 1 出土遺物 (3)35	第 53 国 BSB - 3 出土遺物63
第 28 国 BSD - 3 出土遺物35	第 54 国 BSB - 4 と出土遺物64
第 29 国 BSK - 537	第 55 国 BSD - 266
第 30 国 BSK - 5 出土遺物 (1)38	第 56 国 BSD - 2 土層断面図67
第 31 国 BSK - 5 出土遺物 (2)39	第 57 国 BSD - 2 遺物出土状況図69
第 32 国 BSK - 5 出土遺物 (3)40	第 58 国 BSD - 2 遺物出土状況詳細図 171

第59図	BSD-2 遺物出土状況詳細図2(平面)	第92図	BSK-6	106
	第93図	BSE-1と出土遺物	106
第60図	BSD-2 遺物出土状況詳細図2(断面)	第94図	B区造構外出土 古墳時代の遺物	108
	第95図	B区造構外出土 中世以降の遺物	109
第61図	BSD-2 遺物出土状況詳細図3(平面)	第96図	C区造構配設図	111
	第97図	CSI-7	112
第62図	BSD-2 遺物出土状況詳細図3(断面)	第98図	CSD-1・2と出土遺物	113
	第99図	CSD-5	114
第63図	BSD-2 出土遺物(1)	第100図	CSD-5出土遺物	115
第64図	BSD-2 出土遺物(2)	第101図	CSD-13・16	116
第65図	BSD-2 出土遺物(3)	第102図	CSD-13出土遺物	117
第66図	BSD-2 出土遺物(4)	第103図	CSD-16出土遺物	118
第67図	BSD-2 出土遺物(5)	第104図	C区造構外出土 弥生時代以前の遺物	
第68図	BSD-2 出土遺物(6)			119
第69図	BSD-2 出土遺物(7)	第105図	CSI-1	120
第70図	BSD-2 出土遺物(8)	第106図	CSI-1カマド	120
第71図	BSD-2 出土遺物(9)	第107図	CSI-1出土遺物	121
第72図	BSD-2 出土遺物(10)	第108図	CSI-3	122
第73図	BSD-2 出土遺物(11)	第109図	CSI-3カマド	122
第74図	BSD-2 出土遺物(12)	第110図	CSI-3出土遺物	123
第75図	BSD-2 出土遺物(13)	第111図	CSI-4と出土遺物	124
第76図	BSD-2 出土遺物(14)	第112図	CSI-4カマド	125
第77図	BSD-2 出土遺物(15)	第113図	CSI-5	126
第78図	BSD-2 出土遺物(16)	第114図	CSI-6と出土遺物	127
第79図	BSD-2 出土遺物(17)	第115図	CSD-3・7・8	128
第80図	BSD-2 出土遺物(18)	第116図	CSD-6・9・10	129
第81図	BSD-2 出土遺物(19)	第117図	CSD-3出土遺物	130
第82図	BSD-2 出土遺物(20)	第118図	CSD-6出土遺物	130
第83図	BSD-2 出土遺物(21)	第119図	CSD-7出土遺物	131
第84図	BSD-2 出土遺物(22)	第120図	CSD-8出土遺物	131
第85図	BSD-2 出土遺物(23)	第121図	CSD-9出土遺物	131
第86図	BSD-2 出土遺物(24)	第122図	CSD-10出土遺物	131
第87図	BSD-2 出土遺物(25)	第123図	CSK-1~8	134
第88図	BSD-2 出土遺物(26)	第124図	C区造構外出土 中世以降の遺物	134
第89図	BSD-2 出土遺物(27)	第125図	D区出土遺物	136
第90図	BSD-2 出土遺物(28)	第126図	BSD-2 出土粗造土器分類図(1)	140
第91図	BSD-2 出土遺物(29)	第127図	BSD-2 出土粗造土器分類図(2)	141

表 目 次

第1表 東田遺跡 遺構一覧表	10	第7表 東田遺跡 掘載石器・石製品觀察表	171
第2表 東田遺跡 粗造土器分類表	139	第8表 東田遺跡 掘載金屬製品計測表	172
第3表 東田遺跡 掘載土器觀察表	145	第9表 東田遺跡 掘載木製品計測表	172
第4表 東田遺跡 掘載粗造土器觀察表	160	第10表 東田遺跡 金属生産関連遺物一覧表	173
第5表 東田遺跡 掘載手握土器觀察表	163	第11表 東田遺跡 掘載遺物重量表	174
第6表 東田遺跡 掘載土製品觀察表	164	第12表 東田遺跡 非掲載遺物重量表	174

図 版 目 次

卷頭図版 1 東田遺跡遠景（南から）	BSD - 1 遺物出土状況
BSB - 2・3（北から）	BSD - 2 遺物出土状況
卷頭図版 2 BSD - 2 出土遺物	図版 8 BSD - 2 遺物出土状況
卷頭図版 3 BSD - 2 出土土製品	BSD - 2 遺物出土状況
BSD - 1 出土土器	BSD - 2 遺物出土状況
K4-24グリッド出土帶金具	図版 9 BSD - 2 完掘状況
図版 1 遺跡周辺航空写真（1:14,000）	BSD - 2 完掘状況
図版 2 ASD - 3 遺物出土状況	BSK - 5 遺物出土状況
ASD - 3 完掘状況	図版 10 C区全景
ASH - 1・ASH - 1A 遺物出土状況	CSI - 1 完掘状況
図版 3 ASH - 2 完掘状況	図版 11 CSI - 3 完掘状況
ASD - 4・ASD - 5・ASD - 6 完掘状況	CSI - 3 カマド
ASD - 4・ASD - 5・ASD - 6 完掘状況	CSI - 3 カマド
図版 4 ASD - 1 完掘状況	図版 12 CSI - 6 完掘状況
ASD - 8 完掘状況	CSD - 1・CSD - 2 完掘状況
A区ピット群	CSD - 5 遺物出土状況
図版 5 BSI - 2 完掘状況	図版 13 CSD - 6 遺物出土状況
BSI - 3 完掘状況	CSD - 7・CSD - 8 遺物出土状況
BSI - 8 完掘状況	CSD - 13 遺物出土状況
図版 6 BSB - 1 完掘状況	図版 14 CSD - 11 完掘状況
BSB - 2・BSB - 3 完掘状況	CSD - 11 完掘状況
BSB - 2・BSB - 3 完掘状況	CSD - 12 完掘状況
図版 7 BSD - 1 遺物出土状況	図版 15 A区出土土器（1）

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

千葉県土整備部は、館山市街地の混雑緩和のため、国道410号のバイパス建設事業を計画した。この事業に当たって千葉県土整備部は、事業予定地内の「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会を提出し、千葉県教育委員会から、事業地内に遺跡が所在する旨の回答を得た。その後、遺跡の取扱いについて両者の間で協議が重ねられ、発掘による記録保存の措置を講ずることとなった。調査は財團法人千葉県教育振興財団が実施することとなり、千葉県と委託契約を締結して発掘調査を実施した。

第2節 遺跡の位置と周辺の環境（第1図）

房総半島南端に位置する館山平野は、鏡ヶ浦とも呼ばれる遠浅で波静かな館山湾に西面し、北・東・南の三方向を丘陵に囲まれている。そして北部には平久里川が、南部には汐入川が館山湾に向かって流れている。

東田遺跡は、汐入川が館山平野の南東方向から丘陵を流れ出て、支流と合流する川合の河岸段丘上に位置しており、標高は約9m～13mである。調査区の北東端は現在の汐入川に接し、川までは比高差1.5m～2mの崖状となっている。基盤となる層は軟質な岩盤の上に堆積した砂質土層であるが、砂質土層の堆積は、丘陵尾根先端の迫っている南側へいくほど薄くなる。

東田遺跡（1）の周辺には、数多くの遺跡が所在しているが、調査によって明らかにされている遺跡はあまり多くはない。

遺跡が認められるのは縄文時代からで、良く知られている遺跡として市指定史跡の大寺山洞穴遺跡（7）が挙げられる。大寺山洞穴遺跡は、館山湾を一望する標高約20mの海岸段丘上に立地する海食洞穴遺跡で、縄文時代中期後半～後期を主体とする遺物包含層が検出され、土器や上器片鍾のほか、耳飾、垂飾などが出土した。また、人骨をはじめ、貝類、魚骨、歯骨などの自然遺物も多く出土した。周辺の沿岸部には海食洞穴が多くみられるが、いずれも櫛文海溝時に形成されたと考えられている¹。

弥生時代は、主に微高地上で遺構が確認されている。集落としては、砂丘列上に位置する菅野遺跡（4）で弥生時代中期～後期の環濠集落が検出されている²。また、宝珠院遺跡（3）で弥生時代後期の住居跡が1軒検出された³。墓域としては、坂谷塚遺跡（2）と萱野遺跡（4）で弥生時代中期の方形周溝墓が検出された。いずれも形態は四隅の切れるタイプで、埋葬施設は確認されていない。坂谷塚遺跡の方形周溝墓周溝からは、擬似流水文のある壺などが出土しており注目される⁴。また、長須賀条里制造跡（11）では、旧河道から埴とみられる構築物が検出され、土器や木製品などの多量の遺物が出土し、水際祭祀が行われた可能性が指摘される⁵。

古墳時代の遺跡は数多く確認されているが、ほとんどは祭祀遺跡であるといってよい状況である。特に汐入川の中・上流域は祭祀遺跡が集中する地域として知られている。例えば、つとるば遺跡（9）、猿田遺跡（10）、長須賀条里制造跡（11）、大戸館ノ前遺跡（13）、東長田遺跡（14）などが挙げられるが、館山湾の外側でも安房神社洞穴遺跡（17）、見上遺跡（18）、泉遺跡（19）、青木松山遺跡（21）、沢辺遺跡（22）、



館山湾(鏡ヶ浦)



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1:50,000)

小瀧涼源寺遺跡（23）など、祭祀遺跡は多い。

これらのうち、古墳時代前期の祭祀遺跡として代表的なのは、小瀧涼源寺遺跡（23）であろう。集落は検出されていないが、多量の土器、手握土器、ミニチュア土器、石製模造品などが集積された状態で出土した⁵¹。青木松山遺跡（21）でも、古墳時代前期～平安時代にかけてのミニチュア土器や手握土器を伴う遺物包含層が検出され、祭祀に関連する土器廢棄が含まれていると考えられている⁵²。長須賀条里制遺跡（11）は汐入川を挟んで東田遺跡の隣に位置する遺跡であるが、旧河道及び水路から、古墳時代前期～中期に比定される多量の土器や鏡、子持勾玉、石製模造品などが出土しており、水際祭祀を行っていたことが窺える。なお、水路には扉板などを再利用した木桶が取り付けられており、調査区内で検出された水田城へと続く⁵³。

見上遺跡（18）では、古墳時代中期の堅穴状遺構が3基検出された。鏡形土製品のはか、土玉や手握土器、石製模造品・白糸などが出土し、いずれも祭祀遺構と考えられる⁵⁴。

東田遺跡（1）と同時代の古墳時代後期の祭祀遺跡は、東田遺跡の至近距離に多く、出土遺物も良く似ている傾向にある。特につとるば遺跡（9）では、谷の一部を成す小さな支谷の中腹から、七鈴鏡・四鈴鏡、鏡形土製品などをはじめとする各種土製模造品、手握土器、粗造土器、白糸など、多量の祭祀遺物が出土している⁵⁵。その他、汐入川右岸の河岸段丘にある東長田遺跡（14）でも、段丘の段差の部分にある1.5m～2mの厚さの崖壁堆積物の中から手握土器や土製品などが出土し⁵⁶。東山遺跡（12）でも、旧河道から粗造土器が出土している⁵⁷。また、大戸館ノ前遺跡（13）でも手握土器や土製勾玉などの土製品が出土し⁵⁸、猿田遺跡（10）でも粗造土器が採集された⁵⁹。これらの遺跡では、共通して今のところ集落は見つかっていない。館山湾の外側の沢辺遺跡（22）では、手握土器やガラス玉、鹿角型柄付鉄製小刀を含む土器集積遺構などが検出された。沢辺遺跡は古墳時代後期に成立した、太平洋を臨む磯辺の集落と考えられている⁶⁰。

古墳時代の集落が検出された遺跡は、東田遺跡の周辺ではほかに萱野遺跡（4）が挙げられよう。萱野遺跡では、古墳時代前期及び後期の集落が確認されている⁶¹。

また、古墳時代の墓域としては、周辺では横穴墓や洞穴墓が多くみられ、高塚古墳はあまり確認されていない。洞穴墓の代表的な調査例としては、市指定史跡の人寺山洞穴遺跡（7）が挙げられる。洞穴内からは丸木舟を転用した舟棺が検出され、人骨も出土した。また、土師器・須恵器のはか、甲冑・大刀などの鉄製品、勾玉・管玉・耳環などの装身具、漆塗弓・盾などの木製品など、多種多様な副葬品が出土し、洞穴を舟葬墓として利用していたことが明らかになった⁶²。

鎌山平野周辺で確かに確認されている古墳としては、宝珠院遺跡（3）、峯古墳（15）、翁作古墳（16）が挙げられる。微高地に立地する宝珠院遺跡（3）では、墳丘の失われた円墳が3基検出されている⁶³。翁作古墳（16）は、調査を待たずに破壊されたため詳細は不明だが、金銅製の單鳳環頭大刀、土頭大刀、劍、鹿角波刀子などが出土しており、かなり大きな円墳が前方後円墳であった可能性が指摘されている⁶⁴。峯古墳（15）も詳細は明らかではないが、滑石製勾玉やガラス玉のはか、国内産ではない可能性も指摘されているトンボ玉などが伝世している⁶⁵。このほか、前期古墳の圓溝の可能性のある溝が、萱野遺跡（4）で検出されている。これは古墳時代前期の遺物を多く含む幅7m～8mの溝がコ字形に巡り、内部の一辺が40mほどを測るものである⁶⁶。

奈良・平安時代では、県指定史跡の安房国分寺跡（6）が所在する。安房国府も付近にあると推定され

るが、現在のところ、国府に直接関連すると考えられる遺構は見つかっていない。なお安房国は、律令制定後の養老2(718)年に上卷國より分割新置されるが、天平13(741)年には再び上總に合併、天平宝字元(757)年にまた分立するという、複雑な経緯を辿っている。また、安房神社(17)は、「延喜式」に安房国筆頭の大社と記されており、その存在により安房郡が神郡とされている²⁰。

発掘調査によって明らかになった奈良・平安時代の遺構は、菅野遺跡(4)や長須賀条里製造跡(11)などでみられる。菅野遺跡(4)では、2間×3間とみられる掘立柱建物跡が2棟ほど確認された²¹。また、長須賀条里製造跡では、条里型水田の畔群が検出されている²²。この周辺では「大坪」など「坪」の付く地名が多く残されており、北条条里製造跡(5)など条里製造跡が多い。

中・近世では、菅野遺跡(4)で掘立柱建物跡と考えられるピット群や井戸、方形堅穴造構などが検出され、瀬戸・美濃、常滑などの田舎陶磁器のほか青磁・白磁などの貿易陶磁器も出土した²³。また、市指定史跡の館山城跡(8)をはじめ、白浜城(20)、長尾陣屋跡(19)などの城館跡が調査されている。

第3節 調査の方法と経過(第2・3図)

東出遺跡の調査区は、汐入川を挟んで、長須賀条里製造跡の南隣に位置し、南から伸びる丘陵尾根先端を横切るように、北東・南西方向に設定されている。

発掘調査は、平成8年度と平成9年度に断続的に行った。調査対象面積は4,500m²である。

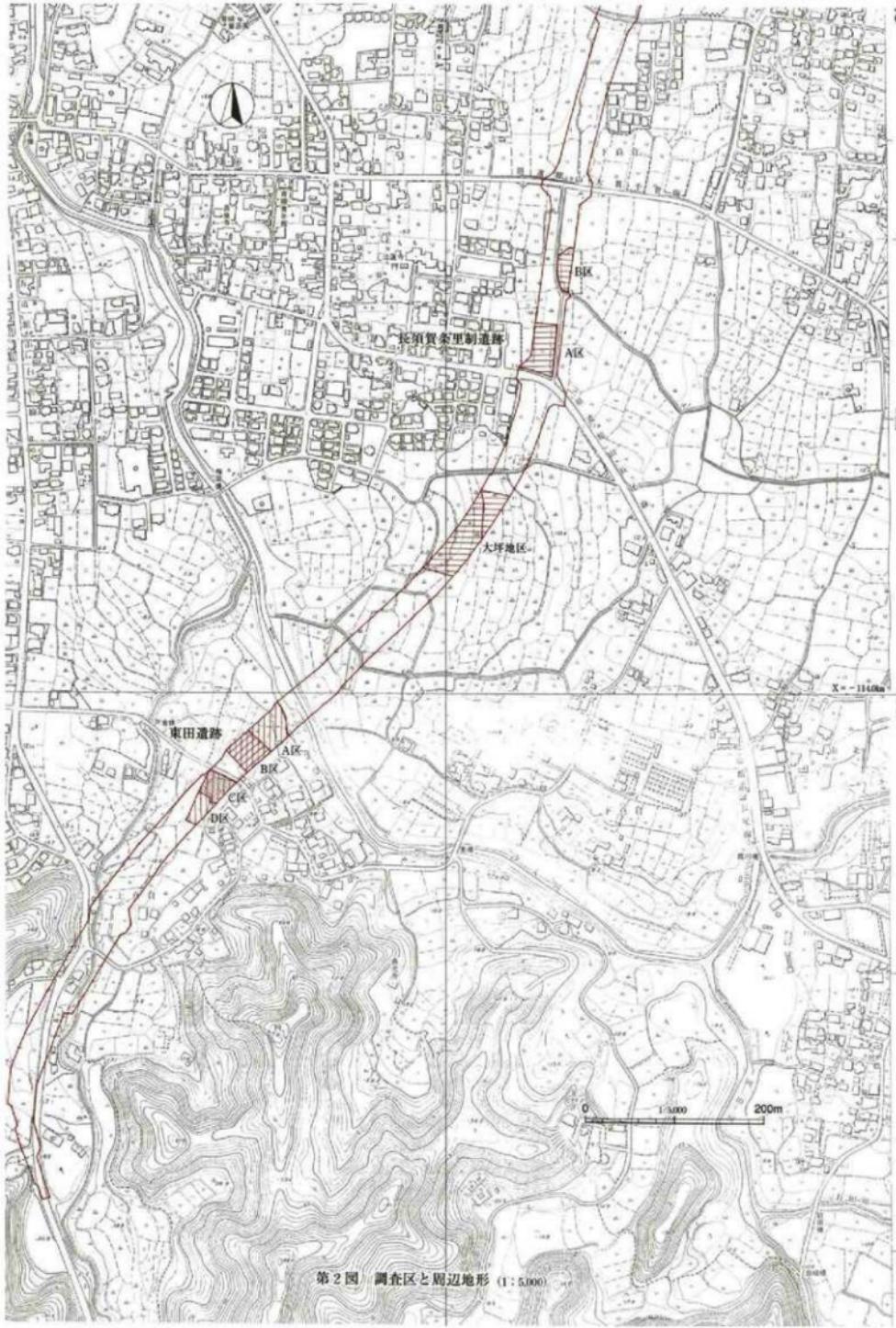
平成8年度には、まず4,500m²のうち、北半の1,400m²について10%(140m²)のトレンチを入れて確認調査を行った。その結果、弥生時代や古墳時代の遺構・遺物包含層などが全面的に広がっていることが判明し、このうちの大溝(BSD-2)分200m²を除いた1,200m²について、同年度中に引き続き本調査を行った。

平成9年度は、南半の3,100m²についてまず10%(310m²)のトレンチを入れて確認調査を行った。その結果、遺構の検出されない範囲900m²を除く2,200m²と、前年度に調査を行わなかった大溝(BSD-2)の200m²、合計2,400m²について引き続き本調査を行うこととなった。

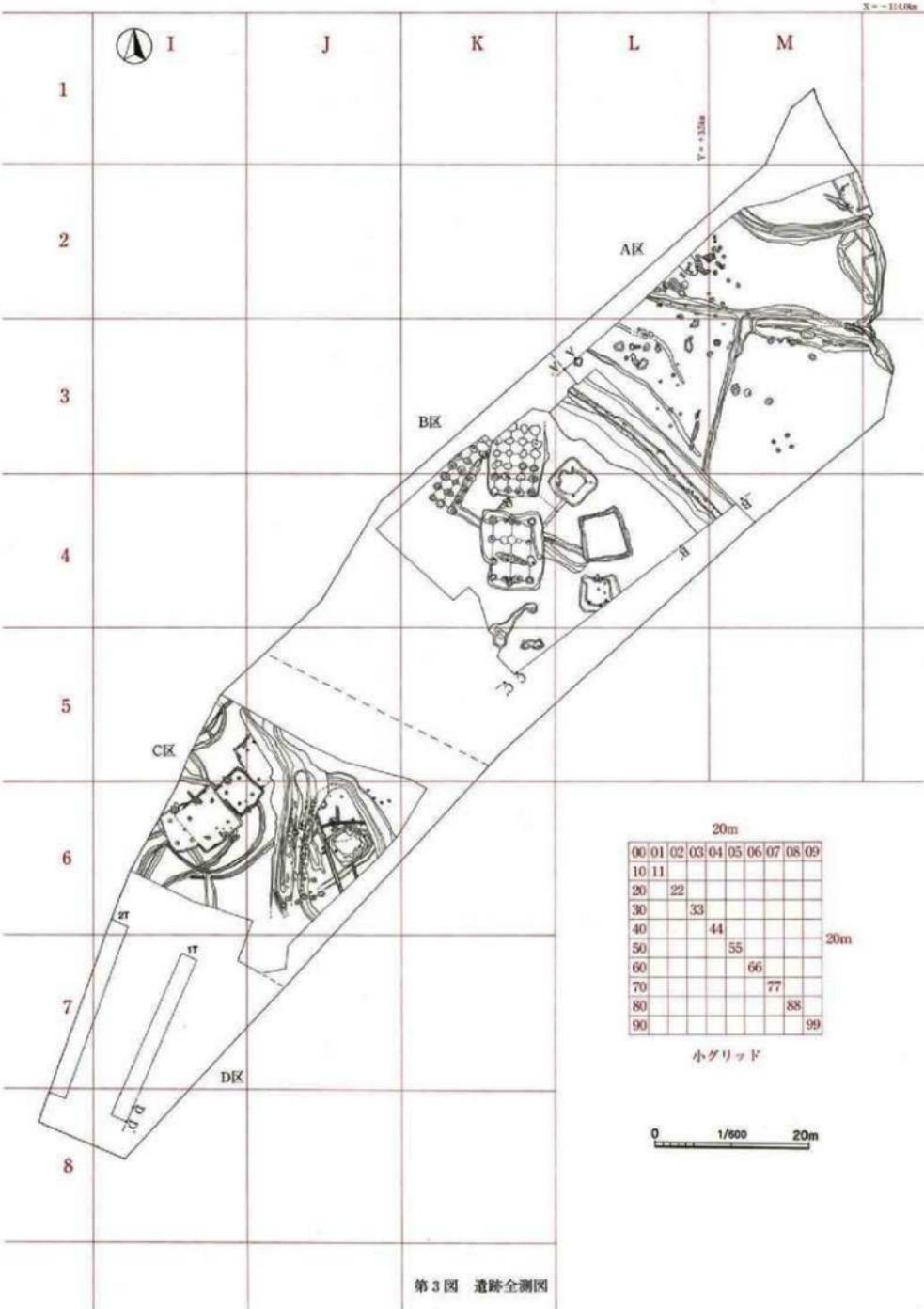
調査に当たっては、平成8年度本調査区をA区、平成9年度本調査区のうち現道を挟んで北側をB区、南側をC区と呼称した。またC区の南をD区としたが、中世以前の遺構が検出されなかつたため確認調査で終了した。なお調査区内には、汐入川側からそれぞれ約1mずつの段差をもって現状で3段の面がみられたが、最も下位の面からそれぞれA区・B区・C区に相当する。

遺構は各調査区ごとに、遺構の種類によって掘立柱建物跡=SB、溝状遺構=SD、井戸=SE、堅穴住居跡=SH(A区)・SI(B・C区)、包含層=SH(B区)、土坑=SK、ピット=SPの略称を接頭に付して、例えば「B区SD-2」のように呼称したが、報告書では、原則的に測量時の名称を踏襲しつつ「区」を省いて遺構名とした。また、遺構番号を付して調査を行ったものの、結果的には遺構とは認められなかつたものや他の遺構と同一であったことが判明したもの等があるが、調査した遺構は全て一覧表として第1表にまとめ、調査時と報告書における遺構名の対応関係を明記した。

発掘調査に当たっては、遺跡とその周辺を含むように、公共座標に基づくグリッド設定を行った。20m×20mの方眼を被せ、それを大グリッドとした。大グリッドはX座標=-114.0km、Y座標=+3.06kmを起点として、北から南へ1・2・3…、西から東へA・B・C…の記号を付け、更に大グリッドの中を2m×2mの小グリッドに100分割し、北西隅から00・01…とし、南東の隅を99とした。これにより、大グリッドと小グリッドの組み合わせで、1A-01、2C-55というように小地区名の表示を行えるようにした。



第2図 調査区と周辺地形 (1:5,000)



第3図 遺跡全測図

ただし、A区遺物包含層に限っては、作業の効率化をはかるため、これとは別に任意のグリッドを設定し、遺物取上げなどの作業を行った（第2章第3節3）。

整理作業は、「整理1」・「整理2」の2事業に分けて、それぞれ平成16年度から開始し、平成17年度まで行って平成17年度に報告書を刊行した。

本事業に係る各年度の期間と内容、担当職員は以下のとおりである：

発掘調査

○平成8年度

期間 平成9年1月6日～平成9年2月28日

内容 確認調査 上層140m²/1,400m²（A区・BSD-2）

本調査 上層1,200m²（A区）

担当者 南部調査事務所長 高田博 技師 吉野健一

○平成9年度

期間 平成9年11月4日～平成10年3月31日

内容 確認調査 上層310m²/3,100m²（BSD-2を除くB区・C区・D区）

本調査 上層2,400m²（B区・C区）

担当者 南部調査事務所長 高田博 技師 城田義友

修理作業

○平成16年度

修理1

期間 平成16年8月2日～平成16年11月30日

内容 水洗・注記～記録整理・接合・実測の一部

担当者 南部調査事務所長 高田博 上席研究員 竹内久美子 研究員 高梨友子

修理2

期間 平成16年12月1日～平成17年3月25日

内容 記録整理・接合・実測の一部

担当者 南部調査事務所長 高田博 上席研究員 地引尚幸 上席研究員 鮎生一夫
研究員 高梨友子

○平成17年度

整理1

期間 平成17年6月1日～平成17年11月30日

内容 実測の一部～編集の一部

担当者 南部調査事務所長 高田博 研究員 高梨友子

整理 2

期 間 平成17年12月1日～平成18年1月31日

内 容 編集の一部～報告書刊行

担当者 南部調査事務所長 高田博 研究員 高梨友子

第4節 基本層序（第4図）

東出遺跡は段丘上に立地している。調査区内には現況でそれぞれ約1mずつの段差をもって3つの面が認められるが、これらは調査区割りでいうと、下位からそれぞれA区、B区、C区（・D区）に相当する。遺構の検出面は同一区内においても一面ではなく、場所によって複雑な様相を呈しているが、ここでは最も平均的な土壘堆積を、各区毎の基本層序として示すこととした。第4図A-A'はA区、B-B'・C-C'はB区、D-D'はD区の断面で、それぞれの実測場所は、第3図に示した。なお、A区・B区・C区は現況で畑地、D区は水田であり、各区における「1層」はそれぞれの耕作土に相当する。

A区 A区のはとんどの遺構は、粒子の細かい、粘り気のある黄褐色砂質土層（地山層）上面で検出した。この層は丘陵尾根先端の岩盤の裾まで、緩やかに傾斜しながら続いているようである。2層～4層は主に古墳時代の遺物を包含する層であるが、山來は明らかではない。整穴住居跡の床面とも考えられる硬化面や溝状遺構と考えられる層も断面に散見されたことから遺構があった可能性もあるが、平面的には遺構として明らかにすることはできなかった。なお、調査区北東側は沙入川に削り取られている。

B区 A区より現況で一段高いB区では、現耕作土（1層）下で古墳時代の遺物を含む非常に堅緻な包含層（9層～11層）が確認されたことなどから、この遺物包含層（9層）上面で遺構の検出を試みることとした。しかし、結果的にはこの面ではBSB-2・3の整穴状の掘込み以外の遺構ははっきりとは検出できず、最終的にはA区と同じ面まで確認面を下げることとなった。A区とB区の段差部分に位置するBSD-2も、A区と同じ面で検出されている。遺物包含層は、結果的には、非常に堅緻であったことなどから整地層の可能性が高いと言えるだろう。整地層とすれば、現況で段差のみられる場所も、当時は段差が無かったことになり、A区とB区は同じ段丘面であったということになる。

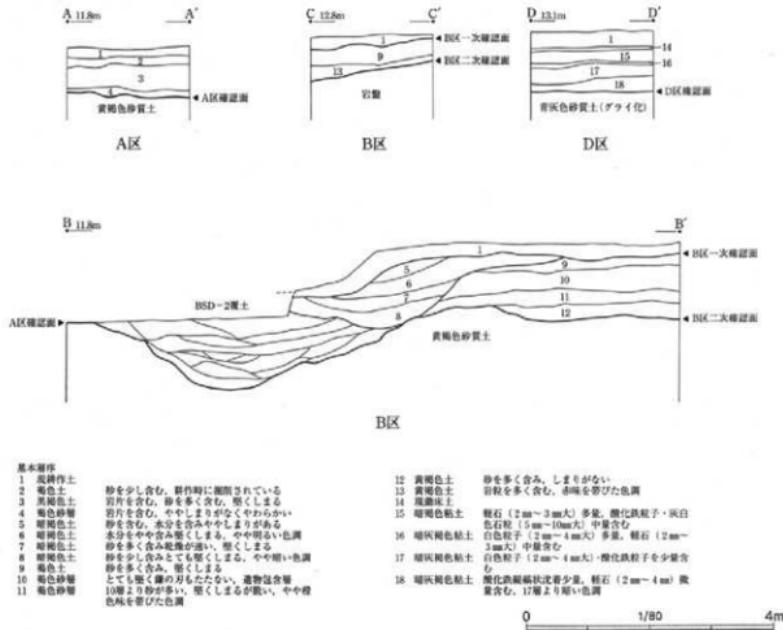
ところでこの遺物包含層は、BSD-2とはほぼ同じ場所に、重複して存在する近世以降の溝状遺構（5層～8層）によって切られている。そのためBSD-2との新旧関係が明らかでないが、この溝状遺構が構築される以前に生じていた段差が、何らかの区画として意識され続けていたことを示していると言えよう。

なお、9層については、南方へいくにつれ若干土質が変化することが調査所見として挙げられている。また、南方では、岩盤がかなりせりあがっているのが確認された。

C区 遺構を検出した面は、A区・B区とはほぼ同じと考えられる。概して地山面までの堆積が薄く、検出された遺構も後の耕作等によってかなり削平を受けていると考えられる。

D区 C区の南に設定した調査区である。グライ化した青灰色砂質土層（地山層）上面まで確認面を下げたところ、建物の柱穴とみられるピットなどが検出されたが、断面の観察により1層直下から掘り込まれ

ていることが明らかになり、中世以前の遺構は検出されなかった。15層～18層は近世以降の耕作土と考えられる。



第4図 基本層序

第1表 東田遺跡 遺構一覧表

調査区	報告書遺構名	調査時遺構名	遺構種類	時代	備考
A区	ASH-1	SH-1	堅穴住居跡	古墳時代後期	
A区	ASH-1A	SH-1A	堅穴住居跡	古墳時代	
A区	ASH-2	SH-2	堅穴住居跡	古墳時代後期	
A区	欠番	SH-3			プラン不明
A区	ASD-1	SD-1	溝状遺構	中・近世以降	
A区	ASD-2	SD-2	溝状遺構	中・近世以降	
A区	ASD-3	SD-3	方形周溝墓	弥生時代中期～後期	
A区	ASD-4	SD-4	溝状遺構	中・近世以降	
A区	ASD-5	SD-5	溝状遺構	古墳時代	
A区	ASD-6	SD-6	溝状遺構	古墳時代～奈良・平安時代	
A区	ASD-7	SD-7	溝状遺構	中世以降	
A区	ASD-8	SD-8	溝状遺構	中世以降	
A区	ASD-9	SD-9	溝状遺構	中世以降	
A区	ASD-10	SD-10	溝状遺構	中世以降	
A区	ASD-11	SD-11	溝状遺構	中・近世以降	
A区	ピット群 (ASP-1~32)	SP-1~32	ピット群	古墳時代	ASP-30欠番、堅穴住居の柱穴か?
A区	A区遺物包含層	遺物包含層 SH-3	遺物包含層	弥生時代～古墳時代	住居の崩壊したもののか?
B区	欠番	SI-1		BSB-2の覆土	
B区	BSI-2	SI-2	堅穴住居跡	古墳時代後期	カマドあり
B区	BSI-3	SI-3	堅穴住居跡	古墳時代?	壁周溝のみ検出
B区	欠番	SI-4		BSB-3の覆土	
B区	欠番	SI-5			遺構ではない
B区	欠番	SI-6			遺構ではない
B区	欠番	SI-7		BSB-3の覆土	
B区	BSI-8	SI-8	堅穴住居跡	古墳時代後期	カマドあり。BSB-2・3に切られる
B区	BSI-9	SI-9	堅穴住居跡	古墳時代?	検出時、床面露出
B区	BSB-1	SB-1, SK-1~4, K3-94~K4-02~04~12~14~22~23グリッド	掘立柱建物跡	古墳時代～奈良・平安時代	2間×3間
B区	BSB-2	SB-2, SI-1, K4-15~16~26~28グリッド	掘立柱建物跡	古墳時代～奈良・平安時代	3間×5間、掘込みあり
B区	BSB-3	SB-3, SI-4, SI-7, SH-2, K4-25~26~35~38~45~48~55~58, 65~68グリッド	掘立柱建物跡	古墳時代～奈良・平安時代	2間×3間、掘込みあり
B区	BSB-4	SB-4, K3-94~95グリッド	掘立柱建物跡	古墳時代～奈良・平安時代	2間×2間以上
B区	BSD-1	SD-1, SD-4	溝状遺構	弥生時代後期	BSB-3に切られる
B区	BSD-2	SD-2E, SD-2M, SD-2W	溝状遺構	古墳時代後期	遺物多量
B区	BSD-3	SD-3	溝状遺構	弥生時代後期	
B区	欠番	SD-4			BSD-1に同じ
B区	欠番	SK-1			BSB-1柱穴
B区	欠番	SK-2			BSB-1柱穴
B区	欠番	SK-3			BSB-1柱穴
B区	欠番	SK-4			BSB-1柱穴
B区	BSK-5	SK-5, SH-3, K4-99グリッド	土坑	弥生時代後期	
B区	BSK-6	SK-6	土坑	古墳時代以前	
B区	BSE-1	SE-1	土坑	古墳時代?	調査時「奈良・平安時代井戸」
B区	欠番	SH-1			古墳時代遺物包含層
B区	欠番	SH-2			BSB-3の覆土
B区	欠番	SH-3			BSK-5に同じ

調査区	報告書遺構名	調査時遺構名	遺構種類	時代	備考
C区	CSI-1	SI-1	堅穴住居	古墳時代後期	カマドあり
C区	CSI-3	SI-2・3	堅穴住居	古墳時代後期	カマドあり
C区	CSI-4	SI-4	堅穴住居	古墳時代後期	カマド2基あり
C区	CSI-5	SI-5	堅穴住居	古墳時代後期	カマド火床部のみあり
C区	CSI-6	SI-6	堅穴住居	古墳時代後期	カマド火床部のみあり
C区	CSI-7	SI-7	堅穴住居	弥生時代後期	ピットのみ検出
C区	CSD-1	SD-1	溝状遺構	弥生時代後期	
C区	CSD-2	SD-2	溝状遺構	弥生時代後期	
C区	CSD-3	SD-3	溝状遺構	古墳時代後期	
C区	欠番	SD-4			位置不明
C区	CSD-5	SD-5	溝状遺構	弥生時代後期	
C区	CSD-6	SD-6	溝状遺構	古墳時代後期	CSI-4の周堤帶か?
C区	CSD-7	SD-7	溝状遺構	古墳時代後期	
C区	CSD-8	SD-8	溝状遺構	古墳時代後期	
C区	CSD-9	SD-9	溝状遺構	古墳時代後期	CSI-3の周堤帶か?
C区	CSD-10	SD-10	溝状遺構	古墳時代後期	
C区	CSD-11	SD-11	溝状遺構	中・近世以降	硬化面あり。道か?
C区	CSD-12	SD-12	溝状遺構	中・近世以降	
C区	CSD-13	SD-13	溝状遺構	弥生時代後期	
C区	CSD-14	SD-14	溝状遺構	古墳時代?	
C区	CSD-15	SD-15	溝状遺構	古墳時代?	
C区	CSD-16	SD-16	溝状遺構	弥生時代後期	
C区	欠番	SB-1			調査時「縄文時代堅穴住居跡」
C区	欠番	SB-2			位置不明
C区	CSK-1	土坑群	土坑	中・近世以降	
C区	CSK-2		土坑	中・近世以降	
C区	CSK-3		土坑	中・近世以降	
C区	CSK-4		土坑	中・近世以降	
C区	CSK-5		土坑	中・近世以降	
C区	CSK-6		土坑	中・近世以降	
C区	CSK-7		土坑	中・近世以降	
C区	CSK-8		土坑	中・近世以降	

- 注 1 岡本東三 2003「大寺山洞穴遺跡」「千葉県の歴史 資料編 2（弥生・古墳時代）」千葉県
- 2 財團法人千葉県文化財センター 2004「千葉県文化財センター年報No28－平成14年度－」
- 3 今泉潔 1988『古代寺院跡（宝珠院）確認調査報告』千葉県教育委員会
- 4 小川和博・大瀬淳志 2003「坂家塚遺跡」「千葉県の歴史 資料編 2（弥生・古墳時代）」千葉県
- 5 「尼治雄・城田義友・高梨友子 2004「船山市長須賀条里制造跡・北条条里制造跡」財團法人千葉県文化財センター
- 6 小川和博・大瀬淳志ほか 1989「小流域源寺」朝夷地区教育委員会・白浜町
- 7 神野信ほか 2003「千葉県安房郡白浜町 青木松山遺跡・沢辺遺跡発掘調査報告書」財團法人總南文化財センター
- 8 注 5に同じ
- 9 高花宏行 2003「見上遺跡」「千葉県の歴史 資料編 2（弥生・古墳時代）」千葉県
- 10 森谷ひろみ 1971「千葉県館山市沼つるば祭祀遺跡の発掘結果からみた遺跡付近の小地誌」「千葉大学教養部研究報告」B-4
- 白井久美子 2003「つるば遺跡」「千葉県の歴史 資料編 2（弥生・古墳時代）」千葉県
- 11 森谷ひろみ 1966「祭祀対象不明の祭祀遺跡とその沖積地質について—館山市東長田及び大戸熊ノ前の場合—」「千葉大学文理学部紀要」第4巻第4号
- 神尾明正 1977「館山市東長山1969年断面祭祀道路と先史原史小地誌」「千葉大学教養学部研究報告」B-10
- 12 城田義友 2005「緊急地方道路整備委託（船山大貫千倉線）埋蔵文化財調査報告書—船山市長須賀条里制造跡・東山遺跡」財團法人千葉県文化財センター
- 13 注11と同じ
- 14 神尾明正 1976「古代祭祀遺跡にみられる安房国 地域性」「千葉大学教養学部研究報告」B-9
- 15 注 7に同じ
- 16 注 2に同じ
- 17 注 1に同じ
- 18 注 3に同じ
- 19 杉江敬 2003「翁作古墳」「千葉県の歴史 資料編 2（弥生・古墳時代）」千葉県
- 20 杉江敬 2003「堅古墳」「千葉県の歴史 資料編 2（弥生・古墳時代）」千葉県
- 21 注 2に同じ
- 22 杉江敬 2003「安房神社洞穴遺跡」「千葉県の歴史 資料編 2（弥生・古墳時代）」千葉県
- 23 注 2に同じ
- 24 注 5に同じ
- 25 注 2に同じ

第2章 A区

第1節 概要

A区では、竪穴住居跡3軒（古墳時代）、方形周溝墓1基（弥生時代）、溝状遺構10条（古墳時代2・中世以降8）、遺物包含層1か所（古墳時代）、ピット群（古墳時代）などが検出された。以下、それらを時代ごとに報告する。

第2節 弥生時代以前の遺構と遺物

1 方形周溝墓

ASD-3（第6・7図、図版2・15・16）

調査区の東端で検出された遺構である。西辺と北辺・南辺の一部がコ字形に連結して検出されたもので、東側には竪穴住居跡ASHI-1やASHI-1A、溝状遺構ASD-2などがあり、これらの遺構に切られる。さらに東側は汐入川へ落ちる崖となっている。周溝の幅は約1.2m、後出面からの深さは約0.3mで、周溝外側上端間は約10mと推定される。遺存部分からは主体部は検出されなかった。遺物は周溝覆土から出土した。

図示した遺物は12点である。1～10は壺である。1～6には、縄文を沈線で区画した文様が施される。3の上端部は口唇部の可能性もあるが、遺存部分が少なく、磨耗もしており明らかではない。6の外面の赤彩は底部まで施されていた可能性もあるが、器面が磨耗しており不明である。7は頭部以下が無傷で完存するが、器面の磨耗が著しく、器面調整や赤彩の有無の観察は困難である。胎土にザラメ状の粒子を極めて多量に含むのが特徴的である。8の外面は赤彩の可能性があるが、器面が磨耗しており明らかでない。9は折返し口縁である。文様は遺存部にはみられない。10は器面の磨耗・磨減が著しいが、壺の底部と考えられる。外面に赤彩の可能性がある。

11は鉢である。口唇部にも文様が施されている可能性があるが、器面が磨耗しているため観察できない。

12は輪積み痕を明瞭に残す壺である。僅かに遺存する口唇部には、上部からの押捺と正面からの押捺が交互に施されている。外面には煤が薄く付着している。

2 遺構外出土遺物（第8図、図版15・17・20）

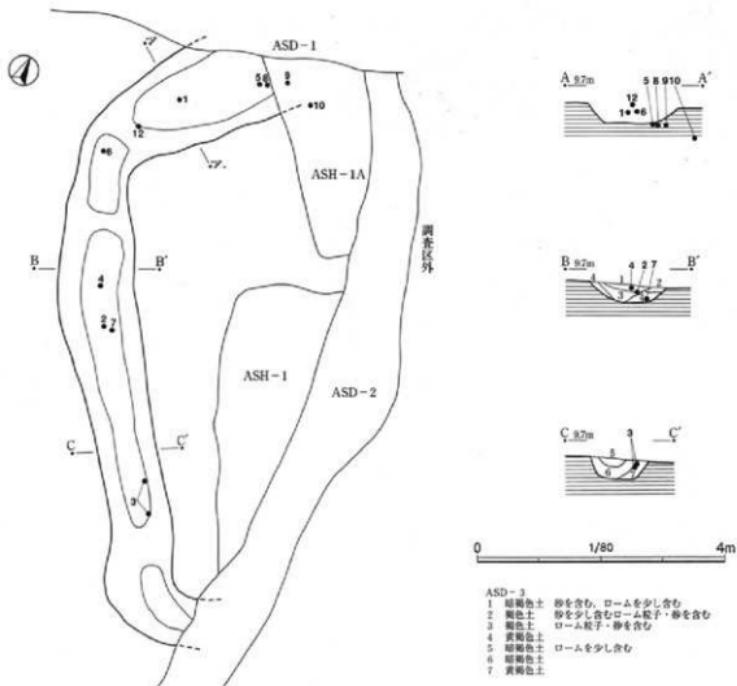
ここでは、遺構に伴わずにA区内で出土した、弥生時代以前に比定される遺物を図示する。ただし、遺構覆土から出土していてもその遺構に伴わないと判断されるものを含む。

1～4は縄文土器で、1～3は胎土に纖維を含んでいる。いずれも器面が磨耗している。1は波状口縁の破片で、平らに面取りされた口唇部の正面側に刻み列が巡っている。微隆起線によって区画された中は押引文によって充填される。微隆起線上には竹管文がみられる。2も僅かに波状となる口縁部破片である。表面に擦痕がみられる。1・2は縄文時代早期に比定されると考えられる。3は縄文のみが観察される。4は縄文と条痕文が観察される。3・4は縄文時代前期に比定されるものと考えられる。

5～16は弥生土器である。5～12は壺で、5～8・12には沈線によって区画された縄文が施される。9～11の外面は、遺存部に全面的にS字状結節文が施されている。9と10は同一個体の可能性が高い。11は



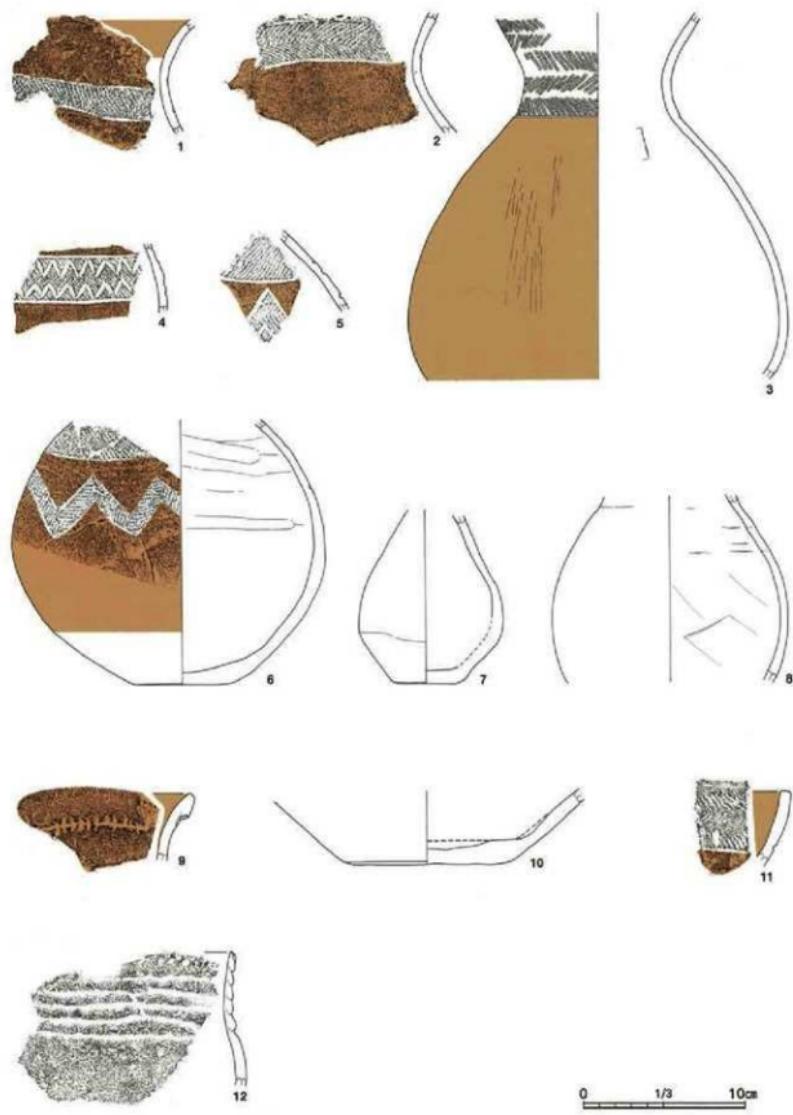
第5図 A区遺構配置図



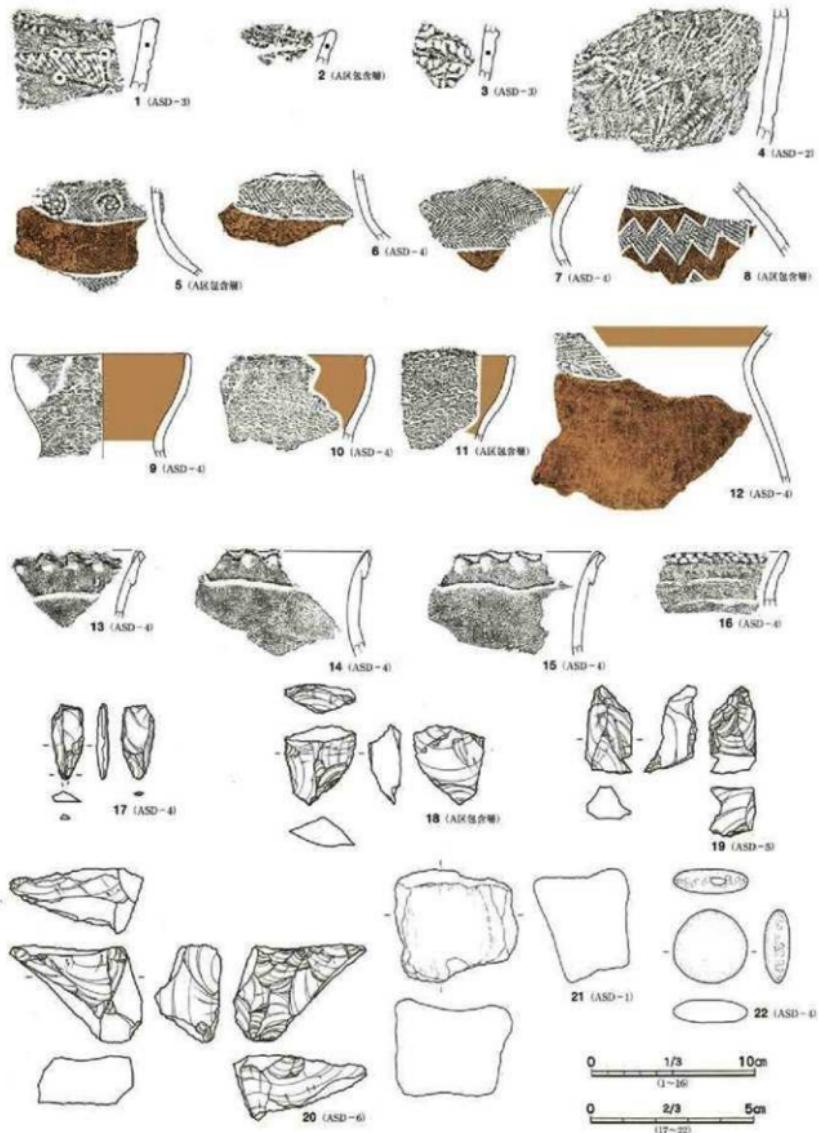
第6図 ASD-3

口唇部にもS字状結節文が施されている。13~16は亮であり、いずれも色調は暗褐色~黒色を呈する。14·15は同一個体と考えられる。16は輪積み痕を残すもので、色調は明褐色を呈する。

17~22は石器・石製品である。17はチャート製で、石錐の可能性がある。先端は僅かに欠損している。18·19は黒曜石製の剥片である。20は黒曜石製の石核とみられるが、楔形石器の可能性もある。21は石皿の破片と考えられる。砥石などとして、二次的に使用されている可能性もある。22は扁平な礫を素材とした嵌石と考えられる。表裏とも表面は滑らかで、縁辺部に敲打痕が一巡している。



第7図 ASD-3出土遺物



第8図 A区遺構外出土 弥生時代以前の遺物

第3節 古墳時代の遺構と遺物

1 壓穴住居跡

ASH-1 (第9図、図版2・15・18・20)

調査区の東端で、北西コーナー部付近のみが検出された堅穴住居跡である。大部分は溝状遺構ASD-2と沙入川に削られている。プランは方形を呈するとみられるが、規模の推定は困難である。検出面からの深さは約0.3mで、壁は比較的緩やかな角度で立ち上がる。床面はほぼ平坦である。ピットやがあるいはカマドは検出されなかった。

図示した遺物は4点である。1・2は土師器である。1は杯で、口縁部がやや稜をもってほぼ直立する。器面の磨耗が著しいが、赤彩が施されていたとみられる。

2は小型壺で、丸底気味の底部は凹凸があり安定が悪い。内面口縁部に焼が少し付着している。

3は勾形十製品である。

4は刀子の茎部とみられる。

ASH-1A (第10図、図版2・18)

調査区の東端で南コーナー部付近のみが検出された、堅穴住居跡と考えられる遺構である。大部分は溝状遺構ASD-1やASD-2、沙入川に削られている。プランは方形を呈するとみられるが、規模の推定は困難である。検出面からの深さは深いところで約0.1mで、壁はほとんど遺存していない。床面は崖側に向かってやや傾斜して低くなっている。ピットやがあるいはカマドは検出されなかった。

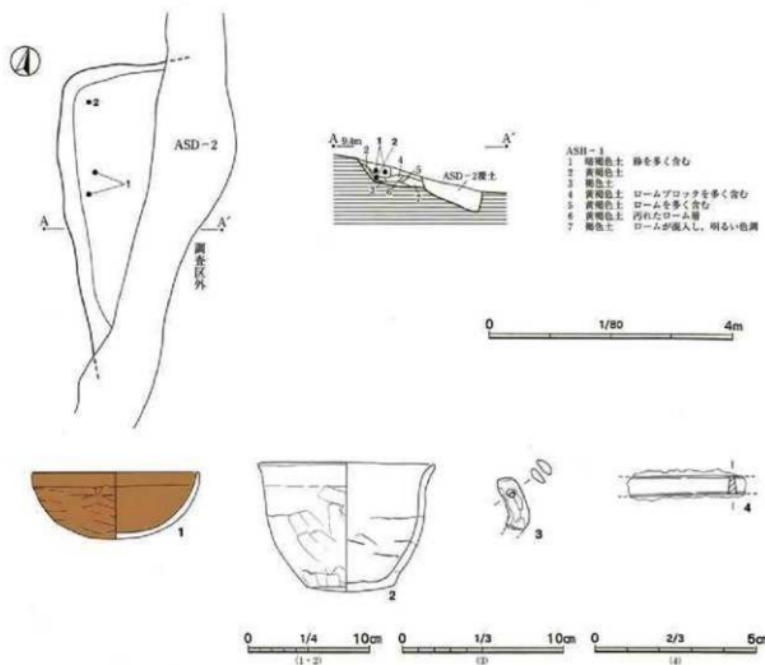
図示した遺物は1点である。1は上師器高杯の破片である。

ASH-2 (第11図、図版3・15・18)

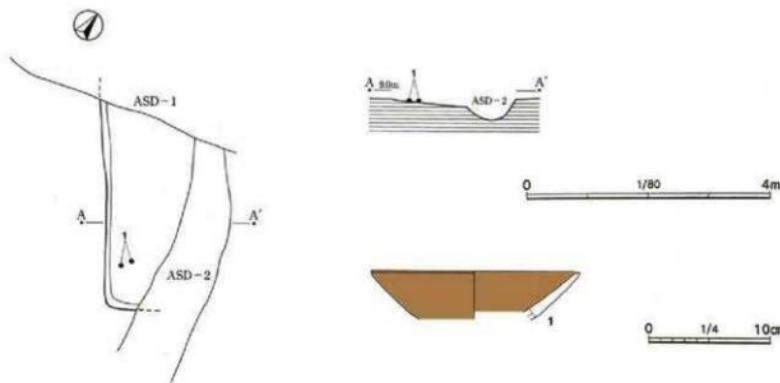
調査区の北東隅で西壁のみが検出された。東側は沙入川へ落ちる崖となっている。直線的な崖のラインから、プランは方形を呈するとみられるが、コーナー部分は不明で、規模も明らかでない。検出面からの深さは約0.4mで、壁は比較的緩やかな角度で立ち上がる。床面は崖側に向かってやや傾斜して低くなっている。調査区の縁では、段状に低くなる部分がある。床面からはピットが並んでいくつか検出されたが、いずれも浅く不規則で、当遺構に作わない可能性もある。炉あるいはカマドは検出されなかった。

図示した遺物は3点である。1は、上師器裏の口縁部破片である。2も壺とも考えられるが、底径が小さいことから、小型壺であろう。底部外面の木葉痕をナデ消している様子が見える。

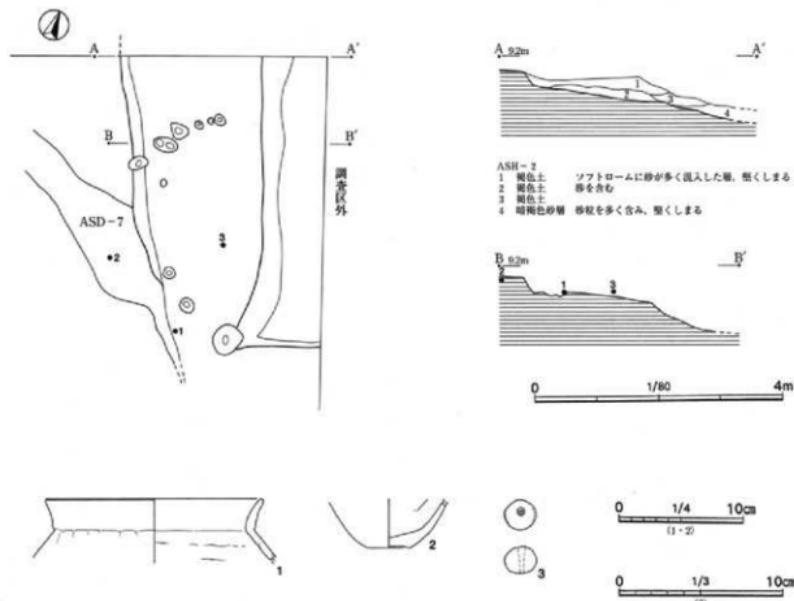
3は土器である。



第9図 ASH-1と出土遺物



第10図 ASH-1Aと出土遺物



第11図 ASH-2と出土遺物

2 溝状遺構

ASD-5 (第12~14図、図版3・15・18)

調査区のほぼ中央を東西に横断する溝状遺構である。溝状遺構ASD-4, ASD-6と重複する。ASD-4は中世以降の溝状遺構であり、明らかに当遺構より新しい。ASD-6との新旧関係は、プランがはつきりしないところもあり、また土層断面でも境界の土質が似ており判別が難しいが、当遺構のほうが古いとみられる。東端は崖沿いを走るASD-2に切られる。西側については、ASD-4に取り込まれはつきりしないが、そのまま調査区外へ続いていくと考えられる。底面は平坦ではなく、地山が強く巻き上げられ、凹凸がある。

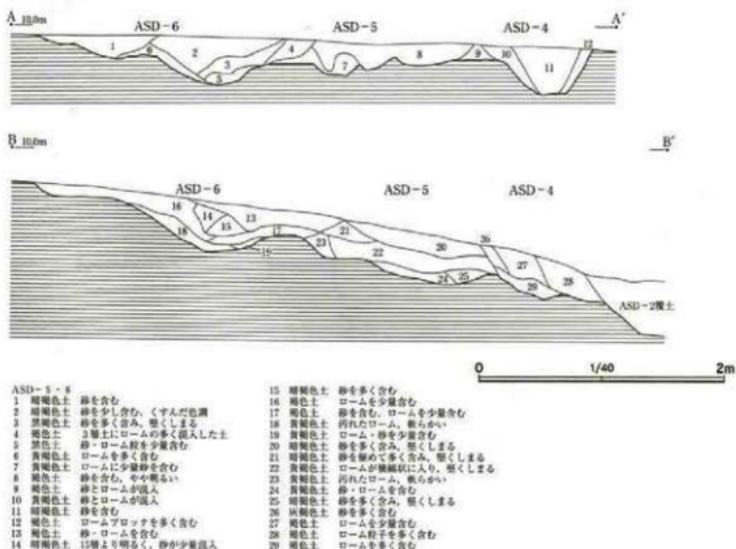
図示した遺物は4点である。1は土師器杯で、口縁部に明瞭な段がみられる。器面が磨耗しているが、内外面赤彩されているようである。

2・3は土玉である。

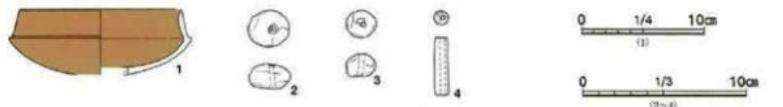
4は滑石製管玉である。



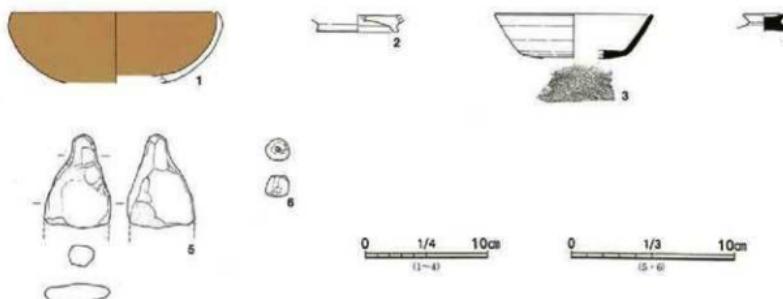
第12図 ASD-5・6



第13図 ASD-5・6 土層断面図



第14図 ASD-5 出土遺物



第15図 ASD-6 出土遺物

ASD-6 (第12・13・15図、図版3・15・18)

調査区のほぼ中央を東西に横断する溝状遺構である。溝状遺構ASD-4, ASD-5と重複する。ASD-4は中世以降の溝状遺構であり、明らかに当遺構より新しい。ASD-5との新旧関係は、プランがはつきりしないところもあり、また上層断面でも境界の土質が似ており判別が難しいが、当遺構のほうが新しいとみられる。東端は崖沿いを走るASD-2に切られる。西側については、ASD-4に取り込まれはつきりしないが、そのまま調査区外へ続いていると考えられる。底面は平坦ではなく、地山が強く巻き上げられ、凹凸がある。出土遺物から、古墳時代以降奈良・平安時代にも機能していたものと考えられる。

図示した遺物は6点である。1・2は土師器杯である。2は内黒の高台付杯である。3は須恵器杯で、遺存部の内面全面と外面口縁部の一部に自然釉がみられる。外面底部には一字文字状にヘラ型記号がみられる。4は須恵器蓋のつまみ部で、外面は薄く自然釉がかかっている。5は斧形土製品を考えられる。6は土糞である。

3 A区遺物包含層とピット群 (第16~19図、図版4・15・16・19・20)

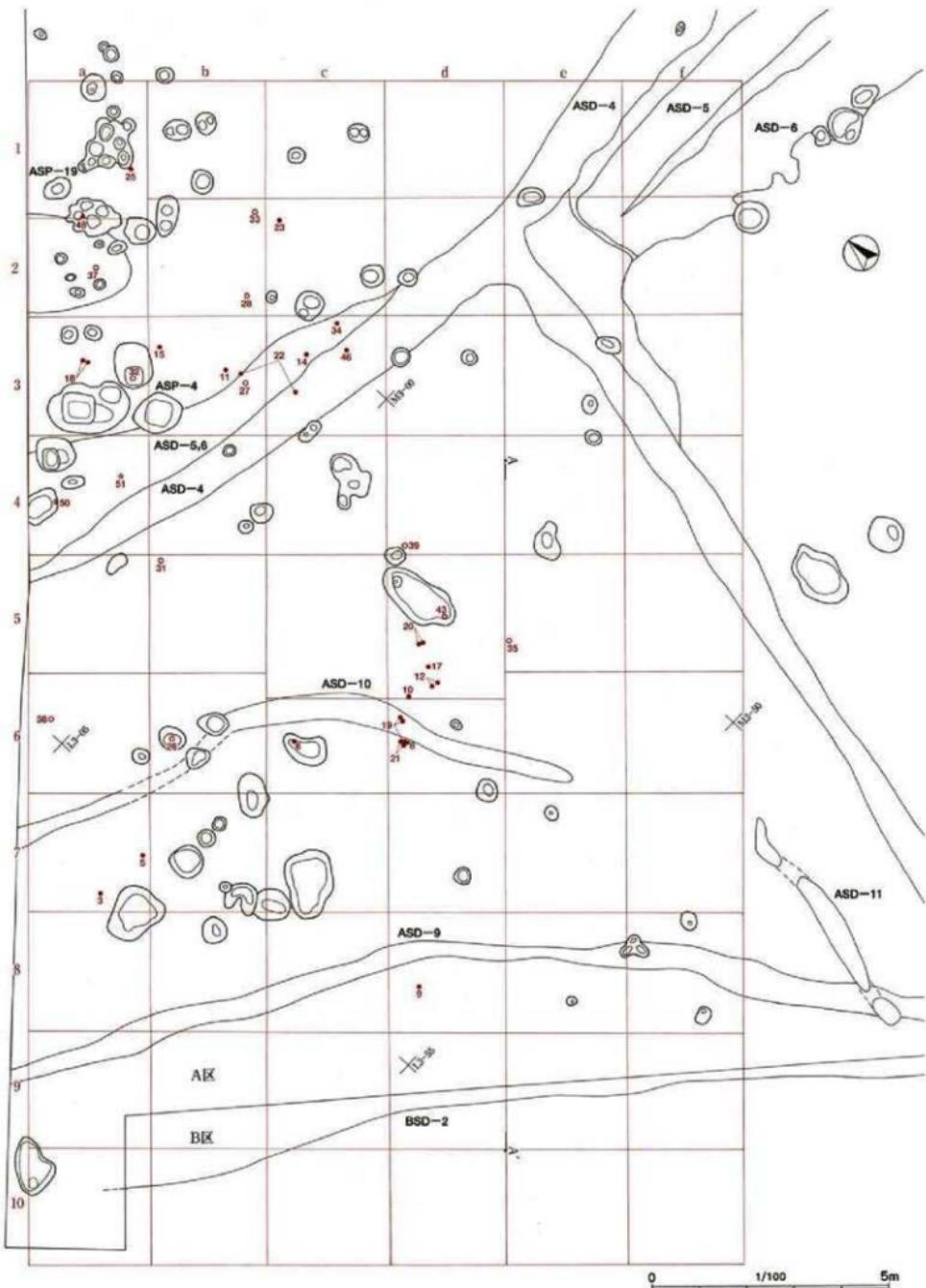
A区の西部で、主に古墳時代の遺物を包含する、弥生時代以降の暗褐色の砂質土層が確認された。遺物が集中して出土する様子や包含層の下からピット群が検出されたことなどから堅穴住居跡の存在を考えたが、壁や床面などは検出できなかった。断面観察により、BSD-2より古いことが明らかとなっている。

包含層の遺物は、遺物の集中する部分を覆うように調査区範囲のラインに沿って2.5m×2.5mのグリッドを独自に設定して取上げを行った。グリッドの起点は任意で、グリッド名は、北西から南東方向へa~f、北東から南西方向へ1~9とし、その組み合わせによってa-3, b-5などと呼称した。d-4・d-5・c-4・e-5グリッド付近は特に遺物が集中していた。

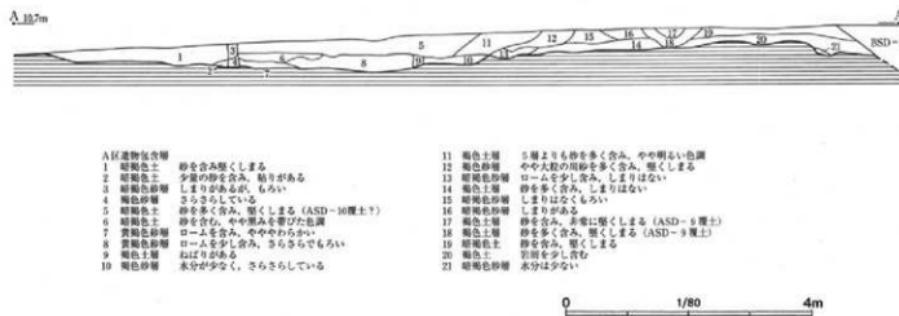
ピット群は主に包含層の下から検出された。ピットの一つ一つに「ASP」の接頭記号を付けて調査した。遺物が出土せず、用途等明らかにならないものも多いが、中には柱痕跡が観察されたものや木炭が詰まつたもの等もあり、堅穴住居は掘立柱建物などを構成するものであったと考えられる。

同示した遺物は51点である。1~9は弥生土器である。1~7は壺で、1・2は地文に縄文が、3・4はS字状縦筋文が、7は網目状横糸文が施される。5・6は沈線で区画された縄文帯による文様をもつものである。5には円形浮文が付されている。8は無頬壺とみられ、口縁部の文様は沈線のみによって描かれており、口唇部には縄文が施されている。赤彩の有無は明らかでない。9は脚部のみの遺存である。脚部内面にも赤彩が施される。10~14は土師器である。いずれも内外面とも赤彩される。15・16は須恵器蓋である。17は土師器の無頬壺とみられる。外面の赤彩範囲は、器面の磨滅・剥落が著しいためはつきりしないが、最大怪付近までの可能性もある。18は土師器高杯である。19・20は土師器の体又は小型壺である。いずれも底部はヘラケメリで仕上げられ、上げ底気味である。21~23は土師器壺、24・25は須恵器壺である。

26・27は輪積みによって成形されていることから粗造土器と考える。いずれも胎土はきめ細かい。26は内面に放射状の指ナデがみられる。27は対面方向に2か所の焼成前穿孔がある。さらに図正面の穿孔横には、貫通しない刺突が1か所認められる。28・29は手捏土器である。28の内面は、上部からみて放射状に指頭圧痕が施されるのが観察できる。29は底部は丸底気味で安定が悪い。30は高杯形土製品である。31・32は土錘と考えられる。33・34は土製円板、35~45は土糞である。このうち41~45は扁平でE字をかたど



第16図 A区遺物包含層とピット群



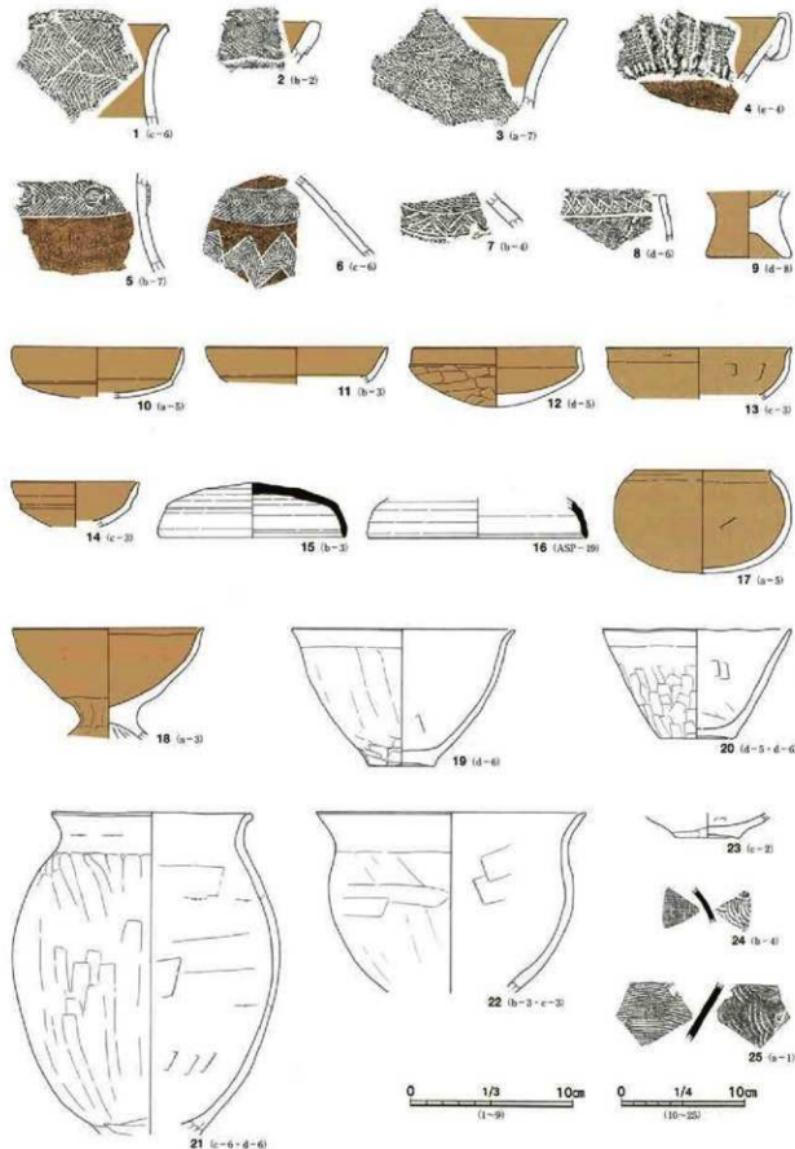
第17図 A区遺物包含層土層断面図

っているかのようである。46は全体の形状は不明だが、図上部に貫通孔が1か所あり、さらに下部の破損部分には貫通孔の痕跡が3か所ある。47・48は軽石製品である。49~51は鉄製品である。49は刀子の刃部である。50は、下部が屈曲し、折れて錆着しているが、先端部の形状から堅あるいは堅などの工具と考えられる。51も鍬などの工具と考えられる。

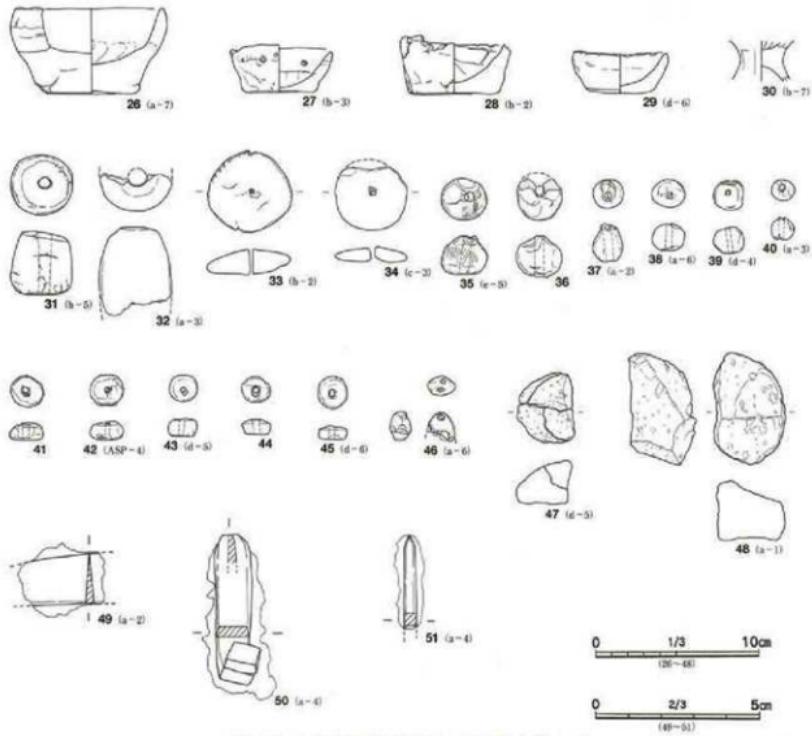
4 遺構外出土遺物（第20図・図版18）

ここでは、遺構に伴わずにA区内で出土した、古墳時代に比定される遺物を図示する。ただし、遺構覆土から出土していてもその遺構に伴わないと判断されるものを含む。なお、遺物包含層の出土遺物については、包含層が住居跡の可能性をもつことから、遺物のまとまりを考慮して別に示している（第18・19図）。

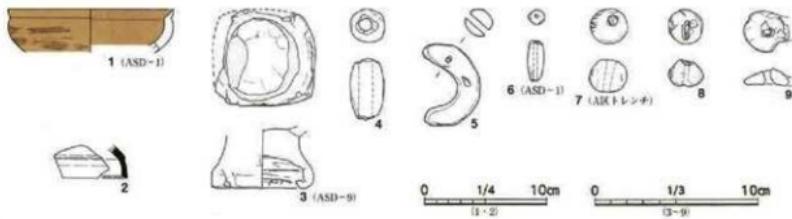
1は土師器杯で、外面にハケ調整痕が少し残る。2は須恵器蓋である。3は高杯形土製品とみられるが、裾部は平面形が四角形を呈しており、四辺を内面に折り込むようにして形作られている。4は土錘と考えられる。5は勾玉形土製品、6は中央部がやや膨らむが管玉形土製品、7・8は土玉である。9は焼成前穿孔のある土製品で、裏面は平坦である。破損部している部分は指で挟むことによって幅が狭められており、左右対称の形であったのだろうか。



第18図 A区遺物包含層とピット群出土遺物（1）



第19図 A区遺物包含層とピット群出土遺物（2）



第20図 A区遺物外出土 古墳時代の遺物

第4節 中世以降の遺構と遺物

1 溝状遺構

ASD-1 (第5図, 図版4)

調査区北部を、ややカーブを描きながら東西に横断する溝状遺構である。断面形はやや凹凸はあるもののほぼ箱形を呈し、検出面からの深さは約0.8mを測る。覆土は堅くしまっており、道として機能したと考えられる。土師器・須恵器の小破片のほか、中・近世陶磁器片が少量出土している。

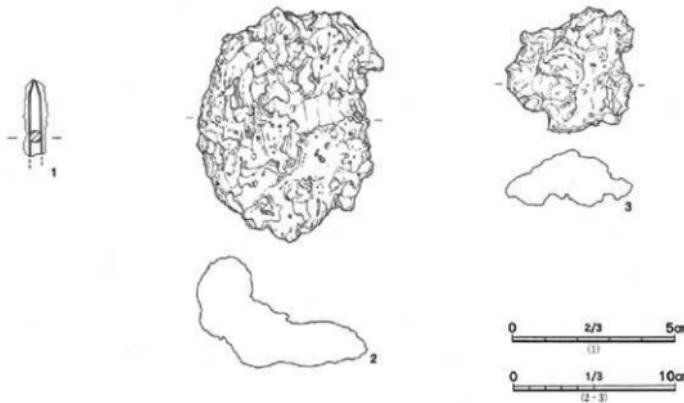
ASD-2 (第5図)

調査区の東端に、汐入川に面した崖に沿って台地縁辺を巡るように位置する溝状遺構である。安全面等の理由から底面まで調査することができなかった。覆土は黒褐色土や暗褐色土で、土層断面の観察から重複する全ての遺構が汐入川に削られた後に造られたものと推定できる。土師器・須恵器の小破片のほか、中・近世陶磁器片、近・現代の陶器が少量出土し、中世以降、かなり新しい時期まで機能していたものと考えられる。

ASD-4 (第5・21図, 図版3・20)

調査区のはば中央を東西に横断する溝状遺構である。溝状遺構ASD-5, ASD-6と重複するが、土層断面の観察から、ASD-5, ASD-6より新しいと判断される。また、中央部付近で南北方向に走るASD-8と繋がるが、その新旧関係は明らかでない。東端は崖沿いを走るASD-2に切られ、西側はそのまま調査区外へ続いていると考えられる。

遺物は土師器・須恵器の小破片及び、中・近世陶磁器片が出土した。図示した遺物は3点である。1は刺突具の先端と考えられる。2・3は椀形津である。



第21図 ASD-4 出土遺物

ASD-7 (第5図)

調査区の北端で検出された溝状遺構である。ASH-2を切るとみられる。断面形は箱形で、覆土は褐色土と暗褐色土である。検出面からの深さは約0.3mを測る。西側は削平され検出できなかった。

遺物は土師器の小破片が少量出土したが、混入品と考えられる。

ASD-8 (第5図、図版4)

調査区の中央付近を南北に継断する溝状遺構である。北端でASD-4, ASD-5, ASD-6と直交するように重複するが、新旧関係は明らかでない。ASD-4と同時に機能したと考えるのが妥当だが、ASD-5, ASD-6と同じ時期（古墳時代）から同時に機能していた可能性も否定はできない。断面形はU字形で、覆土は暗褐色土と褐色土である。検出面からの深さは約0.3mである。土師器・須恵器の小破片のか、中・近世陶磁器片が少量出土した。

ASD-9 (第5図)

調査区の南西隅で検出された溝状遺構である。掘込みは不明瞭であるが、覆土上面が硬化していたことから確認できたものである。西端は調査区外へ続く。東端は更に東へ続く可能性もあるが、明らかでない。硬化面の存在から、道として機能していたものと考えられる。弥生土器・土師器・手捏土器の小破片が少量出土したが、混入品と考えられる。

ASD-10 (第5図)

調査区の西部で検出された溝状遺構である。掘込みはごく浅い。遺物は出土していないが、状況的に中世以降の所産と考えられる。

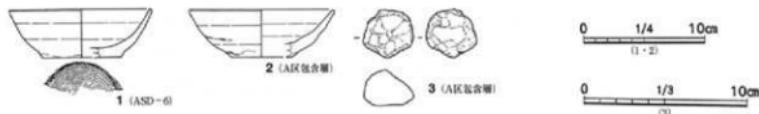
ASD-11 (第5図)

調査区の南部で、ASD-8に沿うように僅かに南北方向に検出された溝状遺構である。覆土は軟質の黒色土である。遺物は土師器・須恵器の小破片が少量出土したが、覆土の状態等から中世以降、比較的新しい時期の所産であると考えられる。

2 遺構外出土遺物 (第22図、図版16・20)

ここでは、遺構に伴わずにA区内で出土した、中世以降に比定される遺物を図示する。ただし、遺構覆土から出土していてもその遺構に伴わないと判断されるものを含む。

1・2はカワラケである。1の外面底部には回転糸切り痕が明瞭に残されている。2も磨耗してはっきりしないが、回転糸切り痕があるとみられる。3はメノウ製の火打石である。稜線がかなり磨滅している。



第22図 A区遺構外出土 中世以降の遺物

第3章 B区

第1節 概要

B区では、堅穴住居跡4軒（古墳時代）、掘立柱建物跡4棟（古墳時代～奈良・平安時代）、溝状遺構3条（弥生時代2・古墳時代1）、土坑3基（弥生時代1・古墳時代2）が検出された。以下、これらを時代ごとに報告する。

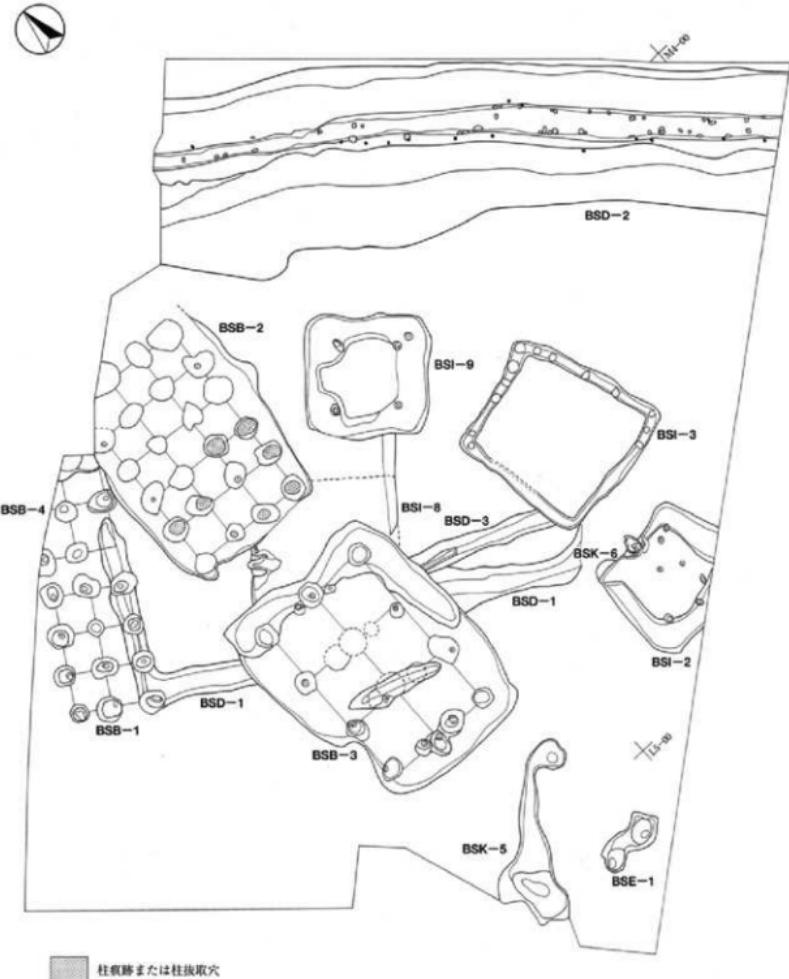
第2節 弥生時代の遺構と遺物

1 溝状遺構

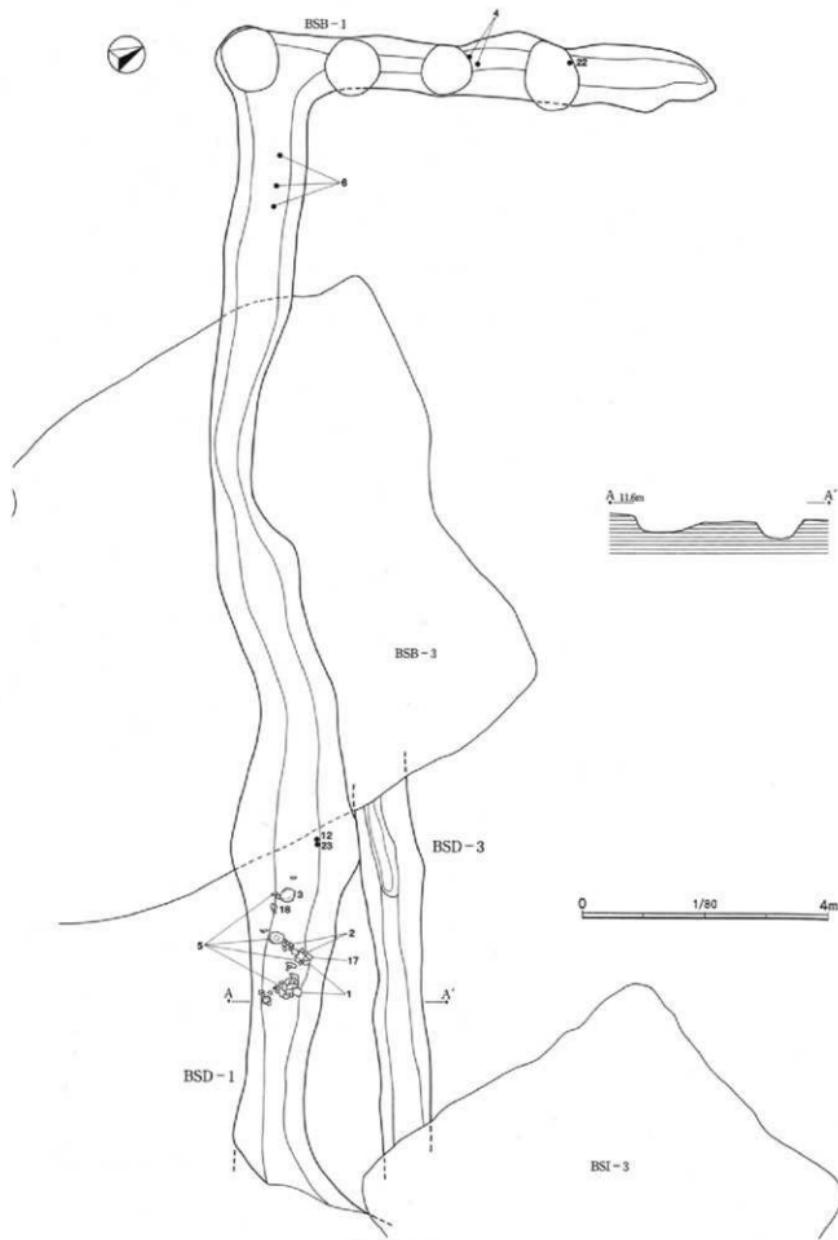
BSD-1（第24～27図、巻頭図版2、図版7・21・23・24・53）

調査区の中央付近を、北東～南西方向から北西～南東方向に約90°方向を変えてL字形に検出された溝状遺構である。西側はBSB-1の柱穴と重複して位置しているが、BSB-1より古い別の遺構と判断される。L字形に屈曲した先はBSB-3に切られ、西端は削平されて検出できなかった。断面形は緩いU字形で、検出面からの深さは約0.3mである。並行するBSD-3と同時存在の可能性もある。遺物が多量に出上りし、弥生時代の所産と考えられるが、機能は不明である。

図示した遺物は24点である。1～18は壺である。1は口縁部のみを欠損する。網目状撚糸文を沈線で区画し文様とするもので、頸部の文様帶の上には円形浮文が現状で7か所、復元で8か所あると推定される。円形浮文は肩部の文様帶の上にも7か所認められる。最大径付近の文様帶は、「H」字状の文様が4分の3周ほど規則的に巡るが、残りの部分には瘤状の文様が不規則に配置されている。この文様帶の上部は沈線によって区画されているが、下部は区画されず解放している。外面の赤彩は無文部に施されているが、底部付近には認められない。2は全面的にミガキで仕上げられ、遺存部には文様は認められない。赤彩が施されるが、器面の磨滅が著しく、底部付近まで施されていたかどうかが明らかでない。なお、上端部は口唇部である可能性もある。3は頸部以下がほぼ無傷で遺存する。最大径付近に1か所、焼成後穿孔が認められる。頸部はS字状結節文が施され、1本の沈線で区画される。沈線以下は丁寧なミガキによって仕上げられている。4は頸部と胴部が直接接合しないが、同一個体の可能性が高く、1個体として復元したものである。頸部はS字状結節文が施され、沈線で区画される。5もS字状結節文が沈線によって区画される文様帶をもつものである。6は遺存部分に文様は認められない。器面の磨滅・剥落が著しいが、外面全体に赤彩が施されているとみられる。7は口縁部・口唇部にS字状結節文が施されており、破損している頸部下端で、沈線によって区画されるようである。8・9は折返し口縁となる壺の口縁部破片である。9の右端には棒状浮文が付いていた痕跡が認められる。10は口縁部・口唇部にS字状結節文が施される。11は頸部の羽状繩文が沈線で区画され、以下無文となる。12はS字状結節文が沈線で区画され、無文部には赤彩が施される。13・14は繩文が沈線で区画される。13には2個1単位と思われる円形浮文が付く。15・16は繩文を沈線で区画し山形の文様がみられるものである。17は広口壺と考えられる。輪積み痕部にはS字状結節文が施され、端部に刺突列が巡る。18は丁寧な作りから壺の底部と考えられるが、赤彩は現状では確認できない。



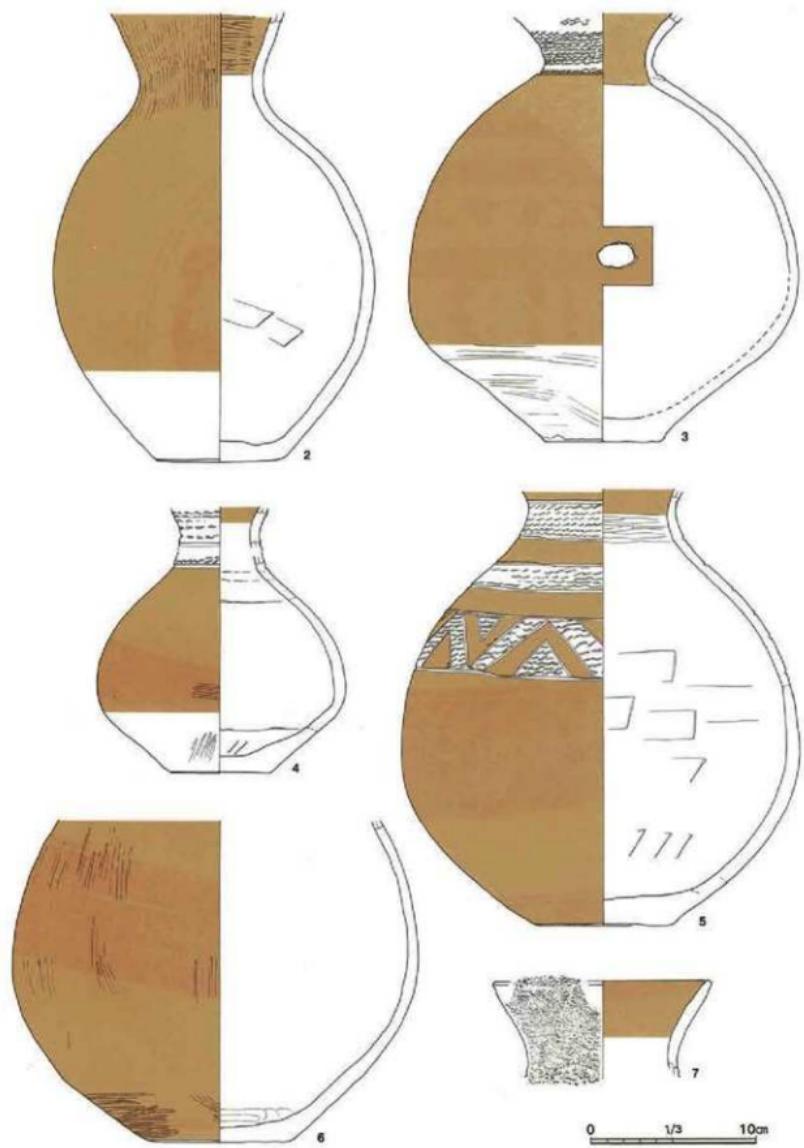
第23図 B区造構配置図



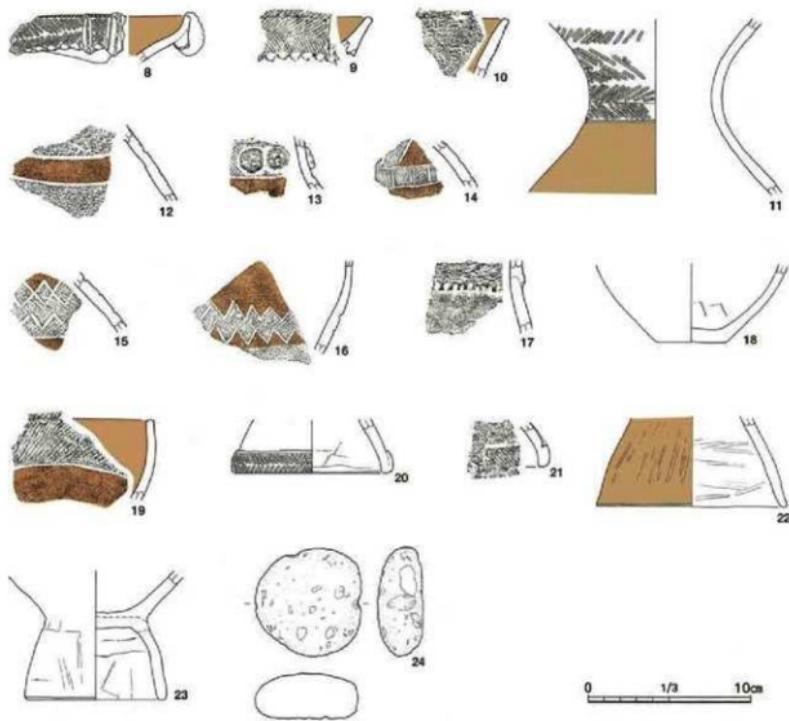
第24図 BSB-1・3



第25図 BSD-1 出土遺物 (1)



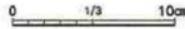
第26図 BSD-1 出土遺物 (2)



第27図 BSD-1 出土遺物 (3)



第28図 BSD-3 出土遺物



19は鉢である。20・21は高杯の脚部と考えられ、同一個体の可能性もある。縁部は折返しとなっており、縄文が施される。22は外面が赤彩される。円形上器の口縁部である可能性もあるが、ここでは縁部の角張った形状や調整痕から、高杯の脚部と考える。23は台付甕の脚台部とみられる。24は軽石製品である。

BSD-3 (第24・28図、図版24)

調査区の中丸付近を、BSB-3と重複しながらBSD-1と並行するように位置する溝状遺構である。東側で重複するBSI-3にも切られると考えられるが、はっきりしない。遺物は弥生上器や土師器の小破片等が出上した。BSD-1と同時存在の可能性がある。

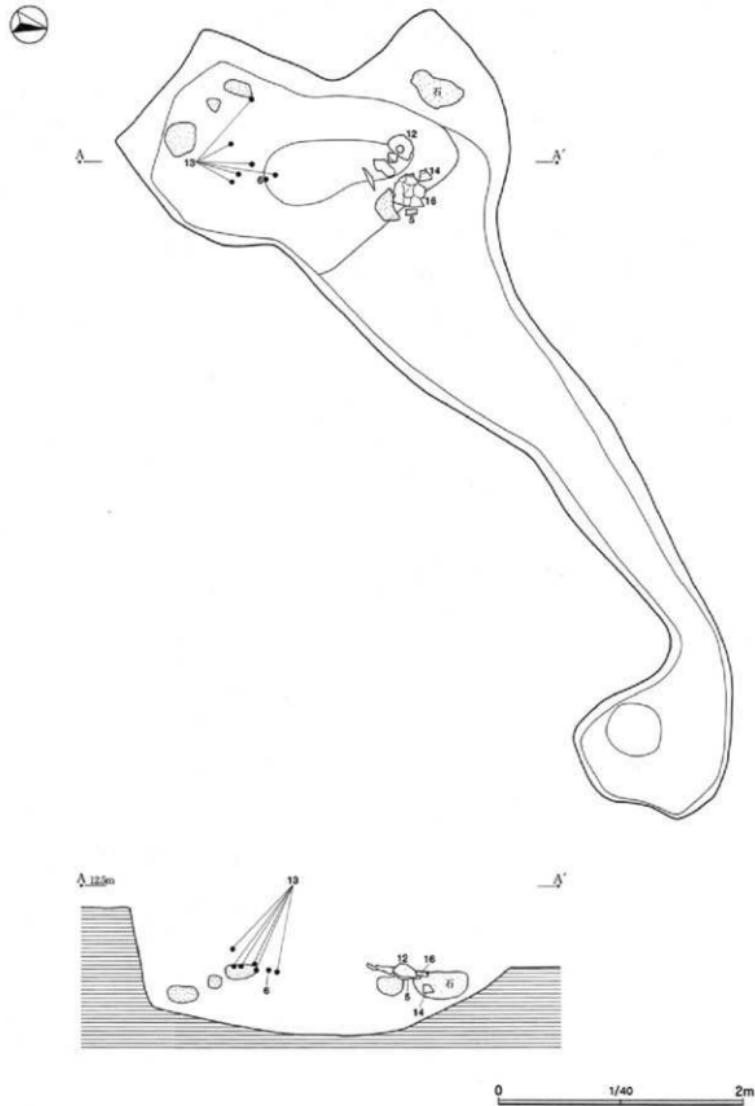
図示した遺物は3点である。1・2は壺で、1は網目状撚糸文を沈線で区画し、無文部に赤彩を施す。2はS字状結節文を地文とする。3は口縁部・口唇部にS字状結節文を施した鉢である。

2 土坑

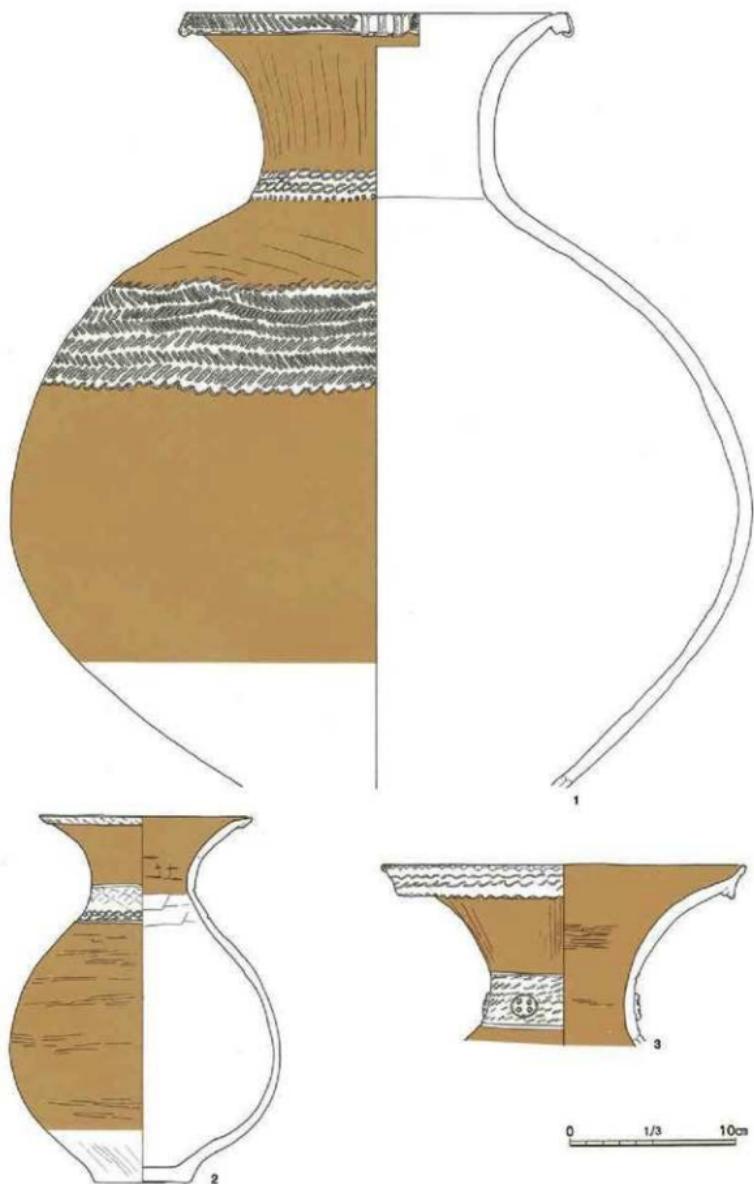
BSK-5 (第29~32図、図版9・21・22・24・47)

調査区の南端で検出された土坑である。北側は溝状を呈する。遺構周辺は岩盤が露出しており、当遺構も岩盤を掘り抜いて構築されている。プランがはっきり捉えられないことから、包含層として調査を開始したが、底面から水が豊富に湧き出し、水汲み場の可能性も考えられる土坑である。遺物は土器が多量に出土したほか、人頭大の石も出土した。

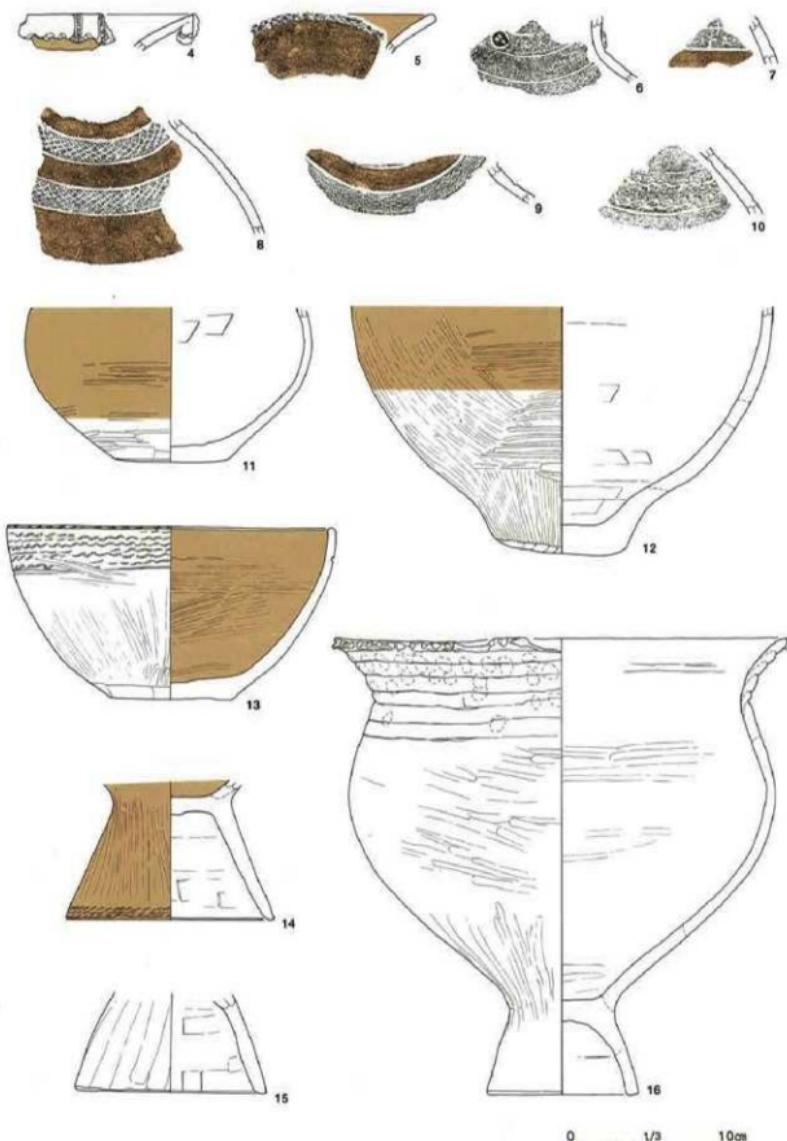
図示した遺物は22点である。1~12は壺である。1は現存高46.7cm、復元胴部最大径44.9cmを測る大型の壺である。折返しとなる口縁部には縦文が施され、その上に棒状浮文が付される。棒状浮文は、3本1単位とみられ、全周では4単位あると推定される。頸部にはS字状結節文の下に棒状T工具部によるとみられる刺突列が巡り、肩部上半にはS字状結節文で区画された羽状縄文がみられる。内面は磨減・剥落が特に著しく、調整痕の観察や赤彩の有無の確認等は困難である。2も折返し口縁で、遺存状態は悪いが口縁部には網目状撚糸文が施されている。頸部は上段に網目状撚糸文、下段にS字状結節文が帶状に巡り、沈線で区画される。3も折返し口縁をもつもので、口縁部と頸部にはS字状結節文が施され、口縁部と折返し肩部には押捺列が巡る。頸部には円形浮文が6単位貼付される。4は器面が磨耗してはっきりしないが、折返し口縁部に縦文又はS字状結節文が施されているようである。内面は赤彩の可能性はあるが明らかでない。5は口唇部にのみ網目状撚糸文が施されている。6~9は網目状撚糸文が沈線によって区画されている。5の赤彩の有無は明らかでない。7は網目状撚糸文の帯に刺突列が加えられている。10はS字状結節文が沈線で区画されている。赤彩の有無ははっきりしない。11・12は遺存部には文様は認められない。12は丸底甕の底部をもち、やや不安定である。13は鉢で、口縁部・口唇部にS字状結節文が施される。外側無文部はミガキが施されており、赤彩があった可能性があるが、現状では明らかでない。14は高杯の脚部と考えられる。脚部にS字状結節文が巡る。15~18は台付甕である。16は口縁部の輪積み痕がはっきり残されている。口唇部には押捺列が巡る。胴部はミガキによって丁寧に仕上げられている。17の輪積み痕は頸部に1本残すほかはナデ消されている。口唇部には押捺列が巡る。胴部外面に漆の付着が若干認められる。18はやや大型で、輪積み痕は幾分粗雑にナデ消されている。19・20は手捏土器である。19の内面には指頭圧痕が放射状にみられる。21・22は土甕であるが、22の孔は貫通していない。



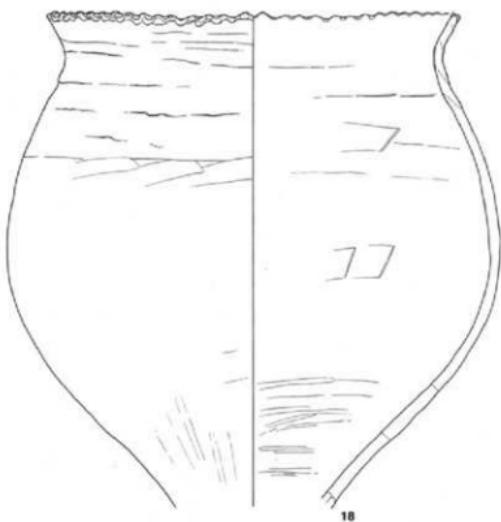
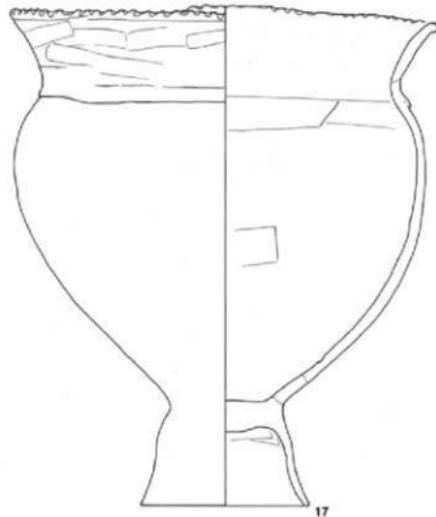
第29図 BSK - 5



第30図 BSK-5 出土遺物 (1)



第31図 BSK-5 出土遺物 (2)



0 1/3 10cm

第32図 BSK-5 出土遺物 (3)

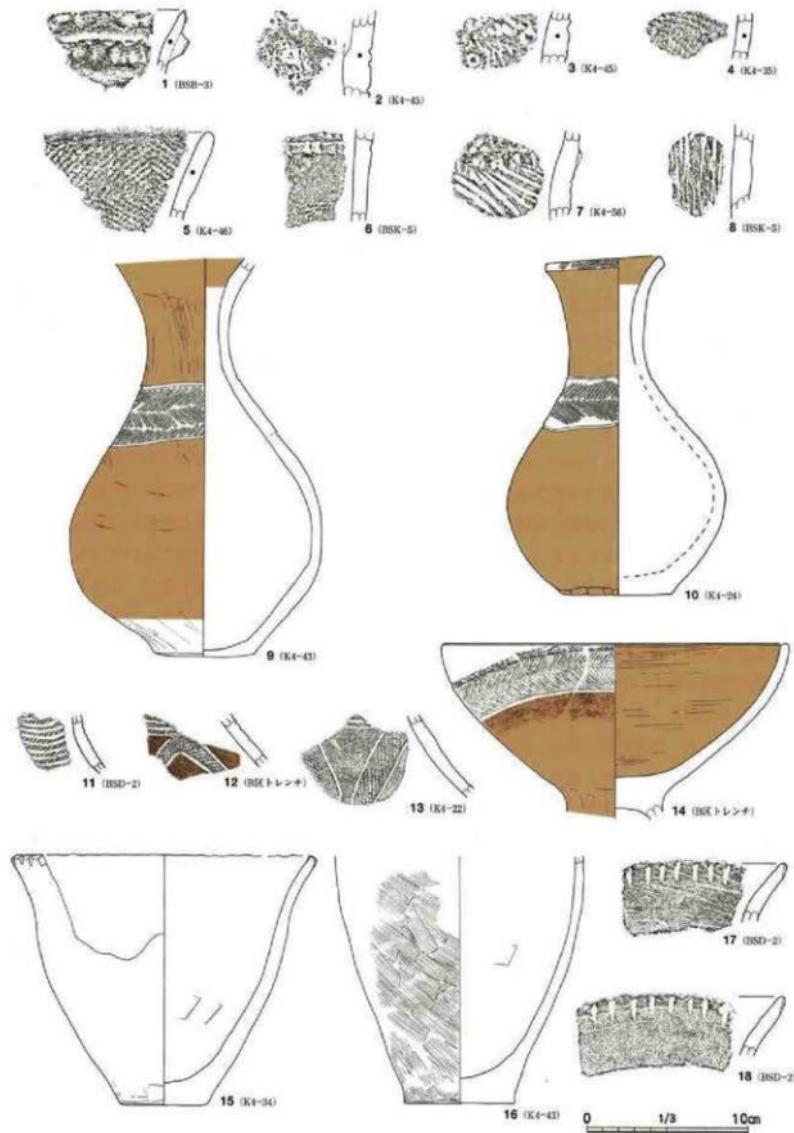
3 造構外出土遺物（第33～40図、図版22・23・25～29・53）

ここでは、造構に伴わずにB区内で出土した、弥生時代に比定される遺物を図示する。ただし、造構覆土から出土していてもその造構に伴わないと判断されるものを含む。

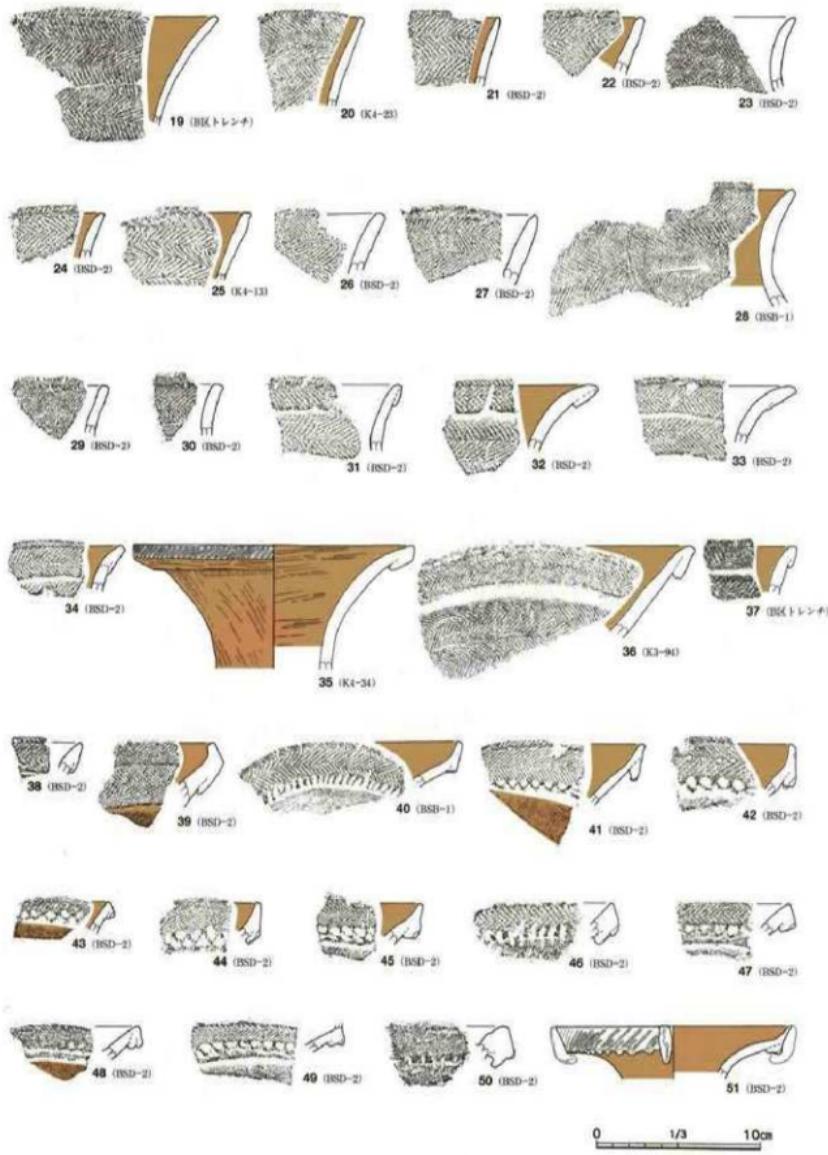
1～8は縄文土器である。1～5は胎土に鐵錐が含まれる。1の口唇部には、正面から指頭などによって加えられた押捺列が巡り、その下には、押捺の加えられた隆帯が付される。縄文時代早期に比定されよう。2・3にはループ文と円形竹管の押捺がみられるので、同一個体の可能性がある。4・5は縄文を地文とし、5は緩やかな波状口縁である。6は竹管による押引文がみられる。2～6は縄文時代前期に比定されよう。7・8は沈線による文様を地文とし、同一個体の可能性がある。縄文時代中期又は後期に比定されるものと考えられる。

9～18は弥生時代中期に比定できる土器である。9～13は壺で、9・10は頸部に沈線によって区画された羽状縄文帯をもつ。11～13はいずれも縄文と沈線によって文様が構成されている。14は高杯で口唇部・口縁部に縦文が施文される。15～18は甕である。16の外面にはハケ調整痕がみられ、若干の煤の付着が認められる。17・18にもハケ調整痕がみられる。口唇部にはハケもしくは飾齒状工具端部による刺突列が巡る。同一個体と考えられる。

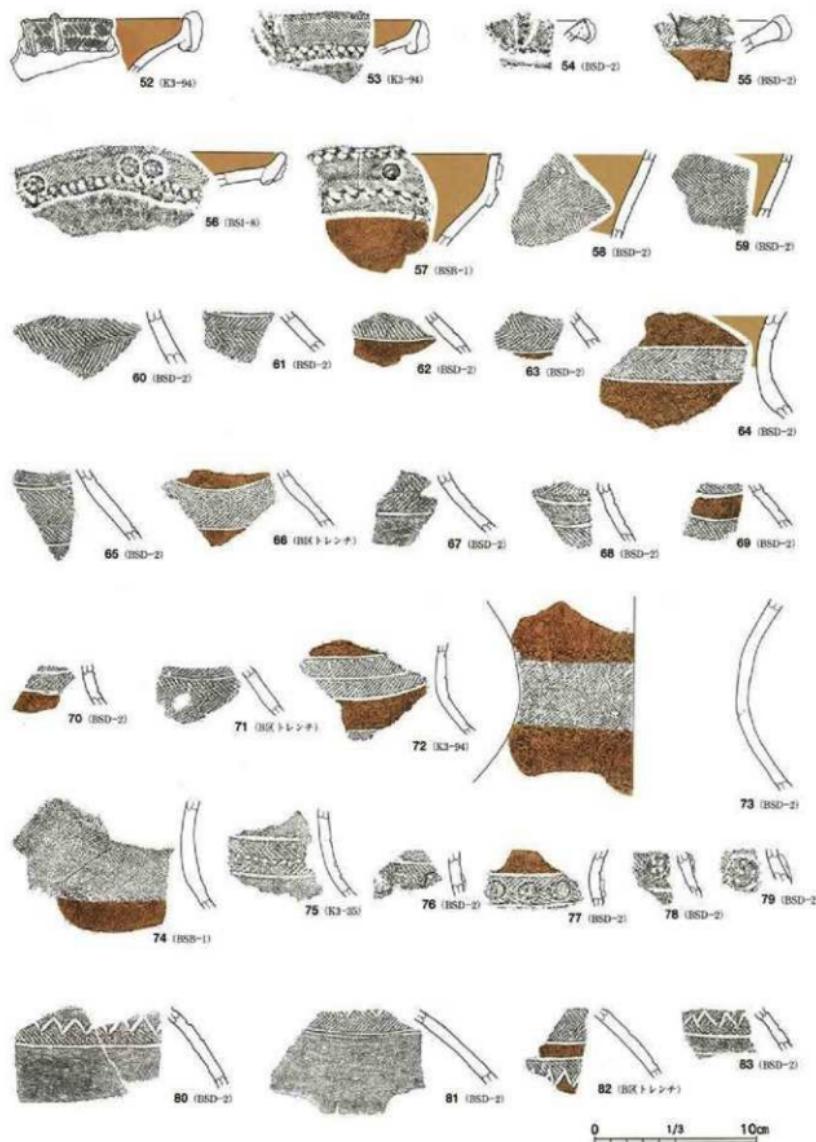
19～30は縄文の施文された壺の口縁部破片である。19～29は口唇部にも縄文がみられ、内面が赤彩されるものが多い。30の口唇部は平扣で無文で、高杯の裾部の可能性もある。31～57は縄文の施文された折返しの口縁部破片である。口唇部にも縄文のみられるものが多い。また、折返し部の端部には刻み列を巡らすものや棒状浮文を付すものもある。内面は赤彩されるものが多く、現状で確認できないものも、器面の磨耗のために、本来は赤彩されていた可能性が高い。51は破片からの復元実測であるが、1本又は2本1単位の棒状浮文が全周で4単位あったものと推定できる。58～72・75～79は沈線によって区画された縄文帯をもつもので、73・74は縄文帯がS字状結節文によって区画されるものである。75・76は縄文帯の上に列点状の刺突を施す。76～79は縄文帯上に円形浮文を付す。80～110は縄文と沈線によって山形文が描かれているものである。多くは無文部に赤彩を施す。現状で確認できないものも器面の磨耗・磨滅のために、本来は赤彩があった可能性が高い。104・107には縦の区画が意識されている。109は器面の剥落が著しいが、本来無文部に赤彩があったと思われるもので、110と同一個体である可能性が高い。111～127は網目状然系文のみられる壺である。縄文を施文したものと同様、沈線で区画したり山形文を構成したりするものがある。多くは無文部に赤彩を施す。現状で確認できないものも器面の磨耗・磨滅のために、本来は赤彩があった可能性が高い。111はほぼ全周造存しているもので、口唇部から頸部まで全面的に網目状然系文が施される。折返しの口縁部端部には刺突列が巡る。112～114も折返しの口縁部破片である。113・114はそれぞれ棒状浮文、円形浮文が付される。115は頸部破片だが、段が形成され、その端部には刻み列が巡っている。128～142はS字状結節文のみられる壺である。縄文を施文したものと同様、沈線で区画したり文様を構成したりするものがある。多くは無文部に赤彩を施す。現状で確認できないものも器面の磨耗・磨滅のために、本来は赤彩があった可能性が高い。128は接合しない2個体から復元実測したもので、広口壺である。頸部には輪積み痕が残され、それより上にS字状結節文が施される。刺突部はミガキ調整が施され、赤彩される。136も同一個体の可能性がある。135の胴部は赤彩の可能性があるが、明らかでない。143～145・147・148は造存部に文様の認められない壺である。146は口唇部と外面にハケ調整痕がみられ、内面に縄文が施される。147は、器面が磨滅しているが、頸部の上下の沈線で区画された中には縄文又はS字状結節文



第33図 B区遺構外出土弥生時代以前の遺物（1）



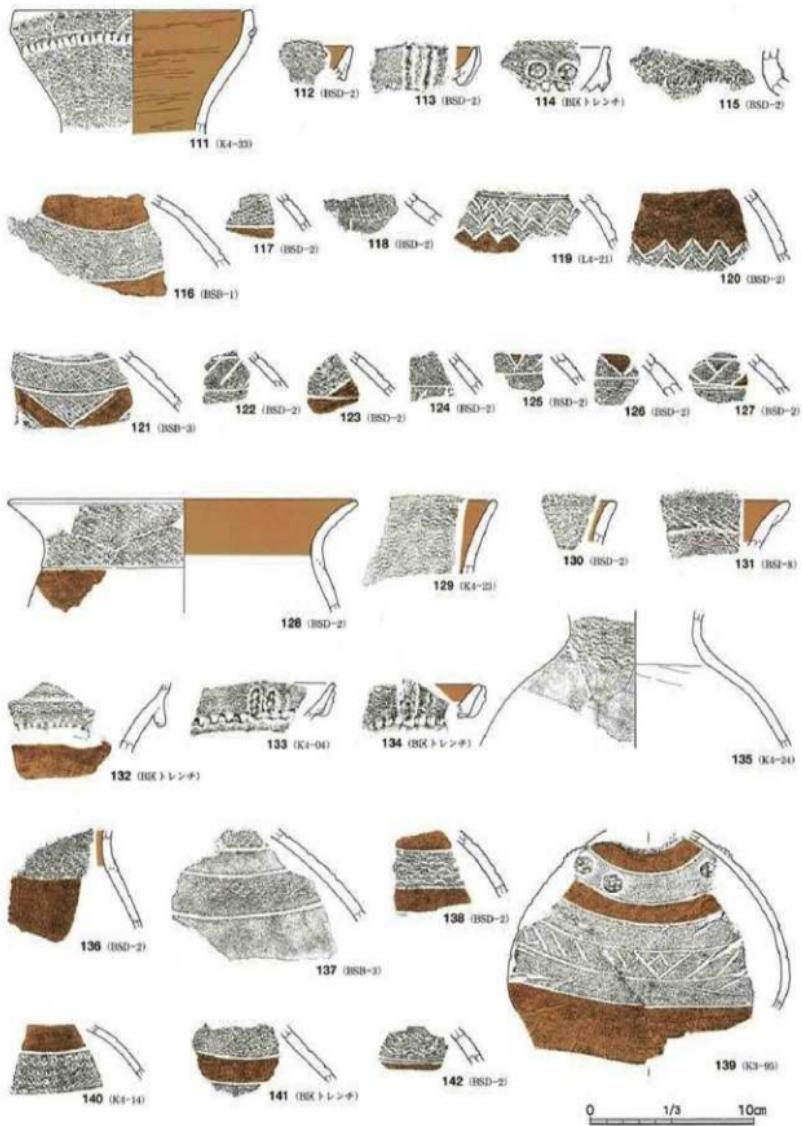
第34図 B区遺構外出土弥生時代以前の遺物（2）



第35図 B区遺構外出土弥生時代以前の遺物（3）



第36図 B区遺構外出土弥生時代以前の遺物（4）

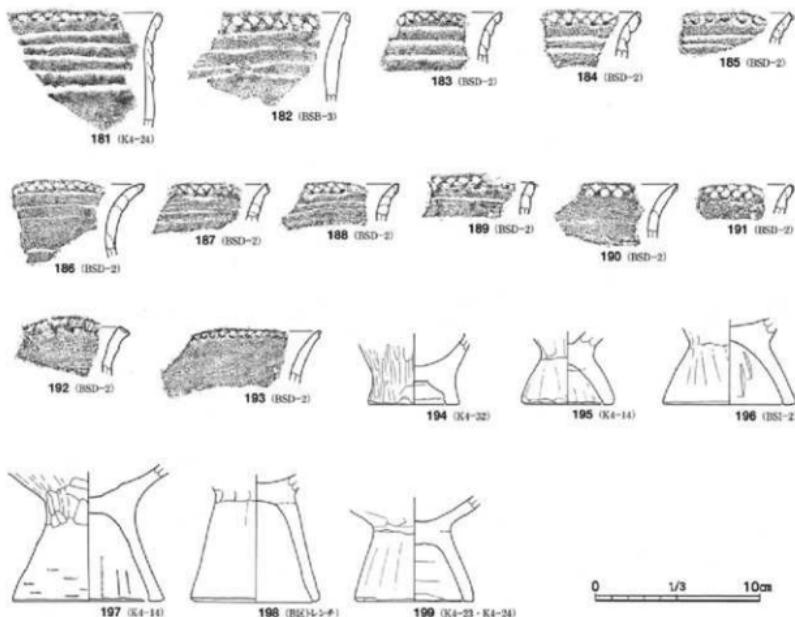


第37図 B区遺構外出土弥生時代以前の遺物（5）



0 1/3 10cm

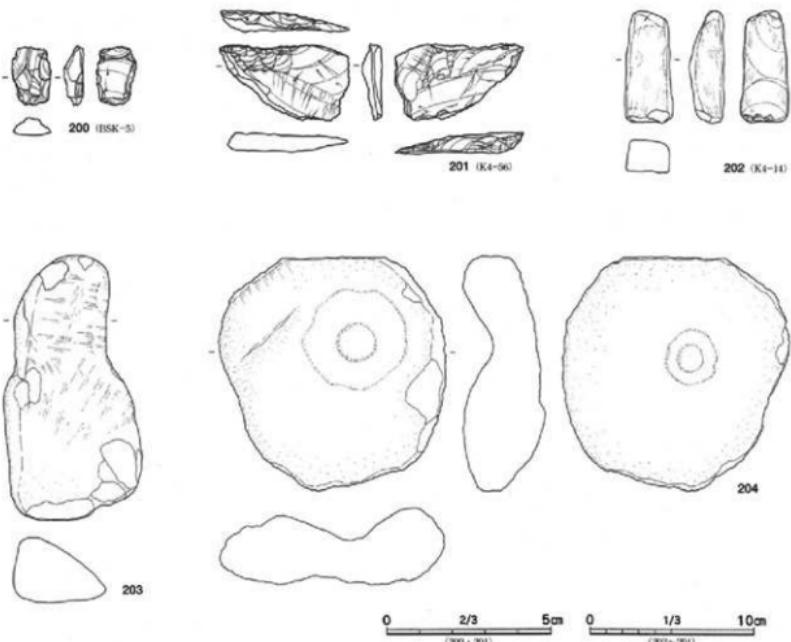
第38図 B区遺構外出土弥生時代以前の遺物（6）



第39図 B区遺構出土弥生時代以前の遺物（7）

が施文されている可能性がある。149～158は無頬壺と考えられるものである。149～152は縦文が施されるものである。149は左端に焼成前穿孔が1か所みられる。153～155は網目状撲糸文が、156～158はS字状結節文が施されるものである。159～175は鉢と考えられる。159～170には縦文が、171～174にはS字状結節文が施文される。176～179は高杯の脚部と考えられる。180の上端は接合部で破損しているようであるが、破断面となっていない部分が数か所観察され、その部分は透孔とみられ、3か所以上の透孔をもつ器台と考えられる。181～199は壺又は台付壺である。いずれも輪積み痕を残すものと考えられる。

200～204は石器・石製品である。200は黒曜石製の楔形石器と考えられるが、かなり風化している。201も黒曜石製で正面上面を中心とする細かい剥離痕のみられる剥片である。202は磨製石斧又はその未製品の可能性がある。203はほぼ全面的に擦痕が観察されることから磨石と考えたが、右側縁下部～下部にかけて剥離痕がみられるほか、表裏面とも中央部から上部にかけて横方向に帯状に変色する部分があり、そこで柄に緊縛されて磨製石斧のように用いられた可能性も高い。204はかなり脆い凝灰質砂岩製の凹石である。



第40図 B区遺構外出土弥生時代以前の遺物（8）

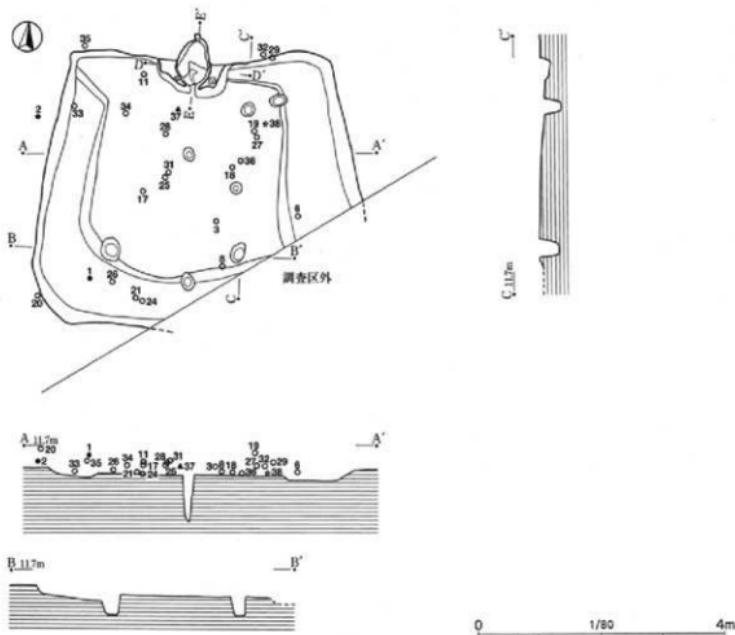
第3節 古墳時代～奈良・平安時代の遺構と遺物

1 壺穴住居跡

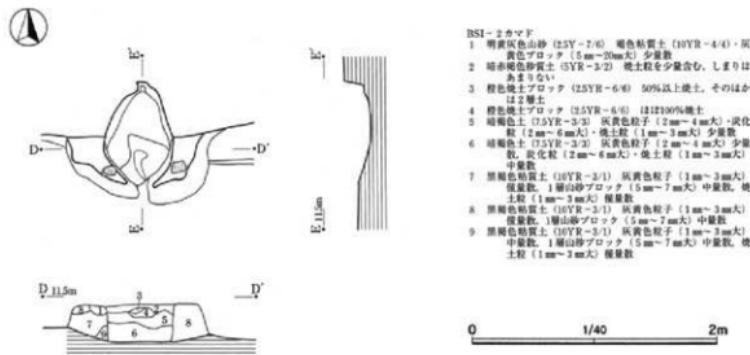
BSI-2（第41～43図、図版5・30・47・53・54）

調査区の東で検出された壺穴住居跡である。南東コーナー部は調査区外である。プランは不整隅丸方形を呈し、規模は南北軸壁間で4.4m、煙道端まで4.9m、東西軸は5.2mである。主軸方位はN-1°-Wである。検出面からの深さは約0.2mで、壁は緩やかな角度で立ち上がる。床面はほぼ平坦で、北西コーナー部付近を除いて幅広の壁溝が巡っている。壁溝の幅は最も広いところで1.25mほどで、床面からの深さは約0.1mである。床面からはピットがいくつか検出されたが、主柱穴が3か所、梯子ピットが1か所みられるほかは、機能は明らかでない。カマドは北壁のほぼ中央に構築されている。遺存状態はあまり良くないが、袖材として軟質砂岩が使用されていた。なお、重複するBSK-6は当遺構の床面で検出されたもので、当遺構のほうが新しいと判断される。

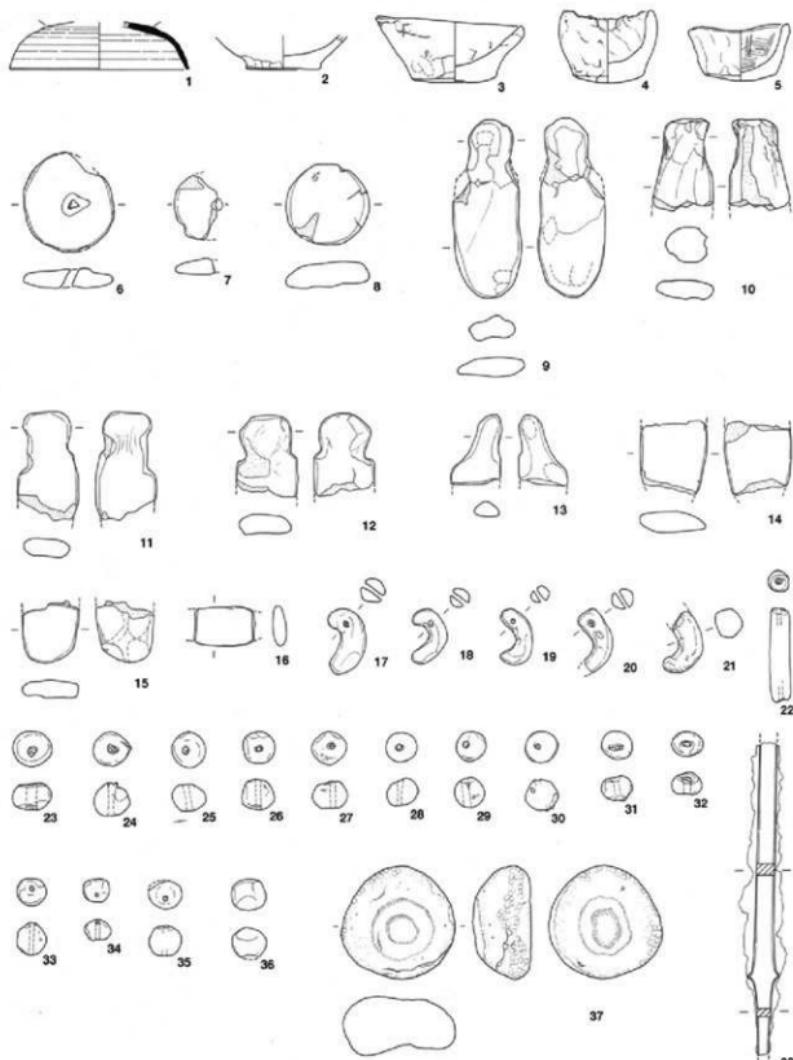
図示した遺物は38点である。土製品類が目立つ。1は須恵器の蓋である。2は土師器の壺の底部と考えられる。3は輪積み痕が認められることから粗造土器と考える。内面にヘラ当て痕が認められる。4・5は手捏土器である。いずれも底部が丸みを帯び、安定しない。5の内面調整はヘラナデとみられる。6～



第41図 BSI-2



第42図 BSI-2 カマド



第43図 BSI-2 出土遺物

8は土製円板である。8には貫通孔がない。9~15は斧形土製品とみられる。16は、斧形土製品の可能性もあるが、幅の狭さから鋤先形土製品の部分と考えられる。17~21は勾玉形土製品である。22は管玉形土製品である。23~36は十玉で、36には貫通孔が認められない。37は安山岩製の円石である。側縁部には敲打痕が観察される。38は鉄錠で、棘状突起をもつ。

BSI-3 (第44図、図版5・31・48)

調査区の中央部や東寄りで検出された堅穴住居跡又は平地式住居と考えられる遺構である。プランはややいびつな隅丸正方形を呈し、規模は南北軸6.4m、東西軸5.8mである。検出面からの深さは約0.1mで、壁は緩やかな角度で立ち上がる。床面はほぼ平坦であるが、軟弱である。壁溝が全周しておらず、壁溝の幅は最も広いところで約0.6m、床面からの深さは約0.1mを測る。大型でしっかりととした壁柱穴も部分的に検出されており、床面からの深さは約0.2mである。床面からはピットや炉は検出されていない。また、カマドも確認できなかった。当遺構は調査時に古墳時代の住居跡と判断したためここに掲載したが、整理作業によって出土遺物に灰釉陶器の破片（第44図2）が含まれていることが明らかとなり、時期決定等に疑問が残る。

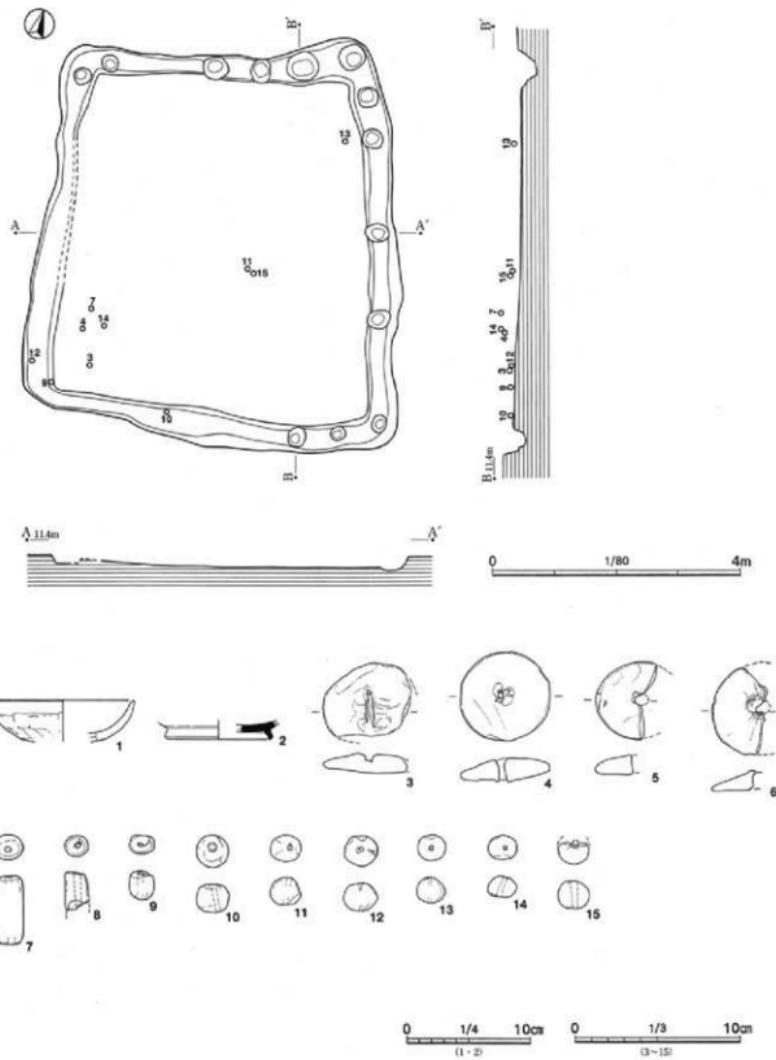
図示した遺物は15点である。1は土師器杯である。11様部の1/4ほどの破片で、器面も磨耗しており、赤彩の有無は明らかでない。2は灰釉陶器である。底部の1/4ほどの破片であるが、内面に薄く施釉が確認できる。3は鏡形土製品である。図正面の中央部が2本の指でつまみ上げられ、盛り上がった部分をよくようく穿孔した痕跡が、沈線のように残されている。磨耗しているためはっきりしないが、鉢の部分が剥落していると考えられる。4~6は土製円板である。7・8は管玉形土製品。9~15は十玉である。9は管玉形土製品の折れたものである可能性もあるかもしれないが、磨耗がひどく、現状で十玉と判断した。

BSI-8 (第45~47図、図版5・30・31・48・53・54)

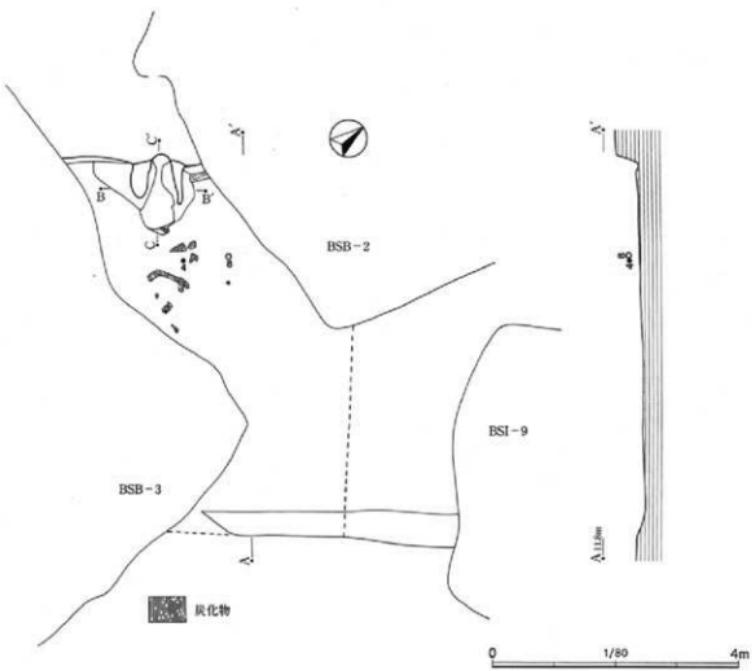
調査区のはば中央で検出された堅穴住居跡である。遺構周辺は黒色土系砂質土が混然と堆積し土層の判別が困難な状況で、カマドによって初めて存在が明らかになった遺構である。ただし、カマドの遺存状態はあまり良くない。プランもはっきりしないが、カマドの対面方向の段差を壁の一部とみれば、北西・南東軸で約6.0mの方形に復元できよう。主軸方向はN-51°-Eである。検出面からの深さは、カマド周辺で約0.35mである。カマドの東側には壁溝が一部確認できる。脆弱な床面には炭化物が散在しており、焼失住居と考えられる。

当遺構については、調査時はBSB-2・BSB-3の覆土にも炭化物が含まれていたことから、漠然と床面が連続していた、つまりBSB-2・BSB-3を切っているものと考えたが、床面の連續性を客観的に証明できるものではなく、また整理時に、当遺構で遺物の遺存度が高いわりにBSB-2・BSB-3の範囲では著しく遺存状態が悪いなど不自然な事実が明らかになった。結論的に当遺構はBSB-2・BSB-3より古いと考えるのが妥当である。遺物はほとんどが床面から出土し、古墳時代後期の遺構と考えられる。

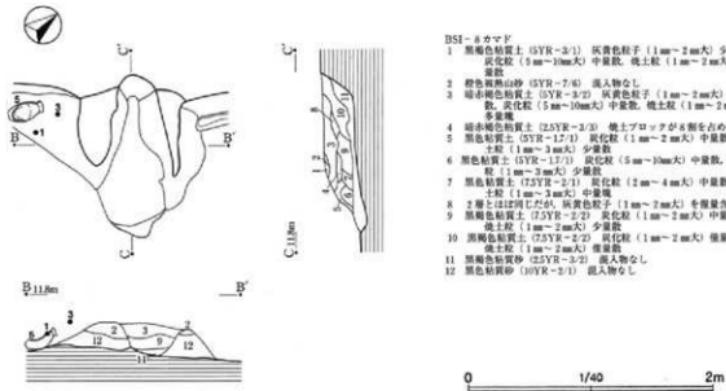
図示した遺物は15点である。1は土師器杯である。器面の磨耗が著しいが、内外面とも黒色処理が施されているとみられる。外面口縁部に、意図的か否かは不明だが、爪形文状又は綫の無沈線状の痕跡がやや不規則にみられる。2は須恵器高杯の口縁部破片と考えられる。外面は暗灰褐色、断面は暗赤褐色を呈し、内面にはやや厚く自然釉がみられる。3~5は七輪器甕と考えられる。5はカマド付近で横倒しになり、



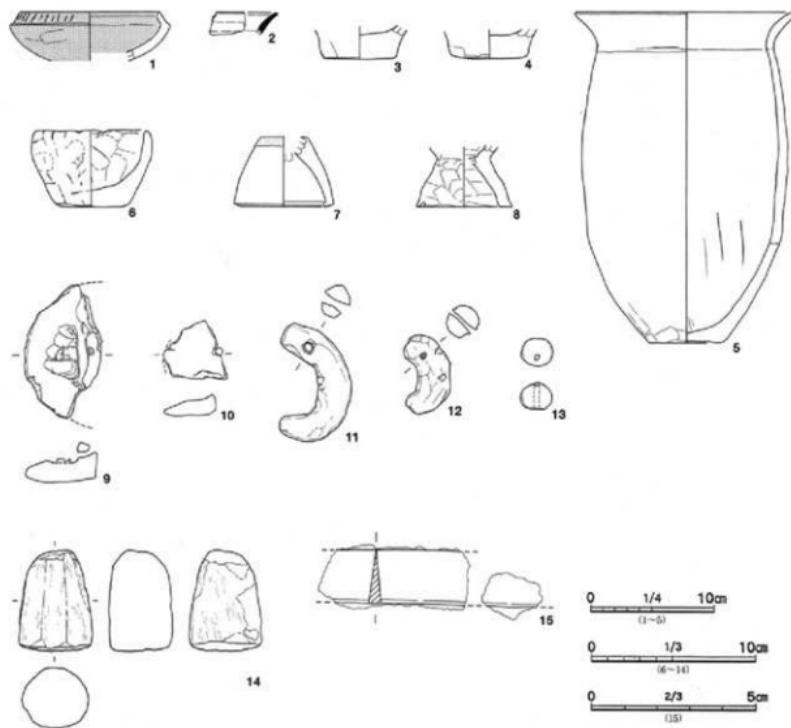
第44図 BSI-3と出土遺物



第45図 BSI-8



第46図 BSI-8 カマド



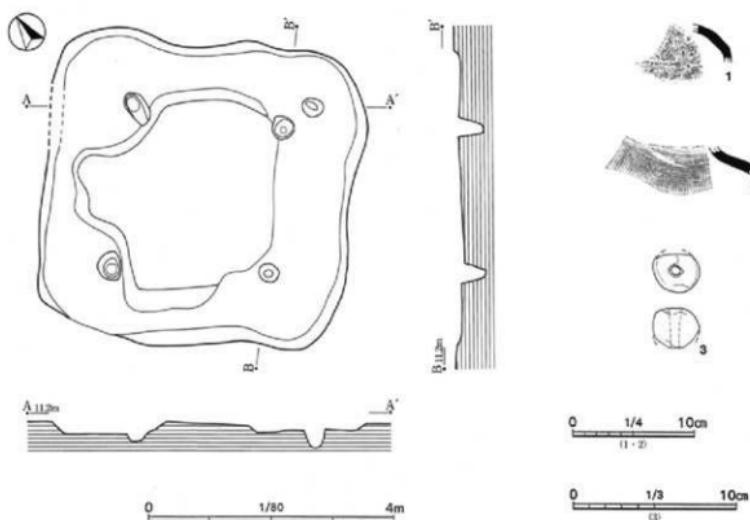
第47図 BSI-8 出土遺物

上になった部分が削平された状態で出土した。外面に少し煤が付着している。6は手捏土器である。内面に放射状の指頭圧痕がみられる。7・8は高杯形土製品の脚部片と考えられる。9は、指で中心部に向かって粘土をつまみ上げ、鼻状に高まった部分に横から串のようなもので穿孔を施している。鉗を表現していると考えられることから、鏡形土製品とみられる。10は、穿孔の位置が外縁の中心ではないようであるが、土製円板と考えられる。11・12は勾玉形土製品である。11は大型だが、他と同様、1本の粘土紐を曲げて形作っている。重さは41.1gを測る。13は土玉である。14は脆く崩れやすい砂岩製で、全体的に研磨により磨耗していることから磨石と考えたが、稜線も観察され、何らかの石製品の可能性もある。15は刀子である。接合しない2片であるが、刃部である。

BSI-9 (第48図、図版31・48)

調査区のほぼ中央で検出された竪穴住居跡である。プランはほぼ隅丸正方形を呈し、規模は北西-南東軸5.0m、北東-南西軸4.9mである。削平を受けたとみられ、検出時には既に床面が露出している状態であった。幅2.0mほどの壁溝が全周しており、その内側端部に沿うように各コーナー部に主柱穴とみられるピットが検出された。炉やカマドは検出されなかった。

図示した遺物は3点である。1・2は須恵器である。1は罐である。外面に厚く自然釉がかかっているため文様がはっきりしないが、櫛描波状文が施文され、その上部には沈線が1条巡る。2は甕で、肩部の破片と考えられる。3は土玉である。



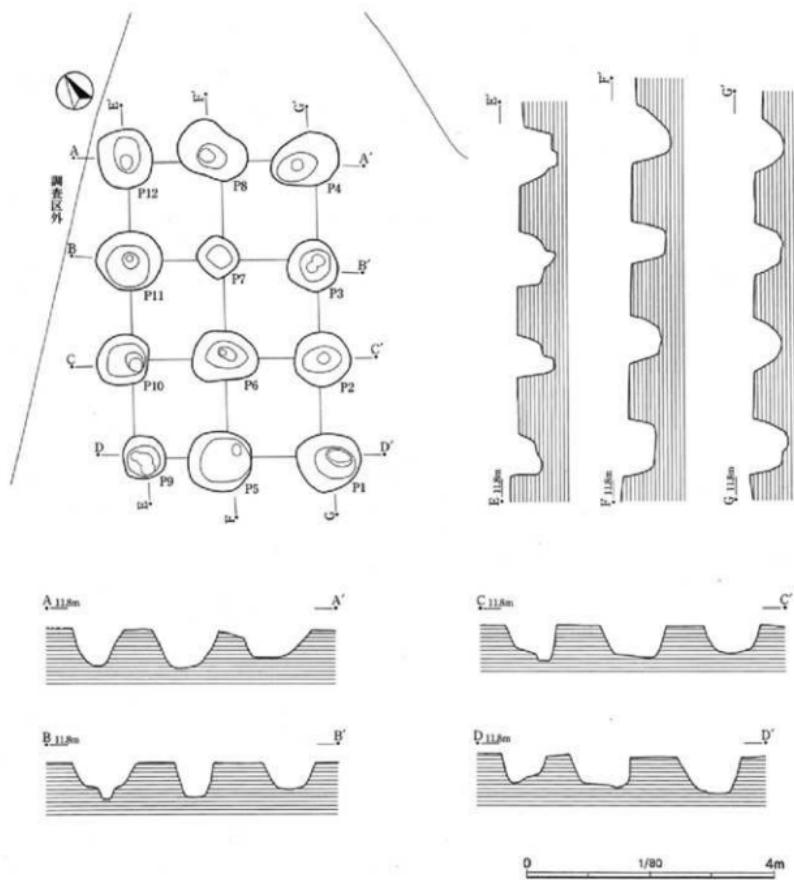
第48図 BSI-9と出土遺物

2 挖立柱建物跡

BSB-1 (第49・50図、図版6・30・31・48)

調査区中央部の西端で検出された掘立柱建物跡である。建物規模は、梁行2間(3.0m)×桁行3間(4.8m)で、桁行方位はN-33°-Eとなる南北棟の総柱建物である。柱間は、梁行1.5m、桁行1.6mである。柱穴掘形は、現状で径0.7m~1.0mほどの円形又は隅丸方形を呈しているが、もともとは隅丸方形であったとみられる。検出面からの深さは約0.6mである。明確な柱痕跡は確認できなかった。

なお、更に北に同規模の柱穴がほぼ同軸で並んでいるが、柱穴の間隔が異なることから別の建物(BSB-4)と考えた。ただし、同時存在の可能性は高い。

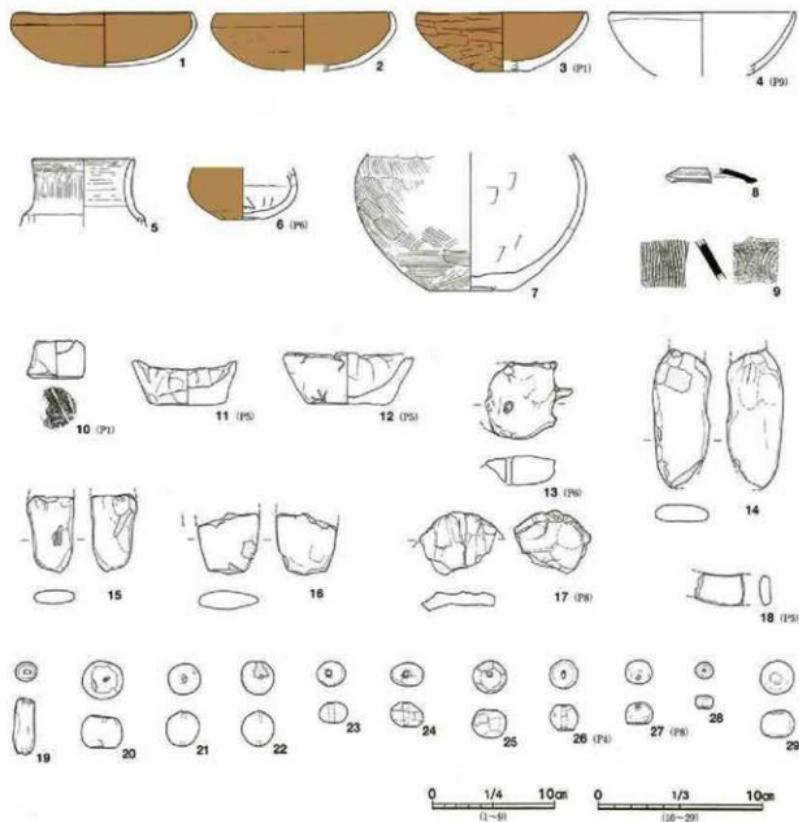


第49図 BSB - 1

また、東側の4つの柱穴がBSD-1と同軸で重複しているが、当遺構とは関係なく、当遺構がBSD-1を切っていると判断される。

遺物は柱穴覆土中及びその周辺から出土した。弥生土器や古墳時代後期までの土師器を主体とするが、いずれも小破片で量も多くはない。当遺構とは関係ない可能性も高いが、弥生土器以外は敢えてここに掲載することとした。なお、柱穴覆土中から出土した遺物については、挿図番号の横に出土柱穴名を記載した。

図示した遺物は30点である。いずれも遺存度は高くない破片ばかりである。



第50図 BSB-1出土遺物

1～7は土師器である。1～4は杯で、3は平底である。4は現状では赤彩の有無は不明である。5は壺で内外面とも丁寧にミガキによって仕上げられている。6は小型の壺で底部は上げ底である。7はハケ調整痕のみられる壺で、底部が輪台状を呈している。

8・9は須恵器である。8は蓋で、口縁部は破損している。9は壺である。

10～12は手捏土器である。10は底部に木葉痕が認められる。口縁部はごく一部の遺存で、擬口縁の可能性もある。11・12の内面には放射状に指頭圧痕がみられる。

13は土製円板状であるが、縁辺部が角状に作り出されており、鈴鏡を意識した鏡形土製品と考えられる。14～16は斧形土製品と考えられる。

17は指頭圧痕を明瞭に残しながら圓表面が全体に凹められており、瓶状を呈する土製品である。

18は全容が明らかでないが、錫先形土製品の可能性がある。

19は管玉形土製品である。

20～29は土玉である。20は上下端が面取りされ平坦である。穿孔は細く、貫通しているのか明らかでない。24はいびつでラグビーボールのような形状である。28は小型で上下端がやや扁平になっており、白玉形を意識しているのかもしれない。29は上下端の中央部がやや凹むが、貫通孔は認められない。

BSB-2 (第51図、巻頭図版1、図版6・30・31・48・53)

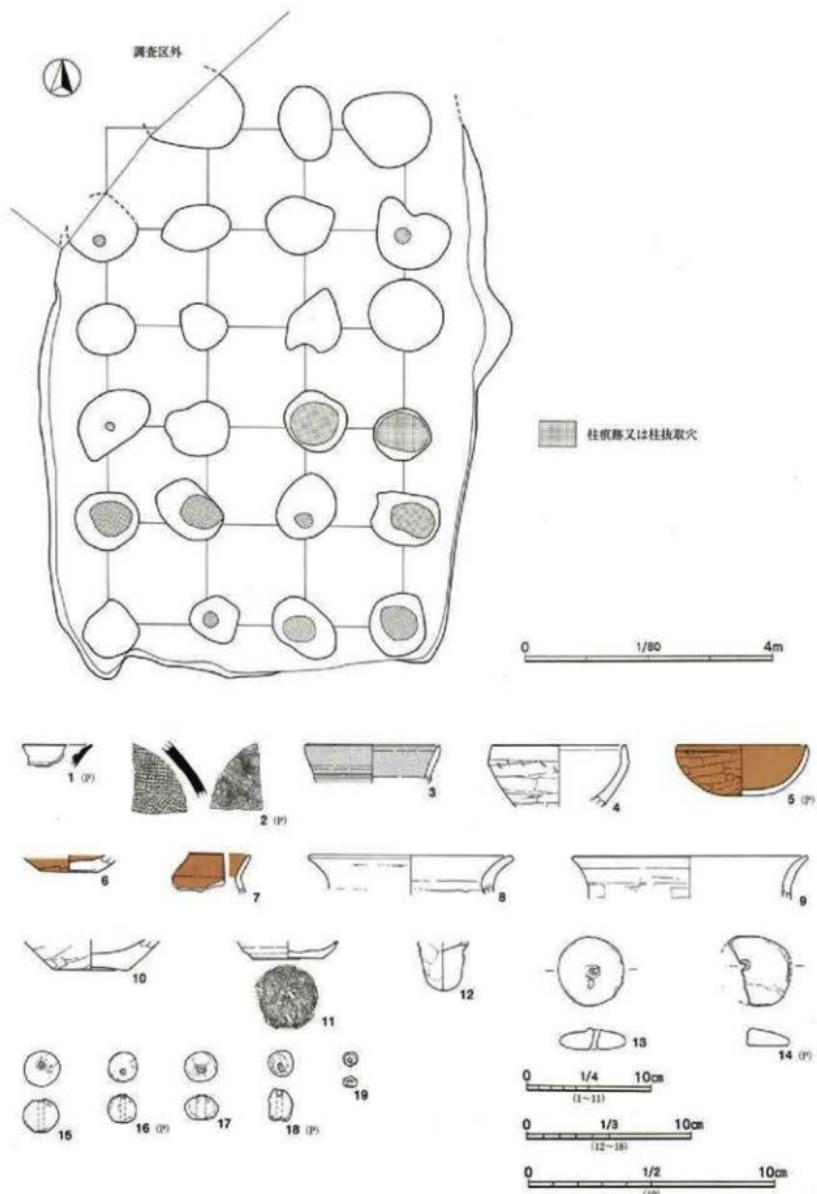
調査区中央部の北端で検出された掘立柱建物跡で、N-5°-Eとなる南北棟の縦柱建物と推定できる。北西隅部でBSB-4を切っているようであるが、北西隅の柱穴は確認できていない。当遺構は、同じ場所に同じ軸方向で、現状で長軸推定10m、短軸約7mの長方形の堅穴状の掘込みがある。柱穴掘形は掘込みの底面で検出され、現状で径0.8m～1.4mほどの円形又は隅丸方形を呈しているが、もともとは隅丸方形であったとみられる。ほぼ円形を呈する柱痕跡又は柱抜取穴が数か所で確認でき、その径は0.7mほどである。建物規模については梁行3間(4.8m)×桁行5間(8.0m)で、柱間は梁行1.6m、桁行1.6mである。

当遺構は掘込みがあったため、堅穴住居跡と認識して調査を進めていたが、調査の最終段階で掘立柱建物跡の柱穴が検出され、「掘込みを持つ掘立柱建物跡」と考えたものである。しかしながら、掘込みの底面に至って柱穴が検出されたこと等から、掘込みは掘立柱建物跡より新しく、掘立柱建物跡とは別の建物に関わるものである可能性が高いと言えよう。軸方向や遺物の状況などを考慮すると、掘立柱建物から基壇をもつ礎石立ち建物などに建替えが行われたものと考えられる。

なお、遺構南東部で重複する古墳時代後期の焼失住居BSI-8は、調査時には当遺構を切るものとみられていた。しかし終理時に検討を加えた結果、それを示す積極的な根拠はなく、むしろ状況的にみて、少なくとも当遺構の掘込みに切られている可能性が高いとの結論に達した。更に、この掘込みに切られているとすれば、時期的に連続又は近接して先行すると考えられる掘立柱建物跡にも切られている可能性が高い。

遺物は柱穴覆土中及び掘込み覆土中から出土した。弥生土器や古墳時代後期までの土師器を主体とするが、いずれも小破片である。当遺構とは関係ない可能性も高いが、弥生土器以外は散えてここに掲載することとした。掘込み覆土からカワラケとみられる底部片が1点出土しているが(第51図11)、当遺構の時期を考える上で注目される。なお、柱穴覆土中から出土した遺物については、坪園番号の横に(P)と記して示した。

図示した遺物は19点である。1・2は須恵器である。1は高杯の口縁部破片と考えられる。内面には厚く自然釉がかかっている。2は甕である。3～10は土師器である。3～5は杯で、3は内外面とも黒色処理が施される。6の底部は輪台状で堅手であり、甕のようでもあるが、内外面に赤彩がみられることから甕又は杯と考えられる。7は小型の甕と考えられる。8～10は甕である。11はカワラケと考えられる。磨耗しているが、底部に回転糸切り痕が観察される。12はミニチュア土器と考えられる土製品である。甕などの把手の可能性も考えられるが、内面は凹んで器状を呈している。13・14は土製円板、15～18は土玉、19は滑石製の臼玉である。



第51図 BSB-2 と出土遺物

調査区中央部で検出された掘立柱建物跡で、N-2°-Eの南北棟の建物と推定できる。BSB-2同様、現状で長軸約10m、短軸約8mの長方形の堅穴状の掘込みが、同じ場所に同じ軸で存在する。造構検出面からの掘込みの深さは約0.6m、掘込みの底面で検出した柱穴掘形は、深さ更に約0.5mを測り、平面形は現状では径0.4m～1.3mほどの円形又は隅丸方形を呈しているが、もともとは隅丸方形であったとみられる。径0.2m～0.3mの円形の柱痕跡又は柱抜取穴も數か所で確認できた。

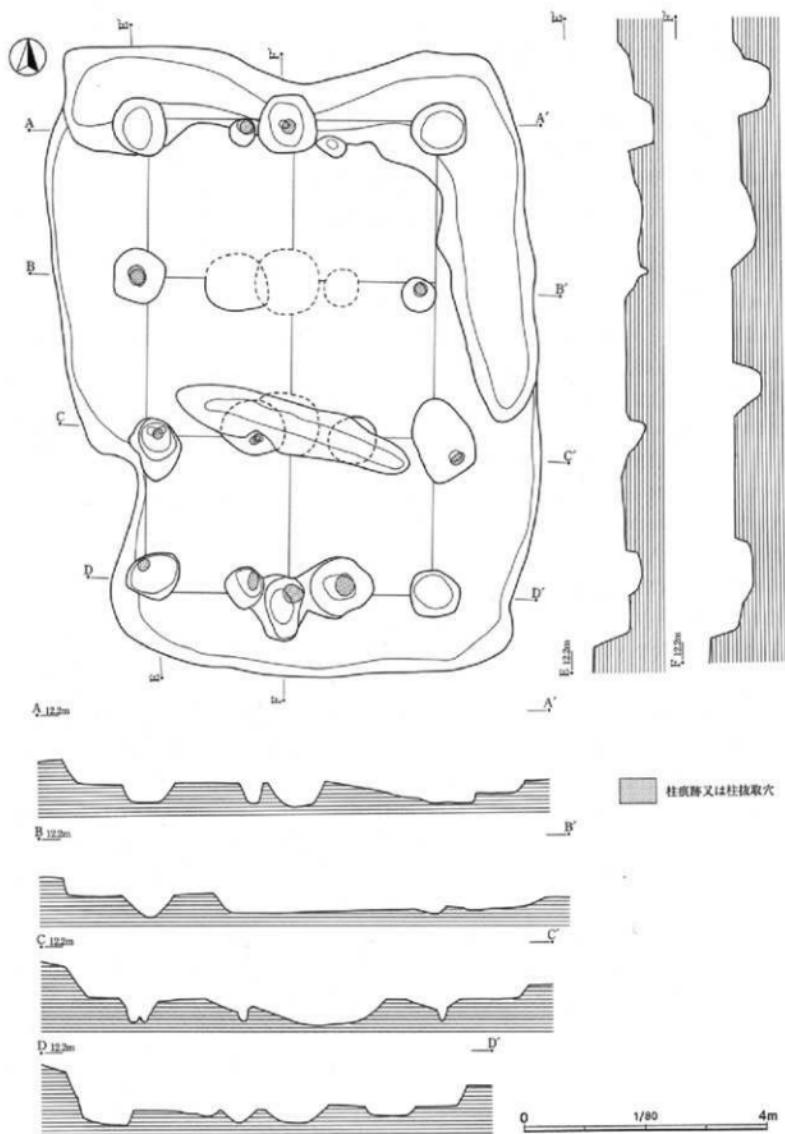
建物規模については、建物内部の柱穴がBSD-1などの古い溝状造構と重複しないため、断定しがたい。梁行2間(4.8m)×桁行3間(7.8m)、又は梁行3間(3.2m)×桁行3間(7.8m)の建物が考えられるが、状況的に、床東をもつ2間×3間の総柱建物とするのが妥当で、柱間は梁行2.4m、桁行2.6mと推定されよう。

当造構は、BSB-2同様、堅穴住居跡と認識し調査を進めていたが、調査の最終段階で掘立柱建物跡の柱穴が検出され、「掘込みを持つ掘立柱建物跡」と考えたものである。しかしながら、BSB-2同様、掘込みの底面に至って柱穴が検出されたこと等から、掘込みは掘立柱建物跡より新しく、掘立柱建物跡とは別の建物に関わるものである可能性が高いと言えよう。軸方向や遺物の状況などを考慮すると、BSB-2と同時に、掘立柱建物から墓壇をもつ礎石立ち建物などに連替えが行われたものと考えられる。

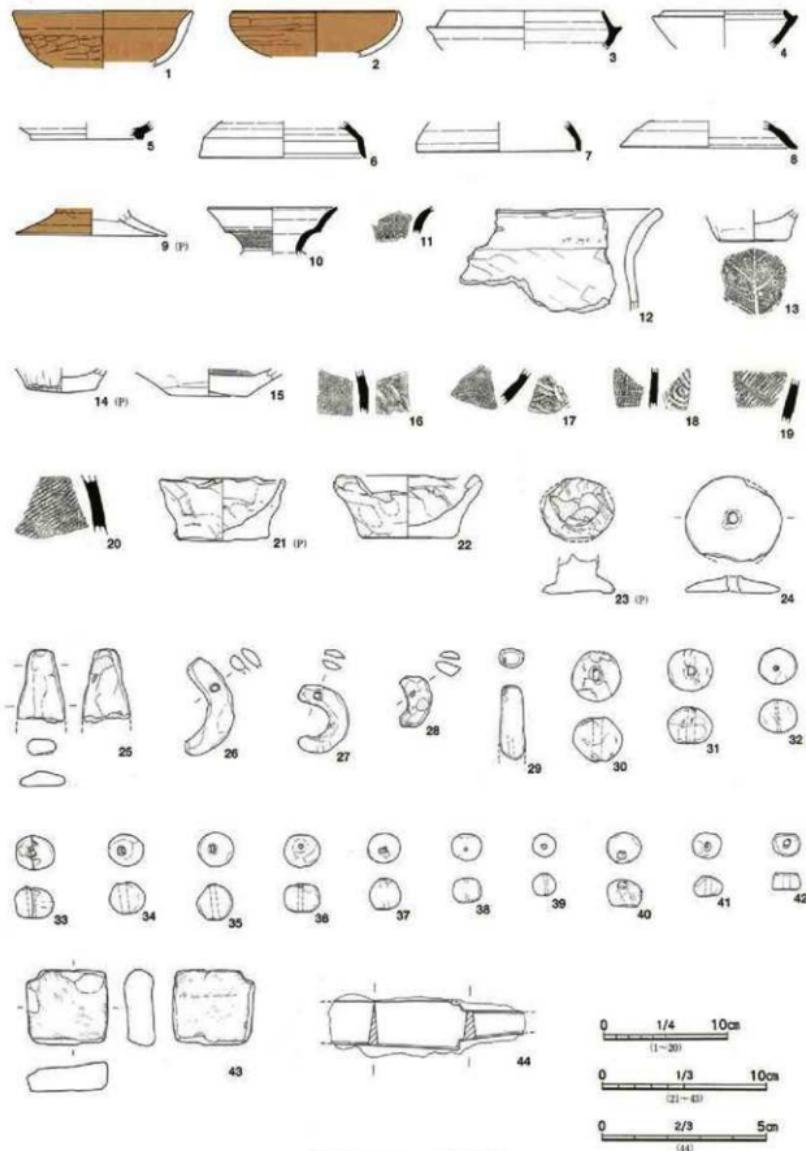
なお、造構北東部で重複する古墳時代後期の焼失住居BSI-8は、調査時には当造構を切るものとみられていたが、整理時に検討を加えたところ、それを示す積極的な根拠はなく、むしろ状況的にみて、少なくとも当造構の掘込みに切られている可能性が高いとの結論に達した。更に、この掘込みに切られているとすれば、時期的に連続又は近接して先行すると考えられる掘立柱建物跡にも切られている可能性が高い。

遺物は柱穴覆上中及び掘込み覆上中から出土した。弥生土器や古墳時代後期までの土師器を主体とするが、いずれも小破片である。当造構とは関係ない可能性も高いが、弥生土器以外は敢てここに掲載することとした。なお、柱穴覆上中から出土した遺物については、抑留番号の横に(P)と記して示した。

図示した遺物は44点である。1・2は土師器杯である。3～5は須恵器杯である。3の外面最大径部以下には自然釉がかかっている。5は高台付杯で瀬西窯製品の可能性がある。6～8は須恵器蓋である。6は外面に自然釉が薄くかかる。8は瀬西窯製品の可能性がある。9は土師器高杯の縁部である。10・11は須恵器縁である。いずれも模描波状文がみられる。10は内外面に、11は内面に自然釉がみられる。10は断面が赤褐色を呈している。12～15は土師器甕と考えられる。13は底部に木葉痕がみられ、焼成が非常に良い。16～20は須恵器甕の破片である。21・22は手捏土器である。23は上部を中心欠損している。縁辺部が遺存していることから瓶の把手ではなく、鉢をもつ鏡形土製品の可能性がある。24は上製円板である。25はくびれは明瞭でないが、斧形土製品と考えられる。26～28は勾玉形土製品。29は管玉形土製品。30～42は土糞である。42は磨耗が著しいが、上下端が平坦にされ、白玉のような形態を意識していると思われる。43は擦痕が観察され、砾石と考えられる。石材は流紋岩かスコリアと考えられる。44は刀子である。



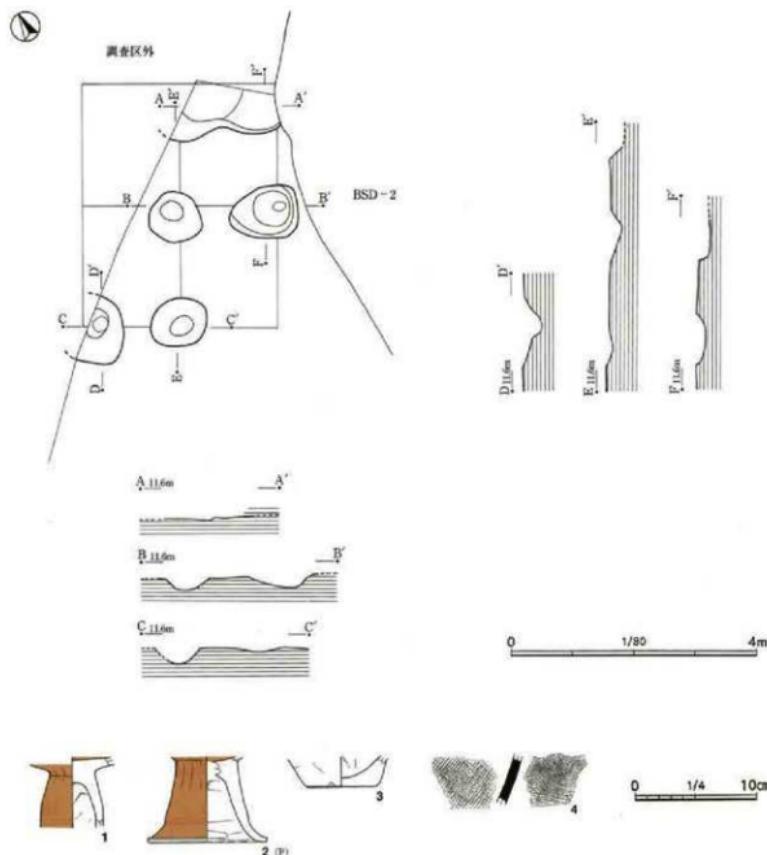
第52図 BSB-3



第53図 BSB-3 出土遺物

BSB-4 (第54図、図版31)

調査区中央部の西端で検出された掘立柱建物跡である。北部・西部は調査区外、東部はBSB-2に切られ、柱穴は梁行・桁行ともに2間分（東西3.2m、南北4.0m）しか確認できなかった。また、南東隅の柱穴も検出されなかつた。南に隣接するBSB-1とは、同じ建物と考えることも可能だが、柱穴の間隔が異なるため別の建物と考えた。棟方位はN-32°E、柱間は梁行1.6m、桁行2.0mの南北棟の建物と推定することができる。柱穴掘形は、現状で径0.8m～1.1mほどの円形又は隅丸方形を呈しているが、もともとは隅丸方形であったとみられる。検出面からの深さは約0.1m～0.3mである。明確な柱痕跡は確認できなかつた。



第54図 BSB-4 と出土遺物

遺物は柱穴覆土中及びその周辺から出土した。弥生土器や古墳時代後期までの土師器を主体とするが、いずれも小破片で最も多くはない。当遺構とは関係ない可能性も高いが、弥生土器以外は敢えてここに掲載することとした。なお、柱穴覆土中から出土した遺物については、挿図番号の横に（P）と記して示した。

図示した遺物は4点である。1～3は土師器で1・2は高杯である。3は壺の底部と考えられる。4は須恵器である。

3 溝状遺構

BSI-2（第55～91図、巻頭図版2・3、図版7～9・32～46・49～55）

調査区の最北端、A区との境界の、現状で段差の認められる部分に北東～南西方向に位置する溝状遺構である。上端幅は最も広いところで約75m、検出面からの深さは約20mを測る。断面形はほぼV字形を呈するが、南側のほうは北側より傾斜が緩く、底面は幅1.0m前後、深さ0.2m～0.3mほど掘り下げられ、平坦面が造られている。底面の両脇には、人頭大の石と杭が並んで検出された。覆土は、上層が暗褐色～黒褐色を呈し砂利を多く含む砂質土層、中層が黑色～黒褐色を呈する粘質砂層と泥炭層、下層が暗緑灰色砂層をそれぞれ主体とする層であった。

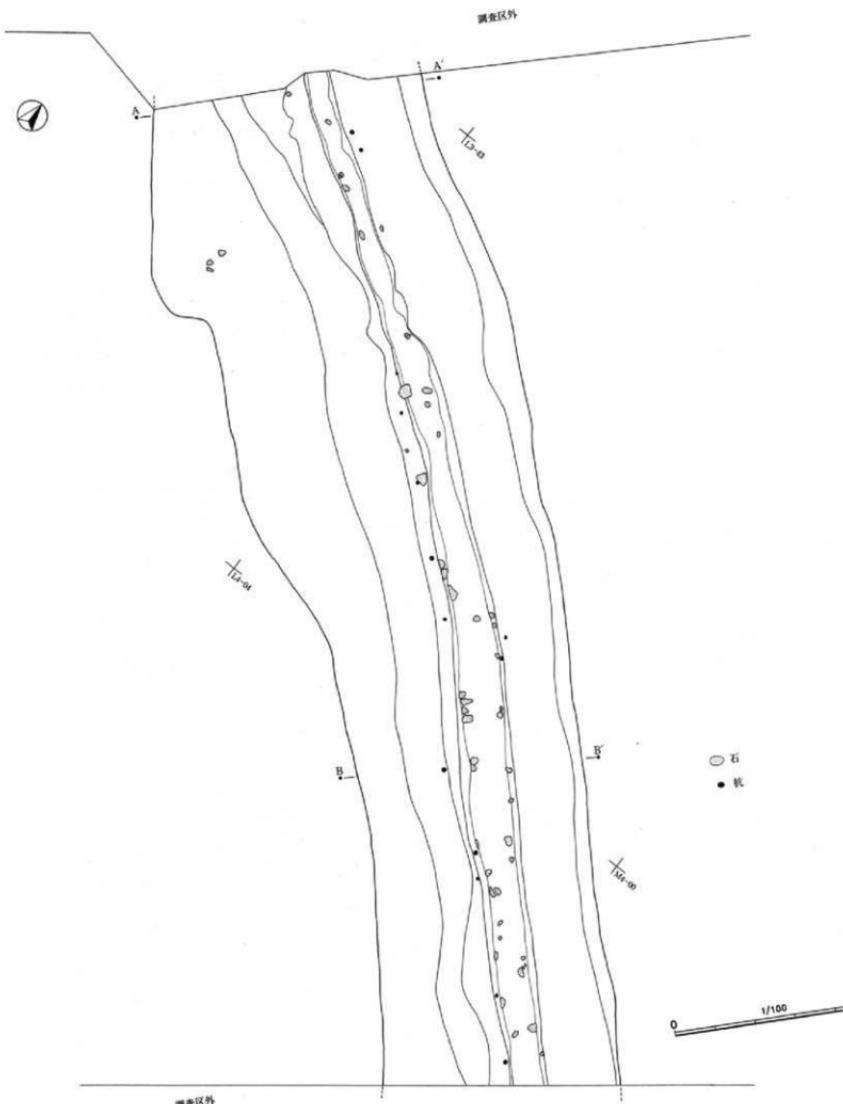
覆土中からは、遺物が極めて多量に出土した。調査区内において平面的に3か所の集中域が確認できたため、「西区（W）」（詳細図2）、「中央区（M）」（詳細図1）、「東区（E）」（詳細図3）と呼称してそれぞれで遺物の取上げを行った。

各集中域では、主として分布する遺物の種類が異なる傾向が捉えられた。すなわち、調査区内西側の集中域においては壺などの土器が、中央の集中域では土玉などの小さな土製品類が、東側の集中域では粗造土器や手握土器などがまとまって出土している。しかもレベル的に見ると、中央の土製品類は全て遺構線近辺の浅い部分に集中しているが、西側の土器と東側の粗造土器等については、少なくとも上2グループにそれぞれ分かれる傾向が看取される。時間差のあることが推定できるが、上下間で遺物の形態の特徴に大きな差は認められない。

これらの遺物の図示に当たっては、個体数が極めて多いことから、土師器・粗造土器・手握土器については完形のもの及び口径・底径のいずれか50%以上遺存しているものには限って実測を行い、図示することとした。須恵器については正側面に量が少ないため、特徴的なものは小破片でも図示した。土製品類・玉類については、小破片でも極力図示するよう努めたが、全体像がほとんど判別できないものは割愛した。石器・石製品、木製品は、製作や使用の痕跡が比較的明瞭なものを選んで図示した。

図示した遺物は545点である。1～23は須恵器である。1～4は壺である。4はBSI-2から出土した破片とも接合した。外面上半部に自然釉がかかる。節縫状工具端部の刺突列が巡っており、その上下に沈線がみられる。上部の沈線は2本であるが、部分的に1本となる。下部の沈線は1本であるが、部分的に途切れる。5～7は杯である。5の外面は全体的に自然釉がかかる。8は壺である。9・10は高杯の脚部と考えられる。11～23は壺又は壺と考えられる。14・15は同一個体の可能性が高い。14は外外面に自然釉がみられる。15も外表面の上部と内面底部に自然釉がみられる。底部外面には格子状のヘラ記号が施される。

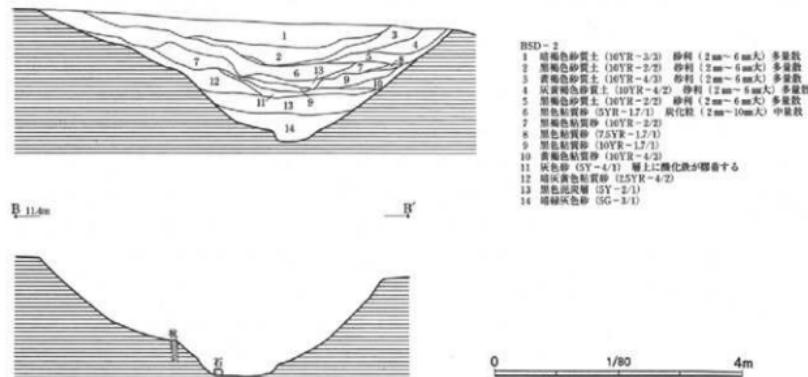
24～183は土師器である。土師器に関しては、当遺構に限られる事ではないものの、焼成についてはほとんどのものが良好で、胎土についても器種によって傾向が全く異なる傾向がある。



第55図 BSD-2

A-11.8m

A'



第56図 BSD-2 土層断面図

24~96は杯である。杯は、胎土がとても細かく、焼成が非常に良好なものが多い。しかし器面は、磨耗・磨滅して調整痕や赤彩の有無がはっきりしないものが多い。赤彩については比較的はっきりしているもののみ図示したが、現状で確認できないものにも、ほとんどには赤彩が施されていた可能性が高い。なお、少量だが黒色処理の施されているものがある。

24~60は、須恵器杯模倣の杯と考えられる。24~35は口縁部にははっきりとした稜をもち、丸底である。29は器面が著しく磨滅しており、赤彩の有無は明らかでない。31は外面も赤彩の可能性があるが、明瞭でない。32は、同一個体と思われる、接合しない2破片から推定復元を行ったものである。かなりの高温により焼成されたとみられ、発泡し膨張して器形が変形している。断面も灰色を呈し、軽石状を呈している。35の胎土は砂粒を多量に含み、きめが粗い。現状では赤彩も認められない。36~39は、明瞭ではないものの口縁部がやや稜をもって内傾し、基本的には丸底となるものである。36は外面底部に「+」のヘラ記号がみられる。内外面黒色処理の可能性がある。38は器面が磨耗しはっきりしないが、内外面赤彩の可能性がある。39は小振りで、平面形は歪んで橢円形を呈している。焼成時に変形したとみられる。40は、口縁部はやや稜をもって内傾するが、底部は平底で外面に木葉痕がみられる。41~53は口縁部が外反し、丸底のものである。41は口縁部に段が認められる。底部の器厚が極めて薄く、胎土に白色針状物質を含まないなど、他のものとは特徴が異なる。42・44・45は器面が著しく磨耗しているが、内外面赤彩の可能性がある。46の胎土は砂粒を多量に含み、きめが粗い。現状では赤彩も認められない。47は、明瞭ではないが底部が平底となるようである。胎土に1mm~2mm大の白色~黄白色粒子を多量に含むのが特徴的である。内外面赤彩の可能性がある。48の内面は赤彩の可能性があるが、器面が磨耗しており不明である。49は器面が著しく磨耗しているが、内外面赤彩の可能性がある。50も器面が磨耗しているが、外面も赤彩の可能性がある。54~60は、基本的には須恵器杯模倣と考えられるが、通常とはやや異なる特徴をもつものである。

54は器面が磨耗しているが、内外面赤彩の可能性がある。56はかなり小振りだが、口縁部は後をもつように内傾し、丸底である。器面は磨耗しているが、内外面赤彩の可能性がある。57はやや上げ底気味の平底をもち、明瞭ではないが木葉痕が認められる。内外面赤彩の可能性がある。58の底部は平底で輪台状となっている。59は全体の30%程度の遺存度であるが、平底で木葉痕のようなものが観察される。60は小振りで器厚もごく薄い。内面には暗文状のミガキ痕が観察される。内外面黒色処理の可能性もある。

61~87は須恵器蓋模倣の杯と考えられるものである。63は器面が磨耗しているが、内外面黒色処理の可能性がある。64は平底である。器面が磨耗しているが外面も黒色処理の可能性がある。62・64・65・66は黒色処理が施されており、漆仕上げの可能性がある。70の底部はケズリ残されて平底風であり、数枚の木葉の圧痕が認められる。外面も赤彩の可能性がある。71は胎土に1mm~2mm大の白色~黄白色粒子を多量に含むのが特徴的である。内外面赤彩の可能性がある。73は器面が磨耗しているが、内外面赤彩の可能性がある。74は胎土に1mm~2mm大の白色~黄白色粒子を含むのが特徴的である。77は胎土に多量の砂粒を含んでいる。79は外面も赤彩の可能性がある。82は外面も赤彩の可能性がある。底部は平底風で、木葉痕が僅かに残される。85は胎土に砂粒を多量に含む。器面も著しく磨滅し、やや異質である。87は底部の棱線がややみられるが丸底風で、平底とは言い切れない。

88~96はその他の杯である。88・89は、後は弱いが平底とみられる。90は全体の50%程度の遺存だが重みが著しく、11径の復元値は、計測場所によって大きくなり異なる。内面の赤彩は刷毛塗りの痕跡が明瞭である。91・92は胎土に1mm~2mm大の白色~黄白色粒子を含むのが特徴的である。93はヘラケズリによって底部が平底になり出されている。95は皿のように器高が低い。遺存度が高くないため明らかでないが、器形が焼成時に変形している可能性もある。外面の赤彩は口縁部のみとみられる。96の外面部は雑なヘラケズリによって仕上げられている。

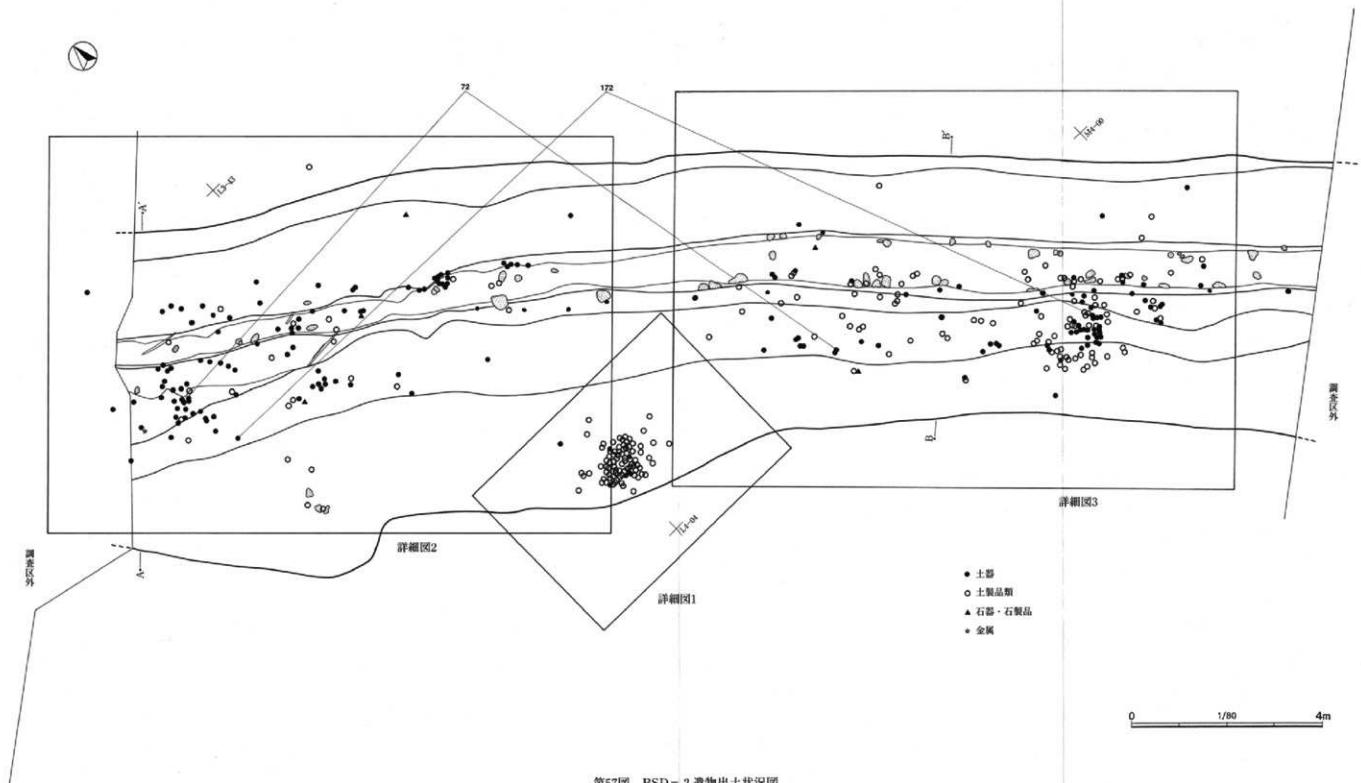
97~103は鉢である。97は器厚が厚めで、胎土に赤色粒子を多量に含むのが特徴的である。98は胎土がきめ細かい。99は胎土に砂粒を多量に含む。100の胎土はきめ細かく、焼成は良好である。内面の赤彩は刷毛塗りの痕跡が比較的顕著である。外面の赤彩は体部にも及んでいる可能性はあるが、明らかでない。101は胎土に砂粒を多量に含む。底部には木葉痕が残される。103は直角に近い立上がりで全体の形状が不明だが、内外面とも赤彩が施されていることから鉢と考えた。

104~116は高杯である。高杯も杯同様、きめ細かい胎土で焼成が良好なものが多い。104は内外面赤彩の可能性が高い。105は杯部内面も赤彩の可能性が高い。106は外面には赤彩が施されるが、杯部・脚部内面は黒色を呈している。111は脚部内面にも赤彩の痕跡が残る。113・115は断面が灰色を呈している。

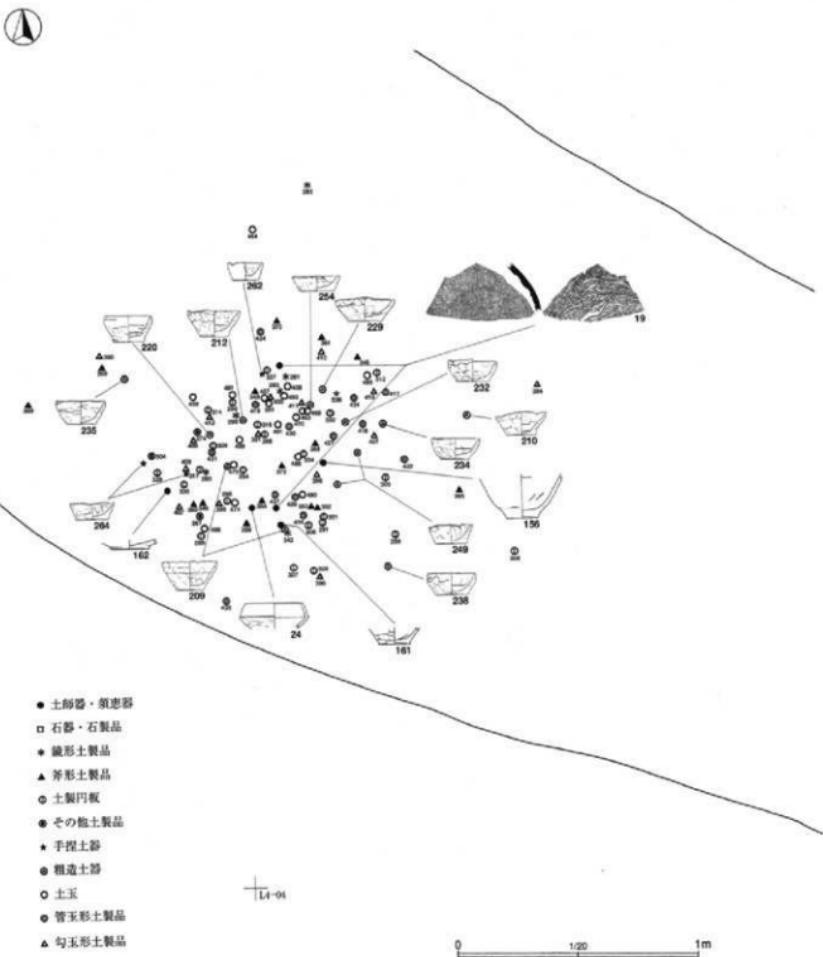
117~118は壺である。117は頸部に焼成前穿孔が1か所認められる。胎土はきめ細かく、焼成は良好である。赤彩の可能性もあるが、器面が磨耗しており、明らかでない。118は器面の磨滅が著しいが、外面全体と内面頸部に赤彩が施されていたとみられる。丸底である。

119~183は壺・瓶類である。壺・瓶類の胎土は砂粒を多量に含むのが特徴的で、杯・高杯類とは著しく異なる傾向である。しかし焼成は、杯・高杯類同様に比較的良好なものが多い。壺では、小型壺を含め器面に煤の付着するものが多くみられる。

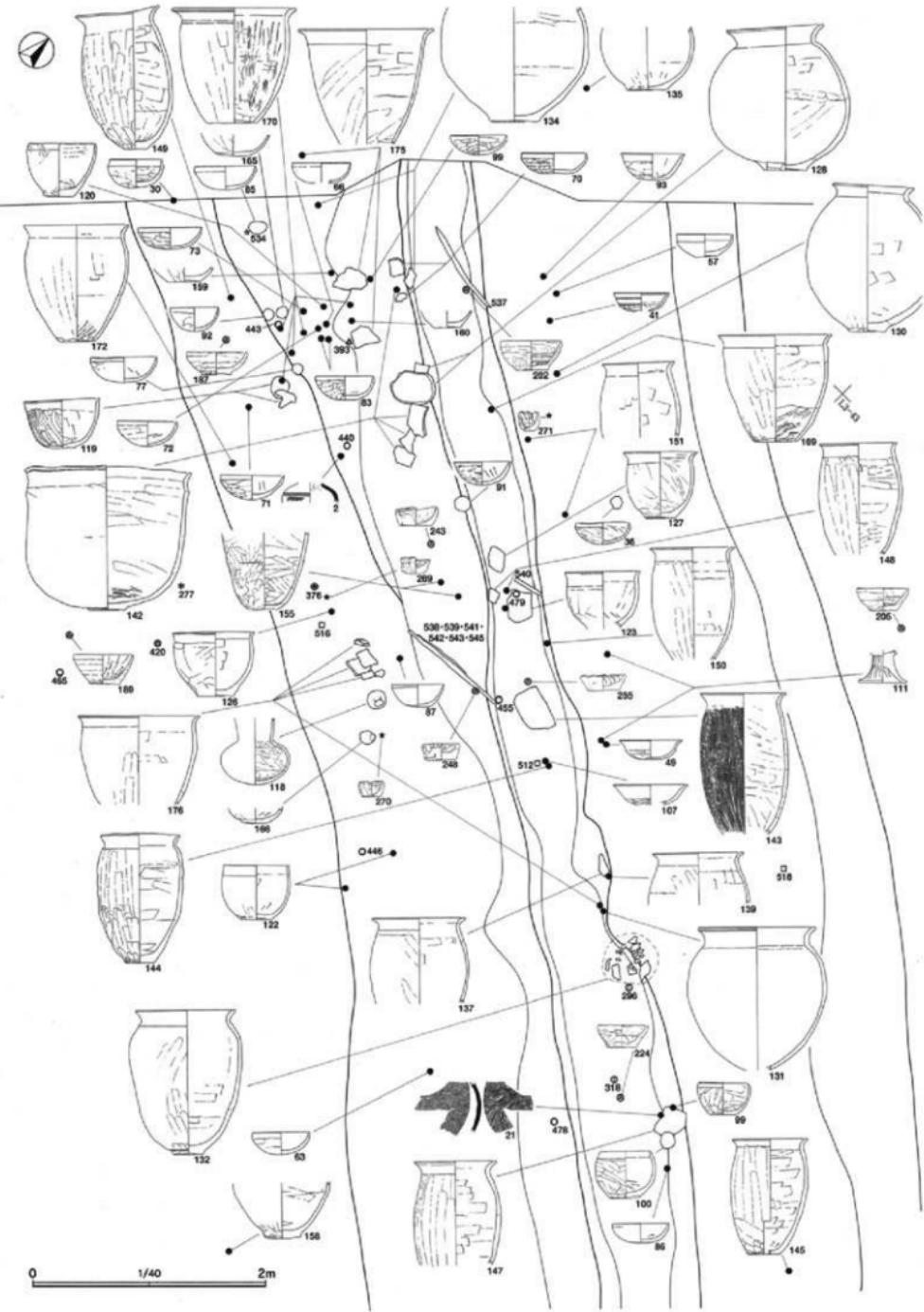
119~127は小型壺である。器形の面で鉢などとの区別が曖昧なものもあるが、砂粒を多量に含む粗い胎土や、ヘラケズリ調整、煤の付着の有無などから鉢と分けた。124は外面に一部磨滅・剥落がみられる。125は底部が不安定である。123・127は外面が黒く煤けている。



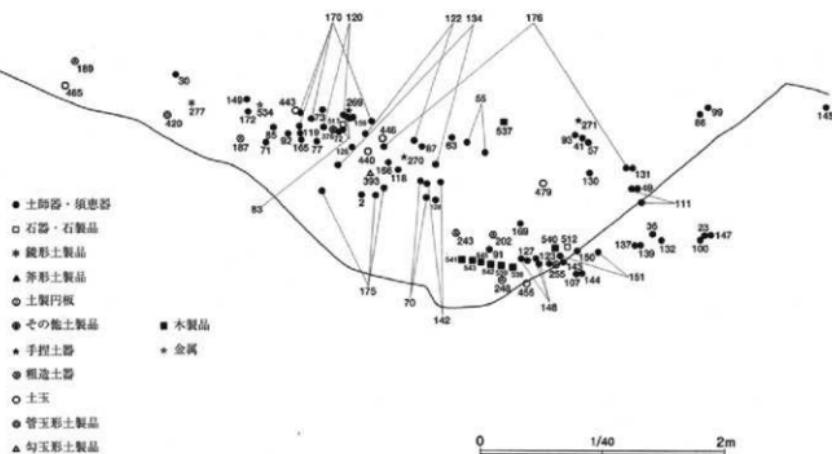
第57図 BSD-2 遺物出土状況図



第58図 BSD-2 遺物出土状況詳細図 1



第59図 BSD-2 遺物出土状況詳細図2(平面)



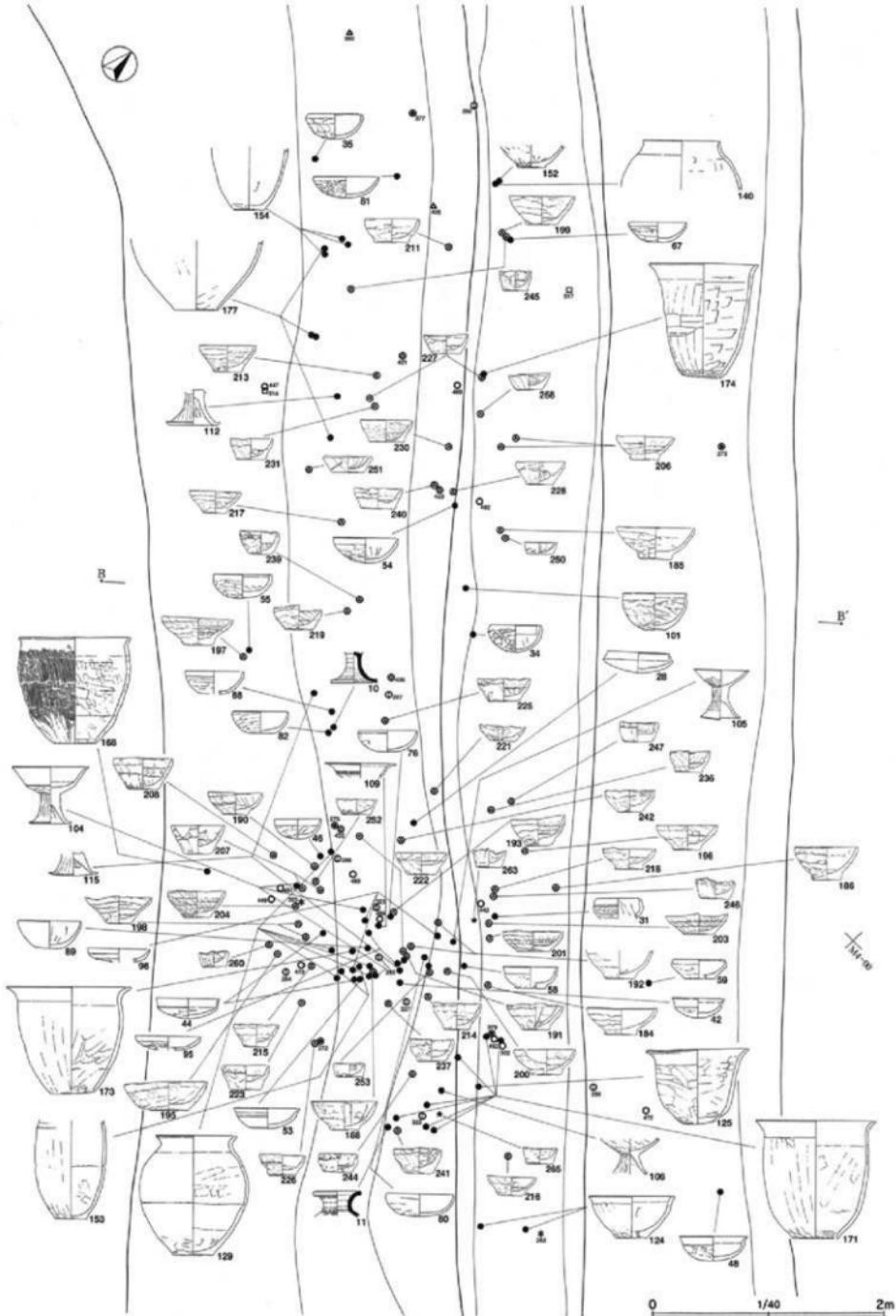
第60図 BSD-2 遺物出土状況詳細図2(断面)

128～167は壺である。128は球形の胴部をもつ。底部はやや上げ底である。安定が良く、丁寧な作りである。129は外面胴部中位以上が著しく磨滅している。130は外面胴部最大径以上が著しく磨滅している。132は外面胴部下半の輪積部で、器面の剥落がほぼ一巡する。133の底部は上げ底である。142は寸胴形の壺である。胴部は、やや上げ底気味の安定した底部から水平方向に聞くように張り出し、垂直方向に屈曲後、そのまま口縁部まで立ち上がる。口径35.0cm、頸径33.9cm、胴部最大径34.9cm、器高30.8cmを測る。内面はほとんど黒色を呈しており、若千煤が付着している。煤は外面上にも少しみられる。器形は独特であるが、胎土や焼成、調整技法などは他の壺と大差ないようである。143は底部を欠損する以外ほぼ完形の壺で、外面胴部にハケ調整痕が明瞭に残される壺である。ハケの単位は7本/cmである。底部が輪積み部で綺麗に外れており、壺として転用された可能性もある。145・154は底部外面に木葉痕が残されている。149はほぼ完形であるが、底部が小さく大変不安定である。155・158の底部もやや不安定である。

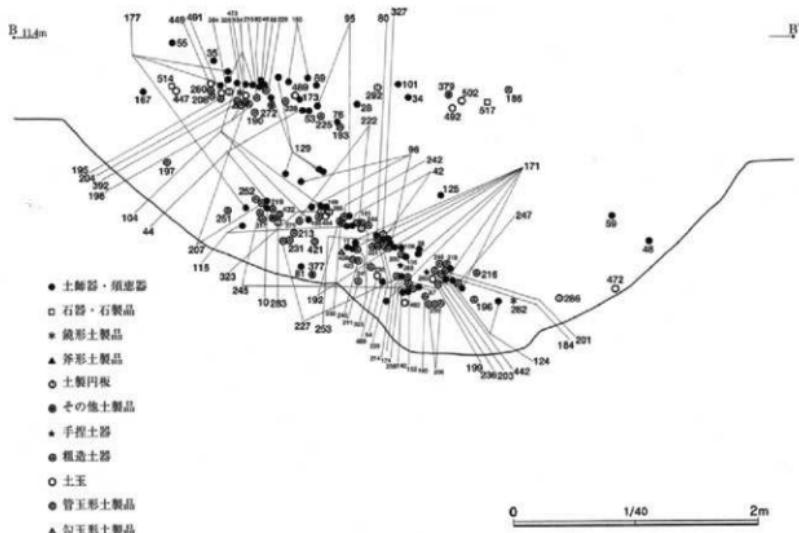
168～183は瓶である。168はほぼ完形で、胴部上半にハケ調整痕が明瞭に残される。下半はハラケズリが施される。ハケの単位は6本/cmである。底部端部はほとんど磨耗している。173・177の底部端部はほとんど破損している。174は胴部外面上部が磨滅している。

184～260は粗造土器である。手捏土器との区別が難しいものもあるが、ここでは輪積みにより成形され、輪積み痕が明瞭に残されているものを粗造土器とし、一塊の粘土から成形されるものは手捏土器として区別した。平面的には、調査区の東側の部分からまとまって出土しているが、垂直分布でみると、少なくとも上下2つの集中に分かれる。

184～192は底部に木葉痕がみられ、外面には数段の輪積み痕が残されるが、内面は丁寧にヘラナデされ



第61図 BSD-2 遺物出土状況詳細図3(平面)

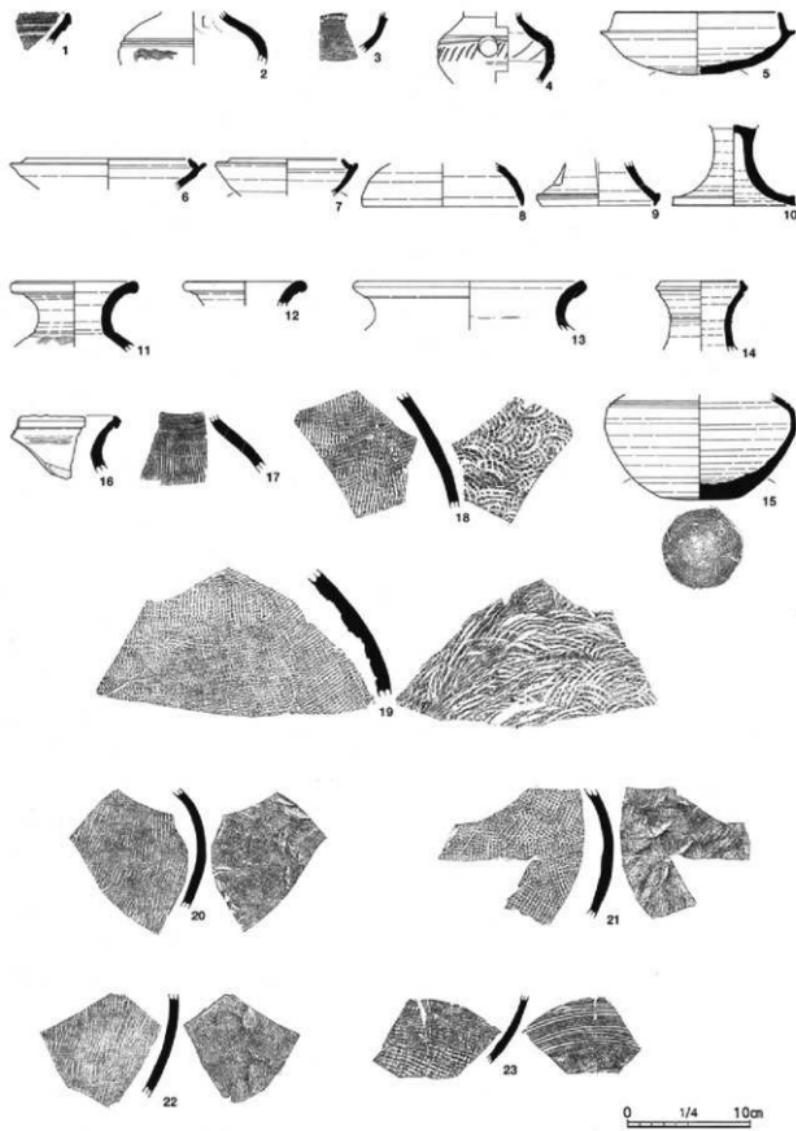


第62図 BSD-2 遺物出土状況詳細図3 (断面)

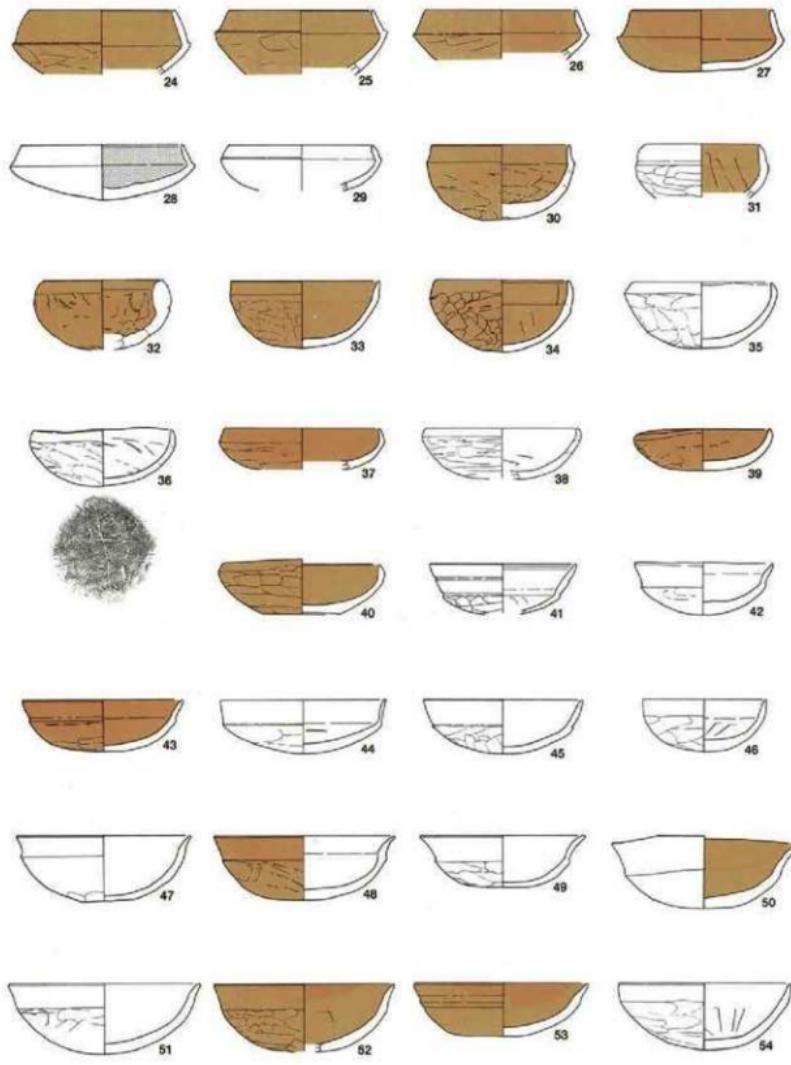
輪積み痕が消されている。大振りで、口径と底径の差が比較的大きい形態である。188・191は、ヘラナデのヘラの当たりが長く鋭い。195も、内面の輪積み痕が消されているが、ヘラではなく指ナデによる。202は、内面底部に、上部からみて放射状に、比較的明瞭に指ナデの指頭圧痕が残されている。このような放射状の指頭圧痕は他の粗造土器にも多くみられ、特徴的ではあるが、手捏土器にも皆無ではない。214は形態的にはほとんど違和感はないが、胎土が細かい点で他と異なる個体である。220は、放射状に指ナデした底部と1段のみの内面の輪積み痕が特徴的である。口径と底径の差があまり大きくなく、小振りで手捏土器にも通じる形態を呈している。このような形態の粗造土器も多く、これらにはほとんど木葉痕はみられない。237は胎土が比較的緻密である。239の外面底部の縁には、何の痕跡から明らかでないが、平行線状に沈線がみられる。241・242はいずれも、内面の輪積み痕が指でナデ消されている。胎土は緻密で、形態・色調等よく類似している。244～246の胎土はきめ細かい。247・248は形態・胎土・色調などの点で良く似ている。249～251・253～256・258～260は、内面の放射状の指ナデが特徴的である。口縁部は擬口縁の可能性が高い。

261～271は手捏土器である。現状で輪積み痕の認められないものを手捏土器としたが、261・264は擬口縁で、粗造土器の可能性もある。266は焼成が非常に良く、表面は橙色だが断面は灰色を呈している。

272～276は高杯形土製品である。272～275はいずれも一塊の粘土から成形されているとみられ、縁部は縁を平らな面に押しつけ、内面に折り込むようにして形作られている。杯部内面には放射状の指ナデがみられる。276は破片のため詳細は不明であるが、接合部で外れているようで、成形技法が他と異なる。

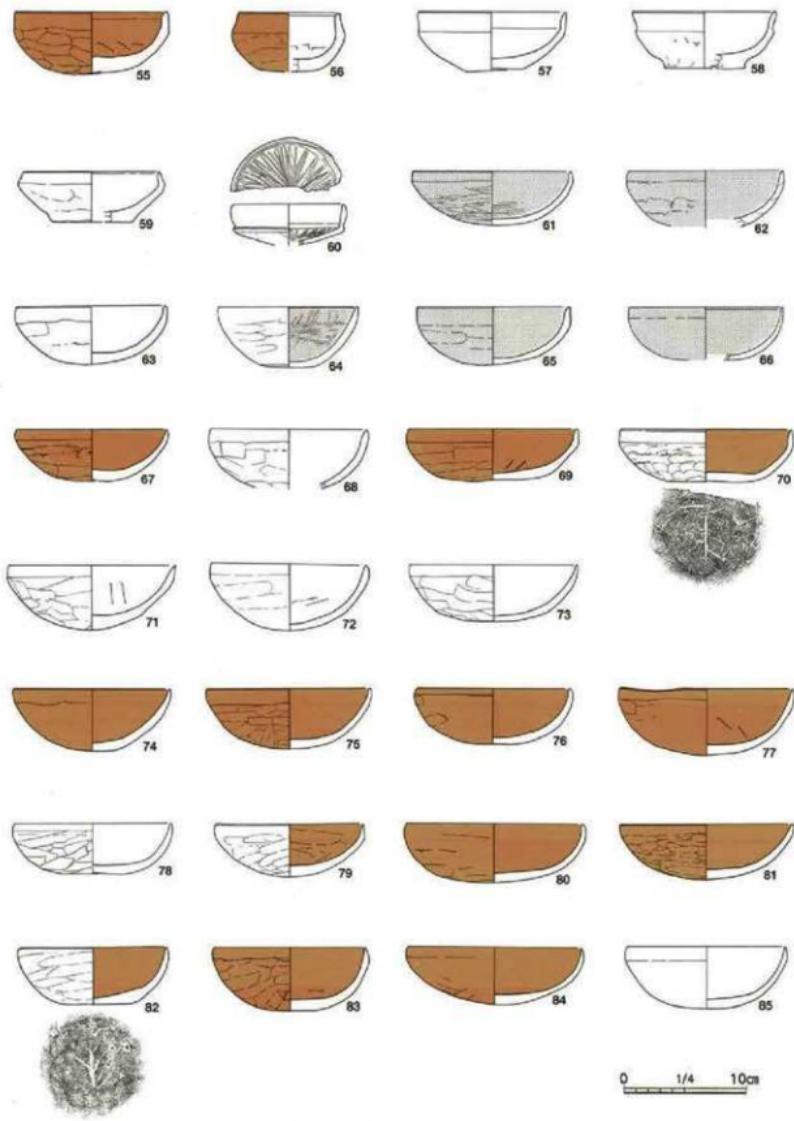


第63図 BSD-2 出土遺物（1）

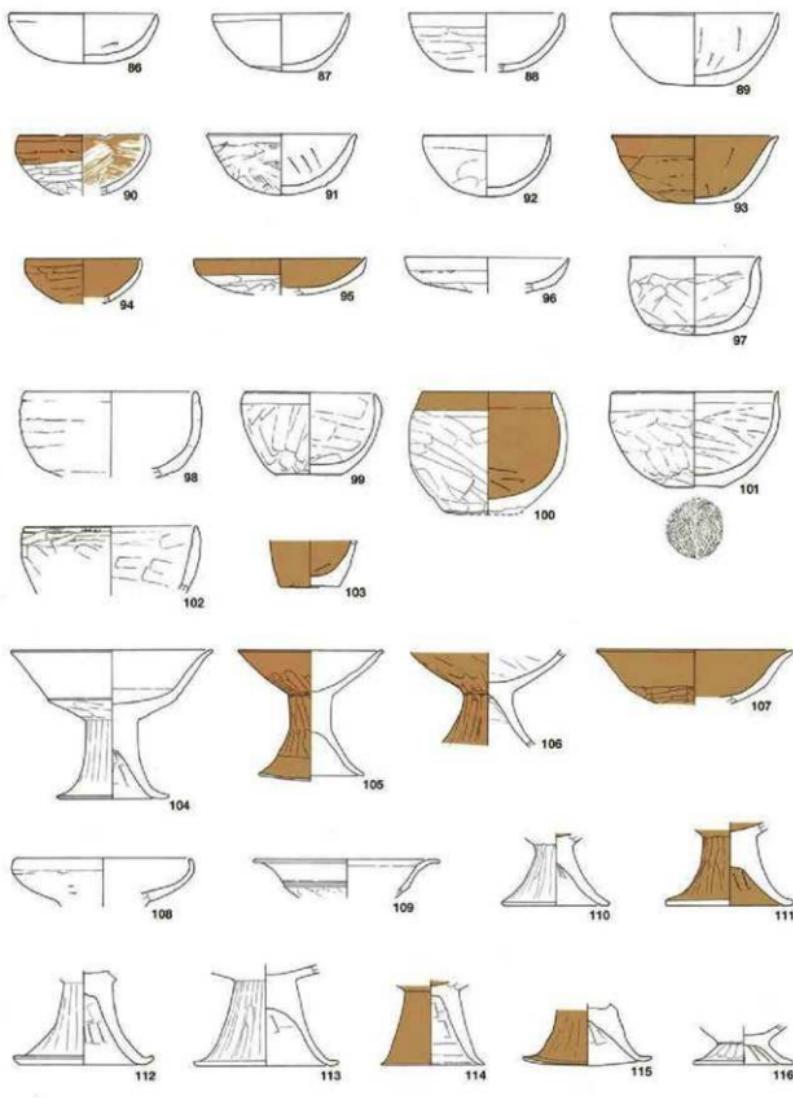


0 1/4 10cm

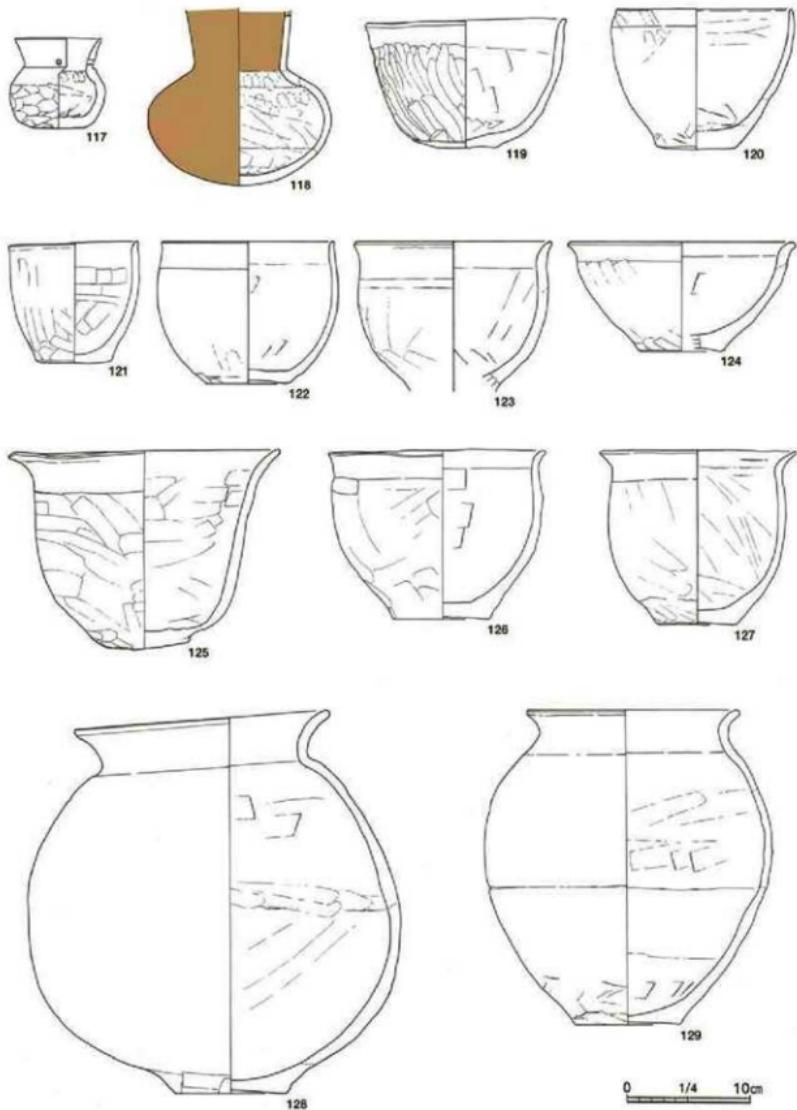
第64図 BSD-2 出土遺物 (2)



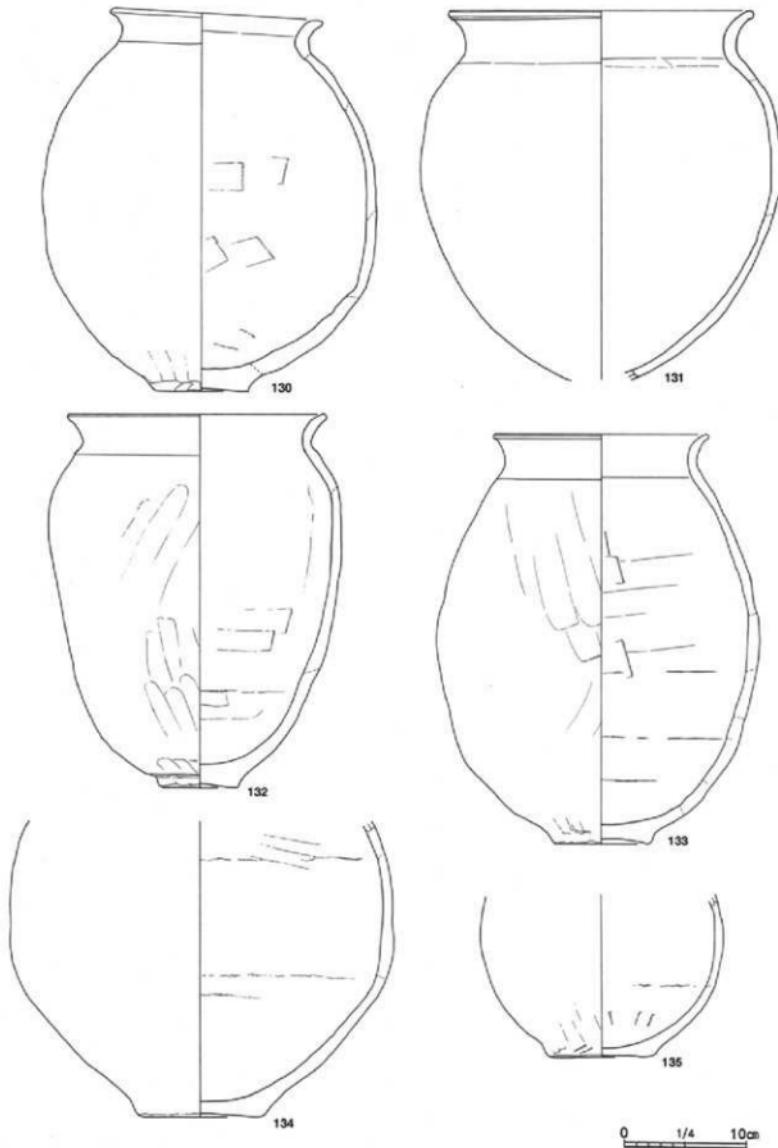
第65図 BSD-2 出土遺物 (3)



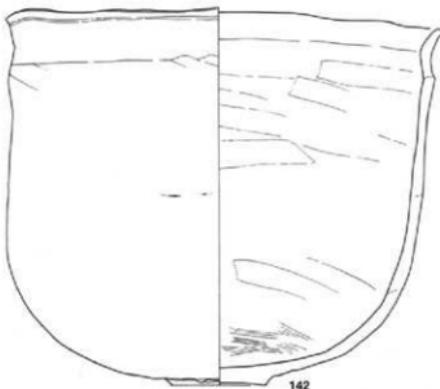
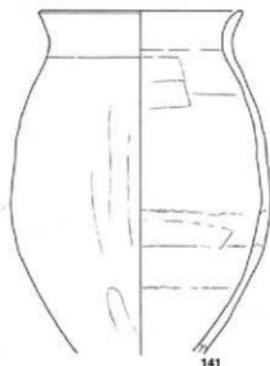
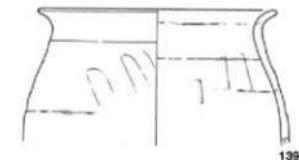
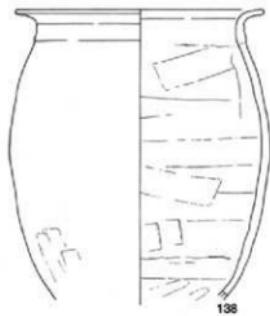
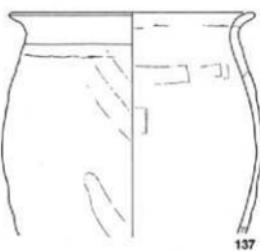
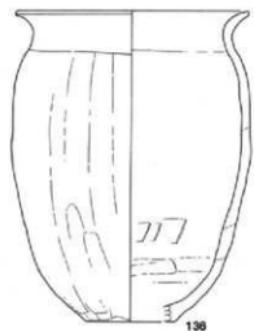
第66図 BSD-2出土遺物(4)



第67図 BSD-2 出土遺物 (5)

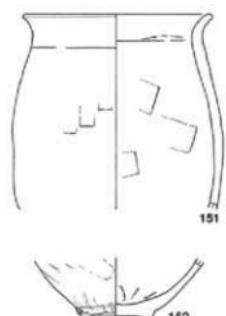
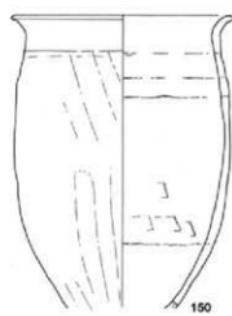
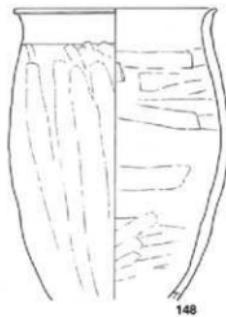
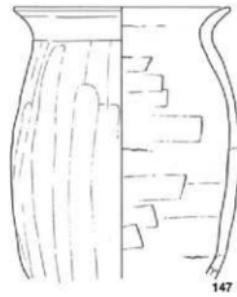
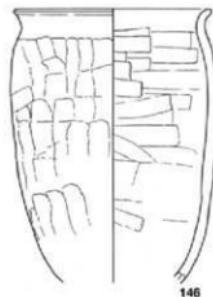
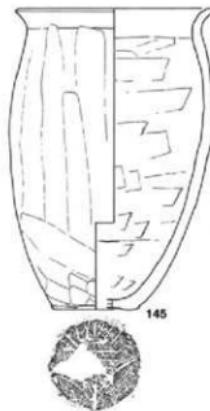
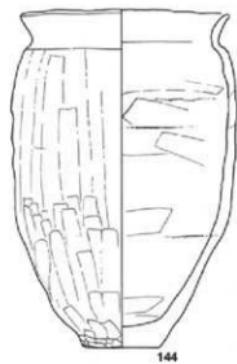
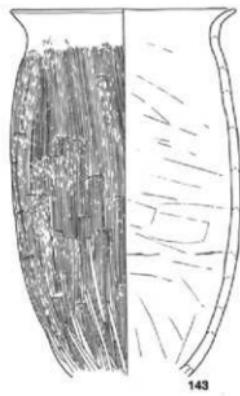


第68図 BSD-2 出土遺物 (6)



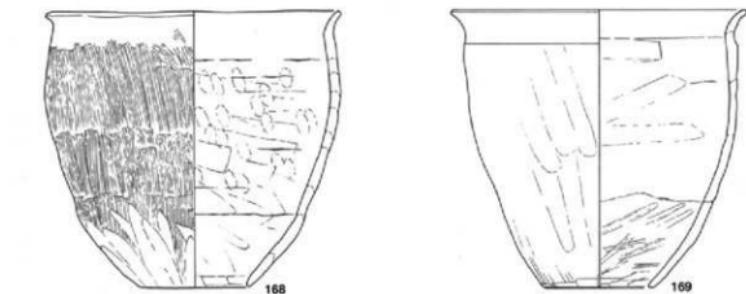
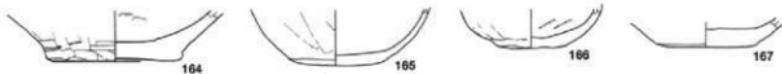
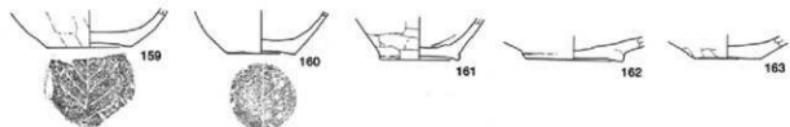
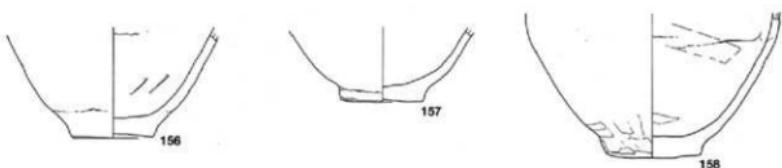
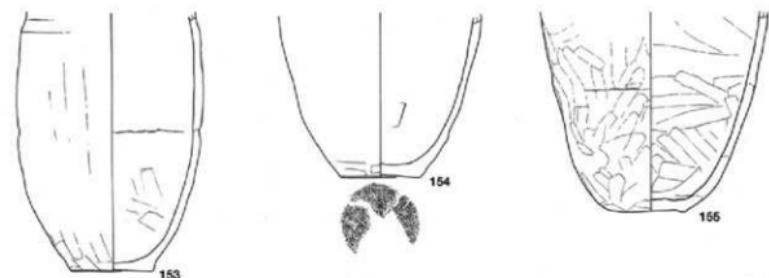
0 1/4 10cm

第69図 BSD-2 出土遺物 (7)



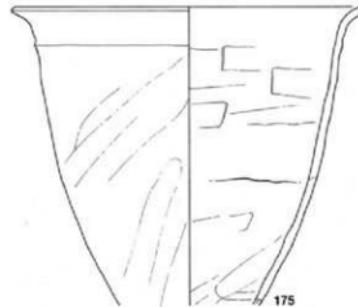
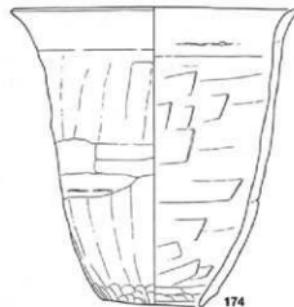
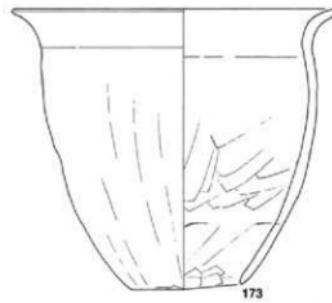
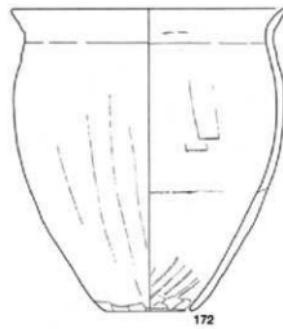
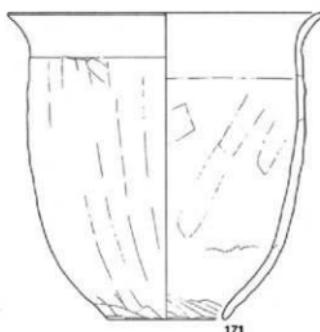
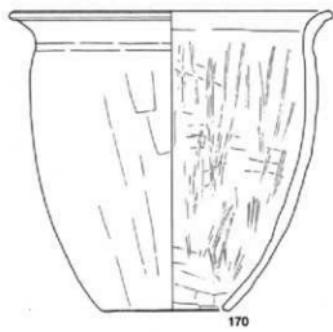
0 1/4 10cm

第70図 BSD-2 出土遺物 (8)



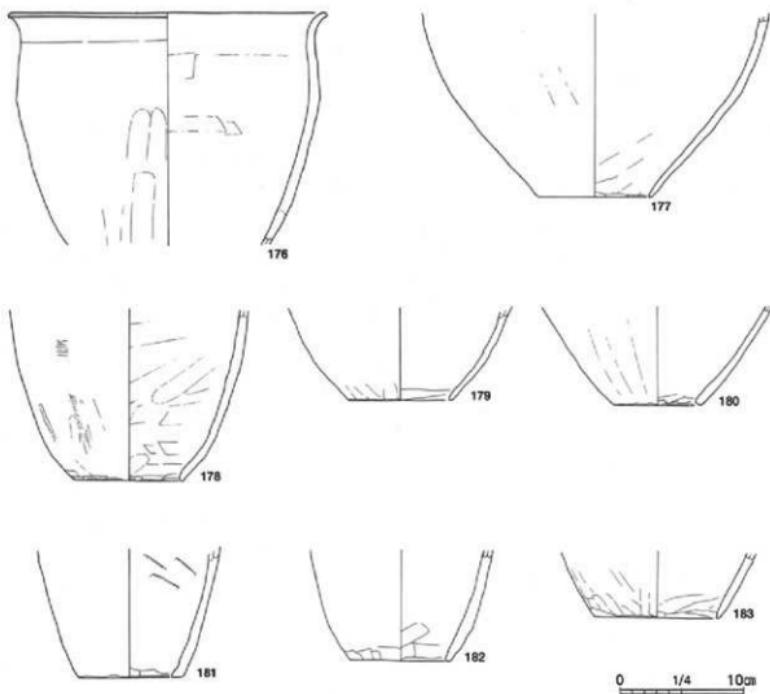
0 1/4 10cm

第71図 BSD-2 出土遺物 (9)



0 1/4 10cm

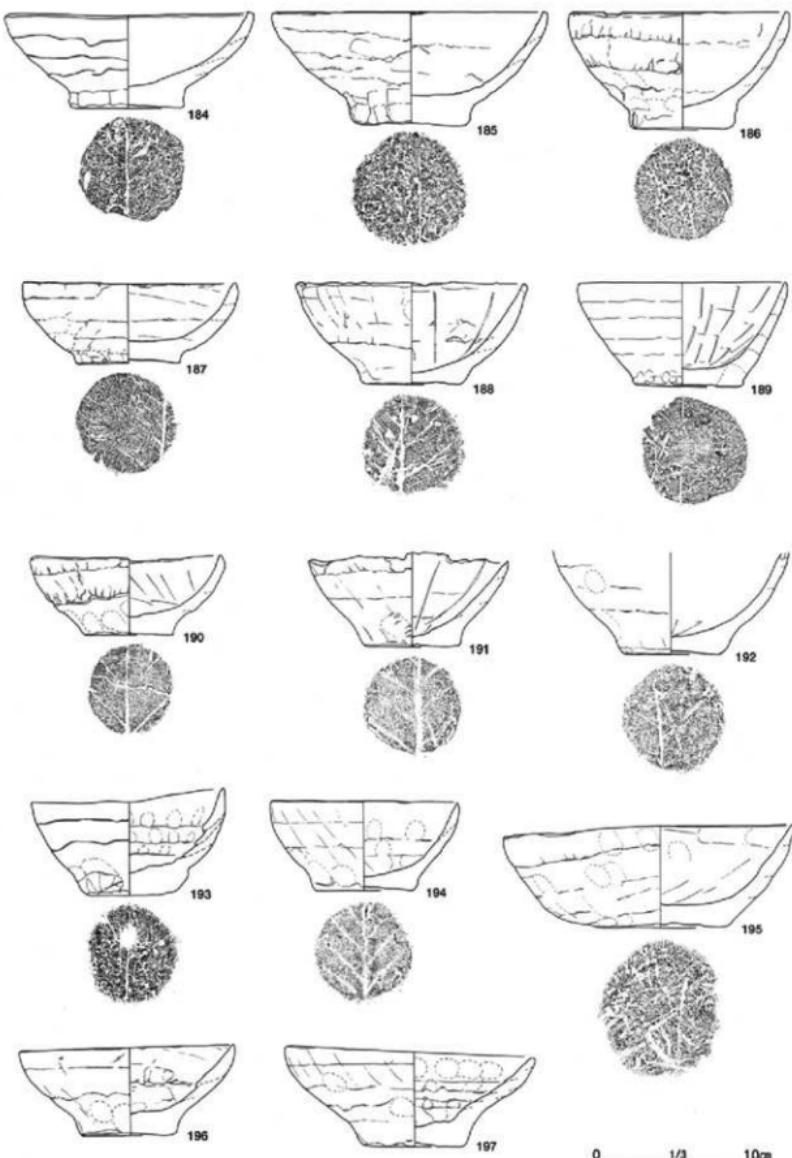
第72図 BSD-2 出土遺物 (10)



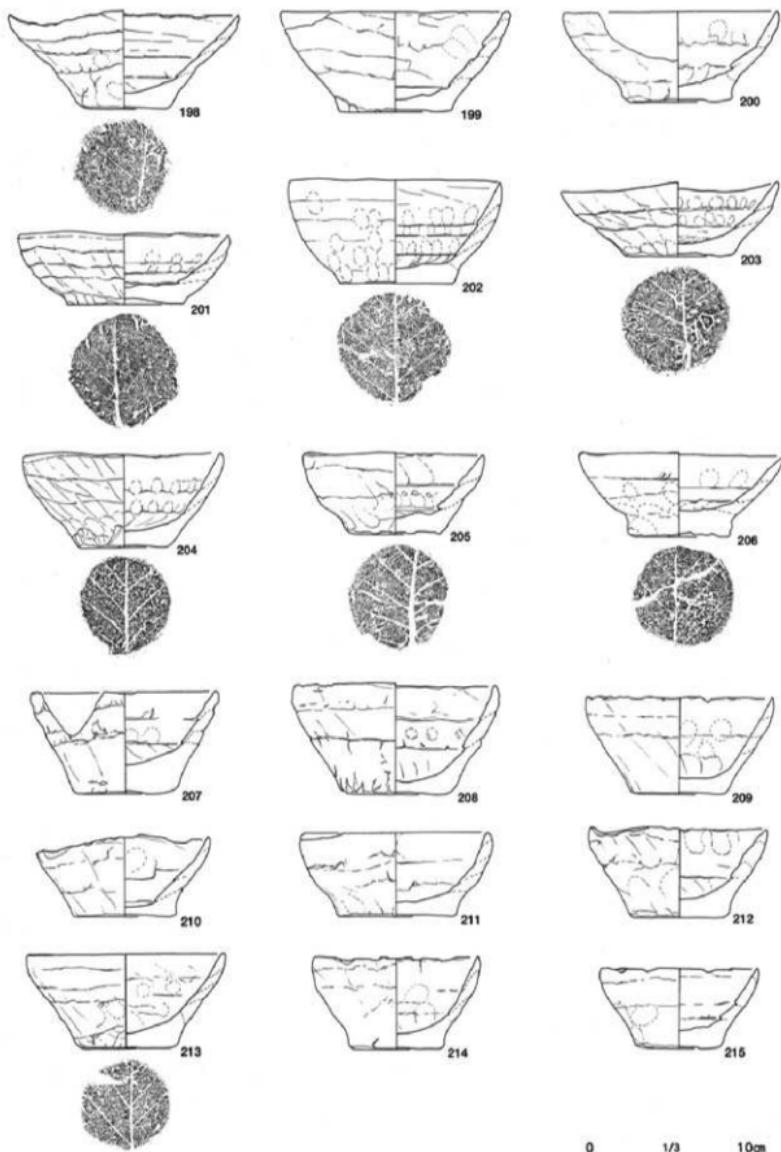
第73図 BSD-2 出土遺物 (11)

277～283は鏡形土製品である。鏡形土製品以下土製模造品類の胎土には、杯・高杯類と共通するようなきめの細かいものと、甕類・粗造土器に共通するような粗いものと、大きく分けて2種類があるようである。277はほぼ完形で、鉢の部分は、粘土を貼付け横から穿孔することによって表現されている。表面は基本的にナデによって仕上げられ、縁辺部及び鉢は面取りしたようにきちんとした稜がつけられる。全体的に丁寧な作りである。胎土には甕や粗造土器同様、砂粒が多量に含まれる。焼成は非常に良く、赤橙色を呈し黒焦等はみられない。278は鉢部分が欠損しているが、横からの穿孔の痕跡が残っており、鏡形土製品と考えられる。279・280は土製円板状の中央部を2本の指でつまみ上げ、鼻状になった部分に横から穿孔して鉢を表現している。281は現状でスタンプのような形状をしているが、中央部は鉢の表現と考えられる。278～281には、277のような稜はみられない。また、胎土はいずれもきめ細かい。282の中央部には穿孔があり、土製円板と類似するが、縁辺部に粘土塊が4つ貼り付けられており、四輪鏡を模していると考えられる。胎土には砂粒が多量に含まれる。焼成は良い。283も土製円板状であるが、縁辺部が指でつまみ出されて角状になる部分があり、四輪鏡を模していると考えられる。

284～344は土製円板である。大きさの大小、穿孔の有無等あるが、いずれも表面はナデによって仕上げ

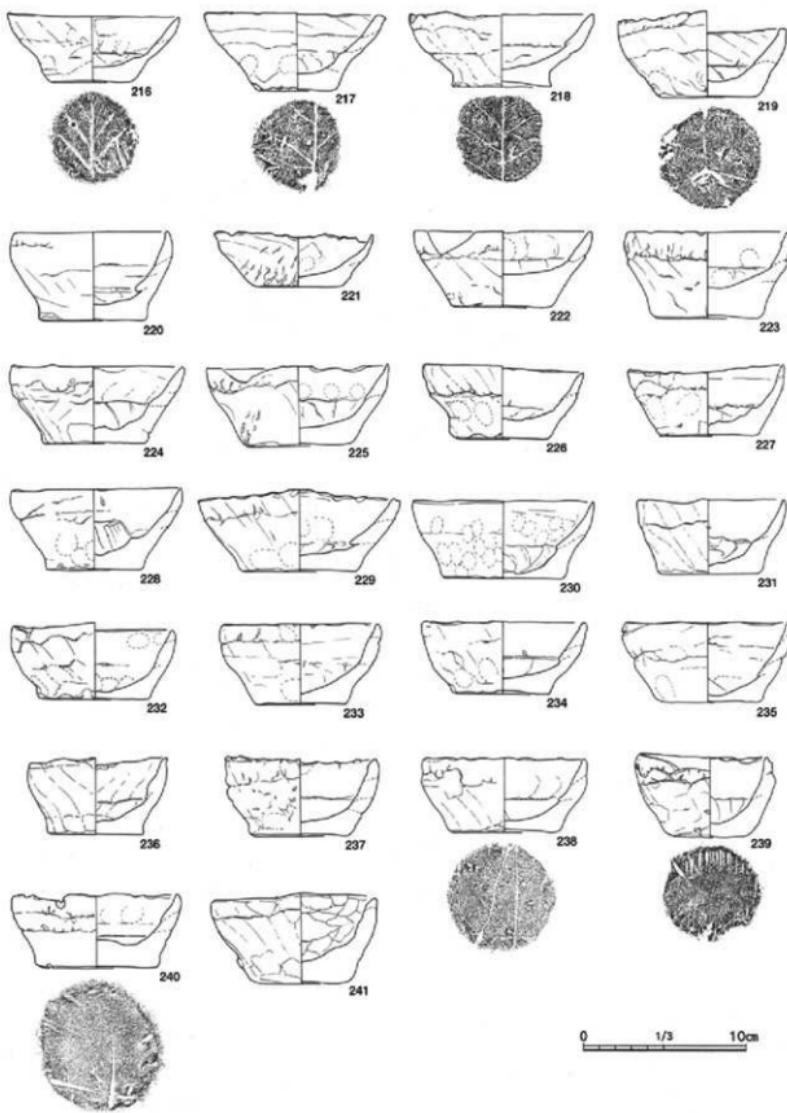


第74図 BSD-2 出土遺物 (12)

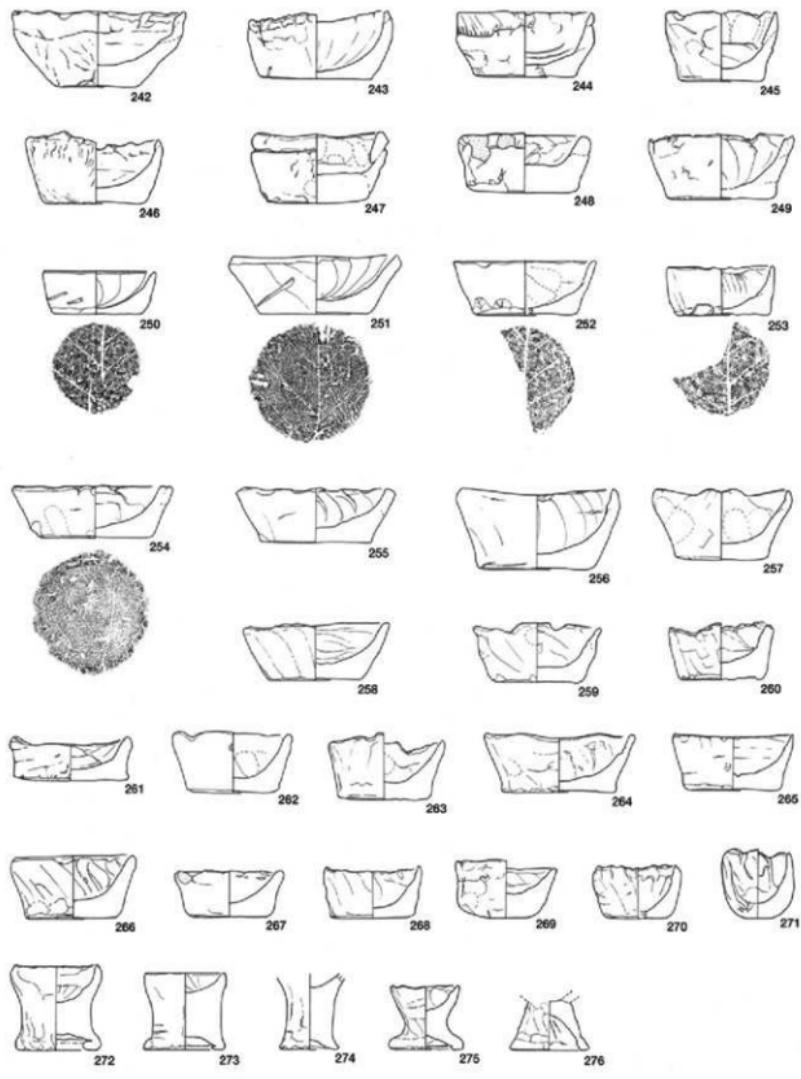


0 1/3 10cm

第75図 BSD-2 出土遺物 (13)



第76図 BSD-2 出土遺物 (14)



0 1/3 10cm

第77図 BSD-2 出土遺物 (15)

られている。315・321は穿孔が中央からややずれる。321は中央の穿孔も細く、焼成時に形が変形しているようであるが、土製円板と考えられる。325はイナジクのような形状で、ほぼ中央付近に穿孔がある。ここでは土製円板に含めて考えたが、別の土製品類の可能性もあるろう。326の穿孔は半截竹管状の工具で施され、位置も縁辺部である。これも別の土製品の可能性があるかもしれない。340～344は遺存部分にははっきりとした穿孔が認められず、341・342は形が梢円形状である。342は図の右側が少し破損しているが、この部分で厚みが増しており、柄の部分などが続く可能性もある。340～344はここでは土製円板に含めたが、いずれも別の土製品である可能性もあるろう。

345～375は斧形土製品である。粘土棒の3/4ほどを平らに押して延ばし、厚みが異なる境目の部分を、2本の指で挟んでつまみ、くびれを作る。くびれの作り方には、2本の指を同じ方向に向かって挟み上げるものと、挟んで捻るものと、大きく分けて2種類あるようである。これらは『研究連絡誌』では「斧形土製品」として報告されたが¹⁾、先端が尖っていないこと、形状が斧形石製品に類似し、くびれ部の表現が袋状鉄斧の袋部分に通じることなどから、ここでは「斧形土製品」と呼称することとした。ただし、言うまでもなく、袋状鉄斧を模したとする確証はなく、より適切な表現を検索した結果である。斧形土製品の基部の断面形を観察すると、2種類のくびれの作り方のうち前者は扁平、後者は円いという傾向もあるよううに見える。これを区別することも可能かもしれない。

345は無傷で完形の個体である。斧形土製品は破損しているものが圧倒的に多く、しかもほとんど接合しないことから、意識的に破壊されている可能性も考えられる。345・346・353～357は同じ方向に挟み上げることによってくびれを作るタイプの個体である。一方347・352・358・362は挟んで捻ることによってくびれを作るタイプである。346・347は2つに破損していたが、接合して完形となったものである。348・349も無傷で完形の個体である。基部の断面形は円形で、くびれはほとんどないが、強いて言えば捻れがあるようである。350・351・359・361・363もくびれが明瞭ではないが、捻れているとみられる。365は基部の端部が横に張り出すようにくびれが作られる。捻れないようであるが、斧形とは異なる土製品の可能性もあるろう。366～375は中間部又は先端部の破片と考えられる。

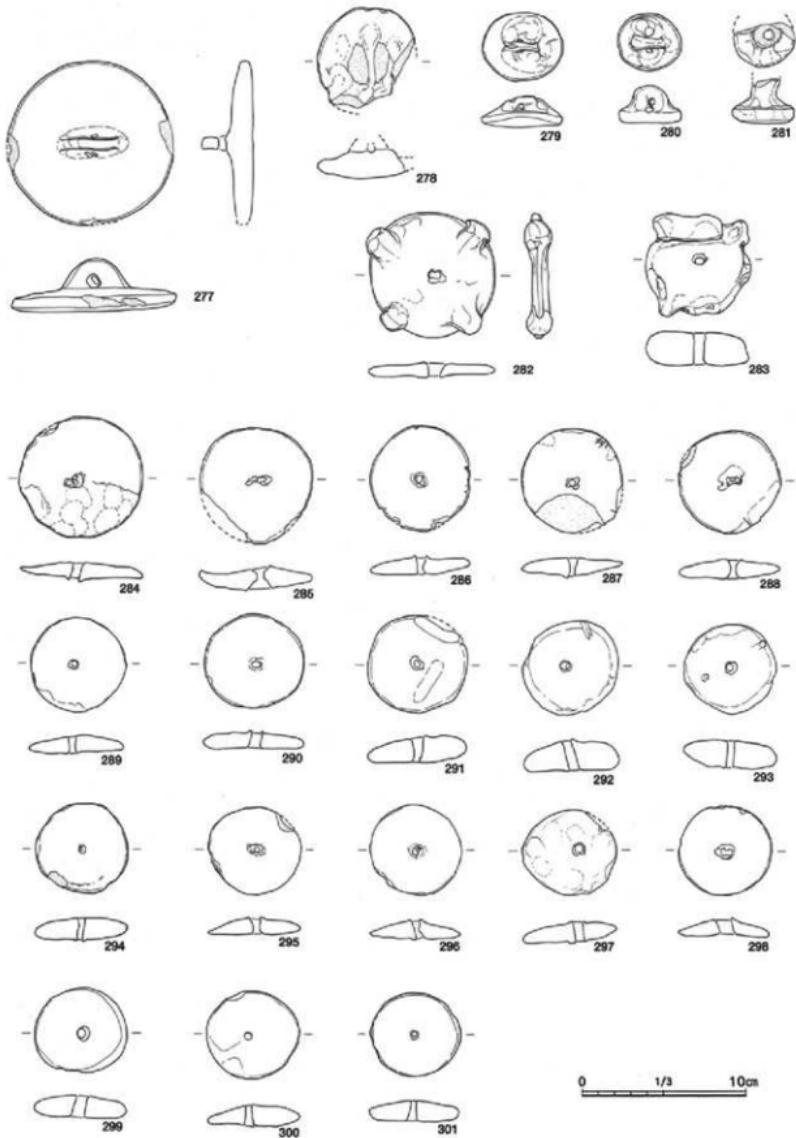
376は丁寧に面取りが施され、磨製石斧のような形状を呈する土製品である。

377～380は鶴先形土製品である。377は三日月状の形状を呈している。図上部はやや棱をもって平坦に整えられる一方下部はやや鋭く、断面形は概ね二等辺三角形である。左右端は指で上方に引き上げて窄められた結果、皺が寄っている。平面形から鎌形を模した可能性も考えられるが、断面形から鶴先形と考えた。378は、斧形土製品をくびれ部分で横に曲げて作られたような形状を呈する。断面形は、基本的には扁平で、曲げられた端の部分のみ円い。はっきりとした刃部の表現はみられないが、鶴先形土製品の一種と考えられる。379も378と同種の鶴先形土製品と考えられる。380も同様か、又は斧形土製品の一部などかもしれない。

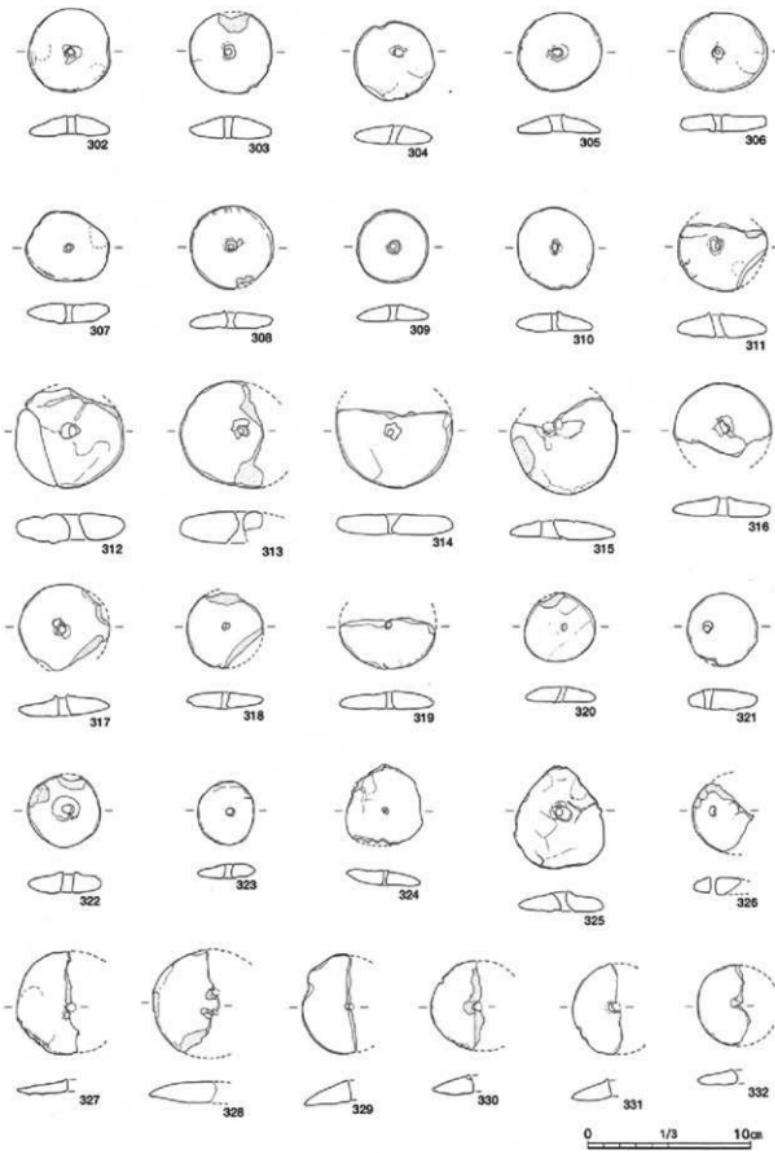
381～383は形態から匙状土製品としたが、全てが同種のものであるという確証はない。381は正面がスプーン状に凹められており、図の上部が欠損している。欠損部付近は接合痕がみられ、柄のようなものが続いている可能性がある。382も同様に正面が凹んでいる。383は小型だが、正面が凹められ、やはり上部が欠損している。凹んだ部分には焼成前穿孔があり、裏面は赤彩されている。

384は小型の土製円板のようであるが、貫通しない穿孔があり、全容は不明である。

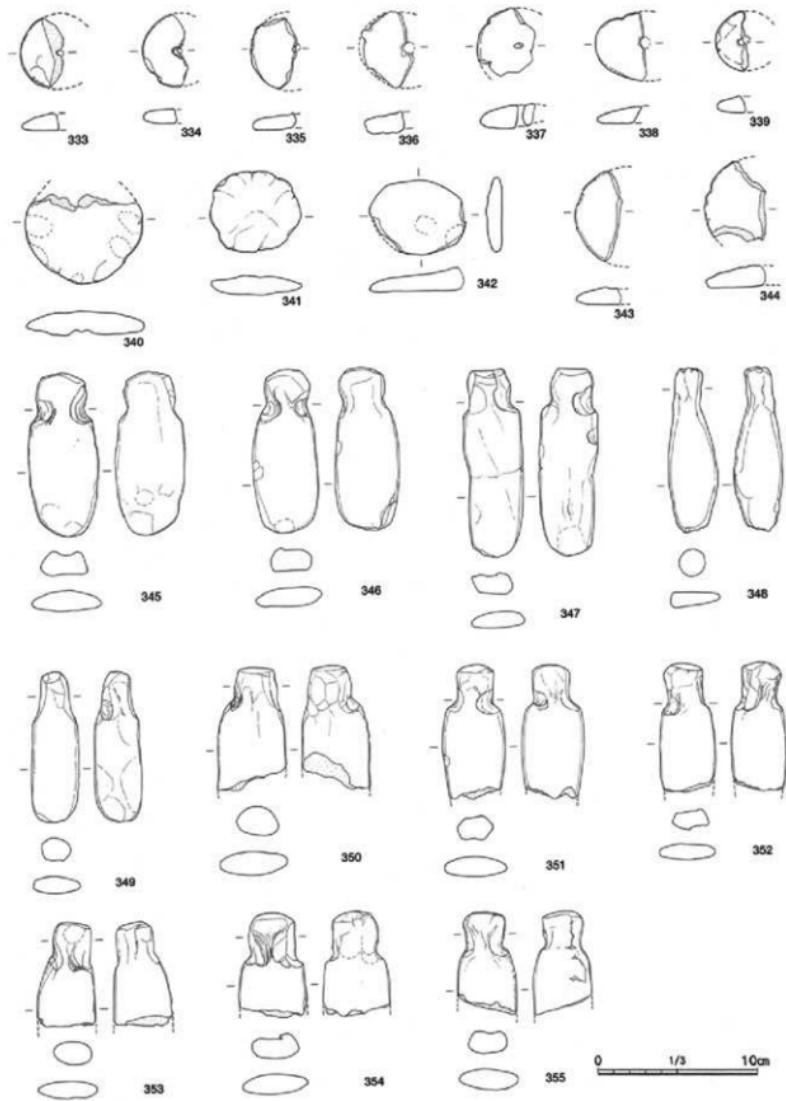
385～387は棒状の土製品である。386は断面形が図上部ほど丸みを帯び、下部ほど扁平になる。鶴先形土



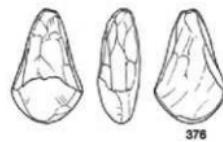
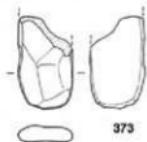
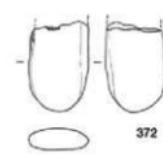
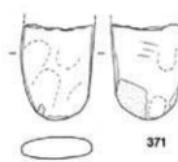
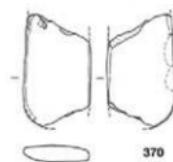
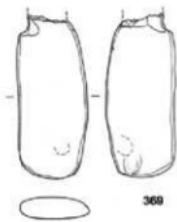
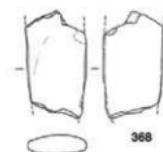
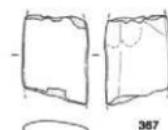
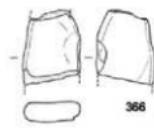
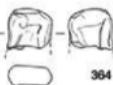
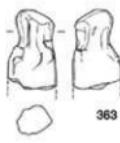
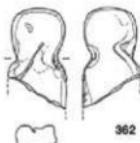
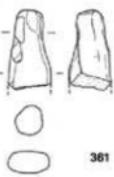
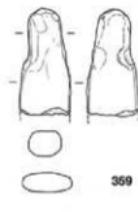
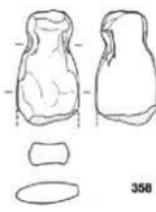
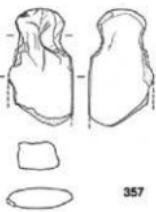
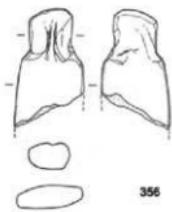
第78図 BSD-2 出土遺物 (16)



第79図 BSD-2 出土遺物 (17)

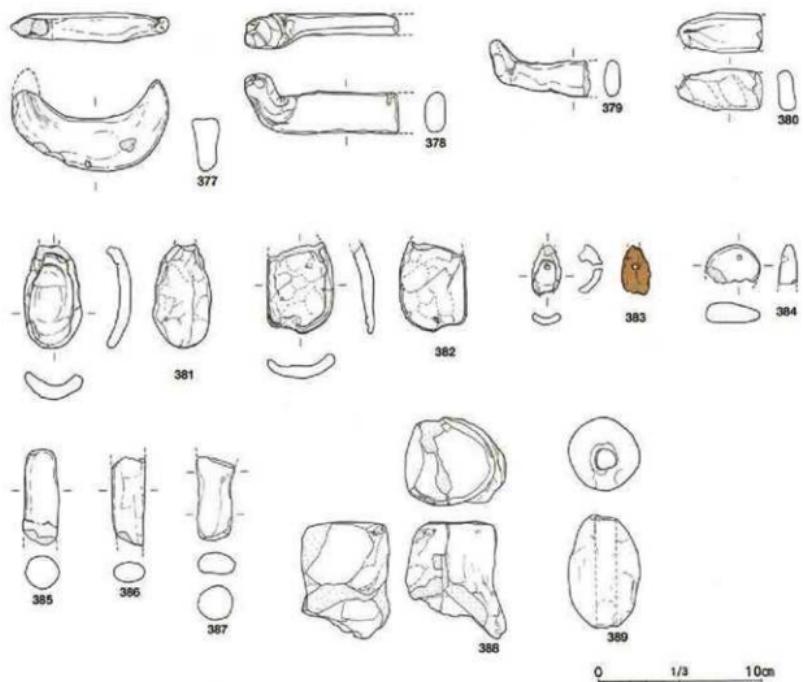


第80図 BSD-2 出土遺物 (18)



0 1/3 10cm

第81図 BSD-2 出土遺物 (19)



第82図 BSD-2 出土遺物 (20)

製品の一種かもしれないが、明らかでない。387は団上部の断面形がやや扁平で、斧形土製品の可能性もある。

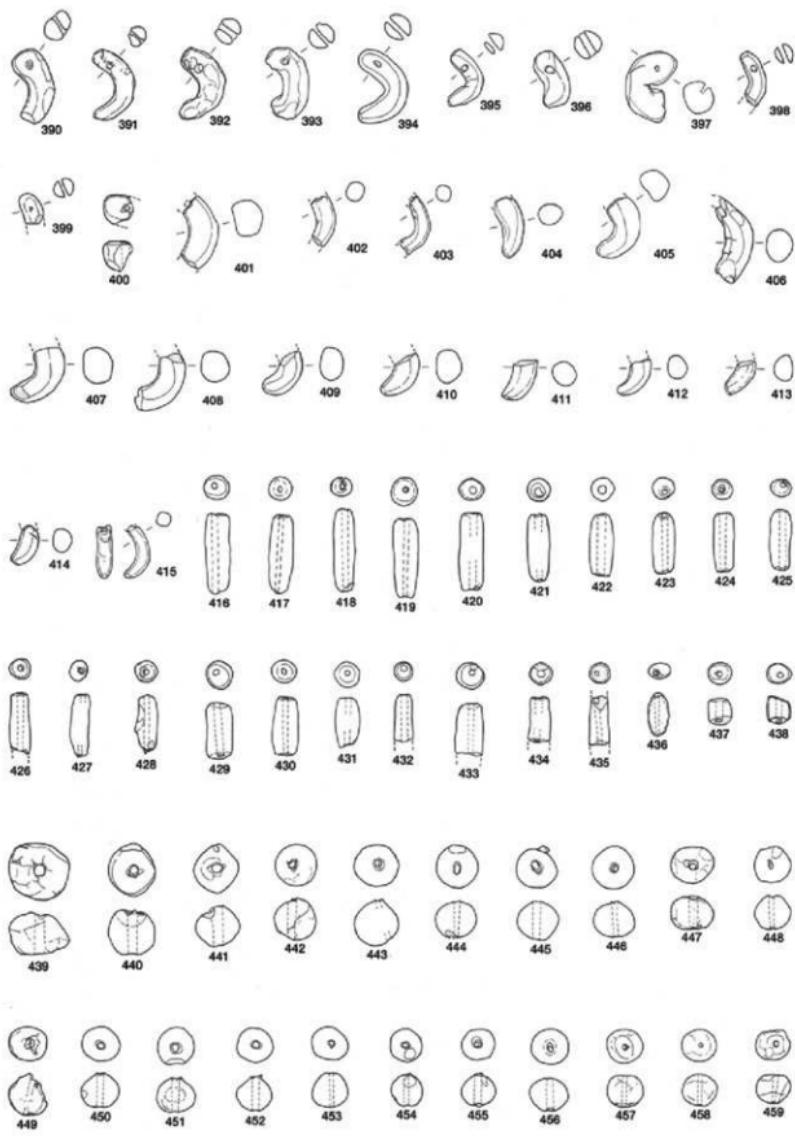
388は団上部と左側面に平坦面がある。器台又は支脚の可能性が考えられる土製品である。

389は土錘と考えられる。

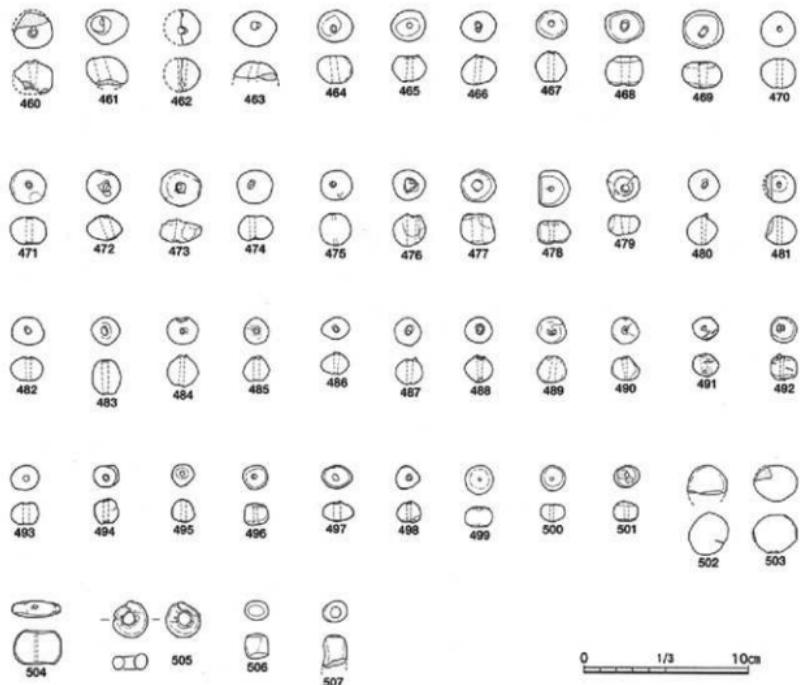
390～415は勾玉形土製品である。いずれも粘土紐を指で曲げて作られているとみられ、腹の部分に皺が寄っているものもみられる。397は片面にしか穿孔がない。415は頭部を欠損しているが、穿孔の向きが他と異なり背部から腹部に向かっている痕跡が観察される。

416～438は管玉形土製品と考えられる。土錘とは異なり、端部は面取りして整えられているものが多いようである。436は中間部が膨れ、断面形は扁平で、押し潰されたような形状をしている。437・438は磨耗のため明らかでないが、端部は折れ面で、もとは長かった可能性がある。

439～503は土玉である。大型のものから小型のもの、扁平なもの、穿孔の細いもの、無いものなどがみられる。473・478・479・499・500等は扁平で、白玉を模している可能性がある。478は磨耗しているため不明だが、左側は欠損している可能性がある。502・503は穿孔がない。



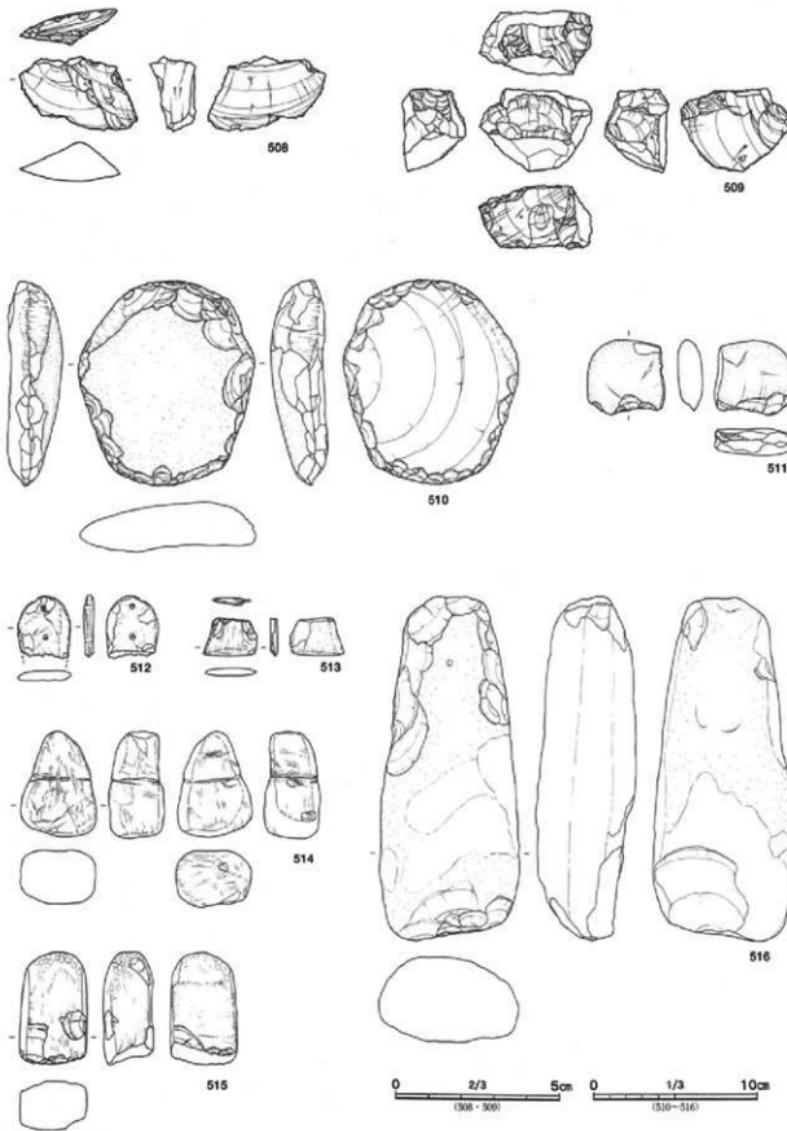
第83図 BSD-2 出土遺物 (21)



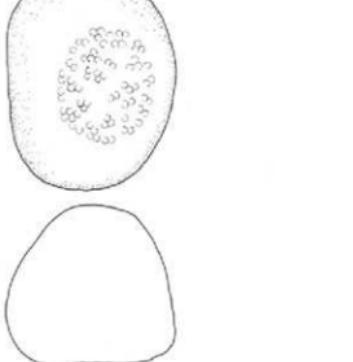
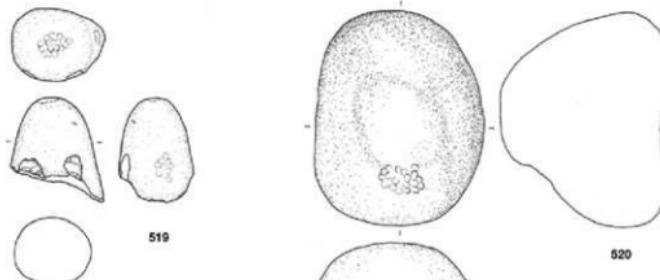
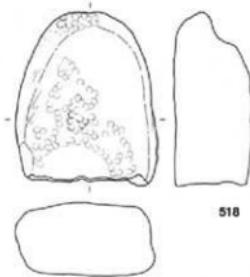
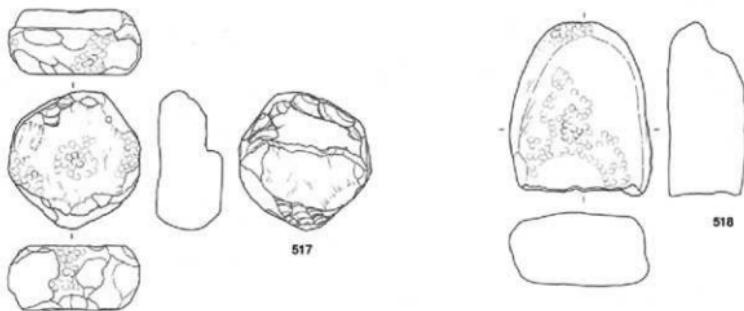
第84図 BSD-2 出土遺物 (22)

504は平玉で、面取りされた上面と下面をつなぐように穿孔が施される。正面はナデにより調整されているが、裏面は砂粒や薫又は草などの圧痕がみられ、未調整のようである。505は細い粘土紐を環状に接合したものである。幅・厚みは一定ではなく、接合部分が極端に細く薄い。506・507は腐耗のため破断面か否かも見分けるのが困難な土製品だが、勾玉形や管玉形の部分又は把手の類の可能性もある。

508~533は石器・石製品である。繩文時代、弥生時代に比定される遺物も含まれるかもしれないが、当遺構に伴わないとの積極的な根拠も乏しいため、敢えてそれらも遺構外とはせずここに掲載することとした。508・509は黒曜石製で、508は剥片、509は石核である。510は砂岩製の礫器で、正面に原礫面が残るが、背面は全て剥離面である。側縁には全て剥離痕がみられる。511は凝灰岩製の礫器である。表面は滑らかで、下部がやや抉れた刃部状を呈する。512は滑石製の剣形石製品の破片である。穿孔が2か所認められる。513は滑石製の石製品で、下部が鋭く研磨され、片刃の刃部様である。514は蛇紋岩製である。全般的に擦痕が観察されるほか、表面から裏面にかけて横一文字に沈線又は人為的につけられた傷痕がみられる。沈線又は傷は、正面のみ中央でクロスするように縦にも施されている。磨り切って玉を作る、玉素材であった可能性もある。515は細粒閃緑岩製の抉入柱状片刃石斧の破片である。516は脆い凝灰質砂岩製で、表面

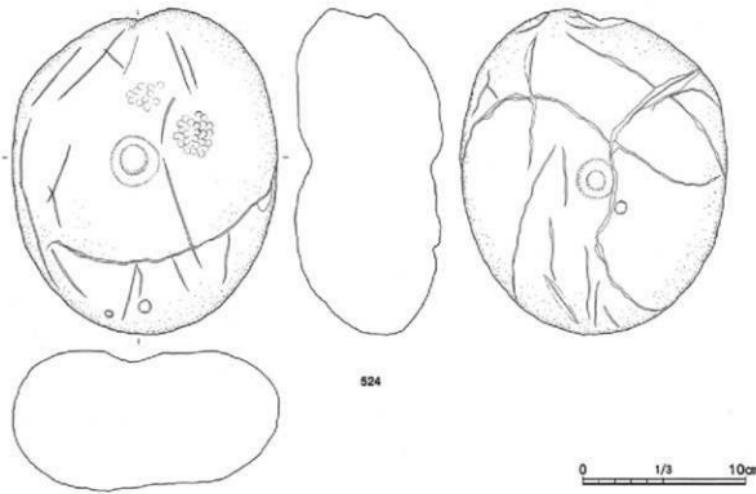
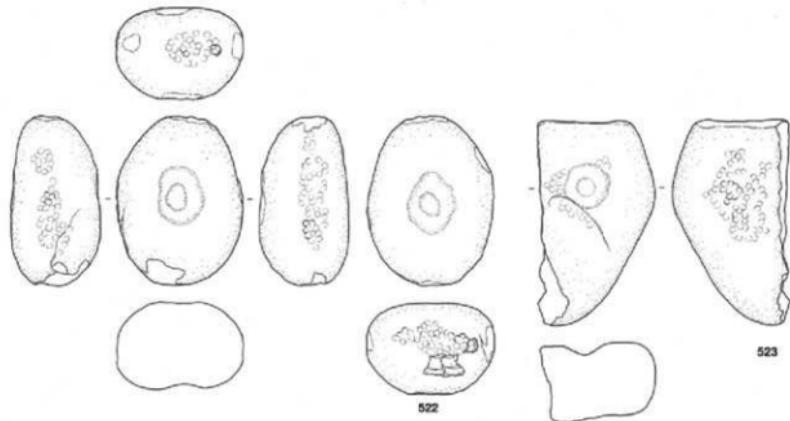


第85図 BSD-2 出土遺物 (23)

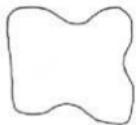


0 1/3 10cm

第86図 BSD-2 出土遺物 (24)



第87図 BSD-2出土遺物 (25)



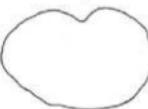
525



526



527



528



529

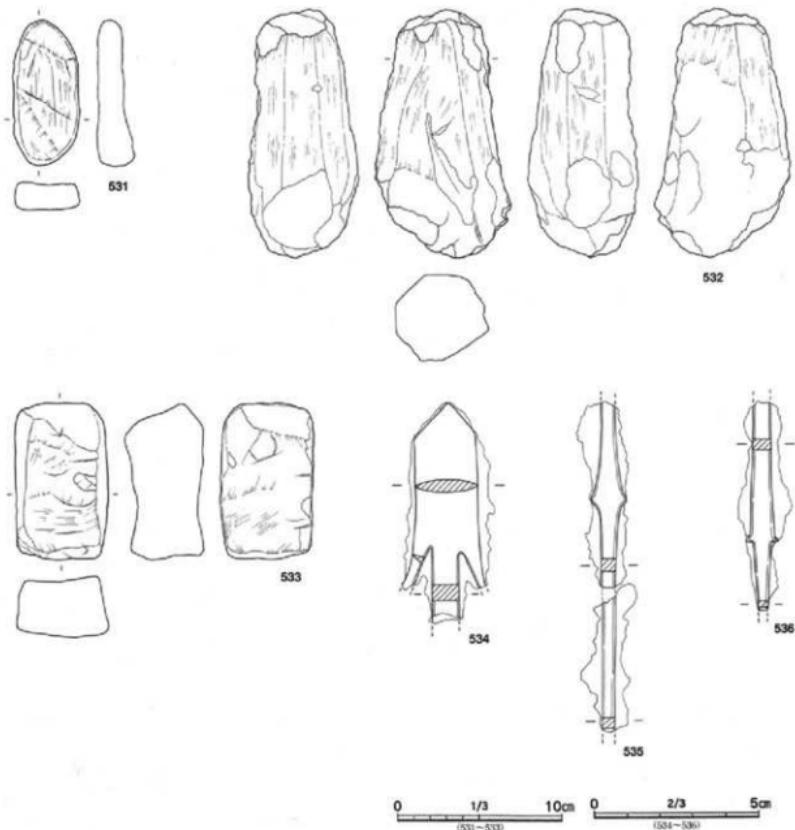


530

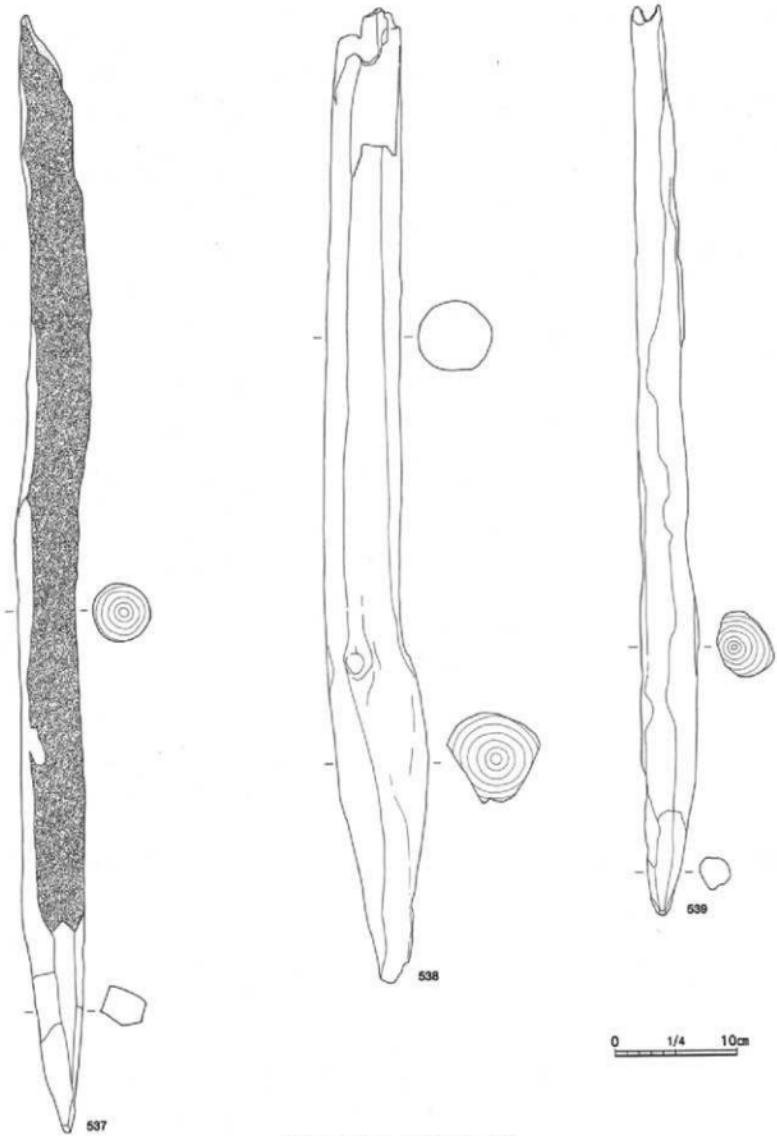


第88圖 BSD-2 出土遺物 (26)

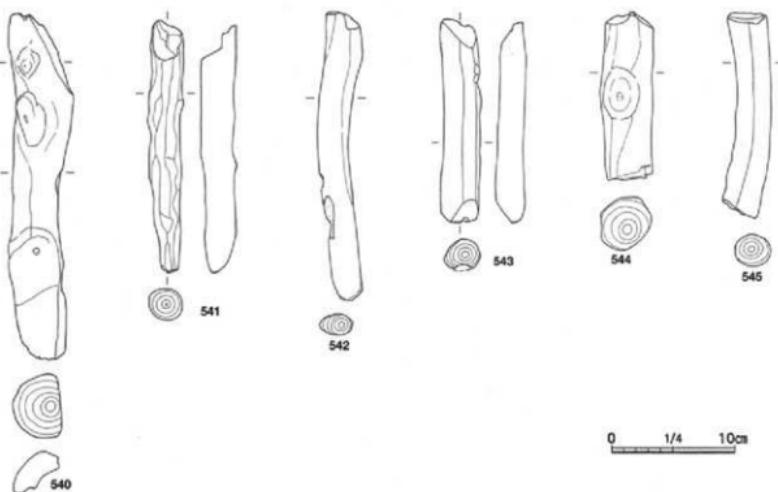
が磨滅・剥落しているが、大型蛤刃石斧と考えられる。被熱している可能性がある。517は閃綠岩製で縁辺部に敲打痕が認められることから敲石と考えられる。正面中央部はやや凹んでいる。518・519も敲石と考えられる。520は、裏面が平坦で安定しているが、中央部はやや凹んでいる。正面は山状に盛り上がり、一部に凹みがみられる。砂岩製で重量は2,800 gを測る。敲石の可能性がある。521は直方体状で、全ての面の中央部が凹んでいる。522は安山岩製の凹石であるが、側縁や上下端部に敲打痕も顕著に認められる。523も凹石の破片であるが、被熱して表面が部分的に赤化している。断面は赤化していない。524～526も凹石である。526は大型の石棒の転用品の可能性もある。527・528は石皿の破片と考えられるが、砥石などに転用されている可能性もある。同一個体の可能性がある。529・530は軽石製品である。



第89図 BSD-2 出土遺物 (27)



第90図 BSD-2 出土遺物 (28)



第91図 BSD-2 出土遺物 (29)

いずれも全体的に擦痕が認められ、530には金属研磨痕がみられる。531は扁平な砂岩製で、砥石と考えられる。532は丁寧に面取りが施されている。支脚の可能性もある。533は砂岩製で、全体的に擦痕が観察され、表面は比較的滑らかになっている。砥石の可能性がある。

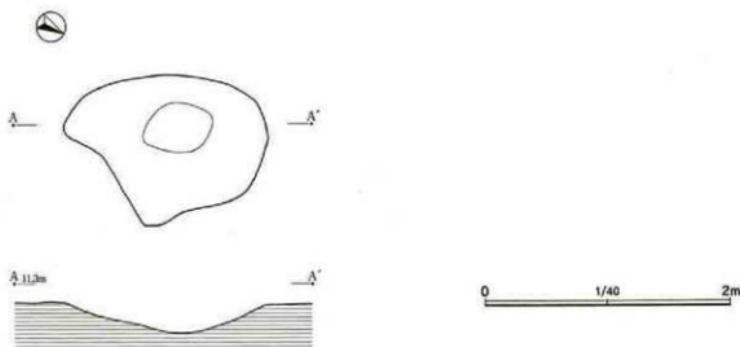
534～536は鉄製品でいずれも鉄鍔である。534は逆刺の先端が欠損しているが、現存値で鍔身長は5.6cm、抉りの深さは1.1cmを測る。535は接合しない2片だが、長頸鍔とみられる。スカート形の棘状突起をもつ。現存値で鍔被長は3.2cm、茎長は6.8cmを測る。536も長頸鍔とみられ、棘状突起をもつ。現存値で鍔被長は4.2cm、茎長は2.1cmを測る。

537～545は木製品で、いずれも遺構底面付近から出土した杭である。537は全面的に焦げている。

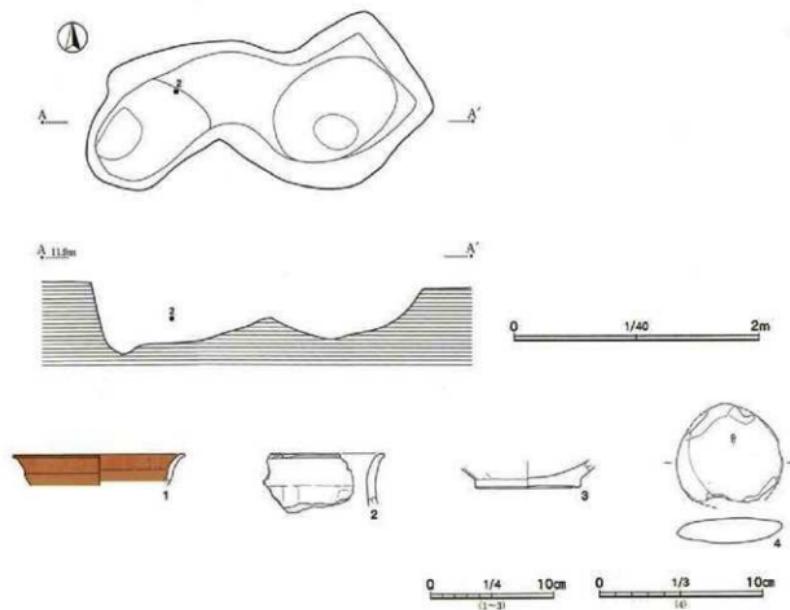
4 土坑

BSK-6 (第92図)

BSI-2の北西コーナー部床面で検出した土坑である。BSI-2に切られるが、出土遺物もなく、機能や詳しい時期等明らかでない。



第92図 BSK-6



第93図 BSE-1 と出土遺物

BSE-1 (第93図、図版47・52)

調査区の南端で検出された土坑である。2つの土坑が繋がったような形状で、検出面からの深さは深い方で約0.6mである。周辺は岩盤が露出しており、調査時には水が湧き出る状況等から井戸と判断しSEの番号を付したが、井戸であったかどうか確認はない。

図示した遺物は4点である。1～3は土師器で、1は杯、2・3は壺の破片とみられる。4は土製円板であるが、他に比べて厚めである。また、穿孔があるが貫通しておらず、位置も中心ではない。

5 遺構外出土遺物 (第94図、図版44・47・52)

ここでは、遺構に伴わずにB区内で出土した、古墳時代～奈良・平安時代に比定される遺物を図示する。ただし、遺構覆土から出土していてもその遺構に伴わないと判断されるものを含む。

1～5は土師器である。1は杯である。底部は小さいが平底である。2は脚部の可能性もあるが、器厚が薄いことなどから杯のような器形と考えた。比較的粗雑なつくりであることから、ミニチュアなどの上製品の可能性もある。3は胴部に大きな欠損部があるが、意識的にあけられた可能性がある。4は口縁部がほぼ直立し、口唇部はやや稜をもって内傾する。焼と考えられる。内外面ミガキによって丁寧に仕上げられるが、現状では赤彩は確認できない。5は小型壺で、底部は上げ底である。外面がやや焼けている。

6～9は須恵器である。6・7は蓋、8・9は壺の破片と考えられる。

10・11は手握上器である。いずれも非常に小型である。

12は土鉢と考えられる。

13～17は土製円板である。17は穿孔の位置が中心ではない。

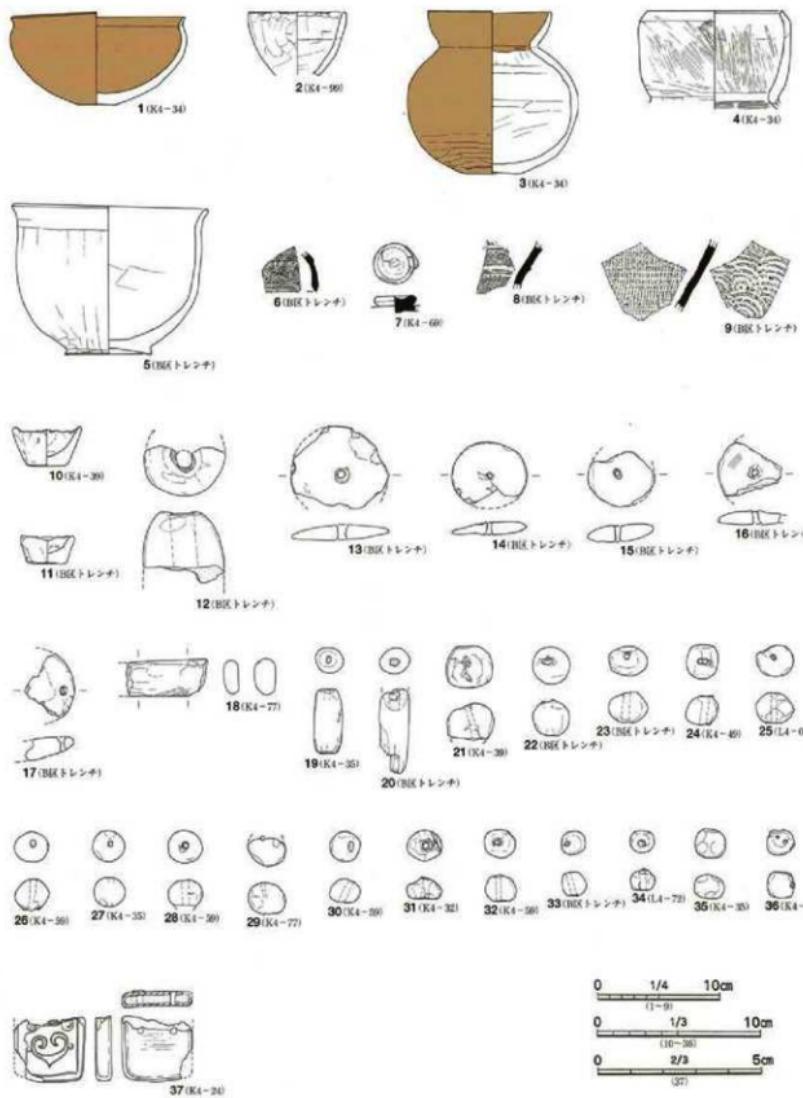
18は断面形が扁平な棒状土製品で、馬先形土製品の可能性がある。

19・20は管玉形土製品である。

21～35は土玉であるが、35は穿孔がない。

36は、いびつで丸味も帶びているが概ね立方体状である。6面あるうちの3面に鋸状の工具で刺突が施され、あたかもサイコロのような土製品である。刺突は、まず対面方向の面に1つずつあり、それらの間に斜めに2つ施される面がある。対面方向の1つずつの刺突は貫通している可能性もあるが、孔が細く、明らかではない。

37は金銅製毛彫帶先金具である。K4-24グリッド、BSB-1のP2東側付近から出土したものである。遺存状態はあまり良くないが、表面には毛彫りの唐草文様が認められ、裏面には擦痕が観察される。鍼は2個遺存している。現存の長さは19.7mm、幅は21.6mm、厚さは4.9mmを測る。



第94図 B区遺構出土 古墳時代の遺物

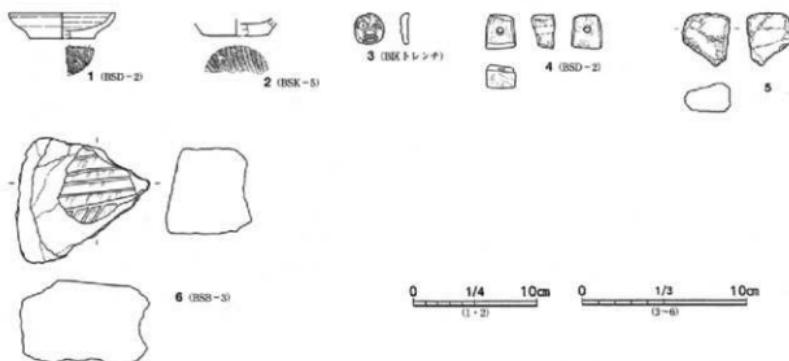
第4節 中世以降の遺物（第95図、図版44・52・54）

ここでは、B区内で出土した、遺構に伴わない中世以降の遺物を図示する。

1・2はカワラケと考えられる。1の底部外面には回転糸切り痕が、2には静止糸切り痕がみられる。

3は泥面子である。

4～6は石器・石製品である。4は凝灰岩製の砥石で、全面ともよく使用されている。5はメノウ製の火打石である。縦線が磨滅している。6は安山岩製の茶臼の破片である。



第95図 B区遺構外出土 中世以降の遺物

注1 発掘調査終了後、調査担当者によってBSD-2を中心とする調査概要が報告されたものである。

城田義友・吉野健一 1998「安房の古墳時代祭祀－館山市東田遺跡の事例－」『研究連絡誌』第53号 財団法人千葉県文化財センター

第4章 C区

第1節 概要

C区では、堅穴住居跡6軒（弥生時代1・古墳時代5）、溝状遺構15条（弥生時代5・古墳時代8、中・近世以降2）、土坑8基（中・近世以降）が検出された。以下、これらを時代ごとに報告する。

第2節 弥生時代以前の遺構と遺物

1 堅穴住居跡

CSD-7（第97図）

調査区北東部で検出された堅穴住居跡である。後世の削平により、主柱穴とみられる比較的しっかりしたビットが4か所、梯子穴とみられるビットが1か所、貯蔵穴とみられるビットが1か所のみ検出された。貯蔵穴とみられるビットから、図示はしないがいずれも弥生時代後期に比定される遺物が若干出土したことから、プランは小判形ないし卵形を呈する弥生時代後期の堅穴住居跡と推定できる。貯蔵穴の覆土は、粘性がやや強くしまりがややある黒褐色粘土質（10YR-3/1）の単層で、灰黄色粒子（2mm～4mm大）、灰白色粒子（1mm～3mm大）を少量、炭化粒（1mm～2mm大）、焼上粒（1mm～2mm大）を僅量含んでいた。主柱穴、梯子穴とみられるビットの覆土も同様だが、しまりがやや弱い。炉は検出されなかったが、恐らく遺構の南寄りに位置し、重複する溝状遺構などに切られたものと考えられる。なお、重複する溝状遺構CSD-13は弥生時代後期の所産と考えられるが、当遺構を切っているようである。

2 溝状遺構

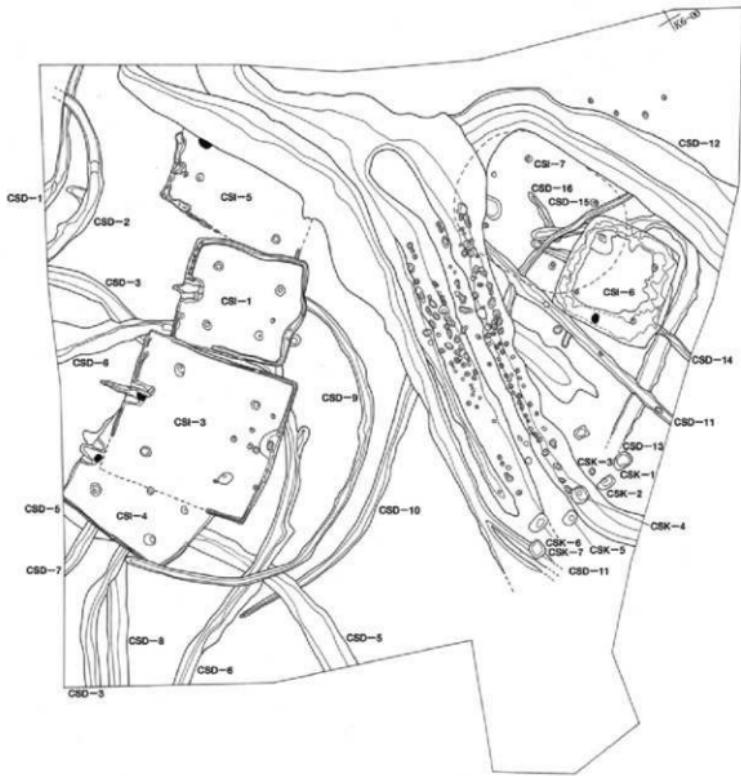
CSD-1（第98図、図版12）

調査区の北西端で、北東～西南方向に検出された溝状遺構である。弧状のCSD-2と重複するが、平面観察からCSD-2より古いと判断される。断面形は逆台形で、覆土はよくしより粘性が比較的強い黒褐色土（10YR-2.5/3）の単層で、黄灰色粒子（2mm～6mm大）、白色微粒子（1mm～2mm大）を中量、橙色粒子（2mm～4mm大）、灰色粒子（2mm～4mm大）を少量、炭化粒（2mm～4mm大）を微量含んでいた。遺構の重複関係から弥生時代後期～古墳時代頃の所産と考えたが、出土遺物はごく少量でしかも小破片であり、時期決定は難しい。

CSD-2（第98図、図版12・56）

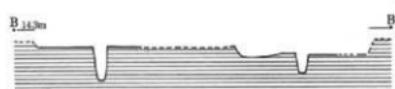
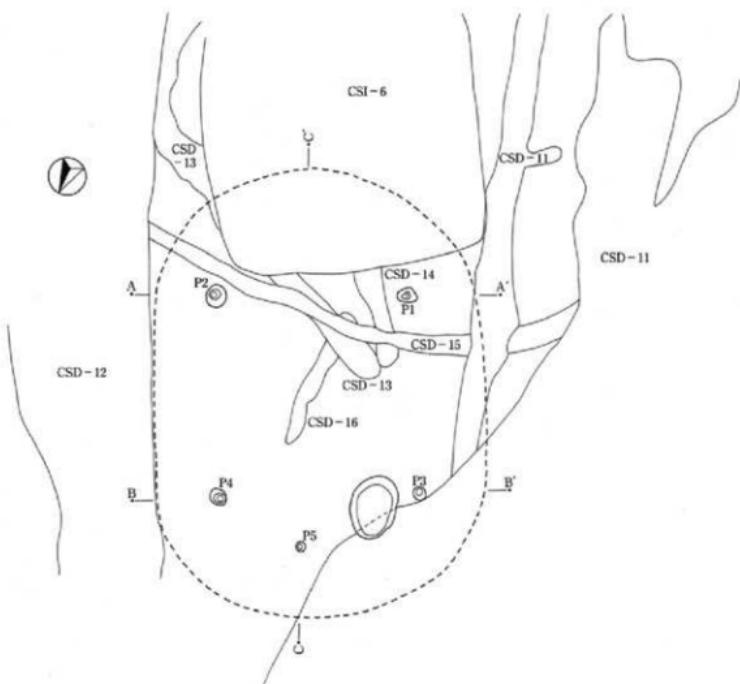
調査区の北西端で、弧状に検出された溝状遺構である。CSD-1と重複するが、平面観察からCSD-1より新しいと判断される。断面形は逆台形で、覆土はよくしより粘性が比較的強い黒褐色土（10YR-3/3）の単層で、黄灰色粒子（2mm～6mm大）を多量、灰色粒子（4mm～6mm大）、白色微粒子（1mm～2mm大）を中量、橙色粒子（2mm～8mm大）、炭化粒（2mm～4mm大）を微量含んでいた。

図示した遺物は1点である。1は壺で、口縁部は内外面ともミガキによって仕上げられる。肩部にはS字状結節文の巡っているのが観察される。内外面赤彩の可能性もあるが、明らかでない。



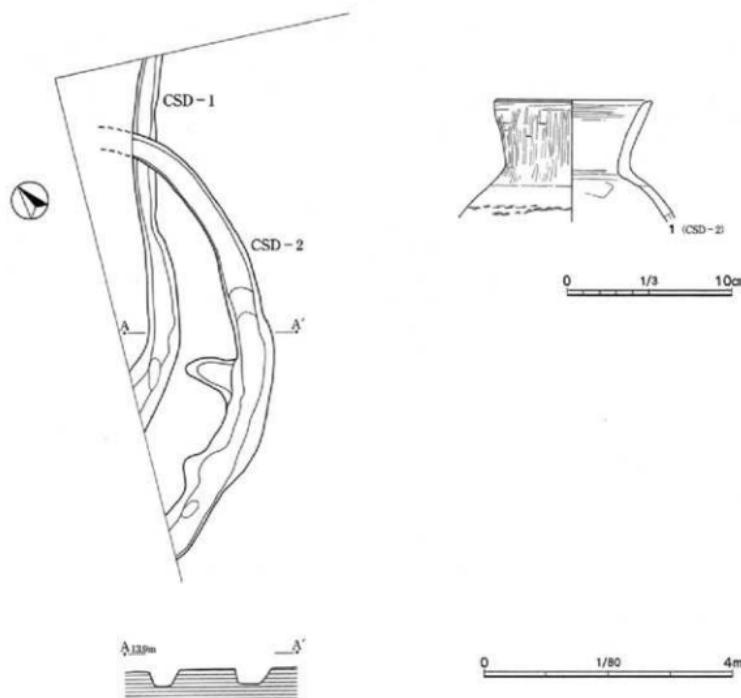
0 1/200 10m

第96図 C区遺構配図



0 1/80 4m

第97圖 CSI - 7

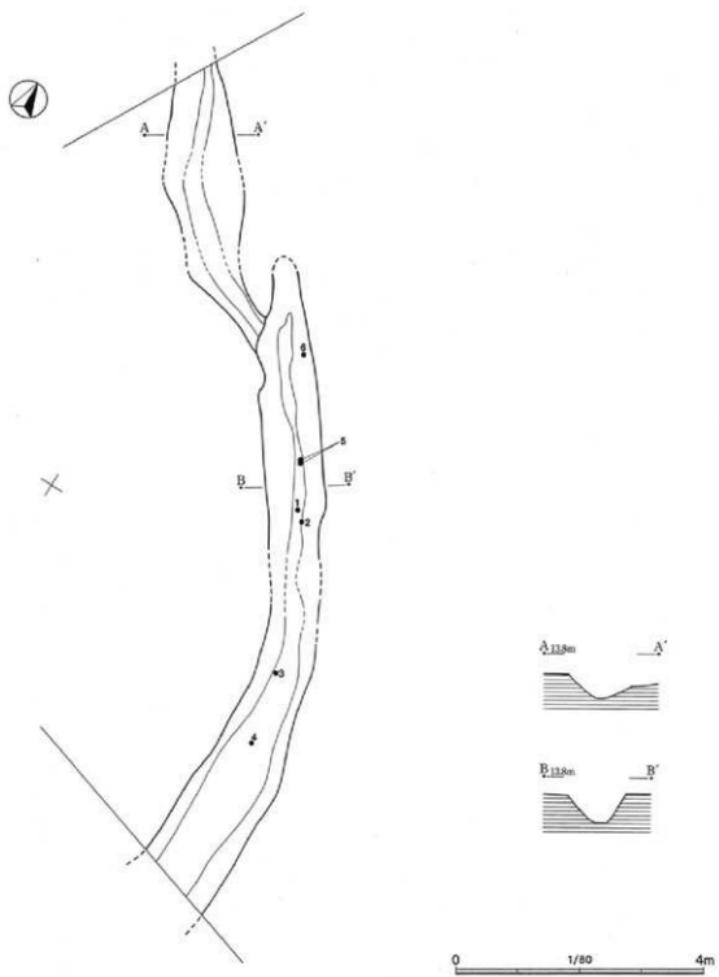


第98図 CSD-1・2と出土遺物

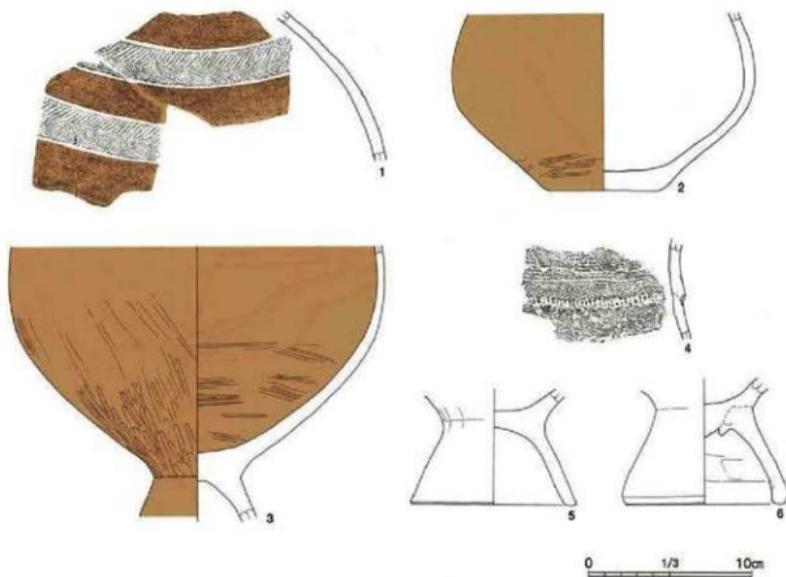
CSD-5 (第99・100図、図版12・56・58)

調査区の南西端で、カーブを描くように北西-南東方向に検出された溝状造構である。出土遺物から、重複する溝状造構CSD-3・CSD-6・CSD-7・CSD-9・CSD-10より古いと考えられる。また、堅穴住居跡CSI-4の床面で検出されており、CSI-4より古いと判断される。幅は約1.3m、断面形はU字形で、検出面からの深さは約0.3m～0.5mである。

図示した遺物は6点である。1・2は壺である。1は沈線で区画された縄文帯がみられ、無文部は赤彩される。2は遺存部分には文様はみられない。3は内外面赤彩されているとみられ、高杯と考えられる。4は輪積み痕が段状に残され、そこに刻み列が巡る。広口壺と考えられる。刻み列の上部は沈線で区画された縄文が施される。無文部は赤彩されている可能性があるが、器面の磨滅が著しく明らかではない。5・6は台付壺の脚台部である。



第99図 CSD-5

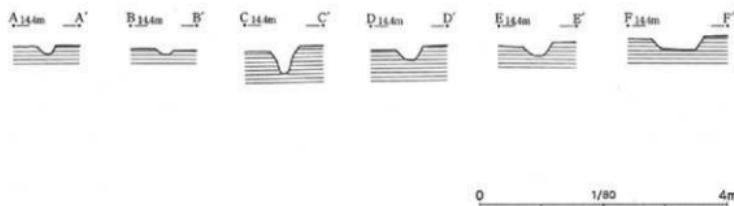
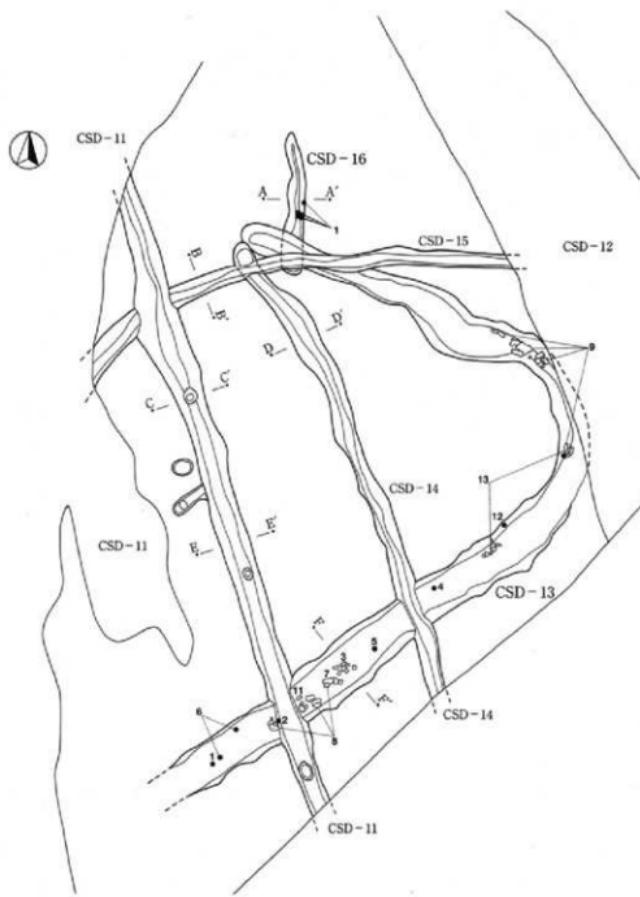


第100図 CSD-5 出土遺物

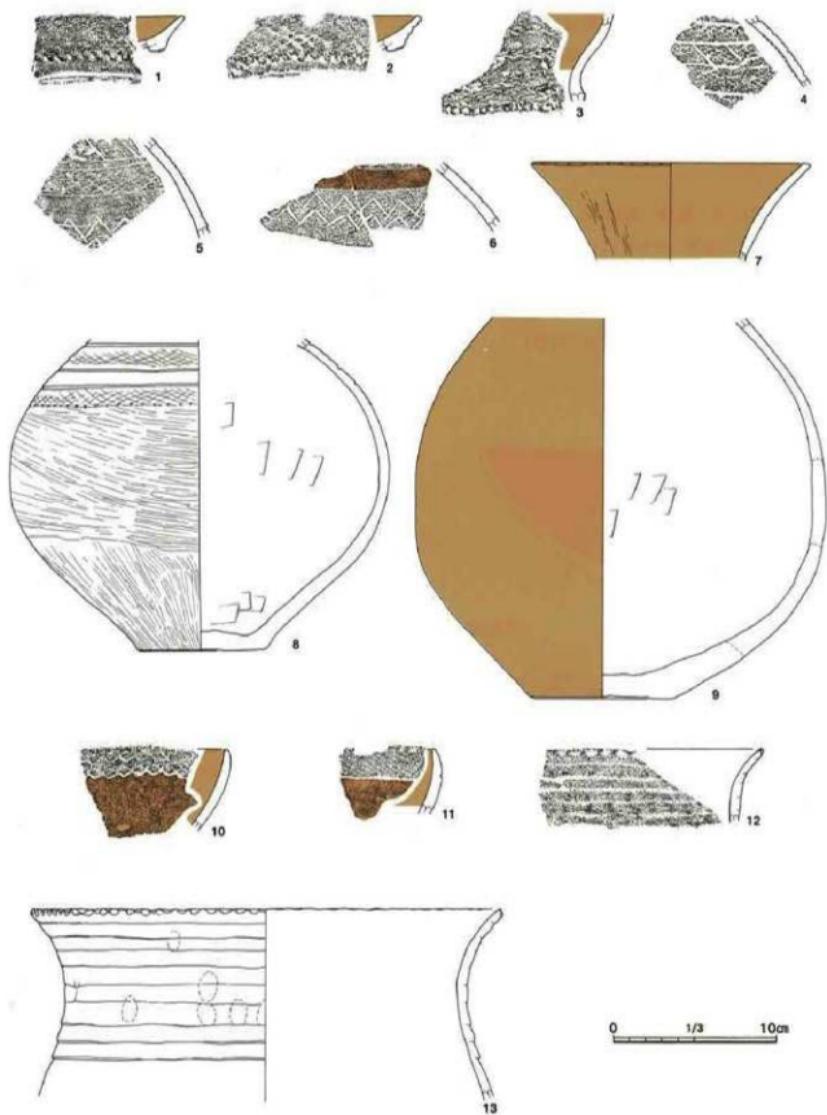
CSD-13 (第101・102図、図版13・56・58)

調査区の東部で、東西軸から北東-南西軸にU字状にカーブして位置する溝状造構である。覆土は、ロームブロックなどを多量に混入する黒褐色土である。断面形は逆台形を呈する。重複するCSI-7を切るが、竪穴住居CSI-6やほかの多数の溝状造構よりは古い。

図示した遺物は13点である。1～9は壺である。1・2は同一個体と考えられる。折返し口縁部にS字状結節文が施され、端部に浅い刻み列が巡る。3はS字状結節文が施される。遺存部下端は刻み列が巡っている。4は沈線で区画された網目状燃系文が施される。5・6は沈線で区画されたS字状結節文が施される。7は口唇部のみに網目状燃系文が施されている。8は肩部に文様帯がみられる。網目状燃系文が2段に施されるが、上段のものは上下が沈線で区画されるのに対して、下段のものは上部は沈線で区画されるが、下部は列点状の刺突列によって区画されている。無文部が赤彩されている可能性もあるが、はっきりしない。9は遺存部分には文様は認められない。外面の赤彩は底部まで施されていない可能性もある。10・11は鉢で、10の口縁部にはS字状結節文が、11の口縁部には沈線で下端が区画された網目状燃系文がみられる。口唇部はいずれも磨滅して、施文の有無は明らかでない。12・13は輪積み痕を残す壺である。



第101図 CSD-13・16



第102図 CSD-13出土遺物

CSD-16 (第101・103図、図版56)

調査区の東部で、南北方向に検出された溝状遺構である。重複する溝状遺構よりは古く、堅穴住居CSI-7より新しいと判断される。幅は約0.3m、断面形はU字形で、検出面からの深さは約0.2mである。

図示した遺物は1点である。1は鉢で、口縁部と口唇部に網目状撲糸文が施文される。内外面とも無文部は赤彩される。

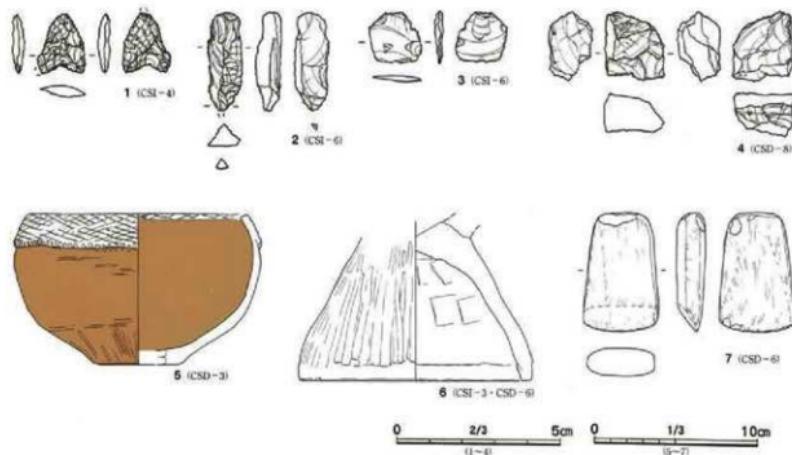
3 遺構外出土遺物 (第104図、図版56・59)

ここでは、遺構に伴わずにC区内で出土した、弥生時代以前に比定される遺物を図示する。ただし、遺構覆土から出土していてもその遺構に伴わないと判断されるものを含む。

1~4は縄文時代の石器と考えられる。1は黒曜石製の石錐である。左側の基部は僅かに折損する。2はチャート製で、先端部を僅かに折損しているが、石錐の可能性がある。3・4は黒曜石製で、3は剥片、4は石核である。



第103図 CSD-16出土遺物



第104図 C区遺構外出土 弥生時代以前の遺物

5・6は弥生土器で、5は無頸壺である。折返しの口縁部及び口唇部に網目状撚糸文を施し、折返し端部には刻み列を施す。6は高杯の脚部と考えられる。外面は丁寧なミガキによって仕上げられており、現状でははっきりしないが赤彩されている可能性もある。7は扁平片刃石斧である。凝灰岩又は緑色凝灰岩製とみられる。刃部はやや潰れているが、使用によるとみられる。

第3節 古墳時代の遺構と遺物

1 壘穴住居跡

CSI-1 (第105~107図、図版10・56・60)

調査区中央、やや西寄りで検出された壘穴住居跡である。プランはほぼ正方形を呈し、規模は南北軸4.8m、東西軸4.6mである。主軸方位はN-42°-Wである。西コーナー部でCSI-3と、北東壁でCSI-5とそれぞれ僅かに重複するようである。新旧関係は、明確ではないがCSI-3とは当遺構の方が古いようである。検出面からの深さは約0.1mで、壁は垂直に近い角度で立ち上がる。覆土は単層で、黒褐色土(5YR-2/1~5YR-2/2)であった。床面はほぼ平坦で中央部に硬化面が認められた。硬化面は黄褐色~暗黄褐色を呈し、混入物の多い土で、よくしまっている。硬化面以外の床面は黒褐色~暗褐色の同質の土である。壁溝がほぼ全周しておらず、壁溝の幅は約0.3m、床面からの深さは約0.1mを測る。壁柱穴とみられるビットも、部分的に検出されている。床面からは上柱穴とみられるビットが1か所、梯子穴とみられるビットが1か所検出された。

北西壁中央部には、カマドが1基検出された。カマドの遺存状態はあまり良くなく、火床部は検出されなかったが、袖材として砂石の切石が使用されているのが確認された。また、砂岩は焚口の閉塞石としても使用されていたようである。

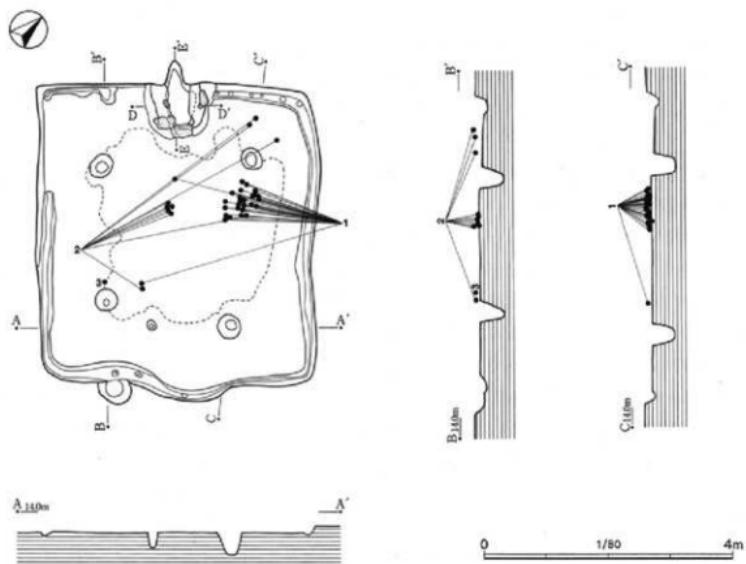
図示した遺物は5点である。1・2は上飾器である。1は甌である。底部端部はほとんど破損している。2は甌と考えられる。

3は手捏土器で口縁部を僅かに欠損する、非常に小型である。

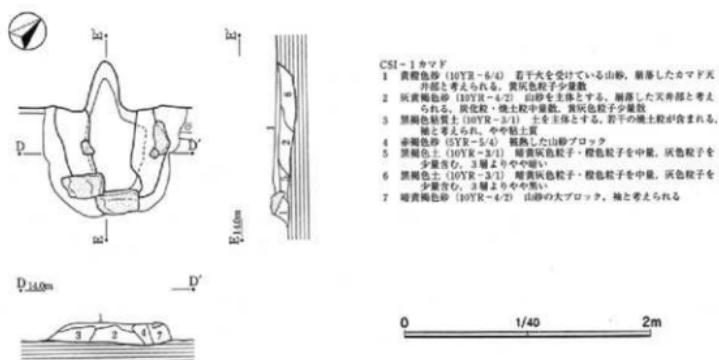
4・5は凝灰質砂岩製の凹石である。いずれも非常に脆い石材である。

CSI-3 (第108~110図、図版11・56・57)

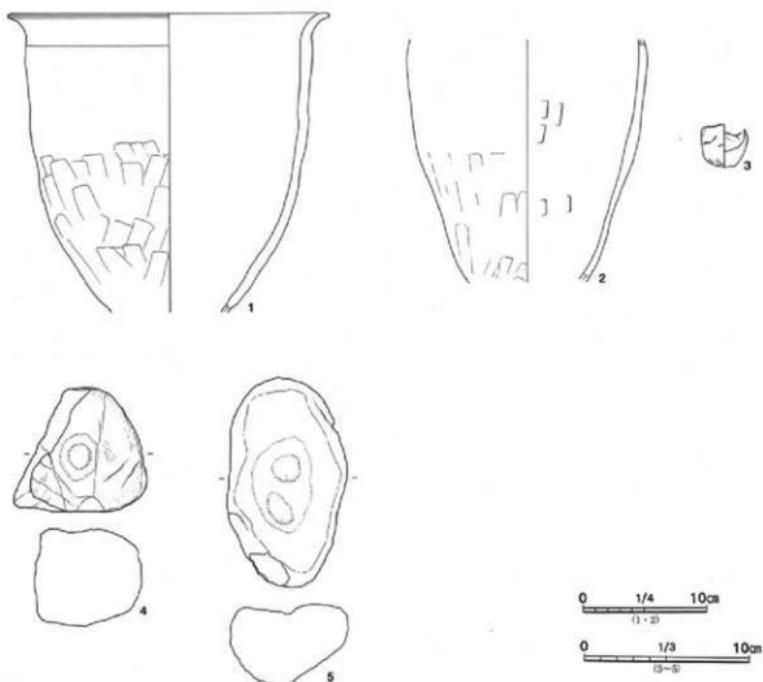
調査区中央、やや西寄りで検出された壘穴住居跡である。プランは正方形を呈し、規模は南北軸6.6m、東西軸6.2mである。主軸方位はN-50°-Wである。北東壁で僅かに重複するCSI-1とは当遺構の方が新しいようである。また、西部で重複するCSI-4よりは当遺構の方が新しい。また、重複する溝状遺構は、全て床面で検出されたもので、当遺構より古いものと考えられる。なお、当遺構の周囲で風を描くように位置するCSD-9は、当遺構の周堤帯である可能性がある。検出面からの深さは0.1m程度で、壁は垂直に近い角度で立ち上がる。覆土は黒褐色土(5YR-2/1~5YR-2/2)の単層で、黄灰色粒子(2mm~4mm大)、炭化粒(2mm~10mm大)を中心、黄橙色粒子(1mm~3mm大)、焼土粒(2mm~3mm大)を少量、灰白色粒子(1mm~2mm大)微量含んでいた。床面はほぼ平坦で、やや東寄りに、あまりしまりはないものの硬化面が認められた。床面は暗黄褐色を呈する混入物の多い土で、硬化部分の色調は周囲よりやや明るい。壁溝が西部を除きほぼ全周しており、壁溝の幅は約0.2m、床面からの深さは約0.1mを測る。柱穴とみられるビットも、部分的に検出されている。床面からは主柱穴とみられるビットが4か所のほか数か所ビット



第105図 CSI-1



第106図 CSI-1 カマド



第107図 CSI-1 出土遺物

が検出されたが、そのうちの1か所が梯子穴になるとみられる。床面付近からは炭化材が多く出土し、焼失住居と考えられる。

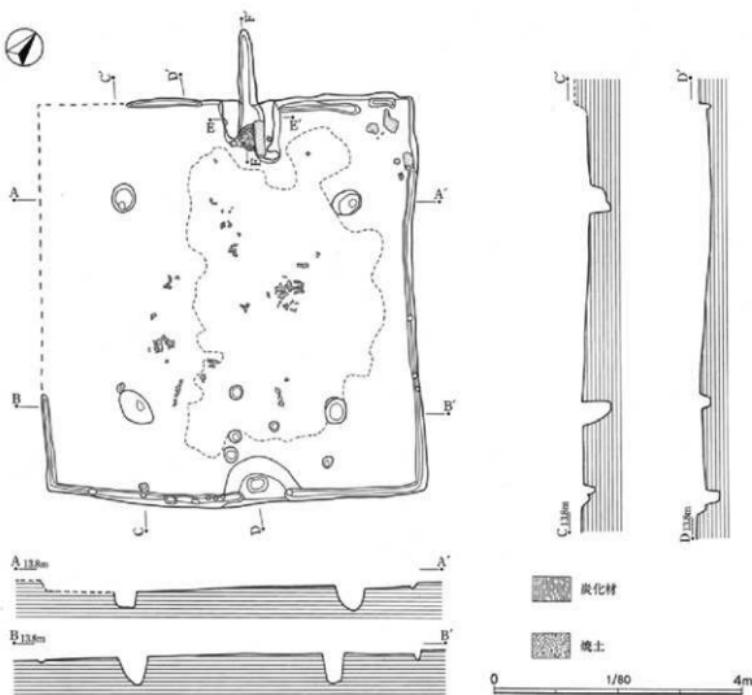
北西壁中央部に、長い煙道部をもつカマドが1基検出された。袖材として砂石の切石が使用されている。遺物はカマドの西側にまとまって出土しており、その周辺に貯蔵穴があった可能性もある。

図示した遺物は5点である。1～4は土師器である。1・2は杯である。2は、縁は明瞭ではないが、底部は平底である。内外面赤彩の可能性もあるが、器面が磨耗しており、明らかでない。3・4は壺である。

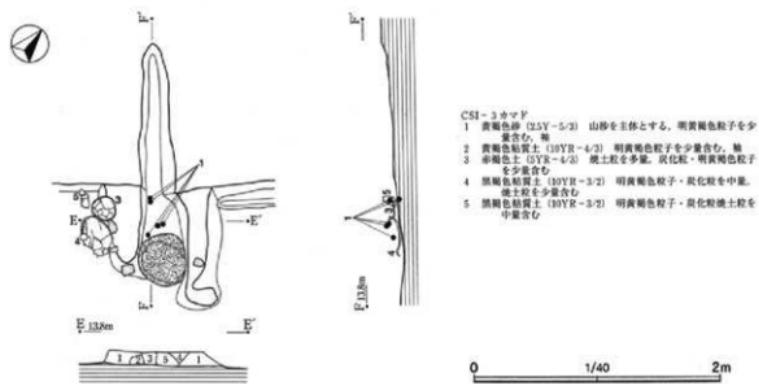
5は土製支脚である。図裏面がやや平坦になっている。

CSI-4 (第111・112図、図版57)

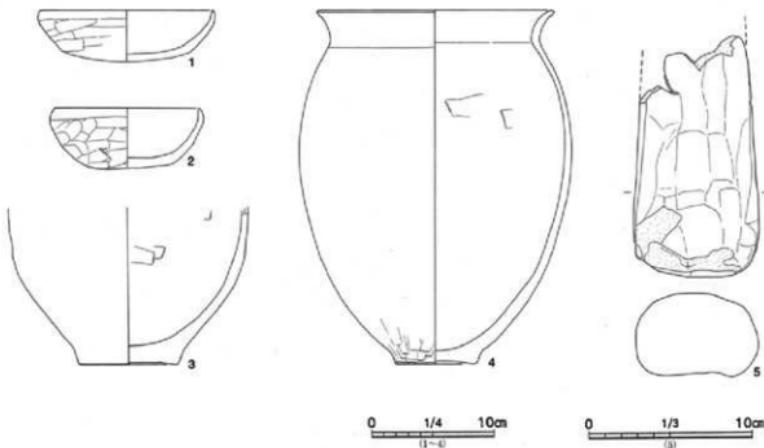
調査区西端で検出された堅穴住居跡である。プランはほぼ正方形を呈し、規模は南北軸5.9m、東西軸5.7mである。主軸方位はN-69°-Wである。東半分がCSI-3と重複しているが、CSI-3のほうが新しい。また、重複している溝状構造は、全て床面で検出したもので、当構造より古いものと考えられる。なお、



第108図 CSI-3



第109図 CSI-3 カマド



第110図 CSI-3 出土遺物

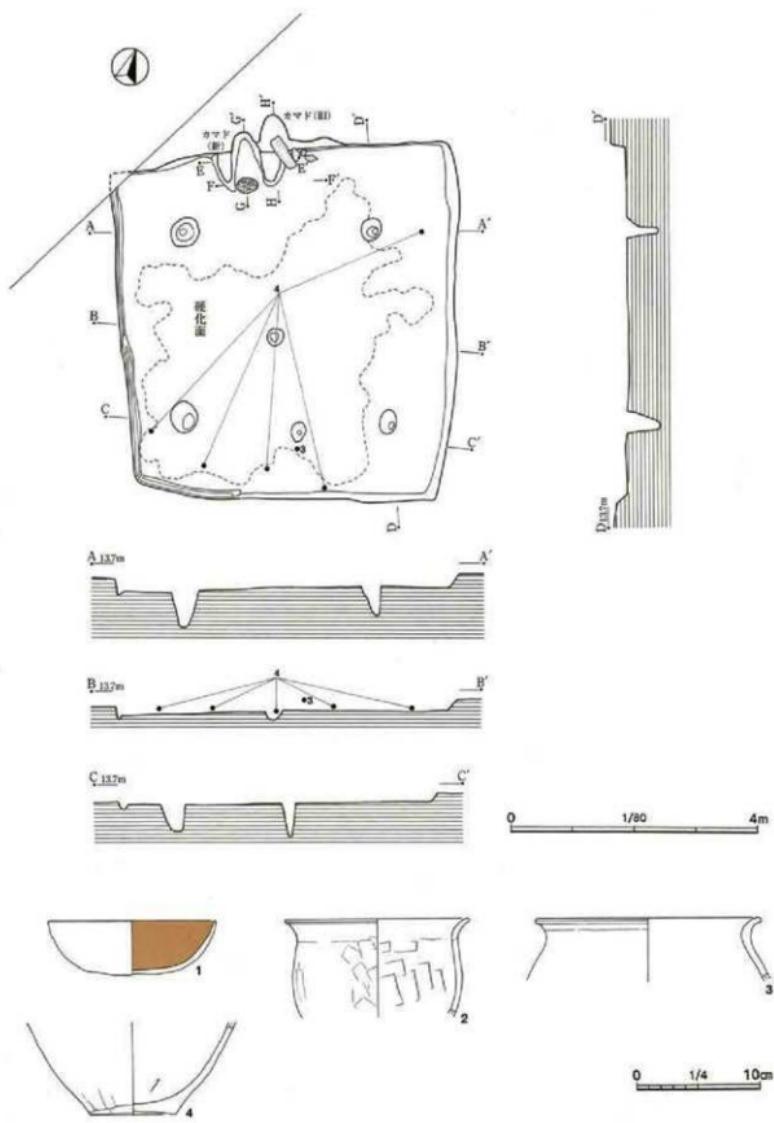
当遺構の周囲で弧を描くように位置するCSD-6は、当遺構の周堤帶である可能性がある。検出面からの深さは約0.2mで、壁は比較的緩やかな角度で立ち上がる。覆土は黒褐色土(5YR-2/1)の単層で、黄灰色粒子(2mm~4mm大)・炭化粒(2mm~10mm大)を中量、黄橙色粒子(1mm~3mm大)を少量、灰白色粒子(1mm~2mm大)を微量、焼土粒(2mm~3mm大)を僅量含んでいた。床面はほぼ平坦で中央部に硬化面が認められた。硬化面は黒褐色を呈する混入物の多い土である。壁溝は南西壁から南コーナー部にかけてのみ検出され、壁溝の幅は約0.1m、床面からの深さは約0.1mを測る。壁柱穴とみられるビットは検出されなかった。床面からは主柱穴とみられるビットが4か所、梯子穴とみられるビットが1か所のほか、中央に性格不明のビットが1か所検出された。

カマドは北西壁中央部に2基、新旧の時期差をもって検出された。いずれもカマドの遺存状態はあまり良くない。また、袖材として砂石の切石が使用されたとみられる。

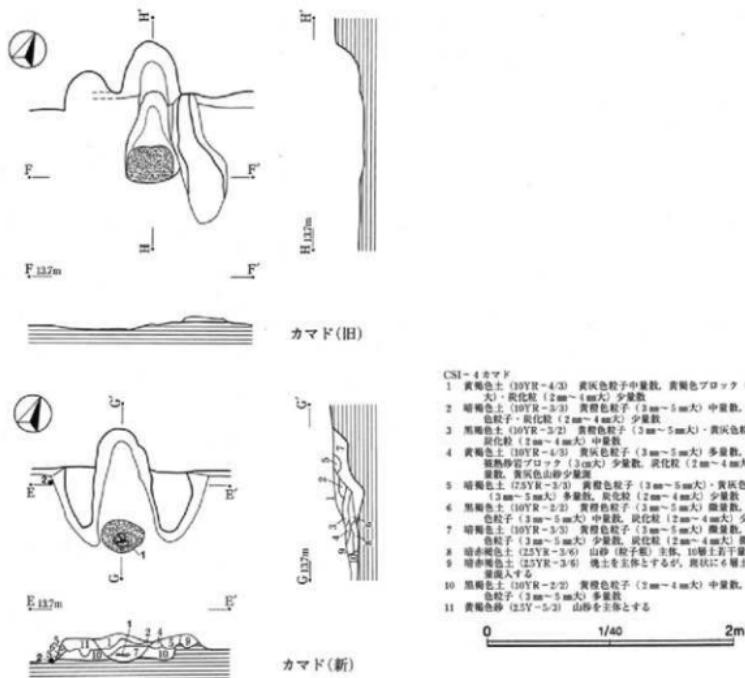
図示した遺物は4点である。いずれも土師器で、1は杯である。器面が磨耗しており明らかでないが、外面も赤彩されている可能性がある。2は小型甕である。3・4は甕である。

CSI-5 (第113図)

調査区北西部で検出された竪穴住居跡である。東側約半分をCSD-11に切られ、遺存部分もほとんど削平を受け、壁周溝と柱穴、カマド火床部のみを検出したものである。プランは、正方形ないし方形を呈すると推定される。主軸方位はN-56°-Wである。南コーナー部付近でCSI-1と重複するようだが、新旧関係は明らかでない。規模は推定で南北軸6.1mである。床面は遺存していないが、壁溝は西コーナー部付近と南コーナー部付近で検出され、検出面からの壁溝の深さは約0.1mである。壁柱穴とみられるビットも検出された。



第111図 CSI-4 と出土遺物



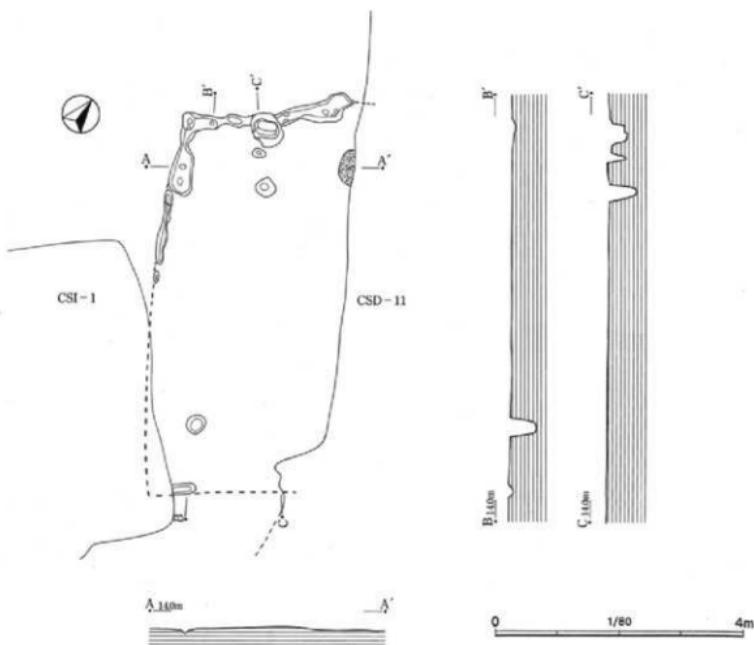
第112図 CSI-4 カマド

北西壁中央部付近に焼土が検出され、カマドがあったと推定されるが、袖は検出できなかった。遺物は出土していない。

CSI-6 (第114図、図版12・58~60)

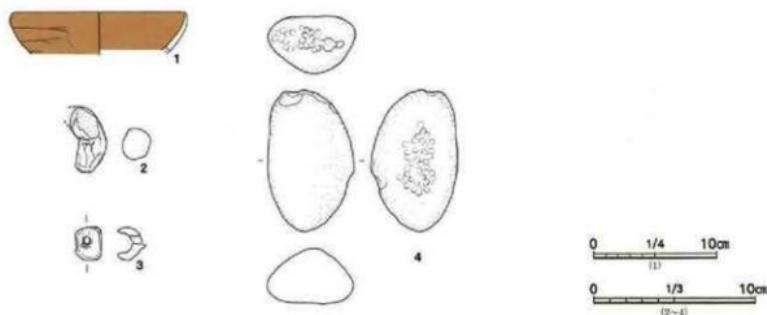
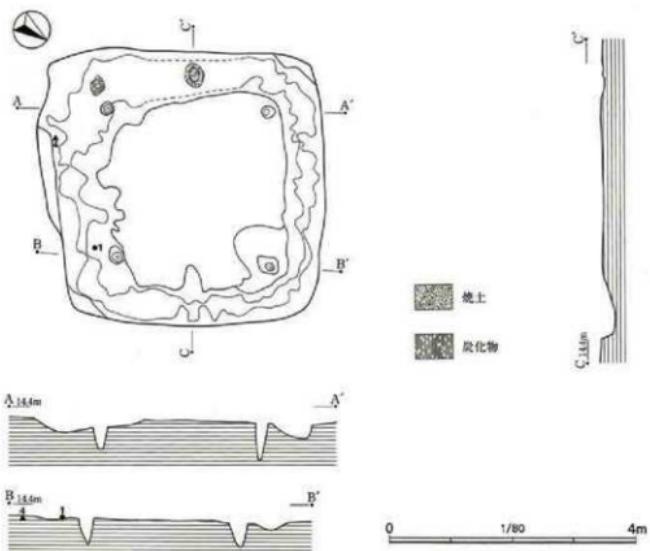
調査区東端で検出された竪穴住居跡である。後世の削平により、幅広の壁溝と柱穴、カマド火床部のみが検出された。プランはほぼ正方形を呈し、規模は南北軸4.6m、東西軸4.5mである。主軸方位はN-123°-Wである。重複する溝状遺構よりも新しいとみられる。竪穴住居の覆土は遺存しないが、壁溝の覆土は、粘性が強くしまりもやや強い黒色粘質土 (7.5YR-2/1) の単層で、灰黄色粒子 (2mm~4mm大)・炭化粒 (4mm~8mm大) を少量、焼土粒 (1mm~2mm大) を微量含んでいた。床面は遺存していない。壁溝は全周検出され、壁溝の幅は約1m、検出面からの深さは約0.2mを測る。壁柱穴とみられるビットは検出されなかつたが、主柱穴とみられるビットが4か所検出された。

カマドは南西壁中央部に1基あったと推定される。遺物は若干量出土したが、当遺構に伴うものは明らかでない。



第113図 CSI-5

図示した遺物は4点である。1は土師器杯の破片である。2・3は土製品で、2は勾玉形土製品と考えられる。3は完形で、長さ3.0cm、幅1.5cm、厚さ0.5cmほどの板状粘土を、丸味をもたせて半円状に曲げ、その内側から外側に向かって焼成前穿孔を施した土製品である。赤彩されている可能性もある。4は安山岩製の敲石である。

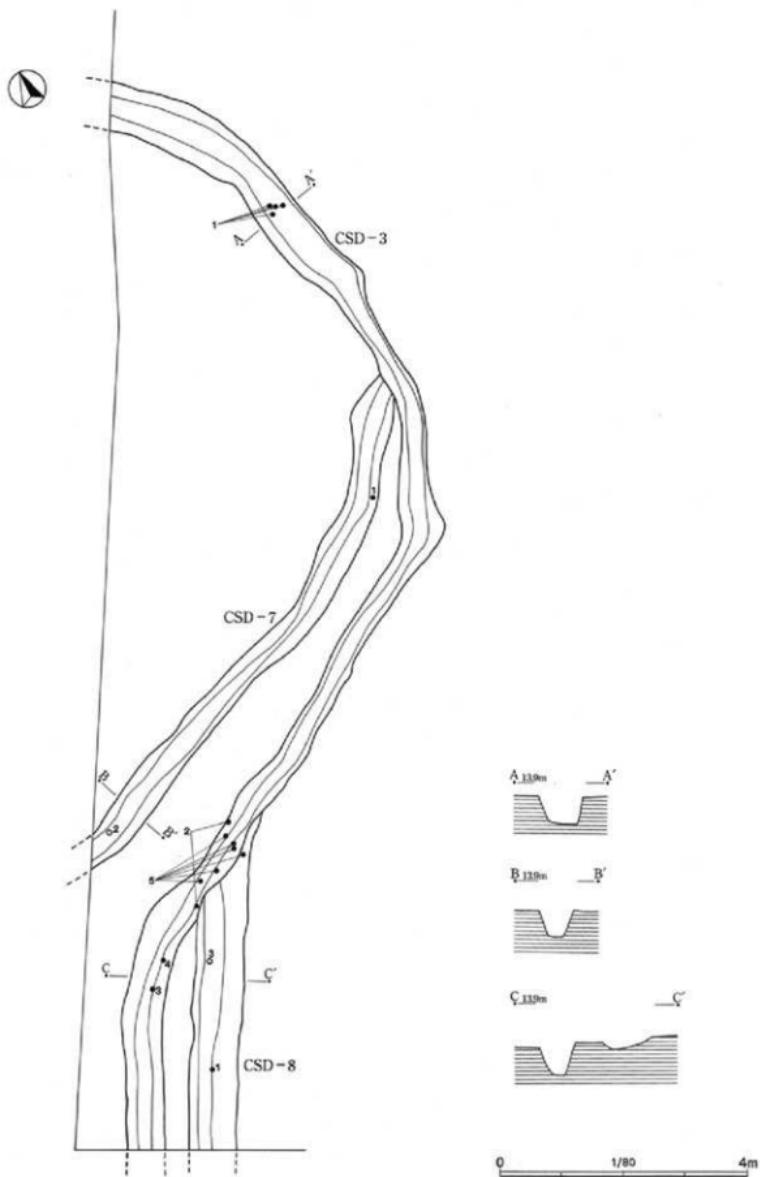


第114図 CSI-6と出土遺物

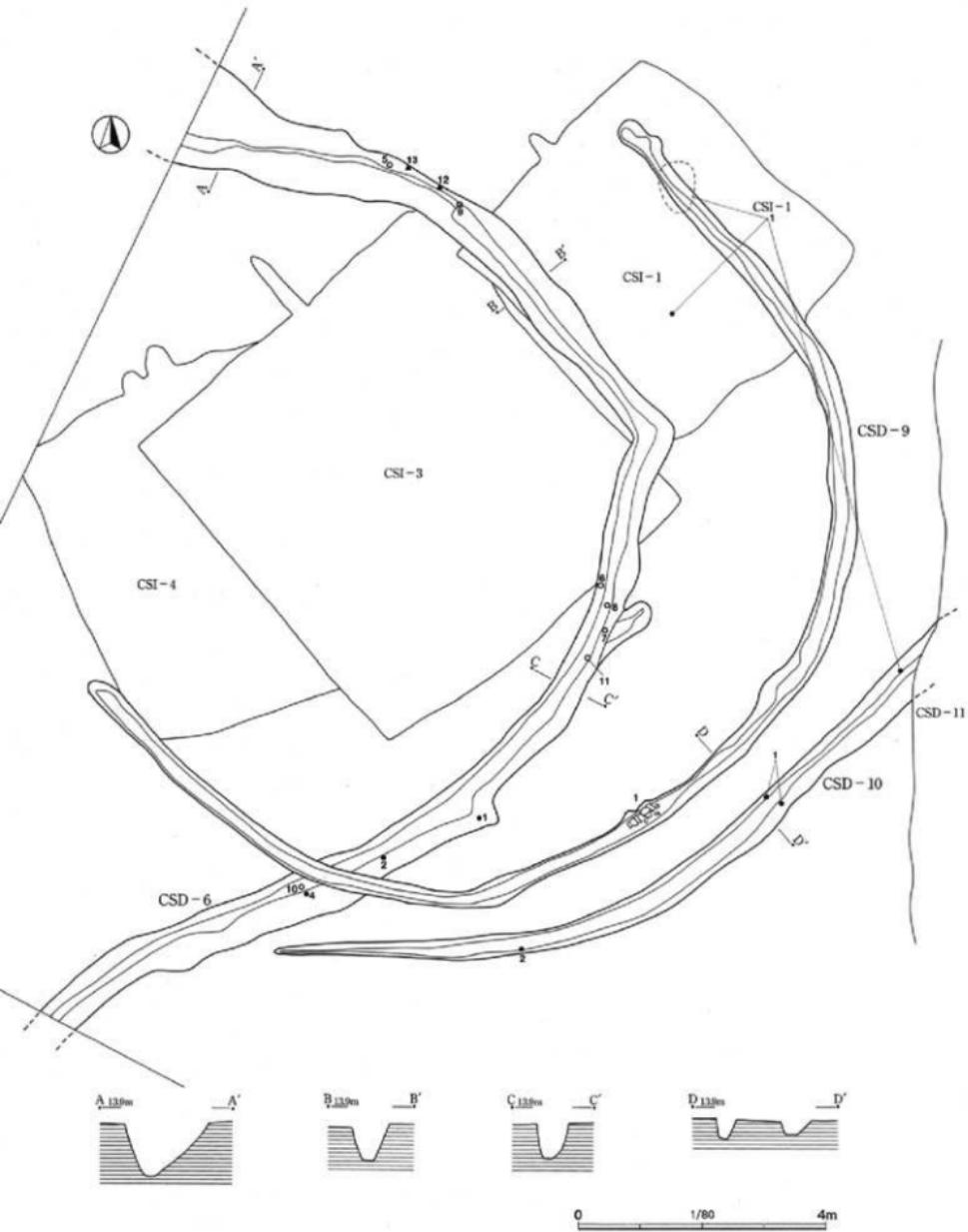
2 溝状遺構

CSD-3 (第115・117図、図版57・60)

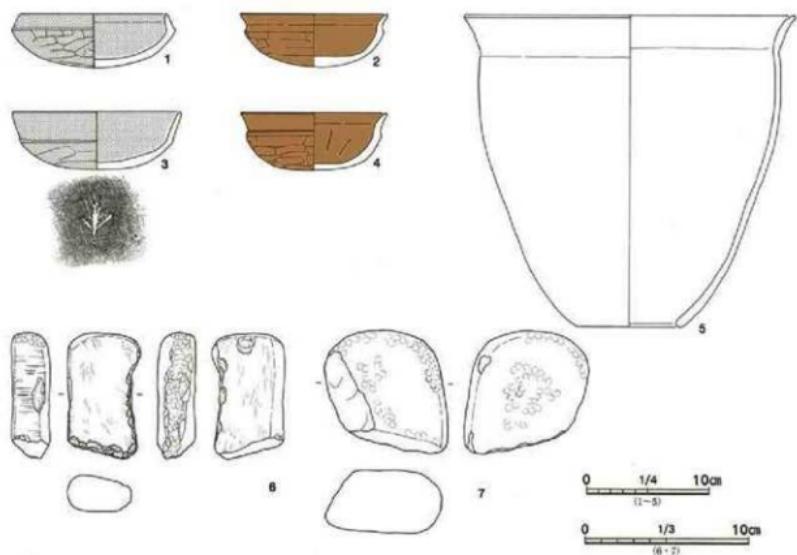
調査区の西部で、カーブを描くように南北方向に検出された溝状遺構である。同じような軸方向でCSD-7やCSD-8と重複するが、新旧関係は明らかでない。なお、CSI-3やCSI-4などの堅穴住居跡の床面で検出されており、それらの堅穴住居跡よりは古いと判断される。幅は約0.7m、断面形は逆台形で、検出面からの深さは約0.3mである。



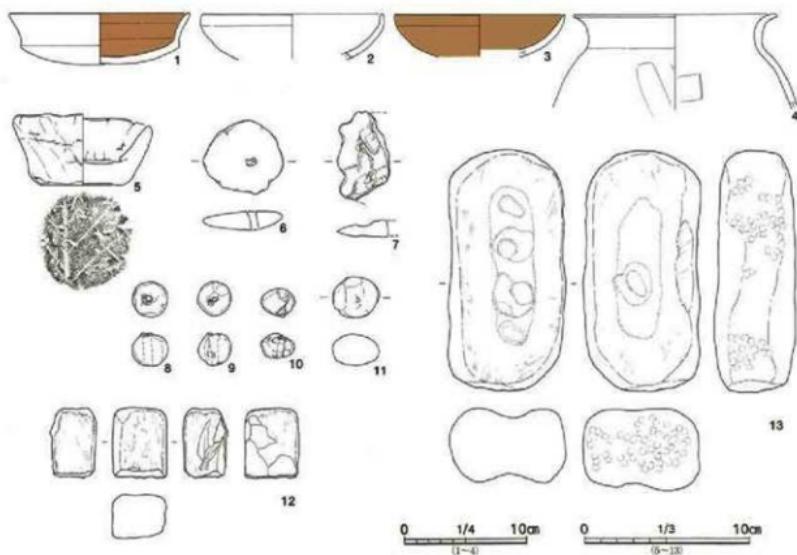
第115図 CSD-3・7・8



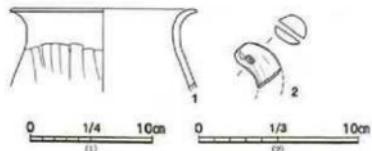
第116図 CSD-6・9・10



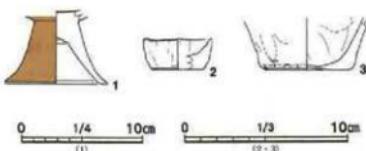
第117図 CSD-3 出土遺物



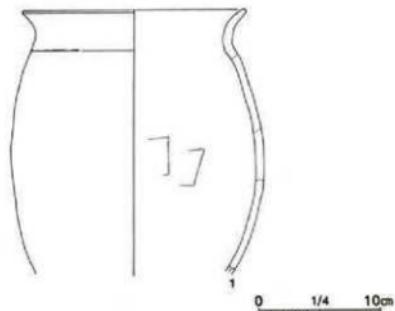
第118図 CSD-6 出土遺物



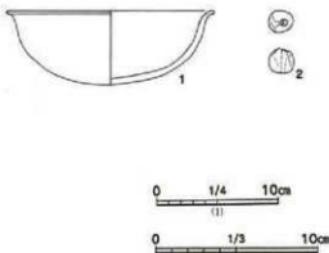
第119図 CSD-7出土遺物



第120図 CSD-8出土遺物



第121図 CSD-9出土遺物



第122図 CSD-10出土遺物

図示した遺物は7点である。1～5は土師器で、1～4は杯である。1・3には内外面黒色処理が施されており、3は漆仕上げの可能性もある。3の底部外面には木葉痕が残されている。2・4は内外面赤彩される。5は瓶である。6・7は石器である。6は擦痕が認められるため磨石と考えたが、右側縁から下端にかけて、敲打痕や剥離痕が顕著に認められる。また、左側面には横方向に擦痕が観察され、緊縛されていた可能性もある。7は安山岩製の敲石である。

CSD-6 (第116・118図、図版13・57～60)

調査区の西部で、カーブを描いて検出された溝状遺構である。重複する溝状遺構CSD-3・CSD-5・CSD-9との新旧関係は明らかでないが、竪穴住居CSI-1・CSI-3の床面で検出されており、それらの竪穴住居よりは古いと判断される。CSI-4の周堤帯の可能性がある。幅は約0.5m～1.3m、断面形はU字形で、検出面からの深さは約0.5m～0.8mである。

図示した遺物は13点である。1～4は土師器で、1～3は杯、4は壺である。5は輪積みによって成形されているところから粗造土器と考えた。底部外面には木葉痕が残されている。胎土に3mm～10mmの大粒なものを含む赤色粒子や1mm～3mm大の黄白色粒子を多量に含むのが特徴的である。6は土製円板である。7も土製円板状であるが、縁辺が数か所外側につまみ出されているほか、中央部付近が指でつまみ上げられており、鉈鏡をかたどった鏡形土製品の可能性がある。8～11は土玉であるが、11は穿孔がみられない。12・13は石器・石製品で、12は砥石である。13は凹石と考えられるが、側面に敲打痕もみられる。

CSD-7 (第115・119図、図版13・58・59)

調査区の西部で、やや蛇行しながら北東-南西方向に検出された溝状遺構である。同じような軸方向でCSD-3と重複するが、新旧関係は明らかでない。なお、CSI-3やCSI-4などの堅穴住居跡の床面で検出されており、それらの堅穴住居跡よりは古いと判断される。幅は約0.5m、断面形は逆台形で、検出面からの深さは約0.4mである。

図示した遺物は2点である。1は土師器壺の破片である。2は勾玉形土製品と考えられる。

CSD-8 (第115・120図、図版13・57)

調査区の南西端で、北東-南西方向に検出された溝状遺構である。同じような軸方向でCSD-3と重複するが、新旧関係は明らかでない。幅は約0.8m、断面形は緩いU字形で、検出面からの深さは約0.15mである。

図示した遺物は3点である。1は土師器高杯の脚部である。器面の磨耗が著しい。2・3は手握土器である。3は全体の40%程度の還存度であるが、底部中央部は器厚が非常に薄い。

CSD-9 (第116・121図、図版57)

調査区の西部で、カーブを描いて検出された溝状遺構である。重複する溝状遺構CSD-5・CSD-6との新旧関係は明らかでないが、堅穴住居跡CSI-1の床面で検出されており、CSI-1よりは古いと判断される。ただし、CSI-4の南コーナー部は当遺構が切っている。CSI-3の周堤帯の可能性がある。幅は約0.3m～0.4m、断面形は逆台形で、検出面からの深さは約0.3mである。

図示した遺物は1点である。1は土師器壺である。

CSD-10 (第116・122図、図版58・59)

調査区の中央部で、ややカーブを描きながら北東-南西方向に検出された溝状遺構である。重複する溝状遺構CSD-5との新旧関係は明らかでないが、CSD-11よりは古いと判断される。幅は約0.5mで、西へ行くほど先細りとなる。断面形は逆台形で、検出面からの深さは約0.25mである。

図示した遺物は2点である。1は土師器杯の破片で、磨耗が著しい。赤彩の有無ははつきりしない。2は土玉である。

CSD-14 (第101図)

調査区の東部で、北西-南東方向に検出された溝状遺構である。重複する溝状遺構CSD-15との新旧関係は明らかでないが、CSD-13よりは新しいと判断される。また、堅穴住居跡CSI-6よりは古いが、CSI-7よりは新しい。幅は約0.4m、断面形は逆台形で、検出面からの深さは約0.2mである。覆土は混人物の多い黒褐色土であった。遺物は土師器の小破片が僅かに出土したのみである。

CSD-15 (第101図)

調査区の東部で、ややカーブを描くように東西方向に検出された溝状遺構である。重複する溝状遺構との新旧関係は明らかでなく、CSD-13同様佐生時代後期に遡る可能性もある。豊穴住居跡CST-6より多く、CSI-7より新しいと判断される。幅は約0.3m、断面形は逆台形で、検出面からの深さは約0.1mである。遺物は土師器の小破片が僅かに出土したのみである。

第4節 中世以降

1 溝状遺構

CSD-11 (第96図、図版14)

調査区のほぼ中央部を、南北に縱断するように検出された溝状遺構である。南端は削平され、明らかでない。ほぼ同方向で数条に枝分かれしたり、新旧関係をもって重複している部分もある。また、底面が平坦ではなく、ピット状に細かい凹凸をもつ部分も認められるが、全体として硬化面が認められたため、道として機能していたものと考えることができる。重複する遺構を全て切っている。幅は一定しないが、検出面からの深さは約0.3mである。遺物は土師器等の小破片が僅かに出土したのみで、いずれも混入品と考えられる。

CSD-12 (第96図、図版14)

調査区の東部で、やや屈曲しながら概ね北西-南東方向に検出された溝状遺構である。東端で、新旧関係は明らかでないがCSD-11に合流する。幅は約2.5m、断面は西側が深くなり、検出面からの深さは深い方で約0.2m、浅い方で約0.1mである。遺物は出土していない。

2 土坑

調査区の南部で上坑群が検出された。遺物も無く、詳しい時期や、群として営まれたのか等については明らかでないが、CSD-11を切り、ほぼ同時期に営まれたものとみられる。調査時はそれぞれに遺構番号は付さず「十坑群」としたが、修理時に便宜的にCSK-1~CSK-8の遺構番号を付した。

CSK-1 (第123図)

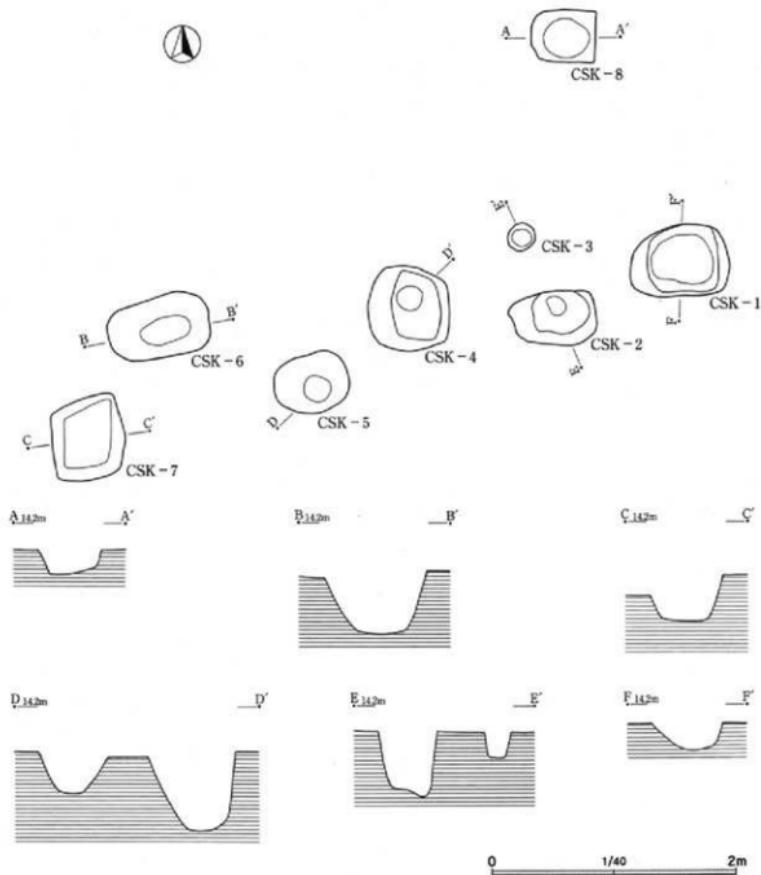
上坑群の中でもっとも東側に位置する。平面形は、長径約1.6m、短軸約1.1mの不整橢円形を呈し、検出面からの深さは約0.5mである。

CSK-2 (第123図)

平面形は長軸1.4m、短軸0.9mの不正形を呈し、検出面からの深さは約1.1mである。

CSK-3 (第123図)

平面形は径約0.4mの円形を呈する。検出面からの深さは約0.4mで、底面はほぼ平坦である。



第123図 CSK-1～8



第124図 C区造構外出土 中世以降の遺物

CSK - 4 (第123図)

平面形は、一辺約1.4mの隅丸正方形を呈する。検出面からの深さは約1.3mである。

CSK - 5 (第123図)

平面形は、長径約1.2m、短径約1.0mの不整楕円形を呈し、検出面からの深さは約0.6mである。

CSK - 6 (第123図)

平面形は、長径約1.7m、短径約1.0mの不整楕円形を呈し、検出面からの深さは約1.0mである。

CSK - 7 (第123図)

土坑群の中で最も西側に位置する。平面形は、一辺約1.3mの隅丸正方形を呈する。検出面からの深さは約0.8mである。

CSK - 8 (第123図)

土坑群の中で最も北側に位置する。平面形は、東側は角をもち方形状であるが、西側は角をなさず、丸みを帯びる。長軸約1.1m、短軸約0.8mを測る。検出面からの深さは約0.4mである。

3 遺構外出土遺物 (第124図、図版59)

ここでは、遺構に伴わずにC区内で出土した、中世以降に比定される遺物を1点図示した。

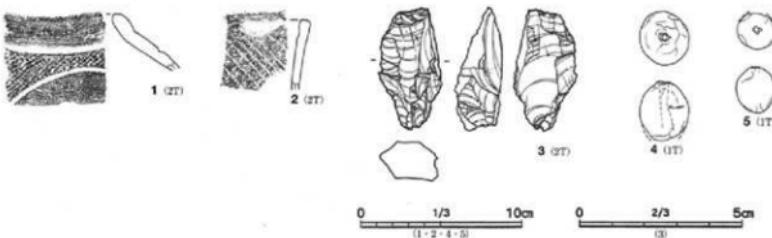
1はチャート製の火打石である。稜線が磨滅している。

第5章 D区

第1節 出土遺物 (第125図、図版60)

D区は、確認調査を行ったが、明確な遺構が検出されなかったため、確認調査で終了した調査区である。トレンチから出土した遺物を5点掲載した。

1・2は縄文土器の破片である。いずれも縄文時代後期に比定されると考えられる。3は黒曜石製で、楔形石器の可能性がある。4・5は土玉である。



第125図 D区出土遺物

第6章 まとめ

第1節 縄文時代～弥生時代

今回の調査区からは、縄文時代の遺構は検出されなかった。縄文時代早期～後期に比定される上器片や石器などの遺物は僅かに出土したが、混入品と考えられる。敲石や凹石といった石器は、弥生時代や古墳時代の遺構廃土から出土しているが、周辺で採取できる石材が多く、転用品ばかりではない可能性も高い。これを踏まえて本報告では、必ずしも縄文時代の遺物とは限定しないで掲載した。

弥生時代とみられる遺構は、ASD-3・BSD-1・BSD-3・BSK-5・CSI-7・CSD-1・CSD-2・CSD-5・CSD-13・CSD-16などがあり、全て弥生時代後期に比定されよう。

これらのうちASD-3は方形周溝墓である。東側が遺存していないが、周溝が全周するタイプのものと考えられる。周辺の仮家塚遺跡や茾野遺跡では、四隅が切れるタイプの方形周溝墓が検出されており、時期は弥生時代中期のものとみられている。東田遺跡のASD-3は、出土遺物からそれよりやや新しいものと考えられるが、やや古手とみられる土器も伴出しており、ASD-3は東田遺跡で検出された弥生時代の遺構の中では、古い方に属する。調査区内では最も標高が低い汐入川に面した場所に立地し、遺存していない部分は川に削り取られていることから、当時は段丘面が更に東に続いていたと推定され、川に面した場所が、最初に墓域として用いられていたようである。ほかに、BSD-1・BSD-3は溝状遺構であるが、特にBSD-1は平面形がL字形を呈し、壺などの遺物が多量に出土している。規模はかなり大きくなるものの仮にこれを方形周溝墓だとすると、墓域がこのあたりまで広がっていた可能性がある。

一方、住居跡はCSI-7のみで、割合区の中では上位の段丘面に立地する。CSI-7はビットのみの検出で伴出遺物もほとんどなく詳細は明らかでないが、B区やC区で後世の遺構などを混入して弥生土器が多数出土している様子から、上位段丘面を中心に、弥生時代後期頃の聚落が展開していたと考えることができよう。

弥生時代には、はじめに汐入川に近い場所に墓域が、時代が下るにつれ標高の高い段丘面に集落域が展開していく様子が見える。

第2節 古墳時代～奈良・平安時代

東田遺跡では、検出された遺構の多くがこの時代に比定されるものである。これらの中で特に注目される遺構は、祭祀遺物が多量に出土した溝状遺構BSD-2と人型掘立柱建物跡群であろう。BSD-2から出土した祭祀遺物は、周辺の祭祀遺跡から出土しているものと大差はないと言えるが、これまで明確な遺構に伴って出土した例がほとんどなかった。さらに、同時期の聚落の検出例も周辺では乏しく、祭祀遺構と聚落との関係で論じ得るものとなると皆無に等しい状況であった。一方、4棟検出された大型掘立柱建物跡も、全て竪柱式で、そのうち2棟には同じ場所に竪穴状の掘込みがみられるものである。このような建物跡は周辺遺跡には今のところ例がない。発掘調査では、これらの遺構の実態について十分に明らかにし得たとは言えない面もあるが、それぞれについてここで成果をまとめてみたい。

なお、特にこの時代における東田遺跡の調査成果については、既にいくつかの文献で紹介されていると

ころだが¹⁾、整理作業を経てそれらとは異なる結果や解釈に至った部分もある。今回の報告をもって、訂正することとした。

1 BSD-2について

BSD-2はA区とB区の境に位置する。調査区内では汐入川と並行するように直線的に検出され、発掘された長さは25mほどだが、覆土中から多量の上器や祭祀遺物が出土した。祭祀遺物が出土したことからこの遺構を「祭祀遺構」と呼ぶことも可能だが、現況で段差の生じていた部分に存在し、しかも数回にわたって同じ場所に溝が掘削し直されている形跡がみられる事から、区画溝など実用性のある溝に、祭祀行為-土器や祭祀遺物の投棄を行ったものと考えられよう。調査区外におけるBSD-2の様子は不明だが、祭祀そのものを目的とした遺構ではない可能性がある。

BSD-2から出土した遺物は、他の遺構に比べて圧倒的に多い。重量では、遺跡全体で出土した量の半分以上を占めている。特筆すべきはこれらの遺物が3つの集中域から、種類ごとにまとまりをもって出土したという事であろう。すなわち、壺などの土器が集中する地点、土瓦などの小型の土製品類が集中する地点、粗造土器・手捏土器が集中する地点の3地点である。それぞれの遺物で祭祀の内容が異なることが窺える。さらに垂直分布では、それぞれの地点内でいくつかの集中に分かれる様子が看守されるが、これは遺物の投棄に時間差があることを示しているのだろう。ただし、各集中間において、遺物の形態差はほとんど認められなかった。

出土した土器は、6世紀後半～7世紀前半頃に比定できるものが主体的である。5世紀代に遡る須恵器片や赤土器破片なども一部含まれるが、それらは混入品の可能性が高い。

これらの土器の特徴として、BSD-2ばかりでなく遺跡全体を通して言えることだが、一つには基本的に焼成が良いことが挙げられる。土師器でも黒墨の認められないものや、断面が須恵器のように灰色を呈するもの、発泡するなどして変質・変形するものなどが見受けられ、全体的にかなり高温で焼成されている様子が窺える。これは、土製品類についても共通して言えることである。

また、杯・高杯類と甕類・粗造土器とで胎土が大きく異なることも特徴的である。杯・高杯類は非常にきめが細かく、甕類・粗造土器は比較的大粒の砂粒が多量に含まれる。土器の胎土におけるこのような2系統は土製品類にもみられるが、土製品類では形態毎に異なるのではなく、同じ形態をなすものの中には2者がみられるといったあり方をしており、大変興味深い。

ところでBSD-2から出土した遺物のうち、最も特徴的と言えるものは粗造土器であろう。粗造土器は安房地区において特徴的な遺物ということができ、その名称は、つとろば遺跡出土のものについて、森谷ひろみ氏が「巻上げ粗造土器」と呼称したことに基づく²⁾。必ずしも巻上げ技法によらないものが存在することから、当遺跡の調査概要報告で、「輪積み痕や底部の木葉痕を意図的に残し、あえて粗雑に製作した土器」について「粗造土器」とした³⁾。木葉痕の有無については、これから述べるように、必ずしも粗造土器の特徴とは言えないが、輪積みによって成形された痕跡を残す杯形の土器として、本報告書でもこの語を踏襲することとした。なお、粗造土器と類似したものの手捏土器があり、両者は混同されがちだが、ここでは輪積みで成形されているものを「粗造土器」、一塊の粘土でできているものを「手捏土器」として区別して考えることとした。

粗造土器には、一見して大振りなタイプと小振りなタイプの2種類がある。これを基本として、今回の

調査によってBSD-2から出土した粗造土器の形態分類を試みることにした。

A類：口径が概ね10.0cm以上、口径/底径の値が概ね1.8以上、目立つ輪積み痕が2段以上。

概して口径が大きく、底部から体部が直線的に広がりながら立ち上がる器形が特徴である。数段の輪積み痕が認められる。

B類：口径が概ね10.0cm未満、口径/底径の値が概ね1.7以下、目立つ輪積み痕が1段程度。

概して口径が小さく、底部から直角に近い角度で体部が立ち上がり、比較的寸胴形のが特徴である。手捏土器と器形が似ているが、底部と体部の境を中心に輪積み痕が1段みられる。

ただし、実際の分類に当たっては、ここで基準とした数値は一つの目安にすぎないと見える。「形態はA類だが大きさはB類」「形態はB類だが大きさはA類」といった境界的な個体も存在する。そのような場合は、測定場所によって誤差の生じやすい遺物であることを考慮して、形態の特徴を優先して分類することとした。

A類・B類の大分類の後、更に内面調整法及び底部木葉痕の有無の組み合わせによって、A1～A6・B1～B6の12分類を考えた（第2表）。内面調整は、丁寧にヘラナデが施され輪積み痕がほとんど見えないもの、底部に、上部から見て放射状をなすような指頭圧痕がみられ、あたかも文様的効果を狙っているかのようなもの、不規則な指ナデによって仕上げられているもの、の3つに分類できる。ヘラナデのもの以外には、内面の輪積み痕は基本的に残されている。底部の木葉痕については、単に現状での「あり」「なし」によって分類することとした。

実際に分類した結果が第126・127図である。A4・B1・B4の各タイプについては、該当例を挙げることができなかった。この分類によって言えることをいくつか指摘するとすれば、まず、粗造土器の特徴の一つのように考えられていた、底部外面の木葉痕は、主体的な特徴とは言えないということが挙げられよう。底部の木葉痕はA類、つまり大振りなタイプに多い。これはつまり、大振りなものは木の葉に乗せて回転させながら成形し、小振りなものは手捏土器の延長のように成形するという、成形技法上の問題が反映されているのかもしれない。ただし、大振りでも木葉痕の認められないものも存在しており、一概にそうとも言いきれない。このほか、内面調整に関しては、ヘラナデはA類の中でも特に大振りで木葉痕のみられるものに限って施される、ということが挙げられる。あくまで今回の調査に限ってであるが、B1類、すなわちヘラナデの施される小振りなタイプの粗造土器は見あたらなかった。また、内面調整で言えば、B類

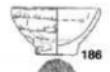
第2表 東田遺跡 粗造土器分類表

A類

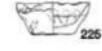
内面調整 底部	ヘラナデ	放射状に 指ナデ	指ナデ
木葉痕あり	A1	A2	A3
木葉痕なし	A4	A5	A6

B類

内面調整 底部	ヘラナデ	放射状に 指ナデ	指ナデ
木葉痕あり	B1	B2	B3
木葉痕なし	B4	B5	B6

	A1	A2	A3
A 類	  185 186	  196 202	  195 203
B 類	  184 192	  204 193	
	B1	B2	B3
B 類		  219 236	  240
		  252	

第126図 BSD-2 出土粗造土分類図（1）

	A4	A5	A6
A 類		 197  200  208  209  212  214  229	 199  196  207  211  210
B 類	B4	B5	B6
		 225  226  237  230  233  243  222  220  246  232  241  239  235  223  236  224  226  231  234  227  257	 242  215  221  244  247  248  245

第127図 BSD-2 出土粗造土器分類図 (2)

すなわち小振りなタイプの内面調整は、放射状の指ナゲ痕のみられるものが多いということも挙げられよう。ただし、放射状の指痕は手捏土器の内面にもみられ、意図的なものか、製作者の癖のようなものか、意味するところは明らかでない。

なお、本報告書では粗造土器と手捏土器とを区別して考えてみたが、その結果、両者の出土状況には明確な差があることが明らかになった。手捏土器は竪穴住居跡や掘立柱建物跡などBSD-2以外の遺構でも出土するのに対し、粗造土器はほとんどBSD-2に限った出土状況であることがわかった。このような出土状況の差は、一体何を表しているのだろうか。時期差か、あるいは遺構の性格の違いなのだろうか。

2 大型掘立柱建物跡について

大型掘立柱建物跡は4棟検出された。柱穴掘形の一辺又は径は、いずれも1mほどある。これらのうちBSD-2・3には、同じ場所に同じ軸方向で竪穴状の掘込みがみられる。周辺遺跡では類を見ないこれらの遺構について、少し考えてみたい。

まず、検出された4棟の掘立柱建物跡のうち、軸方向のはば一致するBSD-1及びBSD-4、BSD-2及びBSD-3は、それぞれセットではなく同時期と考えられる。調査によってBSD-2がBSD-4を切っていることから、BSD-1・4がBSD-2・3に先行する建物群と考えられる。

先に建てられたとみられるBSD-1・4のうち、BSD-1の規模は2間(3.0m)×3間(4.8m)である。BSD-4の規模は明らかでないが、BSD-1とはほぼ同規模とみて良いだろう。いずれも総柱式である。

一方、後に建てられたBSD-2・3の掘立柱建物のうち、BSD-2は3間(4.8m)×5間(8.0m)で、BSD-3は2間(4.8m)×3間(7.8m)で、明らかにBSD-1・4より大型化している。いずれも総柱式で、BSD-3には更に床束もあるとみられる。ただ、BSD-3の構造・規模については議論の余地も若干あり、少なくとも以下の3通りほどの復元案が考えられよう。

復元案① 2間×3間と3間×3間の建物の建替えとするもので、2間×3間は側柱建物、3間×3間は総柱建物に復元される。この場合、新旧関係は明らかでないが、同じ場所に同じ軸で側柱建物から総柱建物へ、ないしは総柱建物から側柱建物へと建物の性格・機能の変わる建替えが行われることになる。

復元案② 独立桿持をもつ3間×3間の総柱建物を考えるものである。北辺・南辺それぞれ中火の柱穴掘形がやや外側に出ていることに注目し、これを独立桿持と考えるものである。ただ、確認された柱痕跡を見ると、外への山方はそれほど苦しいものではなく、微妙である。

復元案③ 2間×3間で、床束をもつ高床構造の建物と考えるものである。

復元案①については、同じ場所に同じ軸で建物の性格や機能の変わるような建替えが行われるということ、通常は考えにくいのではないだろうか。また復元案②については、独立桿持は現在のところ特殊な建物のみにみられるものであり、この案を探るには慎重を期す必要があると思われる。発掘調査時に探った案は復元案③であり、上の復元案①・②とともに検討を加えたところ、やはりこの案がもっとも妥当との結果に至った。

さて、BSD-2・3には、同じ場所に同じ軸方向・規模で、掘込みがある。ともに竪穴住居跡との認識のもと発掘調査が進められ、底面で掘立柱建物跡の柱穴が検出されたことから、「掘込みをもつ掘立柱建物跡」と調査段階で考えたものだが、整理作業を経て、そのように考えるには不自然な事実がいくつか浮上してきた。結果として、この掘込みは掘立柱建物跡に伴うものではなく、基壇をもつ別の建物に関わるもの

のである可能性が高まったのだが、掘立柱建物跡と掘込みのプランが良く合うことなどから、掘立柱建物と基壇をもつ建物とは全く無関係とは考えられないだろう。同じ建物を、掘立柱建物から基壇をもつ礎石立ち建物などに建て替えた可能性が高いのではないだろうか。

これらの建物の性格について、総柱式という構造などから倉の可能性が考えられるだろうが、規模としては大型である。掘込地業をほぼ同じ位置で行い、掘立柱建物から礎石立ち建物へ建て替えるというのは、官衙の正倉においてよく行われているとの指摘があるが³⁾、東田遺跡の建物もこれに相当するのであろうか。

3 変遷

古墳時代～奈良・平安時代における東田遺跡の姿は、どのようなものだったのだろうか。

遺構の新旧関係や出土遺物などから、古墳時代は後期に至ってます、集落が形成されるようである。調査区内では古墳時代前期や中期に比定される遺物は少量しか出土しておらず、遺構も検出されていない。

古墳時代後期の住居跡は、A区の汐入川沿いから、高い段丘面上のC区で検出されている。また、住居跡として形を留めていくとも、遺物包含層やビット群として痕跡が残されていることから、調査区内には全面的に集落が広がっていたと推定される。

古墳時代後期には、溝状遺構BSD-2も存在している。住居跡から出土する土器とBSD-2から出土する土器は基本的には大差ではなく、また、明確にBSD-2に切られる住居跡が検出されていないことから、集落とともにこの大溝が存在していた可能性はない。

しかし一方で、断面の観察から、BSD-2はA区遺物包含層を切って構築されていることが明らかになっている。この遺物包含層の成因ははっきりしないが、弥生時代～古墳時代の堅穴住居跡の崩壊したものである可能性がある。とすれば、A区の集落が放棄された後にBSD-2が構築された可能性があるということになる。また、B区の一次確認面から二次確認面の間に存在した遺物包含層も、BSD-2との新旧関係は明らかではないが、人工的な整地層とも考えられるものである。整地層だとすれば、やはりB区の集落が放棄された後、周辺を整地してからBSD-2が構築された可能性が高くなるということになるだろう。

ところで、確實に古墳時代後期の堅穴住居を切って構築されているとみられるのが大型掘立柱建物群である。前述したように、BSB-1・4がBSB-2・3に先行し、後のBSB-2・3は、掘立柱建物から更に基壇をもつ建物に建替えられていることから、集落が放棄された後、BSB-1・4の掘立柱建物群が建てられ、その後真北に軸方向をとる、更に大型の掘立柱建物群が建てられ、間をおかずに基壇をもつ礎石立ち建物に建て替えたとの流れを推定することができる。

掘立柱建物の時期については、いずれの遺構からも、建物の時期を表す決定的な遺物は出土していない状況である。最も多く出土しているのは古墳時代後期を中心とする土器器であるが、柱穴から出土した遺物もその周辺から出土した遺物も、一様に粉々で、遺存度が著しく低いものばかりである。本報告では時期の検討ができるよう、そのような遺物でもなるべく図示するよう努めたが、ほかの遺構と比べると遺存度の低さは明瞭で、特にBSB-2・3に挟まれたBS-8から、対照的に遺存度の高い変が出土していることを考慮すると、小破片となってBSB-2・3から出土しているものは、混入品の可能性が高いと言えるのではないだろうか。『県史』ではBSB-2・3の時期について、BSI-8に切られていると当初考えられていたこと、及び最も多く出土した土器片から、「鬼高峰期」と想定しているが、実際にはBSI-8はBSB

- 2・3に切られており、それ以後の時期を考えるべきである。

古墳時代後期より新しい遺物は、僅かながらBSB-2・3の掘込み中から出土している。調査区内からは、奈良・平安時代に比定される遺構は検出されておらず、BSB-2から出土した、平安時代後期頃のものと思われる、底部に回転糸切り痕のみられる土器や、BSB-3から出土した、8世紀初め頃のもと思われる須恵器片などは、これらの遺構の時期を考えるうえで、目安となるかもしれない。

なお、BSD-2の軸方向は、BSB-1・4の軸方向とほぼ直交方向にある。また、古墳時代の溝状遺構ASD-5・6とBSB-2・3の軸方向もほぼ直交方向である。各溝状遺構が、区画溝として、それぞれ掘立柱建物とともに機能していた可能性もあるのではないだろうか。

注1 小川和博・大瀬淳志 2003「飯冢塚遺跡」『千葉県の歴史 資料編2（弥生・古墳時代）』千葉県

財團法人千葉県文化財センター 2001『千葉県文化財センター年報No28－平成14年度－』

2 城田義友・吉野健一 1998「安房の古墳時代祭祀・館山市東田遺跡の事例」『研究連絡誌』第53号（以下、「研究連絡誌」）

財團法人千葉県文化財センター 1999『千葉県文化財センター年報No23 平成9年度－』

高田博 2003『東田遺跡』『千葉県の歴史 資料編2（弥生・古墳時代）』千葉県（以下、「県史」）

3 森谷ひろみ 1971「千葉県館山市沼つるば祭祀遺跡の発掘結果からみた遺跡付近の小地誌」『千葉大学教養部研究報告』B-4

4 注2と同じ

5 独立行政法人 文化財研究所 奈良文化財研究所編 2004『古代の官衙遺跡Ⅱ 遺物・遺跡編』

第3表 東田遺跡 地域土器觀察表

件号	季別	出土位置	剖面	形態	器種	器形	口径	外輪高	内輪高	底径	底厚	腹	腹深	内、外、底	内、外、底	内、外、底	内、外、底	
第178	3	ASD-3	直立	罐	新石器時代中期	—	—	(64)	(21.0)	(22.4)	43	圓底罐。腹部へ一帯手縫目。底部へ一帯手縫目。	圓底罐。腹部へ一帯手縫目。	○	○	高輪高(底)	高輪高(底)	○
第179	6	ASD-3	直立	罐	新石器時代中期	—	5.7	—	(19.1)	(16.7)	441	底部(内)の内縫合と、内縫合	底部(内)の内縫合と、内縫合	○	○	高輪高(底)(内)	高輪高(底)(内)	△
第180	7	ASD-3	直立	罐	新石器時代中期	—	2.8	—	8.9	(26)	213	内縫合	内縫合	○	○	サツバク 丸子型	サツバク 丸子型	△
第181	8	ASD-3	直立	罐	新石器時代中期	—	—	(14.6)	(13.6)	205	1.8cm?	ハチナデ	ハチナデ	○	○	高輪高(一端) 浅腹	高輪高(一端) 浅腹	○
第182	10	ASD-3	直立	罐	新石器時代中期	—	3.2	—	—	(4.5)	340	手縫合	手縫合	○	○	高輪高	高輪高	○
第183	9	ASD-4	直立	罐	新石器時代中期	(182)	—	(2.0)	—	(6.1)	56	丁字縫合法	丁字縫合法	○	△	高輪高	高輪高	△
第184	1	ASH-1	直立	杯	新石器時代前期	136	—	5.5	(28)	1.9cm?	1.9cm?	1.9cm?コナダ?	1.9cm?コナダ?	○	○	高輪高(底) 浅腹	高輪高(底) 浅腹	△
第185	2	ASH-1	直立	小口罐	新石器時代前期	14.4	7.9	13.3	11.0	107	415	1.9cm?コナダ?	1.9cm?コナダ?	○	△	高輪高(一端) 浅腹	高輪高(一端) 浅腹	○
第186	1	ASH-1A	直立	杯	新石器時代前期	(112)	—	—	(4.6)	35	ナド	ナド	○	○	高輪高	高輪高	○	
第187	1	ASH-2	直立	瓶	新石器時代中期	(17.6)	—	(18.2)	—	(5.2)	37	1.9cm?コナダ?	1.9cm?コナダ?	○	△	高輪高(一端) 浅腹	高輪高(一端) 浅腹	○
第188	2	ASH-2	直立	小口罐	新石器時代中期	—	3.1	—	(3.8)	76	ヘタド?コナダ?	ヘタド?コナダ?	○	○	高輪高	高輪高	○	
第189	1	ASH-5	直立	杯	新石器時代中期	(12.0)	—	—	(3.5)	35	1.9cm?コナダ?	1.9cm?コナダ?	○	○	高輪高(一端) 浅腹	高輪高(一端) 浅腹	○	
第190	1	ASH-6	直立	杯	新石器時代中期	(16.5)	—	—	(5.7)	82	ナド	ナド	○	○	高輪高	高輪高	○	
第191	2	ASH-6	直立	杯	新石器時代中期	—	6.0	—	(4.1)	13	ロコロ型	ロコロ型	○	○	高輪高	高輪高	○	
第192	3	ASH-6	直立	杯	新石器時代中期	(12.6)	8.5	—	(3.6)	27	ナド?	1.9cm?直縫合	1.9cm?直縫合	○	○	高輪高(一端) 浅腹	高輪高(一端) 浅腹	○
第193	4	ASH-6	直立	瓶	新石器時代中期	—	—	(4.1)	14	ナド?直縫合	ナド?直縫合	○	○	高輪高	高輪高	○		
第194	9	ASD-9	直立	瓶	新石器時代中期	—	5.2	—	(4.1)	81	ナド?	ナド?	○	○	高輪高(一端) 浅腹	高輪高(一端) 浅腹	○	
第195	30	ASH-9	直立	杯	新石器時代中期	(12.7)	—	—	(4.1)	20	ナド	ナド	○	△	高輪高(底) 浅腹	高輪高(底) 浅腹	○	
第196	11	ASH-9	直立	杯	新石器時代中期	(14.7)	—	—	(2.9)	20	1.9cm?コナダ?	1.9cm?コナダ?	○	○	高輪高(一端) 浅腹	高輪高(一端) 浅腹	○	
第197	12	ASH-9	直立	杯	新石器時代中期	12.8	—	—	4.5	120	1.9cm?コナダ?	1.9cm?コナダ?	○	○	高輪高(一端) 浅腹	高輪高(一端) 浅腹	○	
第198	13	ASH-9	直立	杯	新石器時代中期	(13.2)	—	—	(4.1)	22	1.9cm?コナダ?	1.9cm?コナダ?	○	○	高輪高(底) 浅腹	高輪高(底) 浅腹	○	
第199	14	ASH-9	直立	杯	新石器時代中期	(10.0)	—	—	(3.7)	21	1.9cm?コナダ?	1.9cm?コナダ?	○	△	高輪高(底) 浅腹	高輪高(底) 浅腹	○	
第200	15	ASH-9	直立	瓶	新石器時代中期	(13.0)	—	—	4.4	162	ロコロ型	ロコロ型	○	○	高輪高(一端) 浅腹	高輪高(一端) 浅腹	○	

編號	標号	出土位置	種類	形狀	地 質	地 方	層 次	地 質	地 方	地 質	地 方	
外 面	內 面	附 註										
86316	1	EKC-1	全生	鉢	輪郭式立沿の直筒形	22.7	—	13.9	(48.0)	23.6	—	外周に縦溝2本、横溝1本有り。内面に斜溝2本有り。底面に横溝2本有り。縁部に斜溝2本有り。
86316	2	EKC-5	全生	鉢	全縁式立沿の直筒形	12.7	5.8	6.3	(36.7)	20.2	—	外周に縦溝2本、横溝1本有り。内面に斜溝2本有り。底面に横溝2本有り。縁部に斜溝2本有り。
86316	3	EKC-1	全生	鉢	輪郭式立沿の直筒形	12.6	—	8.7	(34.6)	4.6	—	外周に縦溝2本、横溝1本有り。内面に斜溝2本有り。底面に横溝2本有り。縁部に斜溝2本有り。
86316	11	EKC-5	全生	鉢	輪郭式立沿の直筒形	—	7.0	—	(32.6)	6.1	—	外周に縦溝2本、横溝1本有り。内面に斜溝2本有り。底面に横溝2本有り。縁部に斜溝2本有り。
86316	12	EKC-9	全生	鉢	輪郭式立沿の直筒形	—	8.0	—	(35.1)	9.0	—	外周に縦溝2本、横溝1本有り。内面に斜溝2本有り。底面に横溝2本有り。縁部に斜溝2本有り。
86316	13	EKC-3	全生	鉢	全縁式立沿の直筒形	19.6	7.1	—	(36.5)	10.5	—	外周に縦溝2本、横溝1本有り。内面に斜溝2本有り。底面に横溝2本有り。縁部に斜溝2本有り。
86316	14	EKC-5	全生	鉢	輪郭式立沿の直筒形	—	12.5	—	(35.5)	8.0	—	外周に縦溝2本、横溝1本有り。内面に斜溝2本有り。底面に横溝2本有り。縁部に斜溝2本有り。
86316	15	EKC-3	全生	鉢	輪郭式立沿の直筒形	—	14.6	—	(36.0)	7.0	—	外周に縦溝2本、横溝1本有り。内面に斜溝2本有り。底面に横溝2本有り。縁部に斜溝2本有り。
86316	16	EKC-5	全生	鉢	輪郭式立沿の直筒形	(27.2)	9.1	(25.6)	(26.5)	27.8	9.6	外周に縦溝2本、横溝1本有り。内面に斜溝2本有り。底面に横溝2本有り。縁部に斜溝2本有り。
86316	17	EKC-5	全生	鉢	輪郭式立沿の直筒形	25.7	(18.2)	21.6	24.8	30.2	10.7	外周に縦溝2本、横溝1本有り。内面に斜溝2本有り。底面に横溝2本有り。縁部に斜溝2本有り。
86316	18	EKC-5	全生	鉢	輪郭式立沿の直筒形	(24.6)	—	(22.6)	(28.6)	29.6	13.0	外周に縦溝2本、横溝1本有り。内面に斜溝2本有り。底面に横溝2本有り。縁部に斜溝2本有り。
86316	9	KI-43	全生	鉢	全縁式立沿の直筒形	—	4.1	5.0	(24.5)	4.0	—	外周に縦溝2本、横溝1本有り。内面に斜溝2本有り。底面に横溝2本有り。縁部に斜溝2本有り。
86316	10	EKD-2	全生	鉢	全縁式立沿の直筒形	7.0	6.0	6.5	(24.4)	7.0	—	外周に縦溝2本、横溝1本有り。内面に斜溝2本有り。底面に横溝2本有り。縁部に斜溝2本有り。
86316	14	EK-1シート	全生	鉢	輪郭式立沿の直筒形	(28.0)	—	(18.6)	(18.6)	20.5	7.0	外周に縦溝2本、横溝1本有り。内面に斜溝2本有り。底面に横溝2本有り。縁部に斜溝2本有り。
86316	15	KI-34	全生	鉢	全縁式立沿の直筒形	(17.0)	5.4	(15.5)	15.3	19.0	—	外周に縦溝2本、横溝1本有り。内面に斜溝2本有り。底面に横溝2本有り。縁部に斜溝2本有り。
86316	16	KI-43	全生	鉢	全縁式立沿の直筒形	—	6.1	—	(33.1)	7.0	—	外周に縦溝2本、横溝1本有り。内面に斜溝2本有り。底面に横溝2本有り。縁部に斜溝2本有り。
86316	20	KI-24	全生	鉢	輪郭式立沿の直筒形	17.0	—	—	(34.6)	7.0	—	外周に縦溝2本、横溝1本有り。内面に斜溝2本有り。底面に横溝2本有り。縁部に斜溝2本有り。
86316	21	EKD-2	全生	鉢	輪郭式立沿の直筒形	(14.0)	—	—	(31.6)	5.0	—	外周に縦溝2本、横溝1本有り。内面に斜溝2本有り。底面に横溝2本有り。縁部に斜溝2本有り。
86316	10	KI-13	全生	鉢	輪郭式立沿の直筒形	—	5.1	—	(14.6)	3.0	—	外周に縦溝2本、横溝1本有り。内面に斜溝2本有り。底面に横溝2本有り。縁部に斜溝2本有り。
86316	11	KI-23	全生	鉢	輪郭式立沿の直筒形	14.6	—	—	(31.5)	7.0	—	外周に縦溝2本、横溝1本有り。内面に斜溝2本有り。底面に横溝2本有り。縁部に斜溝2本有り。
86316	12	EKD-2	全生	鉢	輪郭式立沿の直筒形	(21.6)	—	(13.0)	(19.0)	13.0	—	外周に縦溝2本、横溝1本有り。内面に斜溝2本有り。底面に横溝2本有り。縁部に斜溝2本有り。
86316	13	KI-24	全生	鉢	輪郭式立沿の直筒形	—	—	—	(18.0)	—	(18.0)	外周に縦溝2本、横溝1本有り。内面に斜溝2本有り。底面に横溝2本有り。縁部に斜溝2本有り。
86316	19	KI-95	全生	鉢	輪郭式立沿の直筒形	—	—	—	(17.0)	—	(18.0)	外周に縦溝2本、横溝1本有り。内面に斜溝2本有り。底面に横溝2本有り。縁部に斜溝2本有り。

件名	番号	出力位置	機種	規格	電圧	電流	1.125(2.25V)			1.125(2.25V)			1.125(2.25V)			1.125(2.25V)				
							(mA)	(mA)	(mA)	(mA)	(mA)	(mA)	(mA)	(mA)	(mA)	(mA)	(mA)	(mA)		
新規料	43	K4-13	高1:	低	1.125(2.25V)	1.125	-	(640)	-	(532)	26	1.125	-	(40)	0	0	1.125(2.25V)	1.125	0	
新規料	47	K3-14	高1:	低	1.125(2.25V)	1.125	-	(640)	-	(532)	10	1.125	1.125	-	0	0	1.125(2.25V)	1.125	0	
新規料	10	BSN-2	高1:	低	新規からの変更	-	-	28	-	(23)	230	1.125	1.125	-	0	▲	新規からの変更	1.125	0	
新規料	17	BSN-1	高1:	低	新規からの変更	-	-	53	-	(134)	141	1.125	1.125	-	0	0	新規からの変更	1.125	0	
新規料	19	BSN-2	高1:	低	新規からの変更	-	-	(31)	-	(62)	62	1.125	-	0	0	新規からの変更	1.125	0		
新規料	30	K4-13	高1:	低	新規からの変更	(72)	-	-	74	1.125	-	1.125	-	0	△	新規からの変更	1.125	0		
新規料	34	K1-32	高1:	低	新規からの変更	-	-	34	-	(43)	113	1.125	-	1.125	-	0	0	新規からの変更	1.125	0
新規料	95	K4-14	高1:	低	新規からの変更	-	-	36	-	(43)	75	1.125	-	ヘッド	0	0	新規からの変更	1.125	0	
新規料	106	BSN-2	高1:	低	新規からの変更	-	-	(76)	-	(52)	37	1.125	-	ヘッド	0	▲	新規からの変更	1.125	0	
新規料	107	K4-14	高1:	低	新規からの変更	-	-	52	-	(74)	250	1.125	-	黒点(1)、黒点(2)ヘッド	0	0	新規からの変更	1.125	0	
新規料	108	BSN-1	高1:	低	新規からの変更	-	-	(76)	-	(21)	130	1.125	-	黒点(1)、黒点(2)ヘッド	0	0	新規からの変更	1.125	0	
新規料	109	K4-13	高1:	低	新規からの変更	-	-	72	-	(54)	154	1.125	-	ヘッド	0	△	新規からの変更	1.125	0	
新規料	110	BSN-2	高1:	低	新規からの変更	-	-	(26)	20	(26)	14	1.125	1.125	-	0	△	新規からの変更	1.125	0	
新規料	12	BSN-2	高1:	低	新規からの変更	-	-	40	-	(24)	115	1.125	-	ヘッド	0	0	新規からの変更	1.125	0	
新規料	13	BSN-1	高1:	低	新規からの変更	(115)	-	-	(34)	22	1.125	1.125	-	ヘッド	0	0	新規からの変更	1.125	0	
新規料	24	BSN-2	高1:	低	新規からの変更	-	(32)	14	1.125	-	1.125	1.125	-	ロリ直面	0	0	新規からの変更	1.125	0	
新規料	31	BSN-4	高1:	低	全機の変更	(1115)	-	(46)	15	1.125	1.125	1.125	-	ヘッド	0	0	新規からの変更	1.125	0	
新規料	32	BSN-4	高1:	低	新規からの変更	-	58	-	(26)	129	1.125	-	ヘッド	0	0	新規からの変更	1.125	0		
新規料	41	BSN-4	高1:	低	新規からの変更	-	42	-	(22)	119	1.125	-	ヘッド	0	△	新規からの変更	1.125	0		
新規料	51	BSN-4	高1:	低	全機の変更	(374)	40	(342)	(367)	265	1.125	1.125	1.125	1.125	1.125	1.125	1.125	1.125	1.125	
新規料	1	K4-23	上階部	中	全機の変更	(343)	-	(26)	44	71	1.125	1.125	1.125	1.125	1.125	1.125	1.125	1.125	1.125	
新規料	2	K4-23	上階部	中	全機の変更	(343)	-	(47)	131	1.125	1.125	1.125	1.125	1.125	1.125	1.125	1.125	1.125		
新規料	3	BSN-1	上階部	中	全機の変更	(338)	-	(48)	96	1.125	1.125	1.125	1.125	1.125	1.125	1.125	1.125	1.125		

件名	番号	地主/施主	種別	品目	規格	量	用意	取扱	備考	色	地
	14	ESD-3	上塗装	漆*	底漆のため全表面	—	5.6 (ml)	—	ヘタリメタルキナード 漆油ヘタリテラヒド	△	△
漆油用	15	KJ-26	上塗装	漆*	底漆のため全表面	—	5.6 (ml)	—	△△△ 漆油ヘタリテラヒド	△△△	△△△
	16	KJ-95	上塗装	漆*	底漆のため全表面	—	5.6 (ml)	—	△△△ 漆油ヘタリテラヒド	△△△	△△△
漆油用	17	ESD-4	上塗装	漆*	底漆のため全表面	—	5.5 (ml)	—	△△△ 漆油ヘタリテラヒド	△△△	△△△
	18	KJ-95	上塗装	漆*	底漆のため全表面	—	3.8 (ml)	—	△△△ 漆油ヘタリテラヒド	△△△	△△△
漆油用	19	KJ-95	上塗装	漆*	底漆のため全表面	—	1.3 (ml)	—	△△△ 漆油ヘタリテラヒド	△△△	△△△
	20	KSD-2	底漆用	漆*	底漆のため全表面	—	—	△△△ (ml)	△△△ ロカラ漆油、底漆のため全表面△△△ 漆油ヘタリテラヒド	△△△	△△△
底漆用	21	ESD-2	底漆用	漆*	底漆のため全表面	—	9.6 (ml)	—	△△△ ロカラ漆油、底漆のため全表面△△△ 漆油ヘタリテラヒド	△△△	△△△
	22	KSD-2	底漆用	漆*	底漆のため全表面	—	13.2 (ml)	—	△△△ ロカラ漆油、底漆のため全表面△△△ 漆油ヘタリテラヒド	△△△	△△△
底漆用	23	KSD-2	底漆用	漆*	底漆のため全表面	—	13.2 (ml)	—	△△△ ロカラ漆油、底漆のため全表面△△△ 漆油ヘタリテラヒド	△△△	△△△
	24	ESD-2	底漆用	漆*	底漆のため全表面	—	13.2 (ml)	—	△△△ ロカラ漆油、底漆のため全表面△△△ 漆油ヘタリテラヒド	△△△	△△△
底漆用	25	ESD-2	底漆用	漆*	底漆のため全表面	—	13.2 (ml)	—	△△△ ロカラ漆油、底漆のため全表面△△△ 漆油ヘタリテラヒド	△△△	△△△
	26	KJ-95	上塗装	漆*	底漆のため全表面	—	13.2 (ml)	—	△△△ ロカラ漆油、底漆のため全表面△△△ 漆油ヘタリテラヒド	△△△	△△△
漆油用	27	KSD-2	底漆用	漆*	底漆のため全表面	—	13.2 (ml)	—	△△△ ロカラ漆油、底漆のため全表面△△△ 漆油ヘタリテラヒド	△△△	△△△
	28	KSD-2	底漆用	漆*	底漆のため全表面	—	13.2 (ml)	—	△△△ ロカラ漆油、底漆のため全表面△△△ 漆油ヘタリテラヒド	△△△	△△△
底漆用	29	KSD-2	底漆用	漆*	底漆のため全表面	—	13.2 (ml)	—	△△△ ロカラ漆油、底漆のため全表面△△△ 漆油ヘタリテラヒド	△△△	△△△
	30	KSD-2	底漆用	漆*	底漆のため全表面	—	13.2 (ml)	—	△△△ ロカラ漆油、底漆のため全表面△△△ 漆油ヘタリテラヒド	△△△	△△△
底漆用	31	KSD-2	底漆用	漆*	底漆のため全表面	—	13.2 (ml)	—	△△△ ロカラ漆油、底漆のため全表面△△△ 漆油ヘタリテラヒド	△△△	△△△
	32	ESD-2	底漆用	漆*	底漆のため全表面	—	13.2 (ml)	—	△△△ ロカラ漆油、底漆のため全表面△△△ 漆油ヘタリテラヒド	△△△	△△△
底漆用	33	KSD-2	底漆用	漆*	底漆のため全表面	—	13.2 (ml)	—	△△△ ロカラ漆油、底漆のため全表面△△△ 漆油ヘタリテラヒド	△△△	△△△
	34	ESD-2	底漆用	漆*	底漆のため全表面	—	13.2 (ml)	—	△△△ ロカラ漆油、底漆のため全表面△△△ 漆油ヘタリテラヒド	△△△	△△△
底漆用	35	ESD-2	上塗装	漆*	1.被膜のため全表面	—	5.6 (ml)	—	△△△ 漆油ヘタリテラヒド	△△△	△△△
	36	KSD-2	上塗装	漆*	1.被膜のため全表面	—	5.6 (ml)	—	△△△ 漆油ヘタリテラヒド	△△△	△△△
漆油用	37	KSD-2	上塗装	漆*	1.被膜のため全表面	—	11.3 (ml)	—	△△△ 漆油ヘタリテラヒド	△△△	△△△
	38	KSD-2	上塗装	漆*	1.被膜のため全表面	—	28.1 (ml)	—	△△△ 漆油ヘタリテラヒド	△△△	△△△

件名	書名	出版社	編集者	著者	定 価	元 定 価	出版社	編集者	著者	定 価	元 定 価	出版社	編集者	著者	定 価	元 定 価	出版社	編集者	著者	定 価	元 定 価
86002	98 ESD-2	三編社	株	企画の教科書	(13)	—	(13)	—	(13)	18	18	(13)	—	(13)	18	18	(13)	—	(13)	18	18
86003	99 ESD-2	三編社	株	企画の教科書	10.8	1.5	202	1.5	202	18	18	202	1.5	202	18	18	202	1.5	202	18	18
86004	100 ESD-2	三編社	株	企画の教科書	16.0	3.0	218	3.0	218	36	36	218	3.0	218	36	36	218	3.0	218	36	36
86005	101 ESD-2	三編社	株	企画の教科書	13.7	6.5	206	7.5	206	11	11	206	7.5	206	11	11	206	7.5	206	11	11
86006	102 ESD-2	三編社	株	企画の教科書	(13)	—	(13)	—	(13)	15	15	(13)	—	(13)	15	15	(13)	—	(13)	15	15
86007	103 ESD-2	三編社	株	企画の教科書	—	—	15	—	15	15	15	—	—	15	—	—	15	—	—	15	—
86008	104 ESD-2	三編社	株	企画の教科書	11.8	2.0	212	2.0	212	12	12	212	2.0	212	12	12	212	2.0	212	12	12
86009	105 ESD-2	三編社	株	企画の教科書	11.8	2.0	212	2.0	212	11	11	212	2.0	212	11	11	212	2.0	212	11	11
86010	106 ESD-2	三編社	株	企画の教科書	11.8	2.0	212	2.0	212	11	11	212	2.0	212	11	11	212	2.0	212	11	11
86011	107 ESD-2	三編社	株	企画の教科書	11.8	2.0	212	2.0	212	11	11	212	2.0	212	11	11	212	2.0	212	11	11
86012	108 ESD-2	三編社	株	企画の教科書	11.8	2.0	212	2.0	212	11	11	212	2.0	212	11	11	212	2.0	212	11	11
86013	109 ESD-2	三編社	株	企画の教科書	11.8	2.0	212	2.0	212	11	11	212	2.0	212	11	11	212	2.0	212	11	11
86014	110 ESD-2	三編社	株	企画の教科書	11.8	2.0	212	2.0	212	11	11	212	2.0	212	11	11	212	2.0	212	11	11
86015	111 ESD-2	三編社	株	企画の教科書	—	—	204	—	204	(13)	(13)	204	—	204	—	—	204	—	204	—	—
86016	112 ESD-2	三編社	株	企画の教科書	—	—	204	—	204	(13)	(13)	204	—	204	—	—	204	—	204	—	—
86017	113 ESD-2	三編社	株	企画の教科書	—	—	204	—	204	(13)	(13)	204	—	204	—	—	204	—	204	—	—
86018	114 ESD-2	三編社	株	企画の教科書	—	—	204	—	204	(13)	(13)	204	—	204	—	—	204	—	204	—	—
86019	115 ESD-2	三編社	株	企画の教科書	—	—	204	—	204	(13)	(13)	204	—	204	—	—	204	—	204	—	—
86020	116 ESD-2	三編社	株	企画の教科書	—	—	204	—	204	(13)	(13)	204	—	204	—	—	204	—	204	—	—
86021	117 ESD-2	三編社	株	企画の教科書	—	—	204	—	204	(13)	(13)	204	—	204	—	—	204	—	204	—	—
86022	118 ESD-2	三編社	株	企画の教科書	—	—	204	—	204	(13)	(13)	204	—	204	—	—	204	—	204	—	—
86023	119 ESD-2	三編社	株	企画の教科書	—	—	204	—	204	(13)	(13)	204	—	204	—	—	204	—	204	—	—
86024	120 ESD-2	三編社	株	企画の教科書	—	—	204	—	204	(13)	(13)	204	—	204	—	—	204	—	204	—	—

地名	番号	施設名	種類	面積	高さ	用途	施設	施設	施設	内		外		土		石		砂		泥		
										(m)	(m)											
80676	131	BSO-2	土槽	小形	全草の堆肥槽	—	(152)	6.1	(15.0)	10.0	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	
80676	132	BSO-2	土槽	小形	全草の堆肥槽	—	(137)	6.0	(14.0)	11.6	223	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	
80676	133	BSO-2	土槽	小形	全草の堆肥槽	—	(15.2)	15.4	[12.2]	284	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]		
80676	134	BSO-2	土槽	小形	全草の堆肥槽	—	(17.0)	6.0	—	8.9	503	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	
80676	135	BSO-2	土槽	小形	全草の堆肥槽	—	216	2.3	10.0	—	9.3	940	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]
80676	136	BSO-2	土槽	小形	全草の堆肥槽	—	16.4	2.9	15.5	12.1	208	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	
80676	137	BSO-2	土槽	小形	全草の堆肥槽	—	15.8	6.3	13.8	14.4	154	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	
80676	138	BSO-2	土槽	中	全草の堆肥槽	—	(26.6)	6.0	(16.0)	20.2	211	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	
80676	139	BSO-2	土槽	中	全草の堆肥槽	—	16.7	8.6	15.3	22.3	180	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	
80686	140	BSO-2	土槽	大	全草の堆肥槽	—	16.3	2.8	10.4	17.3	252	[20]	[20]	[20]	[20]	[20]	[20]	[20]	[20]	[20]	[20]	
80686	141	BSO-2	土槽	大	全草の堆肥槽	—	(24.0)	—	(22.2)	(28.2)	[28.1]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	
80686	142	BSO-2	土槽	大	全草の堆肥槽	—	(20.7)	6.4	(15.0)	(14.1)	288	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	
80686	143	BSO-2	土槽	大	全草の堆肥槽	—	(17.6)	7.3	(15.6)	(20.7)	256	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	
80686	144	BSO-2	土槽	大	全草の堆肥槽	—	—	10.2	—	(13.4)	[24.1]	[24.1]	[24.1]	[24.1]	[24.1]	[24.1]	[24.1]	[24.1]	[24.1]	[24.1]		
80686	145	BSO-2	土槽	大	全草の堆肥槽	—	—	8.8	—	(26.0)	[13.4]	647	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	
80686	146	BSO-2	土槽	大	全草の堆肥槽	—	16.6	3.1	(18.4)	25.5	1307	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	
80686	147	BSO-2	土槽	大	全草の堆肥槽	—	(17.2)	3.2	(18.1)	465	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]		
80686	148	BSO-2	土槽	大	全草の堆肥槽	—	(19.6)	—	(18.6)	(21.0)	744	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	
80686	149	BSO-2	土槽	大	全草の堆肥槽	—	(18.6)	—	(17.0)	—	[18.1]	220	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	
80686	150	BSO-2	土槽	大	全草の堆肥槽	—	—	16.6	—	—	[18.0]	146	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	
80686	151	BSO-2	土槽	大	全草の堆肥槽	—	(14.9)	2.2	(26.5)	609	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]		
80686	152	BSO-2	土槽	大	全草の堆肥槽	—	(18.0)	2.1	(19.7)	264	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]		
80686	153	BSO-2	土槽	大	全草の堆肥槽	—	—	16.5	—	—	[18.0]	147	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	[18]	

件名	番号	地主の姓	地名	面積	地主の姓	地名	面積	地主の姓	地名	面積	地主の姓	地名	面積	地主の姓	地名	面積	地主の姓	地名	面積	地主の姓	地名		
138	139	140	141	142	143	144	145	146	147	148	149	150	151	152	153	154	155	156	157	158	159	160	
第216	140	ESD-2	上地	東	佐野の内山	新谷	—	(1)	W.	田	西	佐野の内山	新谷	—	W.	田	西	佐野の内山	新谷	—	W.	田	西
第217	141	ESD-2	上地	東	佐野の内山	新谷	36.6	69	15.2	35.4	22.5	147	148	149	150	151	152	153	154	155	156	157	158
第218	142	ESD-2	上地	東	佐野の内山	新谷	(15.0)	72	(14.7)	75	24.5	136	137	138	139	140	141	142	143	144	145	146	147
第219	143	ESD-2	上地	東	佐野の内山	新谷	15.6	—	14.9	34.8	—	105	106	107	108	109	110	111	112	113	114	115	116
第220	144	ESD-2	上地	東	佐野の内山	新谷	17.2	—	14.6	38.7	—	105	106	107	108	109	110	111	112	113	114	115	116
第221	145	ESD-2	上地	東	佐野の内山	新谷	—	—	14.6	38.7	—	105	106	107	108	109	110	111	112	113	114	115	116
第222	146	ESD-2	上地	東	佐野の内山	新谷	(14.0)	—	(13.0)	(18.1)	(22.4)	147	148	149	150	151	152	153	154	155	156	157	158
第223	147	ESD-2	上地	東	佐野の内山	新谷	17.8	53	14.5	35.8	—	120	121	122	123	124	125	126	127	128	129	130	131
第224	148	ESD-2	上地	東	佐野の内山	新谷	(17.2)	—	(15.8)	(15.0)	(13.9)	861	149	150	151	152	153	154	155	156	157	158	159
第225	149	ESD-2	上地	東	佐野の内山	新谷	15.1	—	14.7	37.2	—	120	121	122	123	124	125	126	127	128	129	130	131
第226	150	ESD-2	上地	東	佐野の内山	新谷	—	—	14.9	—	—	145	146	147	148	149	150	151	152	153	154	155	156
第227	151	ESD-2	上地	東	佐野の内山	新谷	—	—	14.6	—	—	120	121	122	123	124	125	126	127	128	129	130	131
第228	152	ESD-2	上地	東	佐野の内山	新谷	—	—	14.6	—	—	120	121	122	123	124	125	126	127	128	129	130	131
第229	153	ESD-2	上地	東	佐野の内山	新谷	—	—	14.6	—	—	120	121	122	123	124	125	126	127	128	129	130	131
第230	154	ESD-2	上地	東	佐野の内山	新谷	—	—	14.6	—	—	120	121	122	123	124	125	126	127	128	129	130	131
第231	155	ESD-2	上地	東	佐野の内山	新谷	—	—	14.6	—	—	120	121	122	123	124	125	126	127	128	129	130	131
第232	156	ESD-2	上地	東	佐野の内山	新谷	—	—	14.6	—	—	120	121	122	123	124	125	126	127	128	129	130	131
第233	157	ESD-2	上地	東	佐野の内山	新谷	—	—	14.6	—	—	120	121	122	123	124	125	126	127	128	129	130	131
第234	158	ESD-2	上地	東	佐野の内山	新谷	—	—	14.6	—	—	120	121	122	123	124	125	126	127	128	129	130	131
第235	159	ESD-2	上地	東	佐野の内山	新谷	—	—	14.6	—	—	120	121	122	123	124	125	126	127	128	129	130	131
第236	160	ESD-2	上地	東	佐野の内山	新谷	—	—	14.6	—	—	120	121	122	123	124	125	126	127	128	129	130	131
第237	161	ESD-2	上地	東	佐野の内山	新谷	—	—	14.6	—	—	120	121	122	123	124	125	126	127	128	129	130	131
第238	162	ESD-2	上地	東	佐野の内山	新谷	—	—	14.6	—	—	120	121	122	123	124	125	126	127	128	129	130	131
第239	163	ESD-2	上地	東	佐野の内山	新谷	—	—	14.6	—	—	120	121	122	123	124	125	126	127	128	129	130	131
第240	164	ESD-2	上地	東	佐野の内山	新谷	—	—	14.6	—	—	120	121	122	123	124	125	126	127	128	129	130	131
第241	165	ESD-2	上地	東	佐野の内山	新谷	—	—	14.6	—	—	120	121	122	123	124	125	126	127	128	129	130	131
第242	166	ESD-2	上地	東	佐野の内山	新谷	—	—	14.6	—	—	120	121	122	123	124	125	126	127	128	129	130	131

試験番号	試験番号	高さ(空調)	横幅	縦幅	扇形	直角	斜角	内角	外角	面積	周長	形状	寸法	内寸	外寸	試験番号	
第0004	3	CSL-1	上部	下部	空調	1.65×0.75	—	—	—	1.55	7.0	5.3	1.55	12.3	4.9	1.65×0.75	扇形ヘタチテ
第0005	7	CSL-10	底	底	空調	1.75×0.75	—	—	—	1.75	7.0	5.3	1.75	12.3	4.9	1.75×0.75	扇形ヘタチテ
第0006	1	CSL-1-2	カット	カット	空調	1.65×0.75	—	—	—	1.65	7.0	5.3	1.65	12.3	4.9	1.65×0.75	扇形ヘタチテ
第0007	2	CSL-5	底	底	空調	1.65×0.75	—	—	—	1.65	7.0	5.3	1.65	12.3	4.9	1.65×0.75	扇形ヘタチテ
第0008	1	CSD-2	底	底	空調	1.65×0.75	—	—	—	1.65	7.0	5.3	1.65	12.3	4.9	1.65×0.75	扇形ヘタチテ
第0009	2	CSD-5	底	底	空調	1.65×0.75	—	—	—	1.65	7.0	5.3	1.65	12.3	4.9	1.65×0.75	扇形ヘタチテ
第0010	3	CSD-5	底	底	空調	1.65×0.75	—	—	—	1.65	7.0	5.3	1.65	12.3	4.9	1.65×0.75	扇形ヘタチテ
第0011	5	CSD-5	底	底	空調	1.65×0.75	—	—	—	1.65	7.0	5.3	1.65	12.3	4.9	1.65×0.75	扇形ヘタチテ
第0012	6	CSD-5	底	底	空調	1.65×0.75	—	—	—	1.65	7.0	5.3	1.65	12.3	4.9	1.65×0.75	扇形ヘタチテ
第0013	7	CSD-13	底	底	空調	1.65×0.75	—	—	—	1.65	7.0	5.3	1.65	12.3	4.9	1.65×0.75	扇形ヘタチテ
第0014	8	CSD-13	底	底	空調	1.65×0.75	—	—	—	1.65	7.0	5.3	1.65	12.3	4.9	1.65×0.75	扇形ヘタチテ
第0015	9	CSD-13	底	底	空調	1.65×0.75	—	—	—	1.65	7.0	5.3	1.65	12.3	4.9	1.65×0.75	扇形ヘタチテ
第0016	10	CSD-13	底	底	空調	1.65×0.75	—	—	—	1.65	7.0	5.3	1.65	12.3	4.9	1.65×0.75	扇形ヘタチテ
第0017	11	CSD-13	底	底	空調	1.65×0.75	—	—	—	1.65	7.0	5.3	1.65	12.3	4.9	1.65×0.75	扇形ヘタチテ
第0018	1	CSD-16	底	底	空調	1.65×0.75	—	—	—	1.65	7.0	5.3	1.65	12.3	4.9	1.65×0.75	扇形ヘタチテ
第0019	5	CSD-3	底	底	空調	1.65×0.75	—	—	—	1.65	7.0	5.3	1.65	12.3	4.9	1.65×0.75	扇形ヘタチテ
第0020	6	CSD-3-4	底	底	空調	1.65×0.75	—	—	—	1.65	7.0	5.3	1.65	12.3	4.9	1.65×0.75	扇形ヘタチテ
第0021	1	CSL-1-1	上部	下部	空調	1.65×0.75	—	—	—	1.65	7.0	5.3	1.65	12.3	4.9	1.65×0.75	扇形ヘタチテ
第0022	2	CSL-1	上部	下部	空調	1.65×0.75	—	—	—	1.65	7.0	5.3	1.65	12.3	4.9	1.65×0.75	扇形ヘタチテ
第0023	1	CSL-2	上部	下部	空調	1.65×0.75	—	—	—	1.65	7.0	5.3	1.65	12.3	4.9	1.65×0.75	扇形ヘタチテ
第0024	2	CSL-3	上部	下部	空調	1.65×0.75	—	—	—	1.65	7.0	5.3	1.65	12.3	4.9	1.65×0.75	扇形ヘタチテ
第0025	3	CSL-3	上部	下部	空調	1.65×0.75	—	—	—	1.65	7.0	5.3	1.65	12.3	4.9	1.65×0.75	扇形ヘタチテ
第0026	4	CSL-3	上部	下部	空調	1.65×0.75	—	—	—	1.65	7.0	5.3	1.65	12.3	4.9	1.65×0.75	扇形ヘタチテ
第0027	1	CSL-4	上部	下部	空調	1.65×0.75	—	—	—	1.65	7.0	5.3	1.65	12.3	4.9	1.65×0.75	扇形ヘタチテ

測定 期間	測定 番号	地点名	地表			地下			地表			地下			地表		
			距離 (m)	風速 (m/s)	風向 (°)	距離 (m)	風速 (m/s)	風向 (°)	距離 (m)	風速 (m/s)	風向 (°)	距離 (m)	風速 (m/s)	風向 (°)	距離 (m)	風速 (m/s)	風向 (°)
昭和33年 7月28日	238	BSU-2	全般-200m標高	0.60	6.6	45	1.5	124.7	7.4	全般-200m標高, 近 水表面	ナガ	0	▲	0	内 陸	内 陸	内 陸
昭和33年 7月29日	239	BSU-2	全般-200m標高	7.7	4.9	5.1	1.6	126.0	7.4	全般-200m標高, 近 水表面	ナガ	△	○	△	内 陸	内 陸	内 陸
昭和33年 7月30日	240	BSU-2	全般-200m標高	13.0	7.4	4.5	1.4	109.5	7.4	全般-200m標高, 近 水表面	ナガ	△	○	△	内 陸	内 陸	内 陸
昭和33年 7月31日	241	BSU-2	全般-200m標高	3.7	5.6	2.5	1.7	200.4	7.4	全般-200m標高, 近 水表面	ナガ	○	▲	○	内 陸	内 陸	内 陸
昭和33年 8月1日	242	BSU-2	全般-200m標高	13.2	4.8	4.6	2.1	109.3	7.4	全般-200m標高, 近 水表面	ナガ	○	○	○	内 陸	内 陸	内 陸
昭和33年 8月2日	243	BSU-2	全般-200m標高	8.2	6.4	4.2	1.3	154.0	7.4	全般-200m標高, 近 水表面	ナガ	○	○	○	内 陸	内 陸	内 陸
昭和33年 8月3日	244	BSU-2	全般-200m標高	0.60	6.0	4.0	1.3	47.5	7.4	全般-200m標高, 近 水表面	ナガ	○	▲	○	内 陸	内 陸	内 陸
昭和33年 8月4日	245	BSU-2	全般-200m標高	0.60	5.6	4.3	1.3	77.4	7.4	全般-200m標高, 近 水表面	ナガ	○	○	△	内 陸	内 陸	内 陸
昭和33年 8月5日	246	BSU-2	全般-200m標高	7.6	5.1	4.4	1.3	144.4	7.4	全般-200m標高, 近 水表面	ナガ	○	○	○	内 陸	内 陸	内 陸
昭和33年 8月6日	247	BSU-2	全般-200m標高	7.5	6.0	4.3	1.3	164.1	7.4	全般-200m標高, 近 水表面	ナガ	○	▲	○	内 陸	内 陸	内 陸
昭和33年 8月7日	248	BSU-2	全般-200m標高	7.2	6.4	3.6	1.1	171.7	7.4	全般-200m標高, 近 水表面	ナガ	○	○	○	内 陸	内 陸	内 陸
昭和33年 8月8日	249	BSU-2	全般-200m標高	8.6	6.4	4.0	1.3	104.3	7.4	全般-200m標高, 近 水表面	ナガ	○	▲	○	内 陸	内 陸	内 陸
昭和33年 8月9日	250	BSU-2	全般-200m標高	6.0	5.4	2.6	1.3	68.1	7.4	全般-200m標高, 近 水表面	ナガ	○	▲	○	内 陸	内 陸	内 陸
昭和33年 8月10日	251	BSU-2	全般-200m標高	—	6.6	—	—	175.1	7.4	全般-200m標高, 近 水表面	ナガ	○	▲	○	内 陸	内 陸	内 陸
昭和33年 8月11日	252	BSU-2	全般-200m標高	0.60	7.0	3.3	1.4	152.6	7.4	全般-200m標高, 近 水表面	ナガ	○	▲	○	内 陸	内 陸	内 陸
昭和33年 8月12日	253	BSU-2	全般-200m標高	0.60	5.6	3.0	1.1	52.4	7.4	全般-200m標高, 近 水表面	ナガ	○	○	○	内 陸	内 陸	内 陸
昭和33年 8月13日	254	BSU-2	全般-200m標高	0.60	6.7	3.2	1.2	131.3	7.4	全般-200m標高, 近 水表面	ナガ	○	▲	○	内 陸	内 陸	内 陸
昭和33年 8月14日	255	BSU-2	全般-200m標高	0.60	6.6	2.3	1.3	123.6	7.4	全般-200m標高, 近 水表面	ナガ	○	▲	○	内 陸	内 陸	内 陸
昭和33年 8月15日	256	BSU-2	全般-200m標高	0.60	6.8	4.9	1.4	277.6	7.4	全般-200m標高, 近 水表面	ナガ	○	▲	○	内 陸	内 陸	内 陸
昭和33年 8月16日	257	BSU-2	全般-200m標高	0.70	5.5	4.3	1.4	76.2	7.4	全般-200m標高, 近 水表面	ナガ	○	▲	○	内 陸	内 陸	内 陸
昭和33年 8月17日	258	BSU-2	全般-200m標高	8.4	5.6	3.2	1.3	122.3	7.4	全般-200m標高, 近 水表面	ナガ	○	▲	○	内 陸	内 陸	内 陸
昭和33年 8月18日	259	BSU-2	全般-200m標高	0.70	5.6	3.6	1.4	96.1	7.4	全般-200m標高, 近 水表面	ナガ	○	▲	○	内 陸	内 陸	内 陸
昭和33年 8月19日	260	BSU-2	全般-200m標高	0.60	5.0	2.4	1.2	82.7	7.4	全般-200m標高, 近 水表面	ナガ	○	▲	○	内 陸	内 陸	内 陸
第115回	3	CSD-6	Q6	8.0	5.6	4.3	1.4	141.9	7.4	東北越後入札 水表面	ナガ	○	△	内 陸	内 陸	内 陸	内 陸

※注測点 1) 水表面。 2) 地表面。 3) おもに水表面より2m離れた位置。 4) おもに水表面より4m離れた位置。

第5表 東田遺跡 挖取手程土器觀察表

測量 番号	目次番号	遺 留 型	上層		中層		下層		内 层		外 层		地 面		
			柱高	底径	柱高	底径	柱高	底径	柱高	底径	柱高	底径	柱高	底径	
851005	25	A区新築合繩 伝瓶	4.6	2.5	2.6	0.6	2.4'					○	○		
851006	20	A区新築合繩 全身像(200cm高)	0.60	1.62	2.5	2.0	2.4'		ナデ		○	○			
851007	19	EDC-1	全身像(200cm高)	2.6	4.0	2.1	2.2	2.4'		直筒形下部 斜面形上部	○	○	宝持手一側面		
851008	20	EDC-5	全身像(200cm高)	2.6	—	2.3	1.6	ナデ		直筒形下部 斜面形上部	○	○	直筒形一側面	○	
851009	4	ESI-2	全身像(200cm高)	0.40	1.44	4.1	3.12	ナデ		ナデ	○	○	直筒形一側面	○	
851010	5	ESI-2	全身像(200cm高)	16.0	4.4	3.5	4.15	2.4'		ナデ	○	○	直筒形一側面	○	
851011	6	ESI-4	全身像(200cm高)	16.0	4.3	6.6	8.6	2.4'		直筒形に斜面有 ナデ	○	○	直筒形一側面	○	
851012	70	EDS-1	全身像(200cm高)	17.0	2.3	2.3	2.2	2.4'		ナデ	△	○	直筒形一側面	○	
851013	11	EDS-1	全身像(200cm高)	0.13	0.45	2.7	8.2	2.4'		直筒形に斜面有 ナデ	○	△	直筒形一側面	○	
851014	12	EDS-1	全身像(200cm高)	0.13	0.45	2.7	8.2	2.4'		直筒形に斜面有 ナデ	○	○	直筒形一側面	○	
851015	21	EDS-1	全身像(200cm高)	0.13	0.45	2.7	8.2	2.4'		直筒形下部 斜面形上部	○	○	直筒形一側面	○	
851016	22	EDS-1	全身像(200cm高)	0.13	0.45	2.8	9.3	2.4'		ナデ	△	○	直筒形一側面	○	
851776	201	EDS-2	全身像(200cm高)	0.13	0.45	2.7	8.2	2.4'		ナデ	○	△	直筒形一側面	○	
851776	202	EDS-2	全身像(200cm高)	0.13	0.45	2.7	8.2	2.4'		ナデ	○	△	直筒形一側面	○	
851776	203	EDS-2	全身像(200cm高)	0.13	0.45	2.7	8.2	2.4'		ナデ	○	△	直筒形一側面	○	
851776	204	EDS-2	全身像(200cm高)	0.13	0.45	2.7	8.2	2.4'		ナデ	○	○	直筒形一側面	○	
851776	205	EDS-2	全身像(200cm高)	0.13	0.45	2.7	8.2	2.4'		ナデ	○	○	直筒形一側面	○	
851776	206	EDS-2	全身像(200cm高)	0.13	0.45	2.7	8.2	2.4'		ナデ	○	○	直筒形一側面	○	
851776	207	EDS-2	全身像(200cm高)	0.13	0.45	2.8	9.3	2.4'		ナデ	○	△	直筒形一側面	○	
851776	208	EDS-2	全身像(200cm高)	0.13	0.45	2.8	9.3	2.4'		ナデ	○	△	直筒形一側面	○	
851776	209	EDS-2	全身像(200cm高)	0.13	0.45	2.8	9.3	2.4'		ナデ	○	△	直筒形一側面	○	
851776	210	EDS-2	全身像(200cm高)	0.13	0.45	2.8	9.3	2.4'		ナデ	○	△	直筒形一側面	○	
851776	211	EDS-2	全身像(200cm高)	0.13	0.45	2.8	9.3	2.4'		ナデ	○	△	直筒形一側面	○	
851005	10	K4-20	全身像(200cm高)	0.60	1.20	2.4	8.3	2.4'		ナデ	○	△	直筒形一側面	○	
851006	11	EDC-1	全身像(200cm高)	0.43	1.36	2.6	7.2	2.4'		ナデ	○	△	直筒形一側面	○	
851007	2	CSD-1	全身像(200cm高)	2.4	—	2.6	8.8	ナデ		ナデ	○	○	直筒形一側面	○	
851008	2	CSD-8	全身像(200cm高)	1.60	1.20	1.9	9.3	ナデ		ナデ	○	△	直筒形一側面	○	
851009	3	CSD-8	全身像(200cm高)	—	1.31	2.1	9.7	ナデ		ナデ	○	△	直筒形一側面	○	

参考標識の「△」は直筒形を示す。
参考標識の「○」は斜面有する。
参考標識の「×」は斜面無し。
参考標識の「■」は直筒形の内側有する。

おおむねは、この工場の操業では、1時間に1000枚以上、瓦屋根瓦等の瓦は多量、これはやがて、ロードセミ、コンクリート瓦等を含む。

第7表 東田遺跡・掲載石器・石製品観察表

番号	番号	出土位置	種類	石材	最大長			重量 (g)	備考
					(mm)	(mm)	(mm)		
第8回	17	ASD-4	石錐?	チャート	23.03	10.31	3.62	0.97	
第8回	18	A区遺物包含層	剥片	黒曜石	24.53	21.68	9.41	3.57	
第8回	19	ASD-5	剥片	黒曜石	27.04	14.86	15.92	3.96	
第8回	20	ASD-6	石核	黒曜石	29.98	40.43	20.18	17.05	
第8回	21	ASD-1	石墨	流紋岩	69.16	75.08	60.95	293.83	
第8回	22	ASD-4	敲石?	砂岩	44.88	15.80	15.44	45.31	
第14回	4	ASD-5	管玉	碧石	35.40	8.28	3.02	4.74	
第19回	47	A区遺物包含層	軽石製品	軽石	42.95	35.27	28.08	9.58	
第19回	48	A区遺物包含層	軽石製品	軽石	67.96	44.19	41.51	31.96	
第23回	3	A区遺物包含層	火打石	メノウ	29.49	30.90	22.18	22.73	
第27回	24	BSD-1	軽石製品	軽石	66.08	64.55	27.21	48.63	
第40回	200	BSK-5	楔形石器	黒曜石	17.75	11.80	6.20	1.48	
第40回	201	K4-56	細部調整剥片	黒曜石	22.85	39.00	5.95	4.76	
第40回	202	K4-14	磨製石斧?	閃綠岩	67.86	29.40	20.30	75.22	未製品?
第40回	203	B区-1柄	磨石	砂岩	161.25	83.86	45.30	801.76	
第40回	204	B区-1柄	凹石	凝灰質砂岩	143.02	137.75	50.09	718.91	
第43回	37	BSI-2	凹石	安山岩	69.25	69.30	36.05	253.17	
第47回	14	BSI-8	磨石?	砂岩	60.80	44.60	38.41	75.02	石製品の可能性あり
第51回	19	BSB-2	臼玉	碧石	6.00	6.00	4.00	2.00	孔径2mm
第53回	43	BSB-3	砥石	流紋岩又はコリア	45.90	49.85	17.68	49.15	
第85回	508	BSD-2	剥片	黒曜石	22.70	40.75	14.10	8.15	
第85回	509	BSD-2	石核	黒曜石	25.30	33.95	19.37	17.75	
第85回	510	BSD-2	擦器	砂岩	124.60	106.42	33.45	542.18	
第85回	511	BSD-2	擦器	凝灰岩	47.40	45.22	16.44	33.83	
第85回	512	BSD-2	剝形横造品	碧石	37.68	31.90	5.90	12.30	遺存度50%
第85回	513	BSD-2	石製品	碧石	20.60	33.08	4.60	5.18	片刃様断面あり
第85回	514	BSD-2	不明	蛇紋岩	64.29	45.76	33.91	152.49	玉素材?
第85回	515	BSD-2	抉入柱状片刃石斧	細粒閃緑岩	68.30	41.00	30.51	163.91	
第85回	516	BSD-2	大型削り石斧?	凝灰質砂岩	208.70	86.11	60.78	951.75	
第86回	517	BSD-2	敲石	閃綠岩	84.29	81.05	40.40	437.00	
第86回	518	BSD-2	敲石	凝灰質砂岩	107.01	86.91	47.5	480.68	
第86回	519	BSD-2	敲石	砂岩	73.65	57.41	44.45	177.59	
第86回	520	BSD-2	敲石?	砂岩	131.25	104.06	101.31	280.00	
第86回	521	BSD-2	凹石	凝灰質砂岩	85.31	61.85	53.20	341.78	
第87回	522	BSD-2	凹石	安山岩	103.75	77.38	55.85	675.67	
第87回	523	BSD-2	凹石	安山岩?	126.02	72.00	59.49	806.87	被熱
第87回	524	BSD-2	凹石	砂岩	198.20	162.30	90.62	3305.36	
第88回	525	BSD-2	凹石	砂岩	117.08	82.80	75.10	1169.85	
第88回	526	BSD-2	凹石	砂岩	195.21	94.50	67.00	1507.61	
第88回	527	BSD-2	石墨	凝灰岩又はコリア	131.43	89.70	77.29	591.46	第88回528と同一個体か
第88回	528	BSD-2	石墨	流紋岩又はコリア	117.50	89.61	47.59	334.33	第88回527と同一個体か
第88回	529	BSD-2	砥石?	軽石	110.90	52.01	35.50	52.80	
第88回	530	BSD-2	砥石?	軽石	103.30	73.20	41.60	72.49	金属研磨痕あり
第89回	531	BSD-2	砥石	砂岩	88.41	40.72	24.10	96.53	
第89回	532	BSD-2	不明	火山輝石凝灰岩?	140.21	82.11	66.75	593.18	
第89回	533	BSD-2	砥石?	砂岩?	94.58	57.02	47.15	382.73	
第95回	4	BSD-2	砥石	凝灰岩	20.50	18.70	13.65	7.65	穿孔あり
第95回	5	B区-1柄	火打石	メノウ	32.48	28.81	19.60	18.26	
第95回	6	BSB-3	系臼	安山岩	76.68	80.89	56.99	338.93	
第104回	1	CSI-4	石錐	黒曜石	18.26	14.73	3.87	0.82	
第104回	2	CSI-6	石錐?	チャート	30.42	10.89	8.01	3.02	
第104回	3	CSI-6	剥片	黒曜石	15.85	16.52	2.88	0.70	
第104回	4	CSI-8	石核?	黒曜石	21.45	18.51	13.35	5.18	
第104回	7	CSD-6	扁平片刃石斧?	（緑色）凝灰岩	72.76	46.45	18.63	102.95	
第107回	4	CSI-1	凹石	凝灰質砂岩	75.33	80.48	59.35	311.29	
第107回	5	CSI-1	凹石	凝灰質砂岩	127.61	72.97	51.16	396.67	
第114回	4	CSI-6	敲石	安山岩	86.49	53.19	34.80	209.68	
第117回	6	CSD-3	磨石	砂岩	76.29	44.41	23.21	142.79	
第117回	7	CSD-3	敲石	安山岩?	75.17	75.24	41.70	318.45	
第118回	12	CSD-6	観石	凝灰岩	42.92	33.09	27.11	37.58	
第118回	13	CSD-6	凹石	火山輝石凝灰岩?	146.37	71.23	49.58	622.56	磨石の軸用
第124回	1	CSI-6	火打石	チャート	28.18	26.52	12.48	10.81	
第125回	3	DIKトレンチ	楔形石器?	黒曜石	37.66	19.83	14.71	8.81	

第8表 東田遺跡 掘載金属製品計測表

挿図	番号	出土位置	遺物名	長	最大幅	最大厚	重量 (g)	材質
				(mm)	(mm)	(mm)		
第9図	4	ASH-1	刀子	3.7	0.6	0.4	29	鉄
第19図	49	A区遺物包含層	刀子	2.1	1.5	0.4	5.6	鉄
第19図	50	A区遺物包含層	鑿又は鑿	4.5	1.2	0.4	15.6	鉄
第19図	51	A区遺物包含層	錐	2.9	0.4	0.4	2.2	鉄
第21図	1	ASD-4	刺突具	2.4	0.4	0.4	1.1	鉄
第43図	38	BSI-2	鉄賺	9.6	1.0	0.4	9.9	鉄
第47図	15	BSI-8	刀子	5.6	1.7	0.4	14.7	鉄
第53図	44	BSB-3	刀子	5.8	1.5	0.4	13.6	鉄
第89図	534	BSD-2	鉄賺	6.7	2.5	0.6	25.9	鉄
第89図	535	BSD-2	鉄賺	9.0	0.9	0.4	14.0	鉄
第89図	536	BSD-2	鉄賺	6.3	0.9	0.3	7.4	鉄
第94図	37	BSB-1	帶金具	19.7	21.6	4.9	3.2	銅

第9表 東田遺跡 掘載木製品計測表

挿図	番号	出土位置	遺物名	長	幅	厚	材質
				(mm)	(mm)	(mm)	
第90図	537	BSD-2	杭	91.0	5.1	4.8	全面的に焦げている
第90図	538	BSD-2	杭	80.1	7.6	7.3	
第90図	539	BSD-2	杭	74.7	4.7	5.4	
第91図	540	BSD-2	杭	28.2	4.6	5.2	
第91図	541	BSD-2	杭	20.5	2.8	2.9	
第91図	542	BSD-2	杭	23.5	2.6	1.7	
第91図	543	BSD-2	杭	16.5	3.3	2.6	
第91図	544	BSD-2	杭	13.6	4.1	4.3	
第91図	545	BSD-2	杭	16.7	2.8	2.5	

第10表 東田遺跡 金属生産関連遺物一覧表

擇団	番号	出土位置	遺物名	長	最大幅	最大厚	重量
				(mm)	(mm)	(mm)	(g)
第21団	2	ASD-4	楕形滓	14.4	11.4	6.8	550.0
第21団	3	ASD-4	楕形滓	7.8	7.9	3.5	159.8
		ASD-2	鍛冶滓	44.5	65.0	28.3	84.7
		A区	羽口中間部	62.0	50.5	26.0	62.7
		A区遺物包含層	鍛冶滓	37.0	30.5	17.0	22.7
		BSB-1	鍛冶滓	27.0	25.8	18.5	16.0
		BSB-1	鍛冶滓	35.0	20.5	13.0	10.9
		BSB-2	羽口先端部	28.5	21.3	20.0	14.2
		BSB-3	羽口先端部	19.5	27.0	14.0	4.0
		BSB-3	鍛冶滓	34.5	26.0	22.0	30.5
		BSB-3	鍛冶滓	30.0	26.0	18.5	16.9
		BSB-3	鍛冶滓	21.5	19.0	12.5	5.9
		BSB-3	鍛冶滓	55.5	51.0	30.5	53.5
		BSB-3	鍛冶滓	45.5	28.5	22.5	16.2
		BSB-3	鍛冶滓	31.5	30.5	28.5	18.1
		BSB-3	鍛冶滓	28.0	22.5	15.5	7.1
		BSB-3	鍛冶滓	61.0	45.0	19.5	46.8
		BSD-2	羽口先端部	54.0	42.0	23.7	34.3
		BSD-2	羽口先端部	34.2	43.3	19.5	12.4
		BSD-2	羽口先端部	32.5	29.0	15.8	7.3
		BSD-2	羽口先端部	34.0	17.5	20.3	8.3
		BSD-2	炉壁	63.5	37.8	21.5	33.1
		BSD-2	羽口先端部	41.0	34.0	20.5	12.0
		BSD-2	楕形滓	85.0	63.5	51.7	267.3
		BSD-2	楕形滓	41.2	28.0	14.5	18.6
		BSD-2	楕形滓	41.0	35.0	14.0	11.0
		BSD-2	楕形滓	40.5	28.0	17.8	17.8
		BSD-2	楕形滓	35.0	23.0	14.0	7.5
		BSD-2	楕形滓	25.0	15.0	14.0	3.7
		BSD-2	楕形滓	23.5	14.3	9.5	2.6
		BSD-2	楕形滓	18.5	12.5	7.8	1.6
		BSD-2	楕形滓	17.5	10.0	7.0	1.1
		BSD-2	楕形滓	82.0	85.0	59.0	402.9
		BSD-2	楕形滓	61.0	30.7	29.0	63.7
		BSD-2	鍛冶滓	70.5	45.0	44.2	132.3
		BSD-2	鍛冶滓	42.5	39.0	33.5	43.3
		BSD-2	鍛冶滓	45.5	32.5	24.7	22.9
		BSD-2	鍛冶滓	33.0	31.0	26.0	29.9
		BSD-2	鍛冶滓	30.0	29.5	26.5	24.8
		BSD-2	鍛冶滓	35.5	31.0	26.0	24.9
		BSD-2	鍛冶滓	35.5	27.5	20.0	13.6
		BSD-2	鍛冶滓	30.0	22.0	13.8	6.6
		BSD-2	鍛冶滓	22.5	16.0	12.5	6.5
		BSD-2	鍛冶滓	42.0	30.0	24.5	46.9
		BSI-2	羽口先端部	39.8	37.5	30.7	26.7
	L4-18		羽口先端部	49.0	52.0	24.0	29.9
	B区トレンチ		羽口先端部	25.3	17.5	14.0	4.2
	B区トレンチ		羽口先端部	19.5	14.5	12.0	2.4
	合計			1818.8	1470.6	1001.8	1890.1

第11表 東田遺跡 掘出遺物重量表 (単位: g)

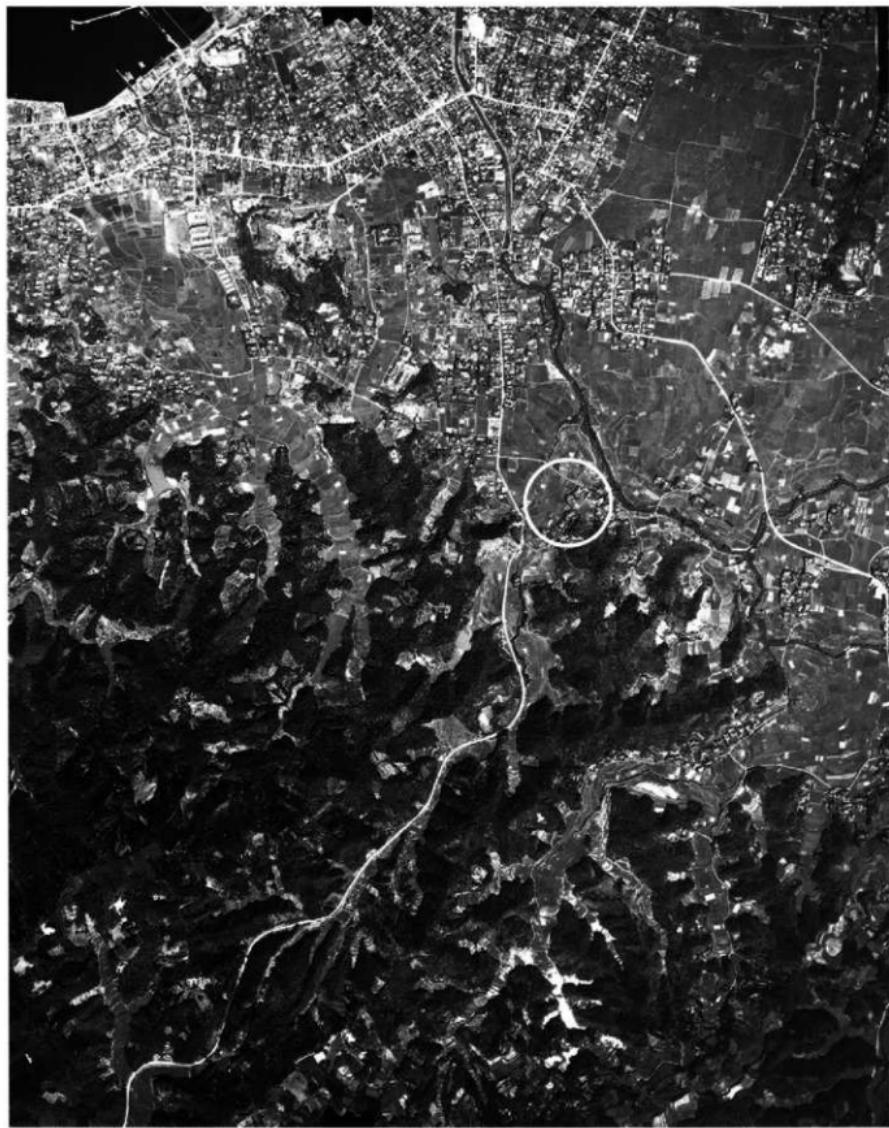
調査区	遺物・グリッド	孰生土器	土器器底・鋸類	土器器杯・高杯類	須恵器	粗造土器	手捏土器	土製品	中・近世 陶器部	石	その他	合計
A	SH-1		415	129				6				550
A	SH-1A			55								55
A	SH-2		133					5				138
A	SD-1			46				2		294		342
A	SD-2										134 織文	134
A	SD-3	2,204									60 織文	2,264
A	SD-4	332										378
A	SD-5			25				12		9		46
A	SD-6			95	41			24	42	17		219
A	SD-9								80			80
A	SP-4							4				4
A	SP-19				18							18
A	a-1 (A区包含層)			24							32	56
A	a-2 (A区包含層)							8		4		12
A	a-3 (A区包含層)			208				2	43			313
A	a-4 (A区包含層)										23	
A	a-6 (A区包含層)							5				5
A	a-7 (A区包含層)	39										39
A	b-2 (A区包含層)	13										13
A	b-4 (A区包含層)	16			5							21
A	b-5 (A区包含層)								51			51
A	b-6 (A区包含層)						152					152
A	b-7 (A区包含層)	37							16			33
A	c-6 (A区包含層)	58										58
A	d-4 (A区包含層)							5				5
A	d-5 (A区包含層)	256	177					3		10		446
A	d-6 (A区包含層)	12	1,807				20	2				1,841
A	d-8 (A区包含層)	81										81
A	e-4 (A区包含層)			29								29
A	e-5 (A区包含層)							14				14
A	e-7 (A区包含層)										6 織文	6
A	A区トレンチ	32						8				40
A	A区一括	85	232	66	162	43	89	146				823
	A区合計	2,938	2,843	861	250	195	109	393	85	435	200	8,309
B	SI-2	115			39	97	98	400			253	1,002
B	SI-3			22				129	14			165
B	SI-8	71	1,305	85	4		86	152			75	1,778
B	SI-9	62						12				132
B	SB-1	702	377	339	25		129	171			80	1,913
B	SB-2	17	189	146	30			69	27	1		479
B	SB-3	389	360	94	171		136	197		54	33 織文	1,434
B	SB-4		90	174	23							287
B	SD-1	9,152								49		9,201
B	SD-2	1,670	52,566	11,293	1,967	11,698	1,378	4,514	12	15,716		101,014
B	SD-3	84										84
B	SK-5	11,985						69	18	23	79 織文	11,574
B	SE-1		73	7				40				120
B	K3	452										452
B	K4	4,213	566	292	17		9	87			196 織文	5,370
B	L4	234						8				242
B	B区トレンチ	990	456		14		9	108				1,580
B	B区一括											1,883
	B区合計	29,829	55,972	12,452	2,348	11,795	1,914	5,905	76	18,111	308	138,710
C	SI-1		1,950				9				708	2,667
C	SI-3		1,612	238				453				2,303
C	SI-4		317	50						1		368
C	SI-6			14				17		225		256
C	SD-2		217									217
C	SD-3	189	759	543						461		1,932
C	SD-5	1,410										1,410
C	SD-6	265	110	128		144		61		764		1,572
C	SD-7		62						12			74
C	SD-8			121			36			5		162
C	SD-9		972									972
C	SD-10			55				2				57
C	SD-13	3,383										3,383
C	SD-16	284										284
	C区合計	5,631	5,999	1,149	0	144	45	545	0	2,164	0	15,677
D	1T								31			31
D	2T								14		9	89
	D区合計	0	0	0	0	0	0	45	0	9	9	120
	進跡合計	38,268	64,814	14,962	2,598	12,134	2,068	6,588	161	30,719	574	162,816

第12表 東田遺跡 非掲載遺物重量表 (単位: g)

調査区	遺構・グリッド	陶生土器	土師器底 裏・鉢類	土師器杯・ 高杯類	頸壺器	織造土器	手捏土器	土製品	中・近世 陶器	石	その他	合計
A	SH-1	58	3,815	988	46		8		58	1,330		6,323
A	SH-1A	49	557	194								710
A	SH-2	71	2,263	188	39							3,382
A	SD-1		1,540	217	35				19	143		1,954
A	SD-2		362	47	58				52	48	433 鋼・鉄	1,000
A	SD-3		1,729	1724	90	98					112	3,753
A	SD-4	346	5,289	519	216				90	100	4,379 351 鋼・鉄	11,290
A	SD-5	60	3,525	337	39				46	5	10,860 31 鋼	14,903
A	SD-6	36	4,913	571	137			34		27	2,670 44 鋼・鉄	8,432
A	SD-7		209								21	230
A	SD-8		360	57						22	194	633
A	SD-9	5	187	30				43			20	285
A	SD-11		384	85	13						36	29 鋼
A	SP-1	18	495	42								547
A	SP-2	8	279	7								294
A	SP-3		139									139
A	SP-4		276	12								295
A	SP-7		107									107
A	SP-10		72	5							1	78
A	SP-15	12	43									55
A	SP-16		134	9								143
A	SP-17		81	7								88
A	SP-18		107	17								124
A	SP-19	5	44	4								53
A	SP-20		38									38
A	SP-21		31	3								34
A	SP-23	10	136	3							3	152
A	SP-24		20	16								36
A	SP-25		26									26
A	SP-31	22	67	14								103
A	SP-32	11	28	13								52
A	a-1 (A区包含層)	11	869	605	7	11		21		10		1,534
A	a-2 (A区包含層)	113	2,230	339	12	45			4	28		2,791
A	a-3 (A区包含層)	34	1,904	628	40		7			527		2,740
A	a-4 (A区包含層)	133	1,684	172		19				233		2,241
A	a-5 (A区包含層)	48	769	39				9		4		866
A	a-6 (A区包含層)	112	1,435	102	9					29		1,687
A	a-7 (A区包含層)	198	264	227				18				707
A	a-8 (A区包含層)	44	1,246			18	136	14		26		1,484
A	a-9 (A区包含層)	5	364	2								371
A	a-10 (A区包含層)	7	401	43								482
A	b-1 (A区包含層)		371	24								306
A	b-2 (A区包含層)	22	594	31						3	38	686
A	b-3 (A区包含層)	26	834	55								915
A	b-4 (A区包含層)	46	1,631	78				3	5	173		1,936
A	b-5 (A区包含層)	24	547	69		12						675
A	b-6 (A区包含層)	5	314	14								333
A	b-7 (A区包含層)	24	604	63								691
A	b-8 (A区包含層)	9	266	31								309
A	c-2 (A区包含層)	7	73		9				6			96
A	c-4 (A区包含層)	60	1,534	129	9	6		3	75			1,316
A	c-5 (A区包含層)	20	248	3								271
A	c-6 (A区包含層)	55	1,022	108	24			8		241		1,458
A	c-7 (A区包含層)	13	425	67			15		14	2,873		3,407
A	c-8 (A区包含層)	4	283	15					11	15		328
A	c-9 (A区包含層)	7	329	10								346
A	d-4 (A区包含層)	72	743	190		24				64		1,093
A	d-5 (A区包含層)	11	810	130	9	12		5	1	1,085		2,063
A	d-6 (A区包含層)	237	3,677	311	31	45		12		1,165		5,678
A	d-7 (A区包含層)	15	212	9			19			9		264
A	d-8 (A区包含層)	37	237	52						3		329
A	d-9 (A区包含層)	22	704	56					8			790
A	e-3 (A区包含層)		123	2								125
A	e-4 (A区包含層)	49	1,474	213		8		10	15			1,769
A	e-5 (A区包含層)	4	758	81								843
A	e-6 (A区包含層)	54	943	81								1,098
A	e-7 (A区包含層)		286	11								305
A	e-8 (A区包含層)		6	11								17
A	f-3 (A区包含層)	141	45							9		195
A	f-4 (A区包含層)		335	67						92		494
A	f-5 (A区包含層)		16	3								19
A	f-7 (A区包含層)		108	22						1		131

調査区	遺構・グリッド	陶生土器	土師器破片・鉢類	土師器杯・高杯類	頸壺器	軽造土器	手捏土器	土製品	中・近世 陶磁器	石	その他	合計
A	A区トレンチ	582	6,694	1,465	47	161		22	3	1,440	15 スラダ	10,399
A	A区一坑	295	15,030	1,941	45	666	86	20	45	742	163 瓦・瓦・瓦	19,034
	A区合計	4,845	70,062	10,949	941	1,139	236	256	397	29,978	1,186	128,990
B	SI-2	64	9,493	128	428	83	56	8	14,654	152 瓦・瓦	25,076	
B	SI-3	257	7,000	959	97	235	32	18	90	827	3 瓦	9,318
B	SI-8	771	8,000	1,017	27	41	37	14		616	8 瓦	10,581
B	SI-9	177	1,557	345						506		2,385
B	SB-1	9,600	37,396	2,703	99	80	148	44		1,253		51,325
B	SB-2	1,527	27,351	2,484	54	164	54	82			3 瓦	31,719
B	SB-3	6,000	75,630	11,000	685	343	593	242	159	3,201	67 瓦・骨	97,920
B	SB-4	763	2,546	297	15	62		7		56		3,746
B	SD-1	714	7,000	351	43	47	37	11		485		8,688
B	SD-2	6,500	20,377	43,624	1,166	38,500		1,490	449	120,023	457 瓦・瓦	420,586
B	SD-3	100	2,464	126	18	11				151		2,870
B	SK-5	1,897	16,021	1,586	302	10	131	53	56	259	42 瓦	30,351
B	SE-1	2	700	3	4					33		742
B	K3			18								18
B	K4	660	21,010	2,025	256	4		15	5	1,308	36 鉄	25,319
B	L3			45								45
B	L4	73	5,000	596	92	89			13	216		6,079
B	L5	107	1,356	147	9				37	53		1,709
B	B区トレンチ	1,786	21,944	5,997	294	1,909	37	26	50	385		32,518
B	B区一坑	648	14,948	1,705	262	29	116	30	271	237	197 瓦・瓦	17,673
B	B区合計	31,846	45,6645	84,470	3,561	43,042	1,318	2,088	1,138	144,283	875	769,266
C	SI-1	349	3,034	339						16,073		19,795
C	SI-3	418	3,987	574					2	15,031	57 瓦	21,379
C	SI-4		6,907	427	48		92	21		2,976	10 鉄	10,481
C	SI-6	190		72	6				72	113		453
C	SI-7	98	124					9		223		454
C	SD-1	90	705	30						45		860
C	SD-2	138	1,011	19					11,445	68		12,681
C	SD-3	293	6,286	460		36	19	48		438		7,582
C	SD-5	94	562	96						43		795
C	SD-6	1,023	10,170	872		134		75		1,587	4 鉄	13,965
C	SD-7	125	952	39						73		1,170
C	SD-8	89	1,904	66		20	4			203		2,376
C	SD-9	189	2,270	191	6					1,278		3,934
C	SD-10	80	1,004	89			44	3		55		1,275
C	SD-11	8	995	30	197					404		1,634
C	SD-13	865	5,642	156					2	94		6,759
C	SD-14											145
C	SD-15											135
C	SD-16			9								9
C	C区トレンチ		241	9								250
	C区合計	4,049	45,069	3,449	257	192	159	160	11,521	38,764	71	106,622
D	IT		327	79	36		22		4	643		1,111
D	2T	3	2,248	356	159	128				917		3,811
	D区合計	3	2,575	435	195	128	22	0	4	1,560	0	4,922
	遺構合計	40,744	586,351	99,294	4,954	44,501	1,735	2,504	13,060	214,525	2,132	1,008,800

写 真 図 版



遺跡周辺航空写真 (1: 14,000)



ASD-3 遺物出土状況



ASD-3 完掘状況



ASH-1・ASH-1A
遺物出土状況



ASH-2 完掘状況



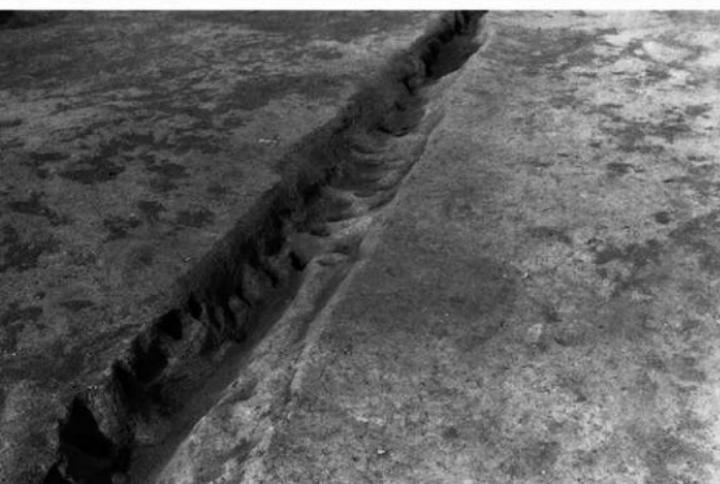
ASH-4・ASH-5・
ASH-6 完掘状況



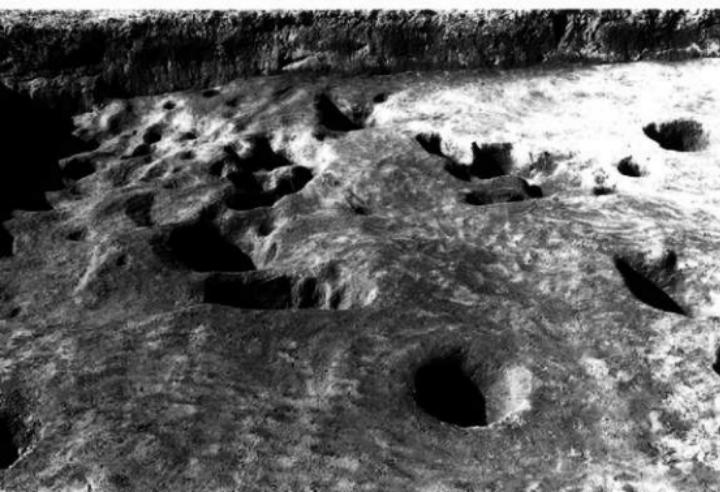
ASH-4・ASH-5・
ASH-6 完掘状況



ASD-1 完掘状況



ASD-8 完掘状況



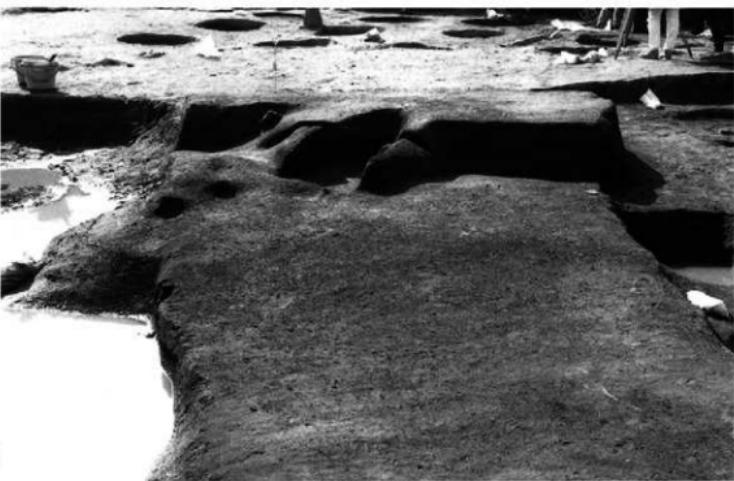
A区ピット群



BSI - 2 完掘状況



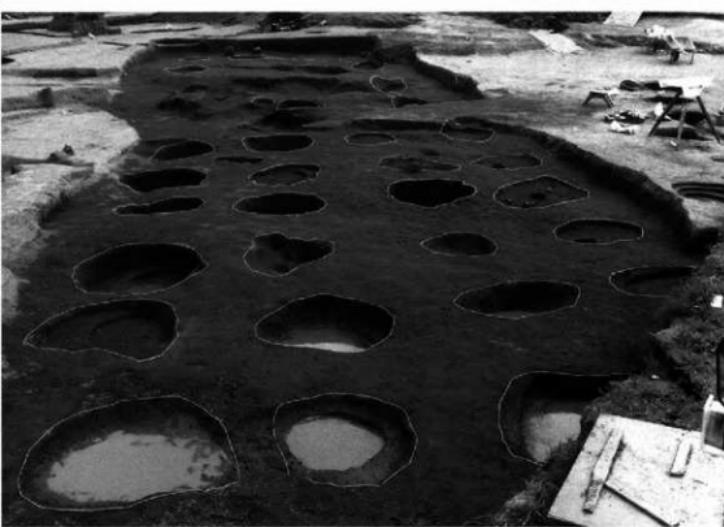
BSI - 3 完掘状況



BSI - 8 完掘状況



BSB-1 完掘状況



BSB-2・BSB-3 完掘状況



BSB-2・BSB-3 完掘状況



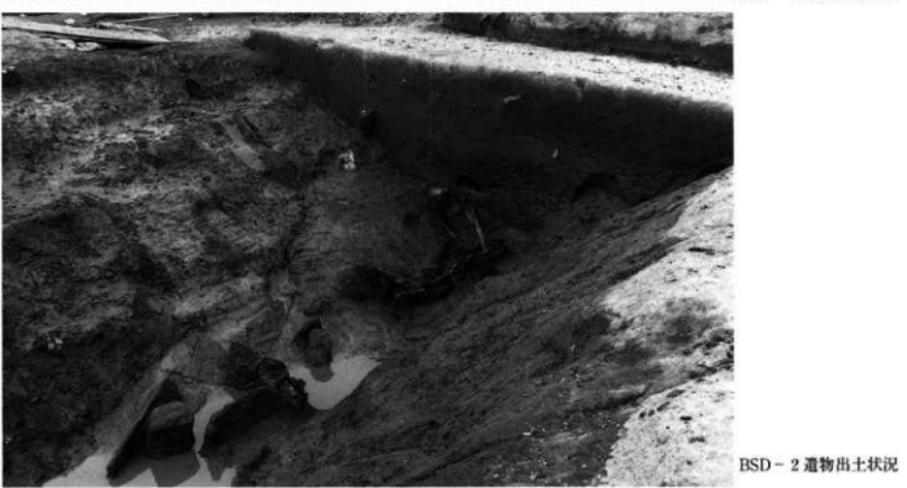
BSD-1 遺物出土状況



BSD-1 遺物出土状況



BSD-2 遺物出土状況





BSD - 2 完掘状況



BSD - 2 完掘状況



BSK - 5 遺物出土状況



C区全景



CSI-1 実掘状況



CSI-1 カマド



CSI-3 完掘状況



CSI-3 カマド



CSI-3 カマド



CSI-6 完掘状況



CSD-1・CSD-2 完掘状況



CSD-5 遺物出土状況



CSD-6 遺物出土状況



CSD-7・CSD-8
遺物出土状況



CSD-13 遺物出土状況



CSD - 11完掘状況



CSD - 11完掘状況



CSD - 12完掘状況



第7図3



第7図10



第15図3



第8図9



第15図9



第7図6



第9図1



第18図10



第9図2



第18図12



第7図7



第11図2



第18図15



第7図8



第15図1

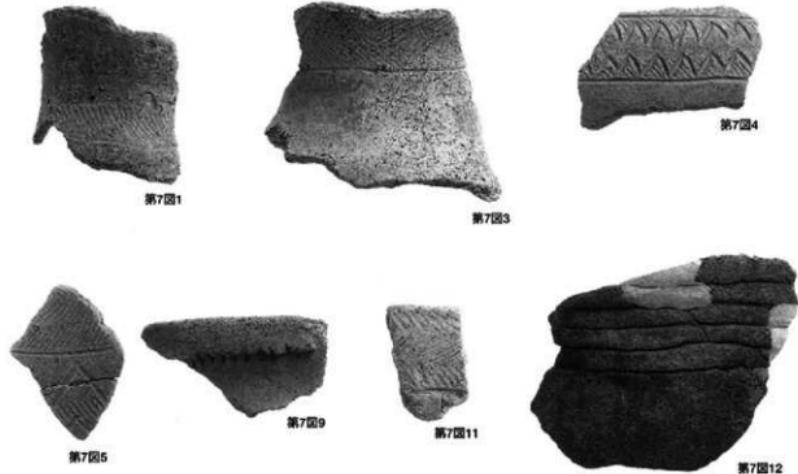


第18図17

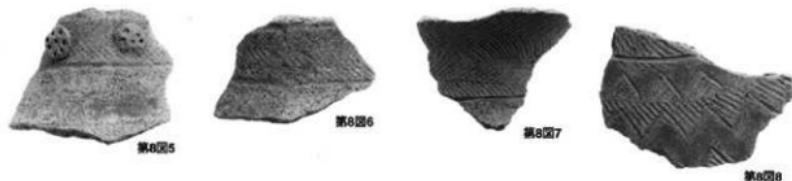
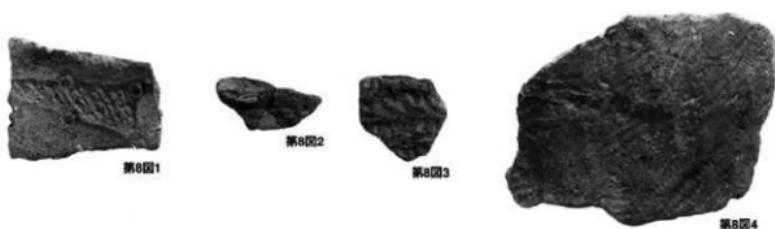
A区出土土器（1）



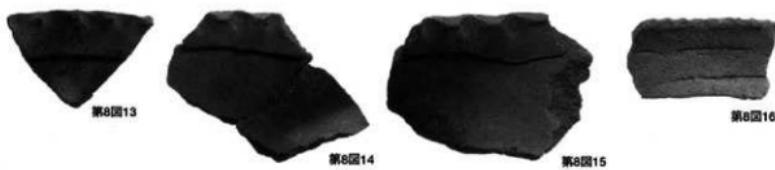
A区出土器（2）



ASD-3 出土土器



A区遺構外出土 弥生時代以前の土器（1）



A区遺構外出土 弥生時代以前の土器（2）



第10図1



第11図1



第15図2



第15図4



第20図2

ASH-1A, ASH-2, ASD-6 出土土器



第9図3



第11図3



第14図2



第14図3



第15図5



第15図6



第19図30



第19図31



第19図32



第19図33



第19図34



第19図35



第19図36



第19図37



第19図38



第19図39



第19図40



第19図41



第19図42



第19図43



第19図44



第19図45



第19図46



第20図4



第20図5



第20図6



第20図7



第20図8



第20図9

A区出土土製品



第18図1



第18図2



第18図3



第18図4



第18図5



第18図6



第18図7



第18図8



第18図11



第18図13



第18図14



第18図16



第18図22



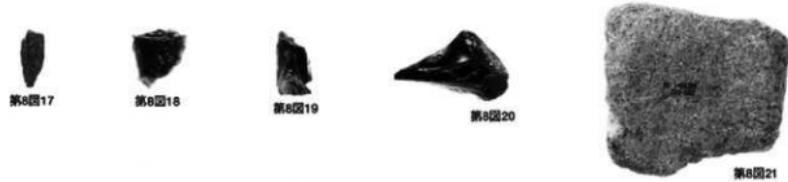
第18図23



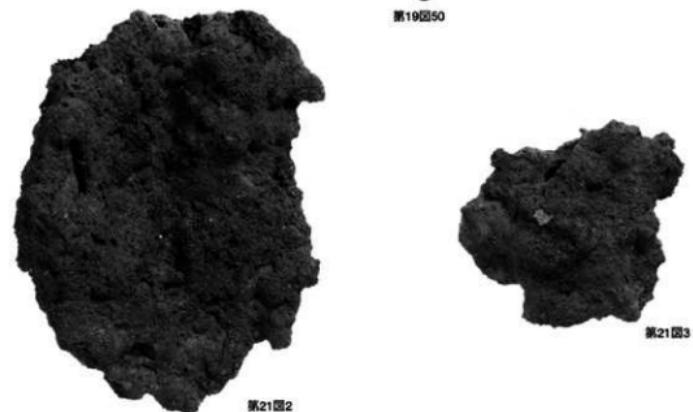
第18図24



第18図25



A区出土石器・石製品



A区出土鉄製品・腕形滓



第25図1



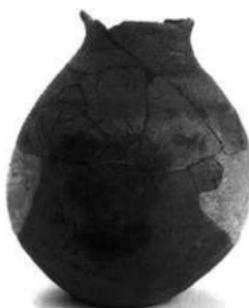
第26図4



第30図1



第26図2



第26図5



第30図2



第26図3



第27図18



第30図3



第31図11



第26図6



第27図23



第31図12

B区出土土器（1）



第31図13



第32図18



第33図10



第31図14



第32図19



第33図14



第31図15



第32図20



第33図15



第32図17



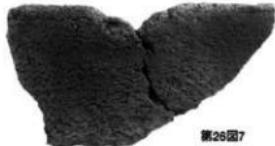
第33図9



第33図16



B区出土土器（3）



第26图7

第27图8

第27图9



第27图12

第27图13

第27图14



第27图15

第27图16

第27图17

BSD-1出土土器（1）



第27图19



第27图20



第27图21



第27图22



第28图1



第28图2



第28图3

BSD-1 出土土器 (2)



第31图4



第31图5



第31图6



第31图7



第31图8

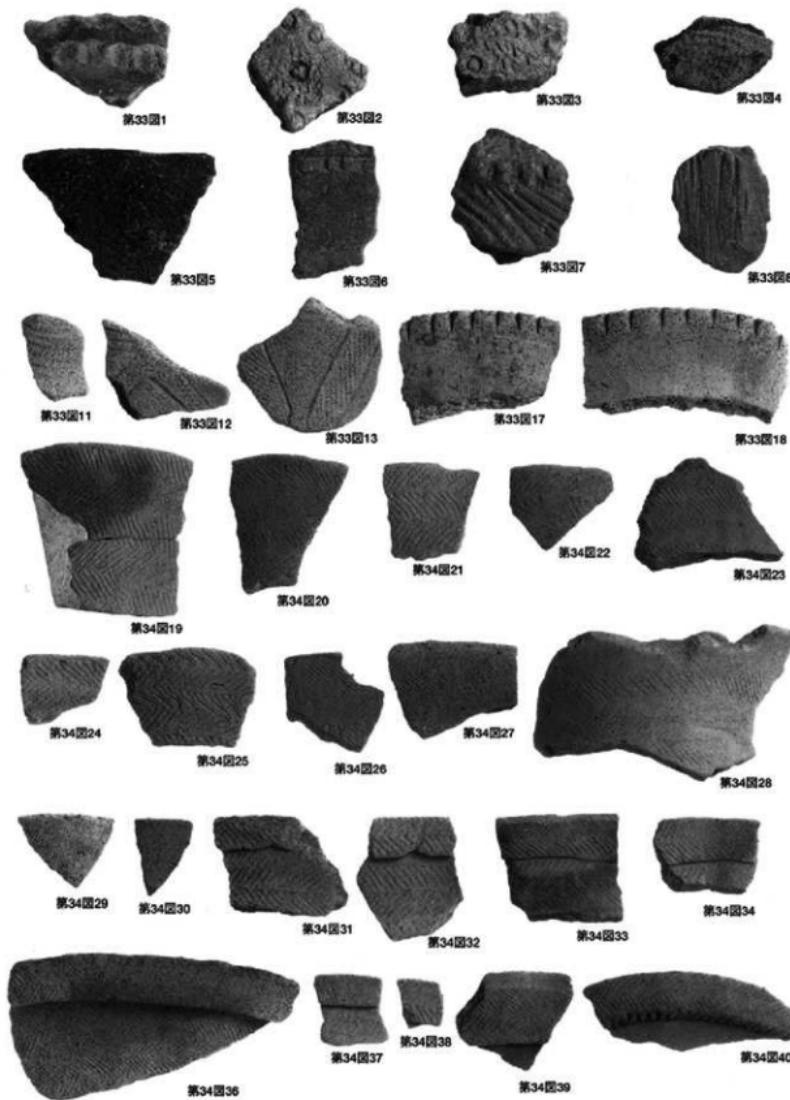


第31图9

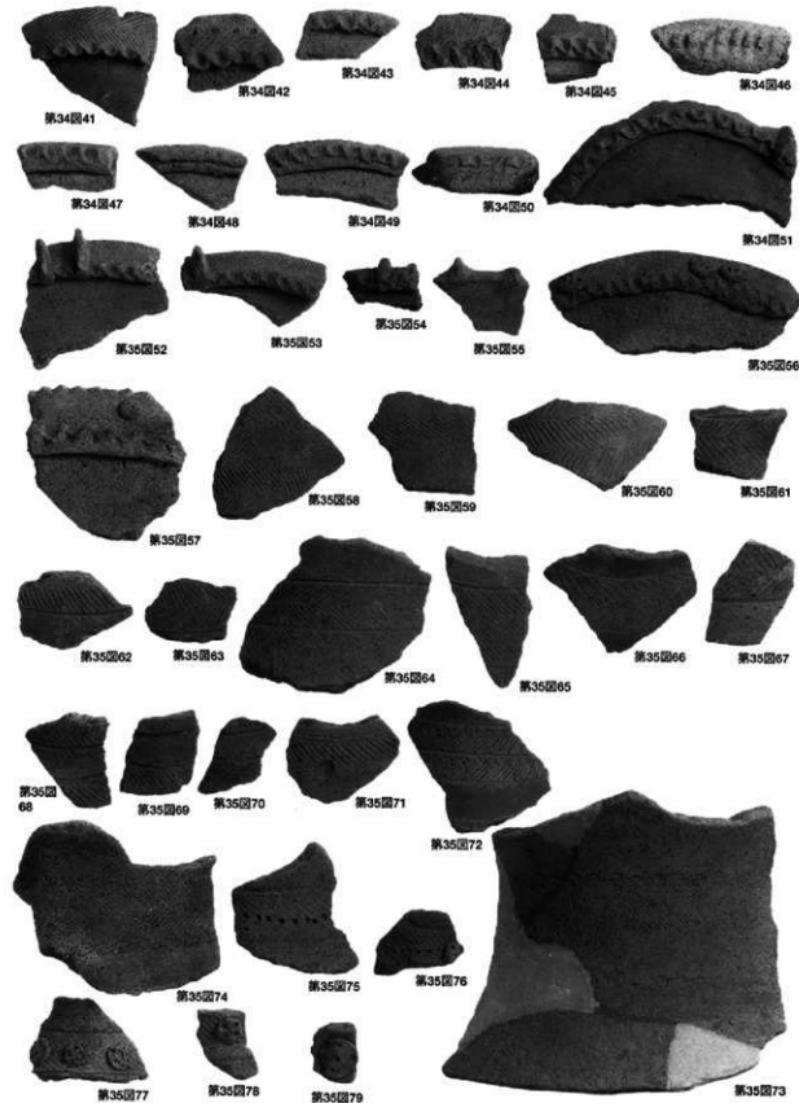


第31图10

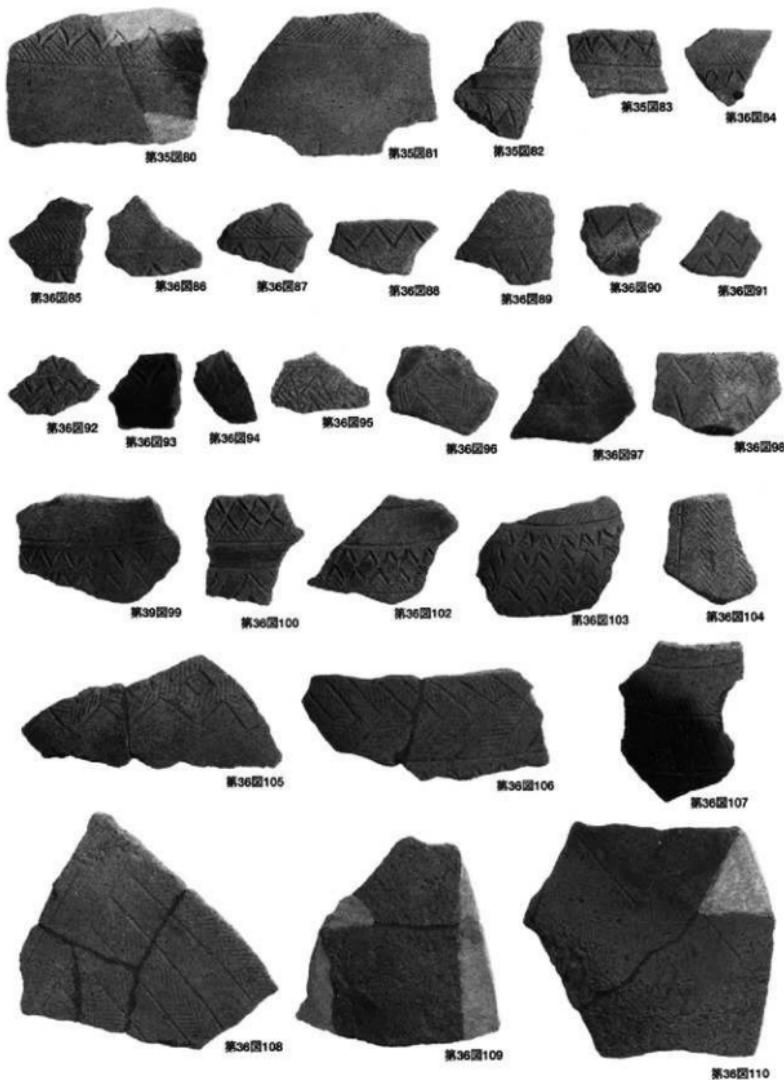
BSK-5 出土土器



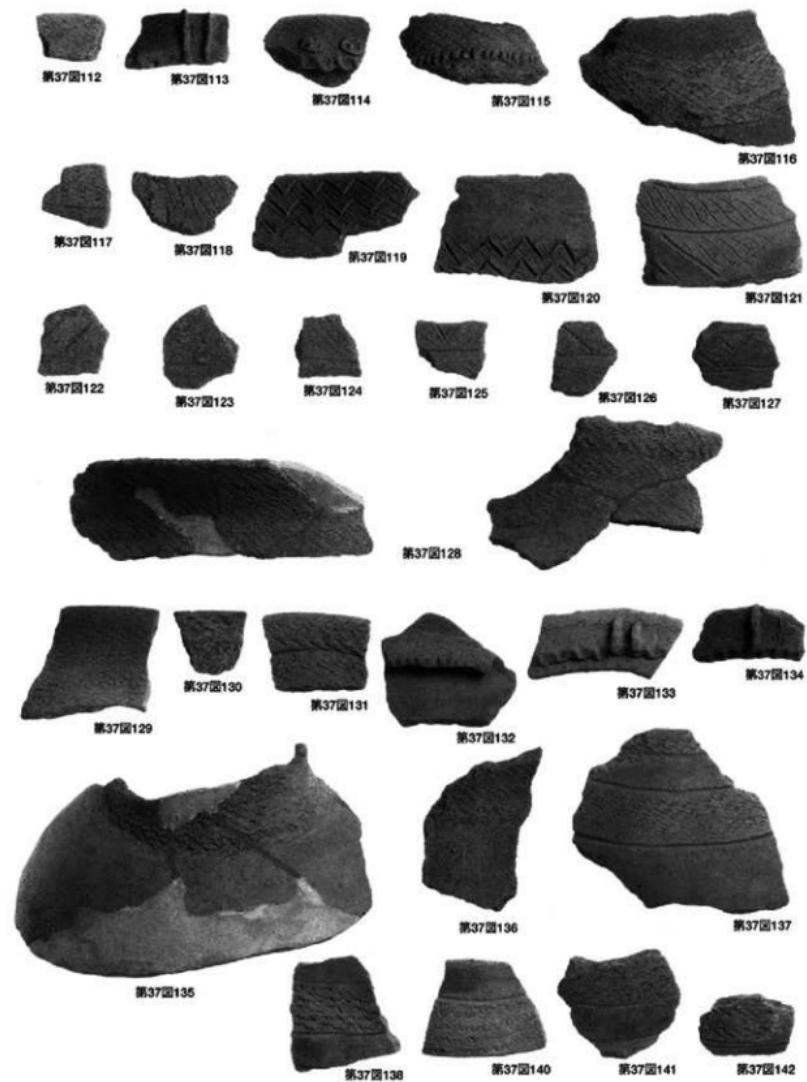
B区遺構外出土 弥生時代以前の土器（1）



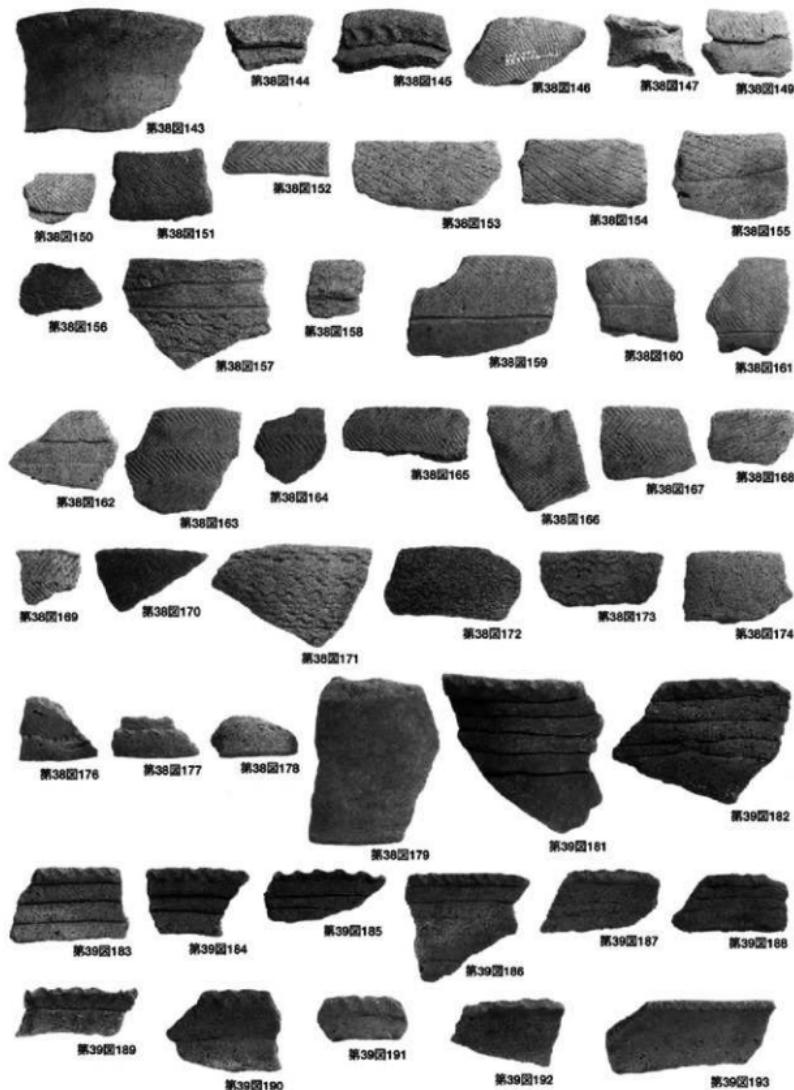
B区遺構外出土 弥生時代以前の土器（2）



B区造構外出土 弥生時代以前の土器（3）



B区遺構外出土 弥生時代以前の土器（4）



B区遺構外出土 弥生時代以前の土器（5）



第43図1



第47図6



第50図11



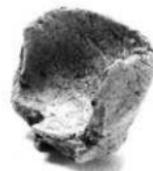
第43図3



第50図1



第50図12



第43図4



第50図2



第51図5



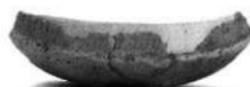
第43図5



第50図3



第51図11



第47図1



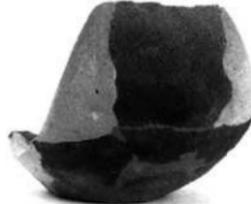
第50図6



第51図12



第47図5



第50図7



第53図21

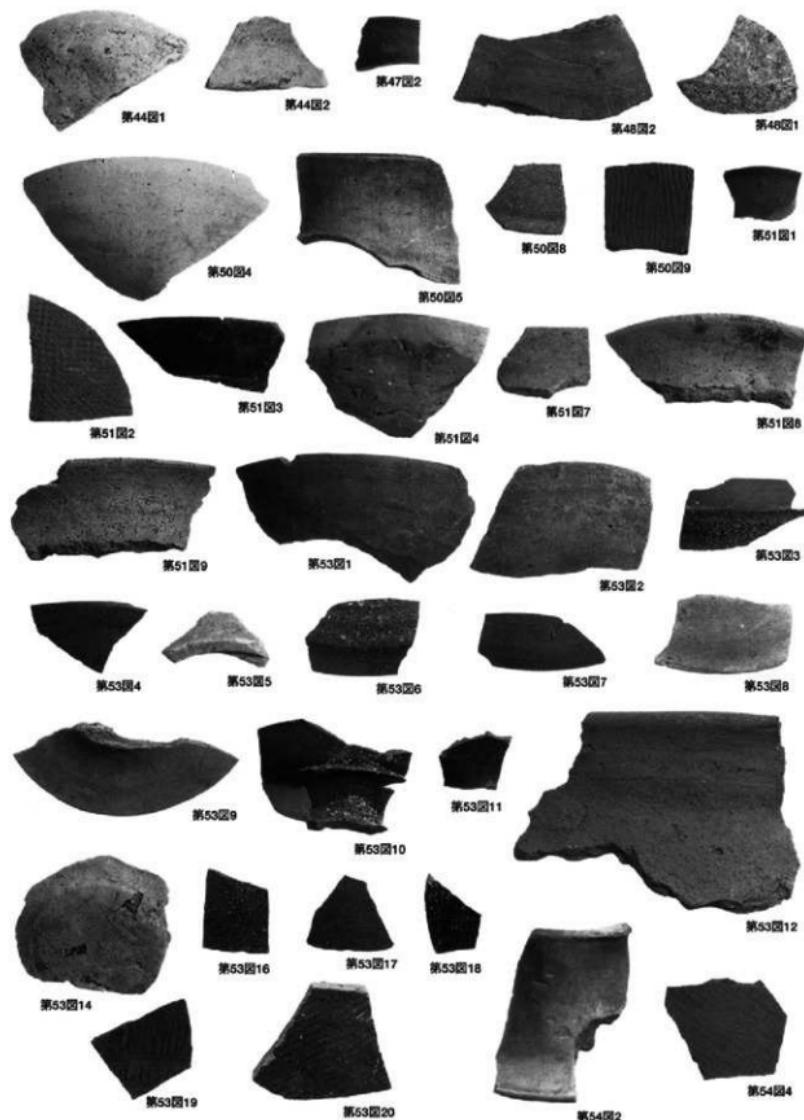


第50図10

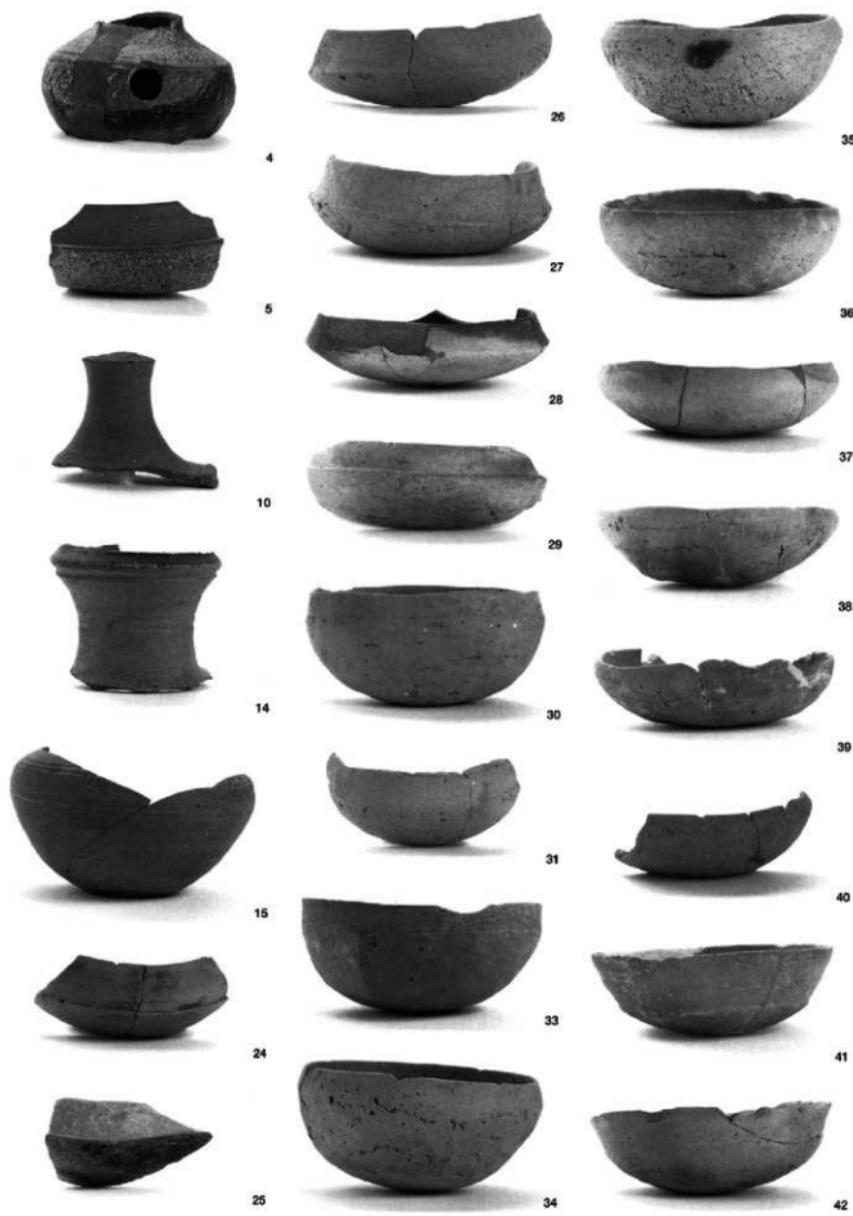


第53図22

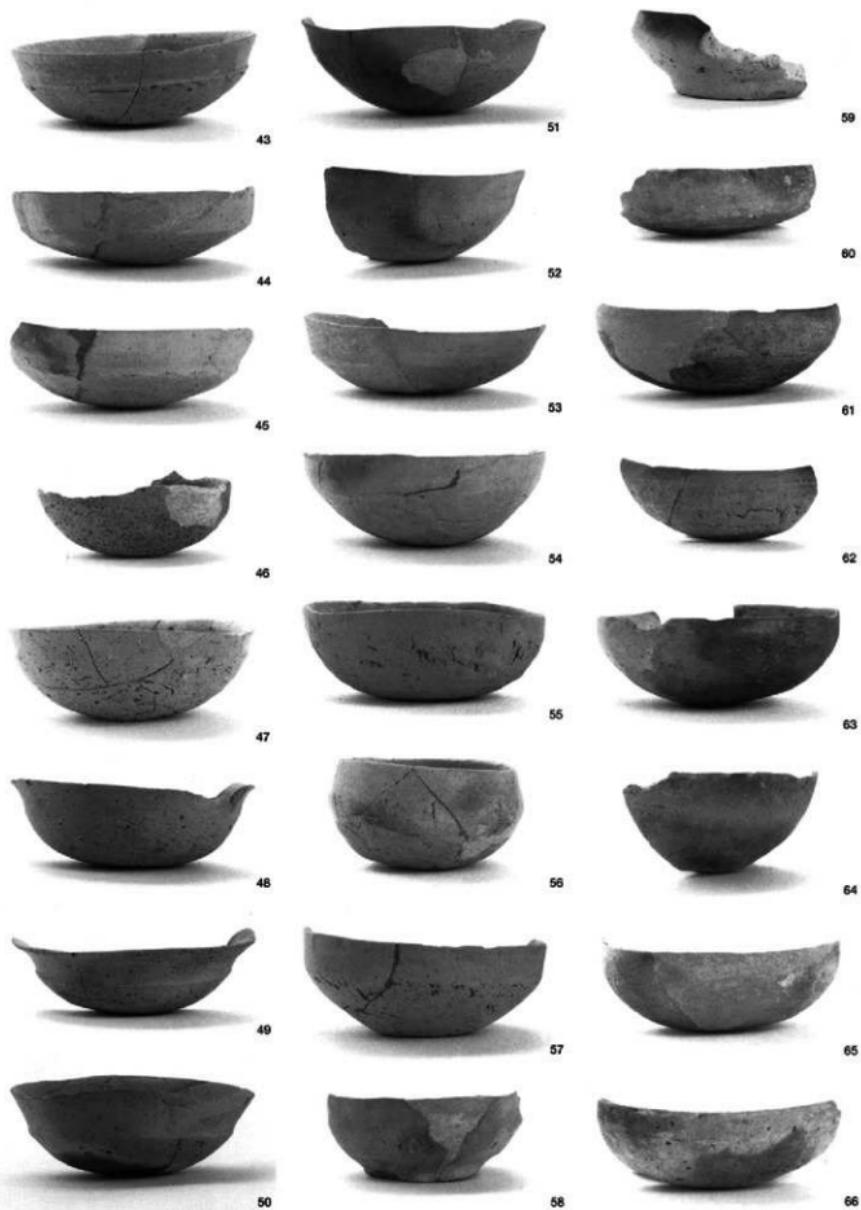
BSI, BSB出土土器 (1)



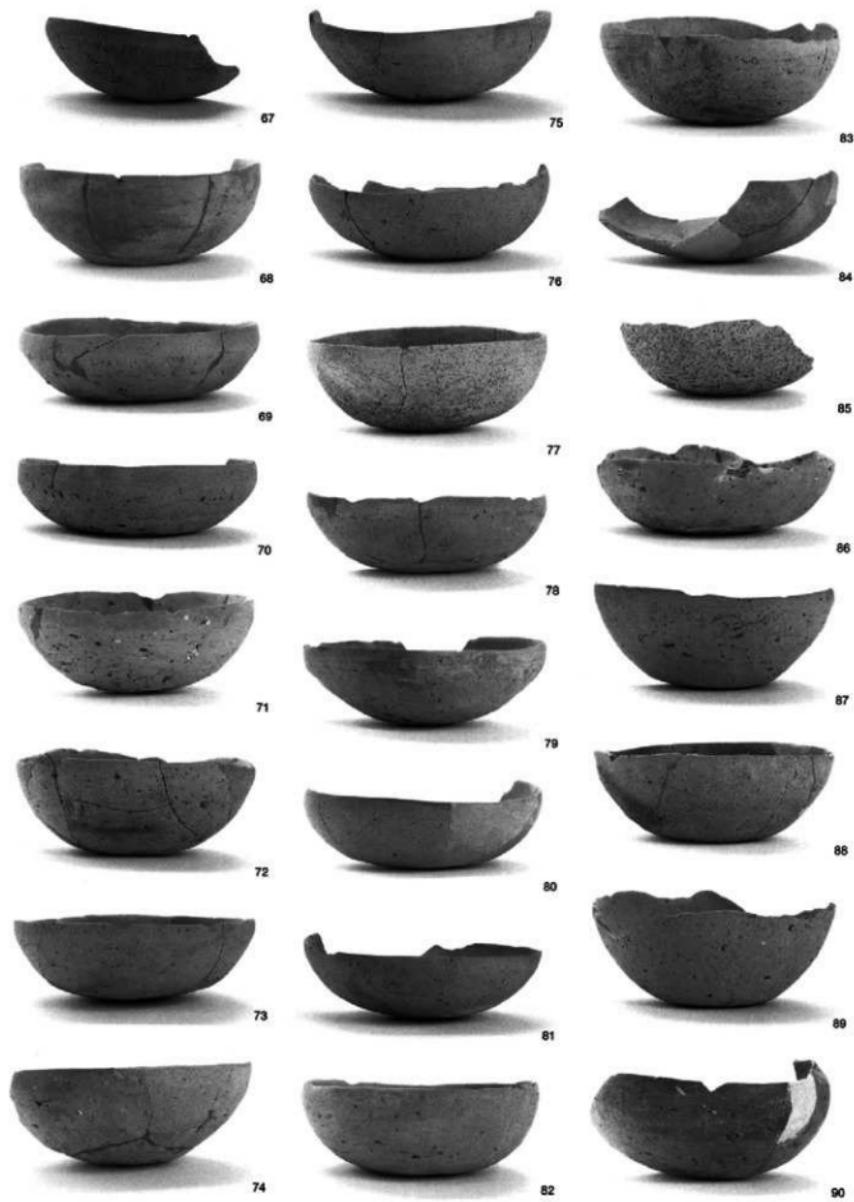
BSI, BSB出土土器 (2)



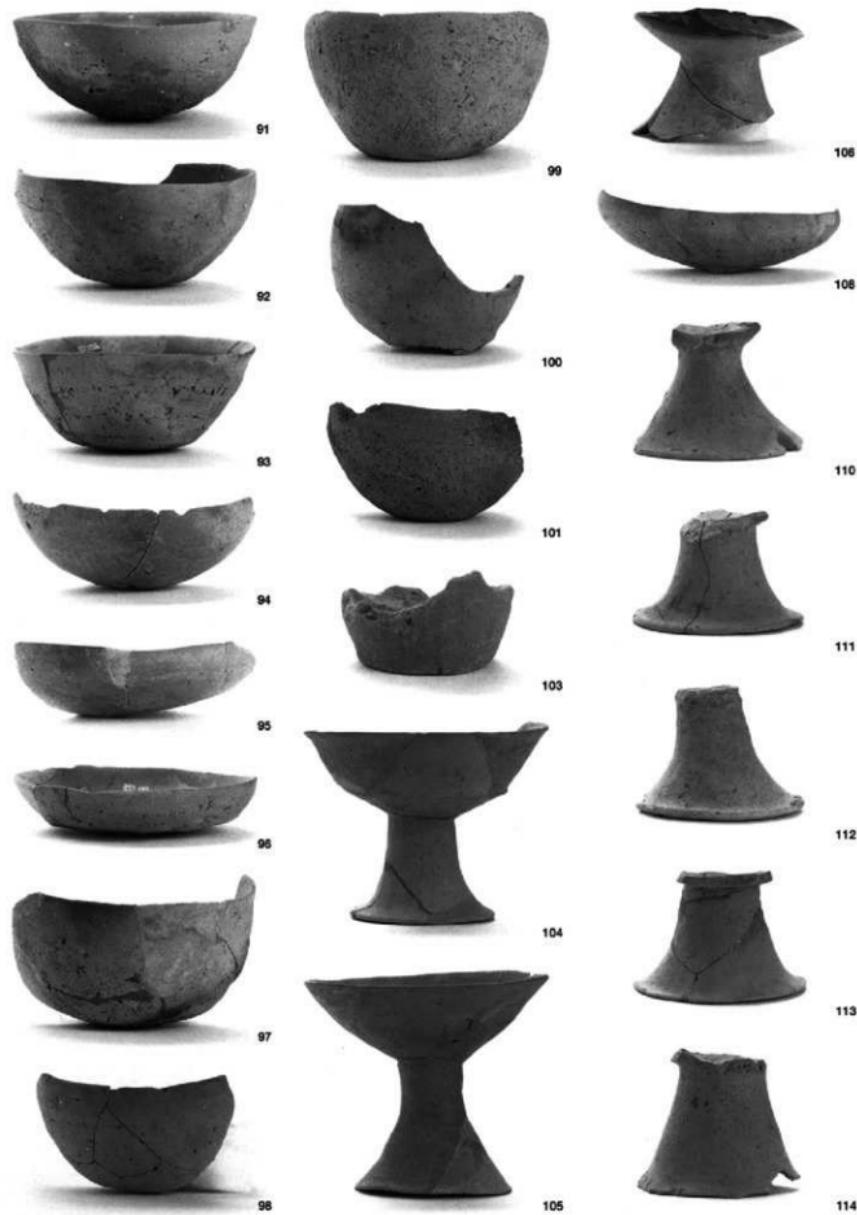
BSD-2 出土土器 (1)



BSD-2 出土土器 (2)



BSD-2 出土土器 (3)



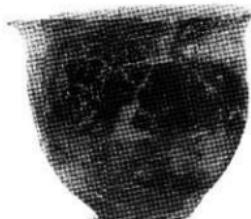
BSD-2 出土土器 (4)



115



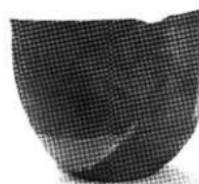
121



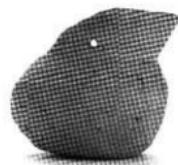
127



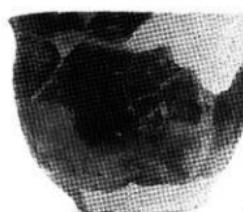
116



122



117



123



118



124



119



125



120



126



130

BSD-2 出土土器 (5)



131

135

139



141

132

136



142



137

133



143

134



138



144



147



150



146



148



151



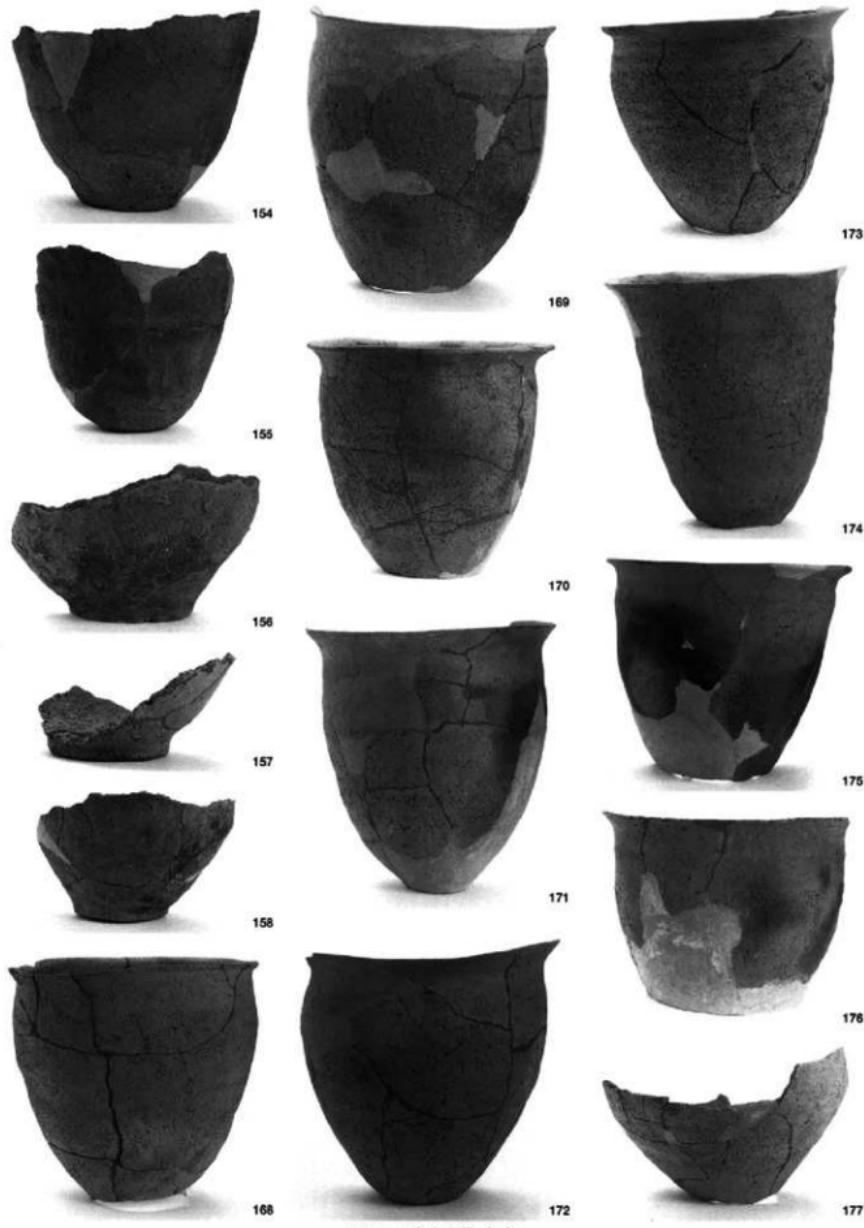
152



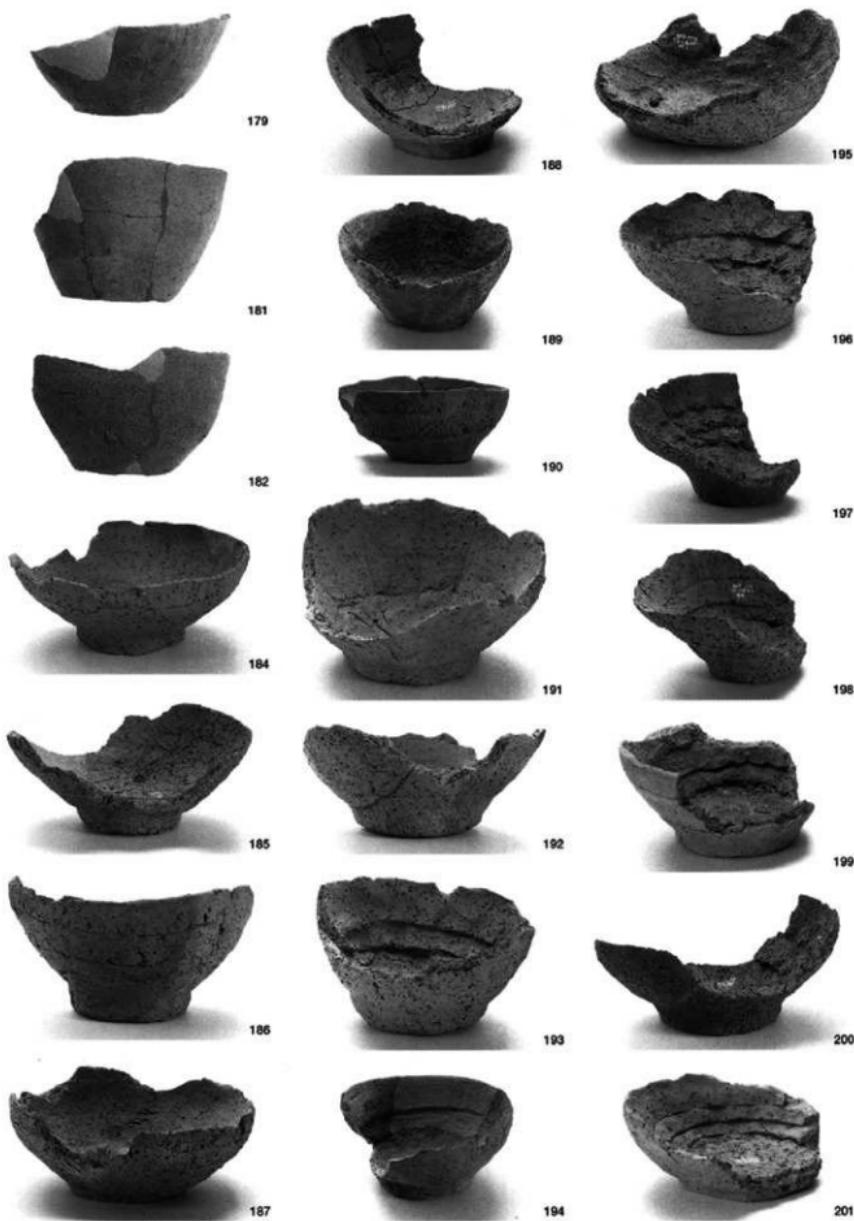
149



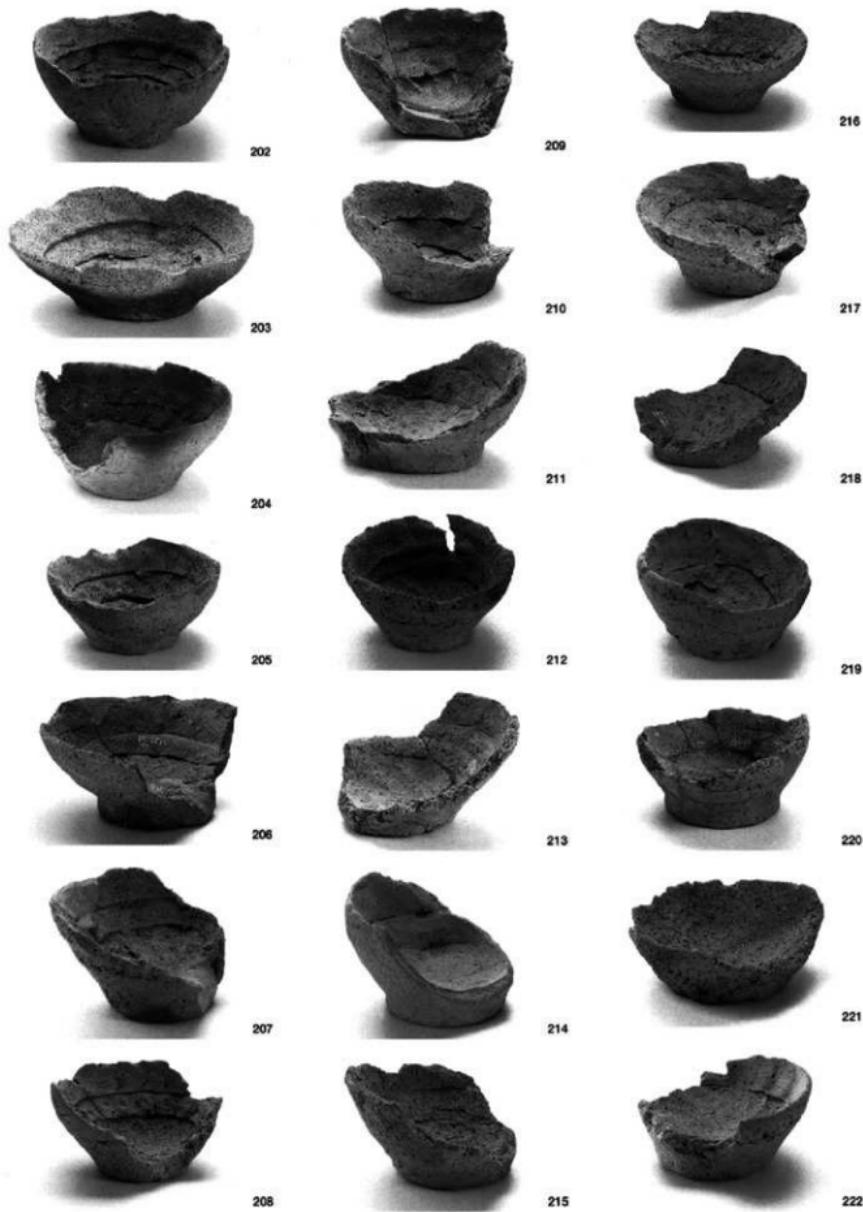
153



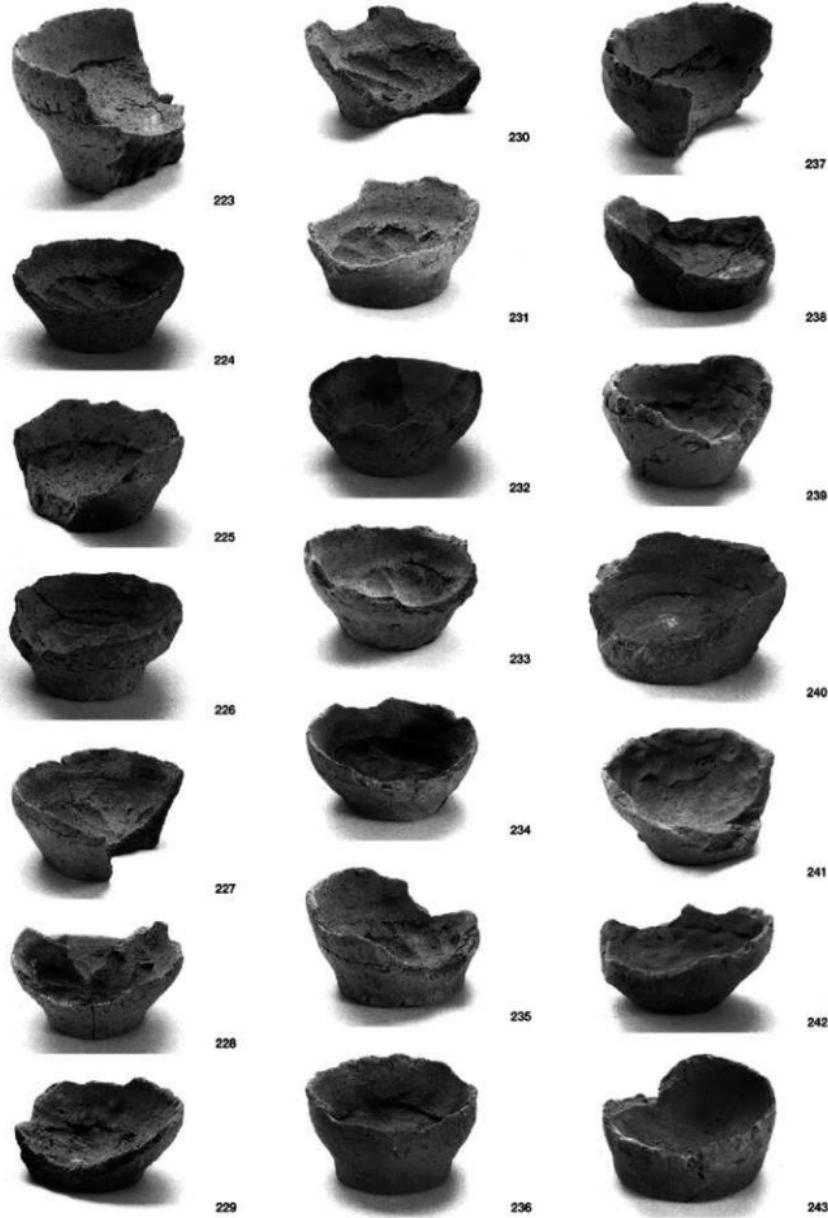
BSD-2 出土土器 (8)



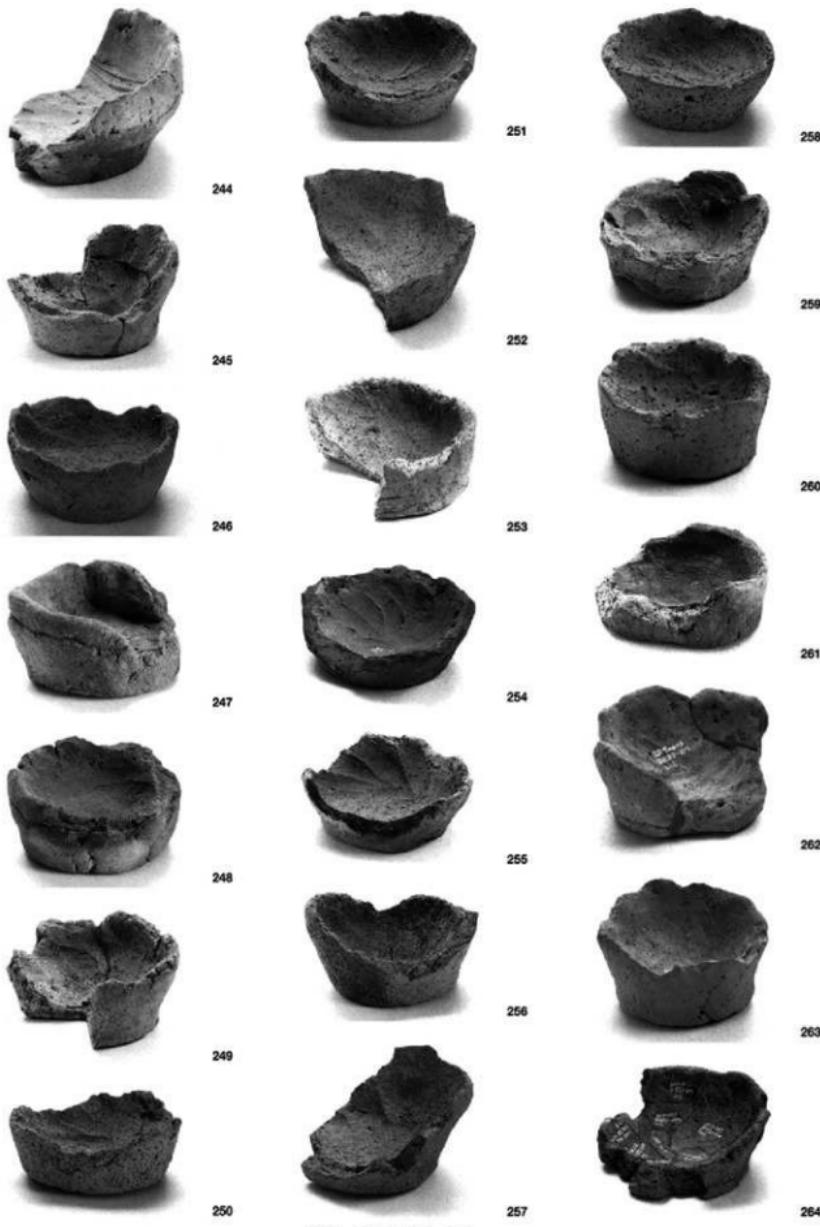
BSD-2 出土土器 (9)



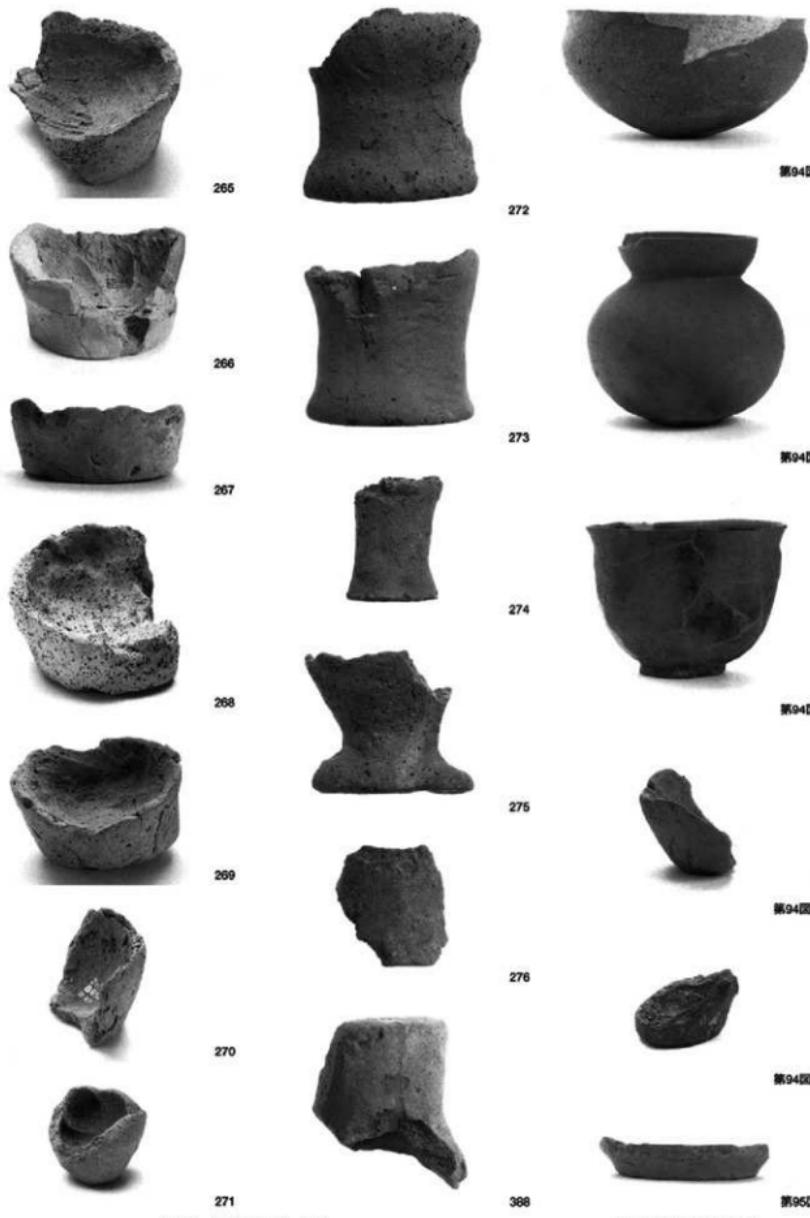
BSD-2 出土土器 (10)

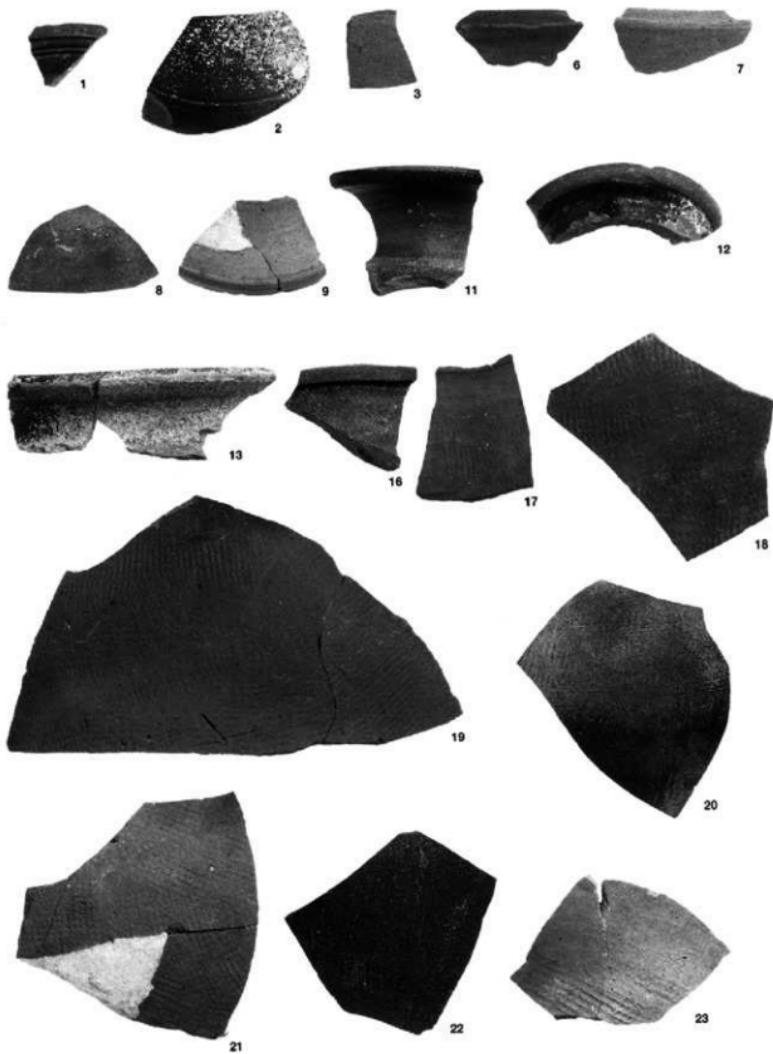


BSD - 2 出土土器 (11)

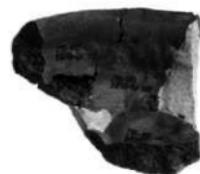


BSD-2 出土土器 (12)





BSD-2 出土土器 (14)



32



102



107



109



140



178

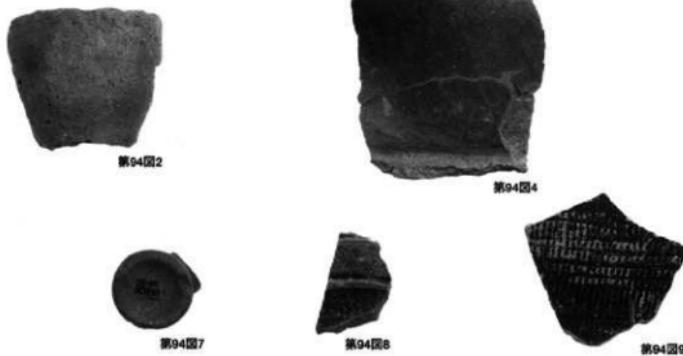


180

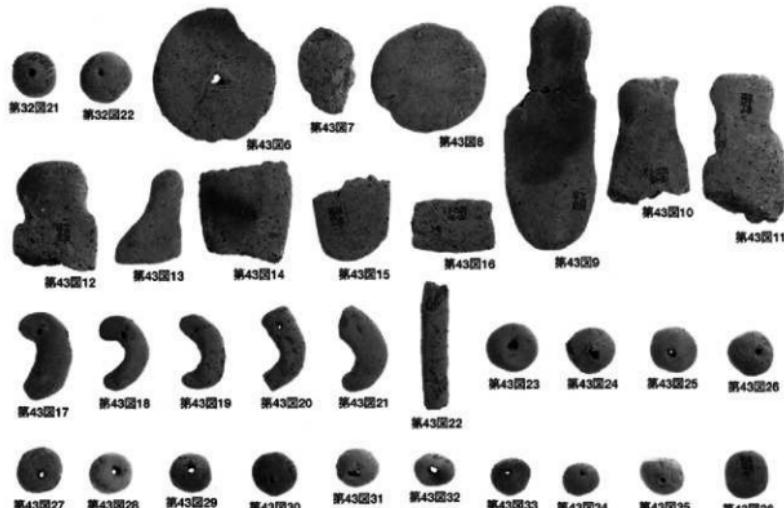


183

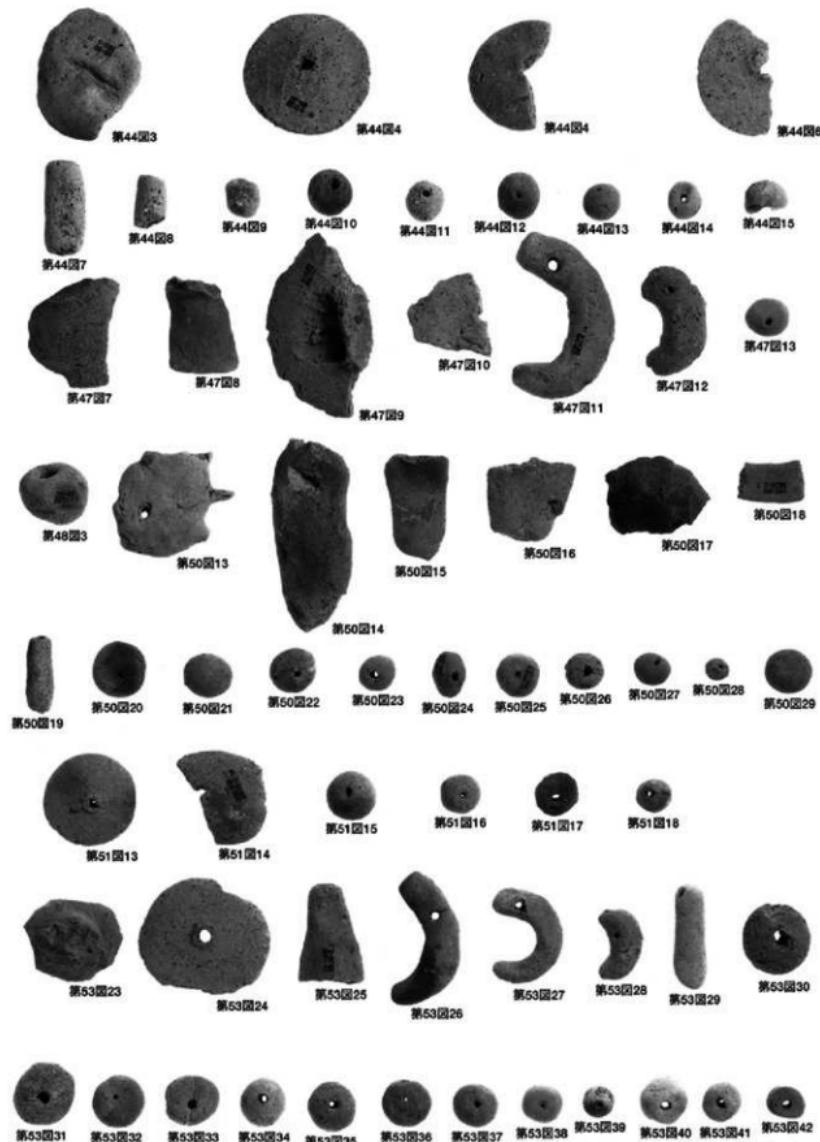
BSD - 2 出土土器 (15)



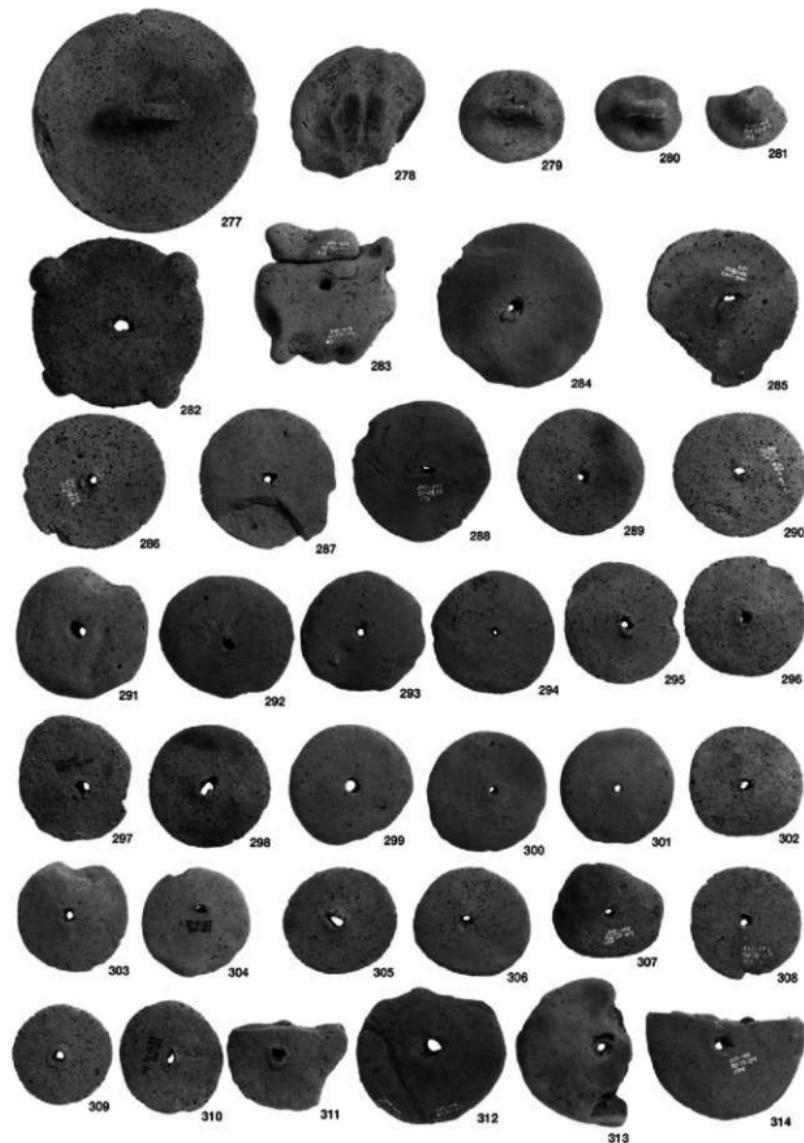
BSE - 1, B区遺構外出土土器



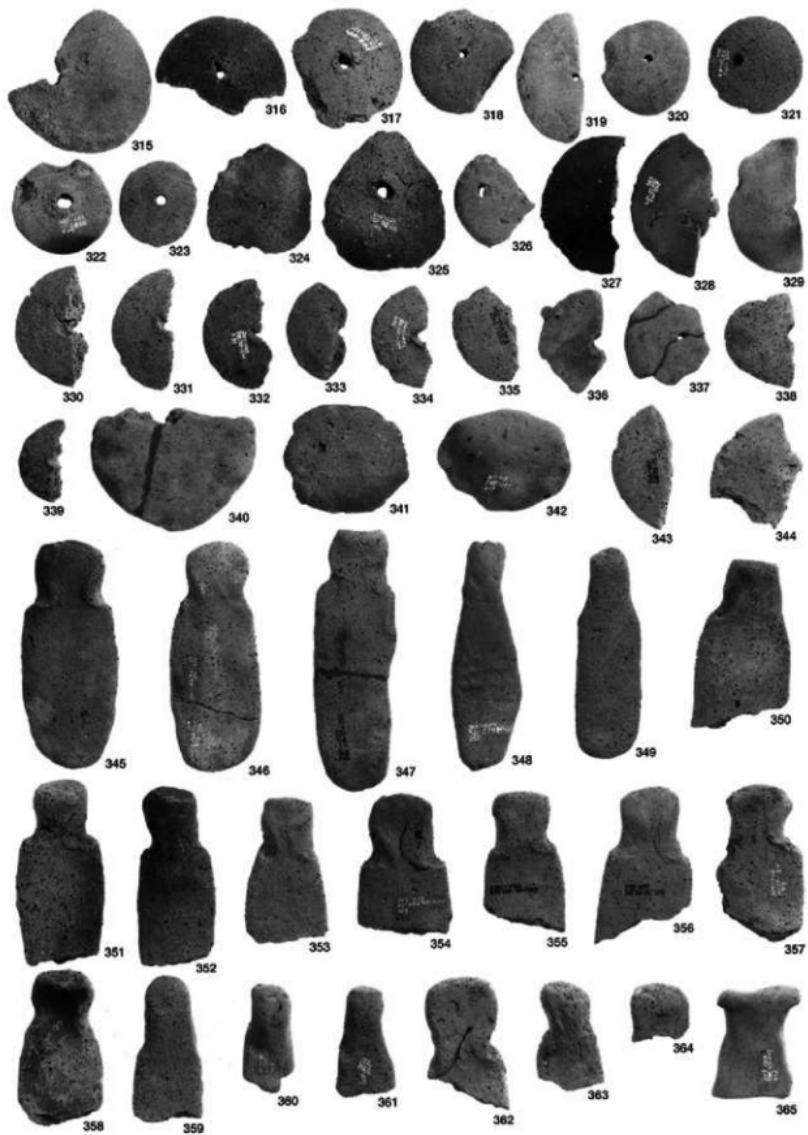
BSK - 5, BSI - 2 出土土製品



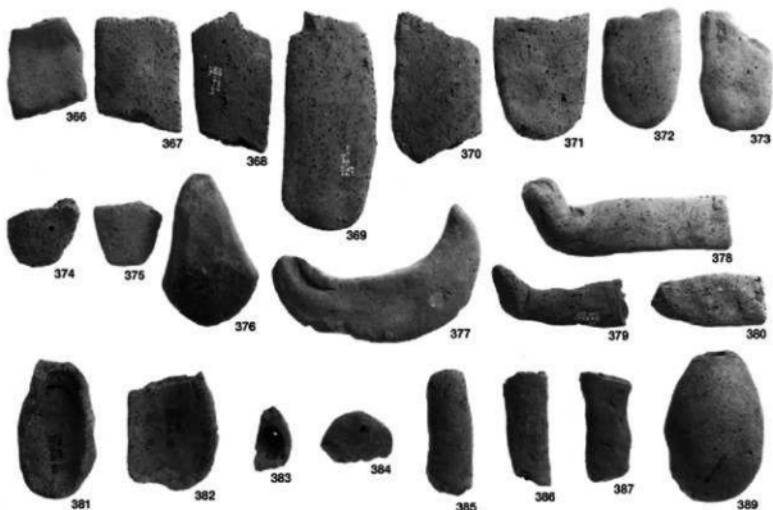
BSI-3·8·9, BSB-1·2·3出土土製品



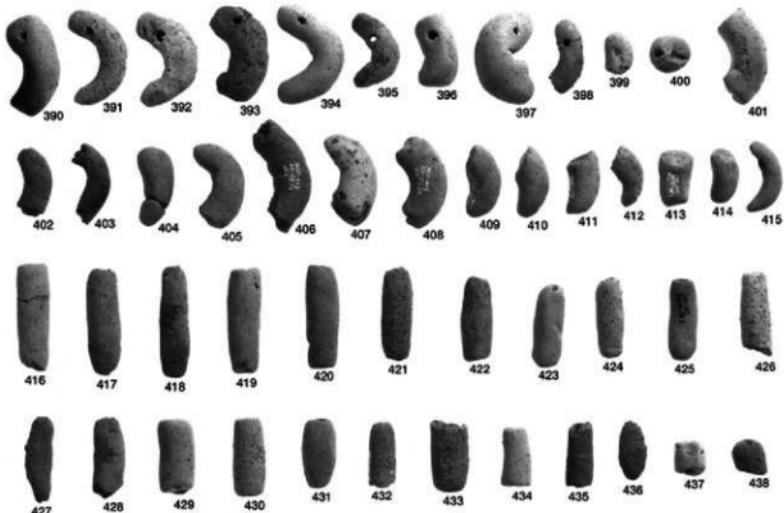
BSD-2 出土土製品 (1)



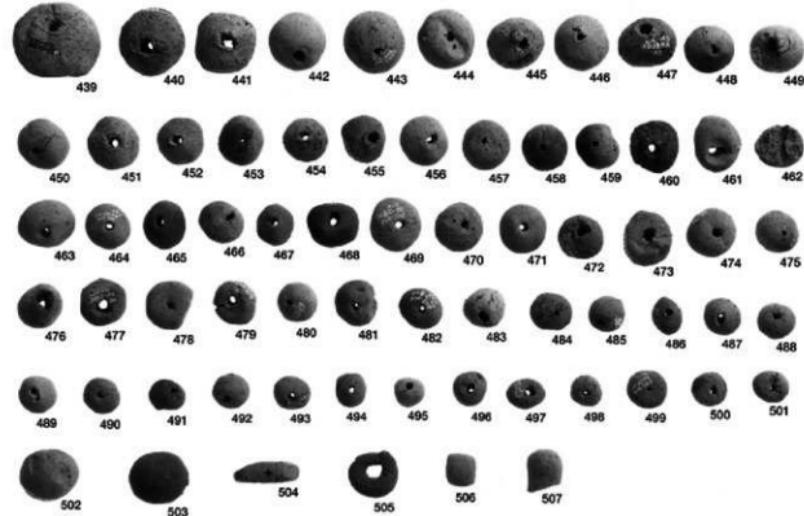
BSD-2 出土土製品（2）



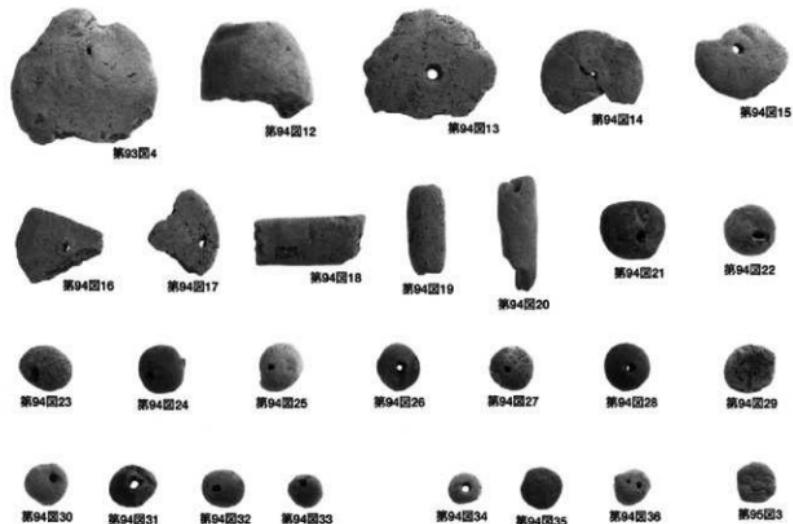
BSD-2 出土土製品 (3)



BSD-2 出土土製品 (4)



BSD - 2 出土土製品 (5)



BSE - 1, B区遺構外出土土製品



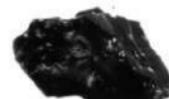
第40图200



第40图201



第51图19



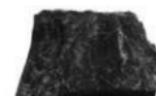
第85图508



第85图509



第85图512



第85图513

B区出土石器・石製品（1）



第27图24



第40图203



第40图204



第43图37



第40图202



第47图14



第53图43



第85图511



第85图514

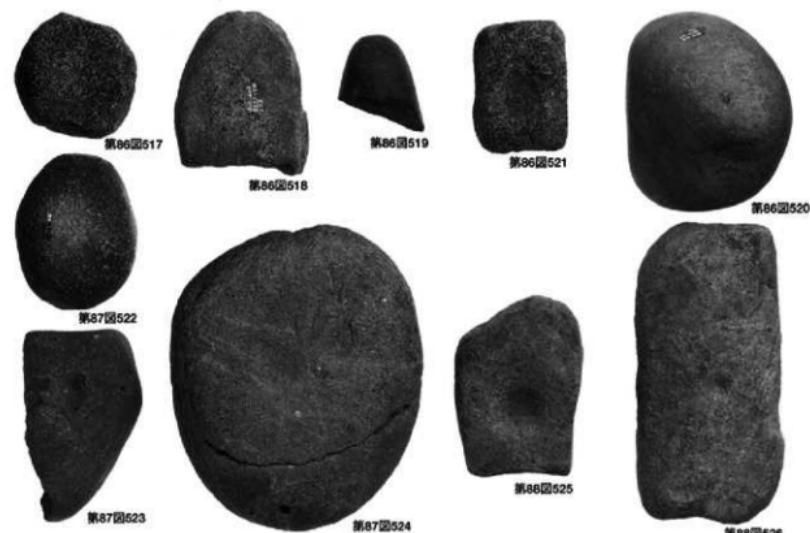


第85图515

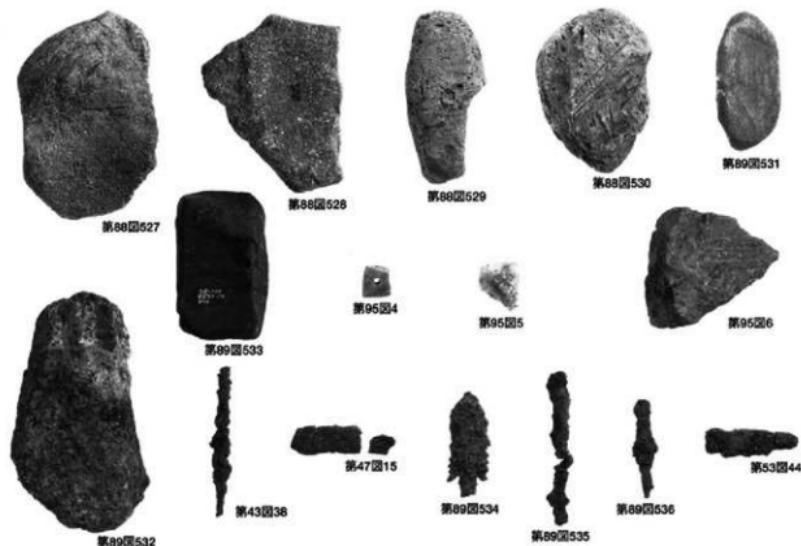


第85图516

B区出土石器・石製品（2）



B区出土石器·石制品（3）



B区出土石器·石制品（4），铁制品



第90図537



第90図538



第90図539



第91図540



第91図542



第91図544



第91図541



第91図543



第91図545



第98图1



第102图8



第107图1



第100图2



第102图9



第107图2



第100图3



第102图13



第107图3



第100图5



第103图1



第110图1



第100图6



第104图5



第110图2



第102图7



第104图6



第110图3

C区出土土器（1）



第110図4



第117図1



第118図4



第117図2



第118図5



第110図5



第117図3



第120図1



第111図1



第117図4



第120図2



第111図2



第117図5



第120図3



第111図3

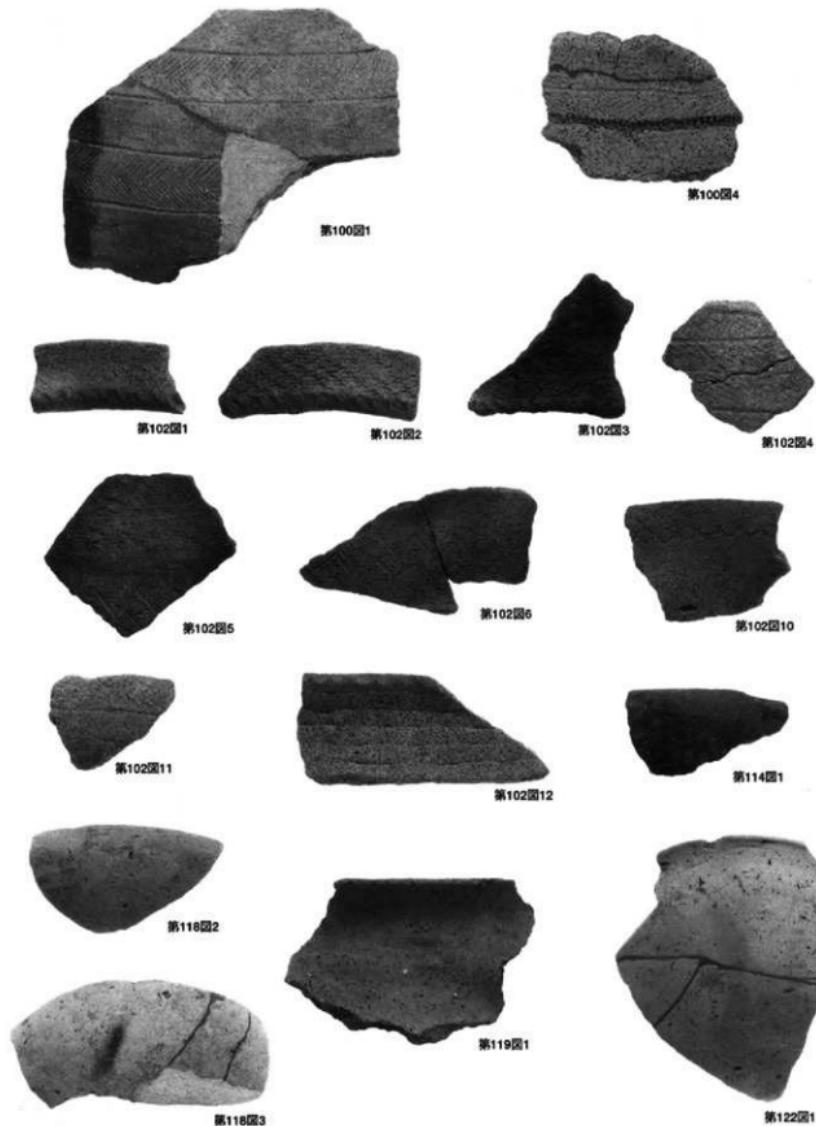


第118図1



第121図1

C区出土土器（2）





第114図2



第114図3



第118図6



第118図7



第118図8



第118図9



第118図10



第118図11



第119図2



第122図2

CSI - 3・6, CSD - 6・7・10出土土製品



第104図1



第104図2



第104図3



第104図4

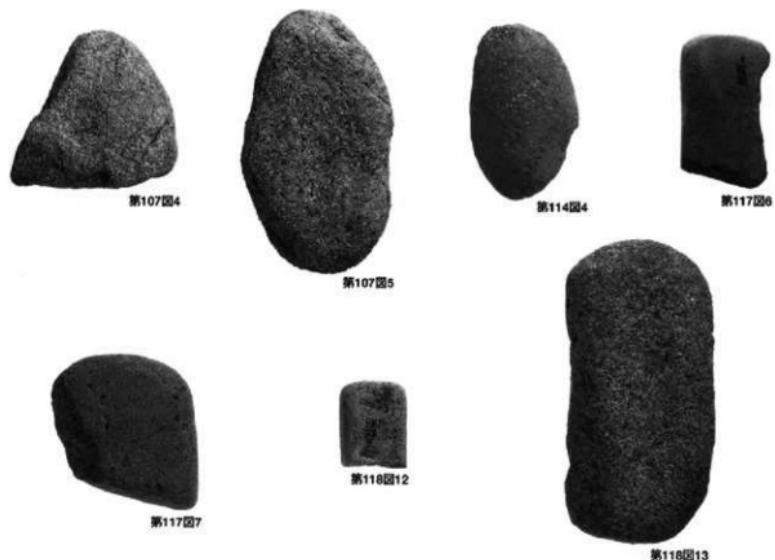


第104図7

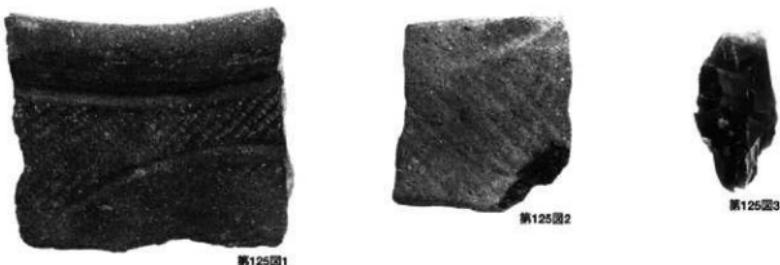


第124図1

C区出土石器・石製品（1）



C区出土石器·石制品（2）



D区出土遗物

報告書抄録

ふりがな	たてやましひがしだいせき
書名	館山市東田遺跡
副書名	国道410号（北条）埋蔵文化財調査報告書
卷次	2
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告
シリーズ番号	第551集
編著者名	高梨友子
編集機関	財団法人千葉県教育振興財団
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地2 TEL 043-422-8811
発行年月日	西暦 2006年3月24日

所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
東田遺跡	館山市上真倉字 東田706ほか	12205	003	34度 58分 12秒	139度 52分 11秒	19970106～ 19970228 19971104～ 19980331	4,500m ²	道路建設に伴う埋蔵文化財調査

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東田遺跡	集落跡 墓 城	弥生	竪穴住居跡・溝状遺構・方形周溝墓	弥生土器（中期・後期）・石器	土器・土製模造品類など多量の遺物を含む大溝のほか、大型掘立柱建物跡を検出した。
	集落跡 祭 祀	古墳～ 奈良・平安	竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝状遺構・土坑	土師器、須恵器、土製品、石器・石製品、鉄製品、帶金具、杭	
		中・近世	溝状遺構	カワラケ、火打石、砥石	

千葉県教育振興財団調査報告第551集

館山市東田遺跡

—国道410号(北条)埋蔵文化財調査報告書2—

平成18年3月24日発行

編 集 財團法人 千葉県教育振興財団

發 行 千葉県県土整備部
千葉市中央区市場町1-1

財團法人 千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡809番地2

印 刷 株式会社 正 文 社
千葉市中央区都町1-10-6